

第十七回 松本清張研究奨励事業

清張鉄道1万3500^キ
口

—— 作品中の鉄道乗車記録詳細と文学的効果の考察
—— 清張世界への乗り鉄論的アプローチ ——

元朝日新聞記者 赤塚 隆二

目次

終わりからの始まり 5

第1章 明治一二年の陸蒸気 8

延岡への道 西郷札、(地図A)

母と子のいる風景 火の記憶、或る「小倉日記」伝

東京を離れて 青春の彷徨、湖畔の人、大臣の恋

列車に乗る自画像

ひとり旅、恐喝者、断碑、赤いくじ、父系の指

上り線、下り線 父系の指、青のある断層、(表1)

○地図1

第2章 旅情・愛憎・ミステリー 22

旅への誘い 張込み

ロマンスシートの魔界 箱根心中、顔、任務

旅先の人間模様 九十九里浜、市長死す、声、鬼畜、

地方紙を買う女、遠くからの声

崩れたタイムトンネル 白い闇、捜査圏外の条件

○地図2

第3章 東京駅15番線 34

一、二等待合室 眼の壁

並走する殺害行列車 点と線、(地図B)

究極の机上鉄 点と線、(表2)

昭和三年のBGM

眼の壁、点と線、拐帯行、氷雨、日光中宮祠事件

山男たちが乗った列車

装飾評伝、真贋の森、遭難、失踪、紐、微笑の儀式

○地図3

第4章 鉄路を急ぐ女たち 47

恋膨らむ車窓―椎原典子 蒼い描点

夫のいない新妻―板根禎子 ゼロの焦点

闘争と逃走の日々―室田佐知子 ゼロの焦点、(地図C)

男を許せぬ理由―笠原祥子 黒い樹海、影の地帯

よろめきの果てに―結城頼子 黒い福音、波の塔

○地図4

第5章 歩廊に佇む男たち 62

短すぎた解放の時―小塚貞一 駅路、黄色い風土

組織びとの宿命―大蔵エリート尾山正宏、新聞記者石内

歪んだ複写、金環食、万葉翡翠、考える葉

東奔西走する刑事―今西栄太郎 砂の器

潰えた野望―和賀英良 砂の器、田舎医師

番外地にて―戸谷信一 わるいやつら、山峡の章、球形の荒野

○地図5

第6章 遠くへ行きたい 75

津軽へ、国東へ 風の視線

東京湾を挟んで 不安な演奏、蒼ざめた礼服、連環
和布刈から潮来まで

美しき闘争、時間の習俗、(表3)、落差、地の指

日高山脈の麓

影、人間水域、塗られた本、絢爛たる流離、彩霧

見えて来た邪馬台国

けものみち、陸行水行、半生の記、溺れ谷、屈折回路

○地図6

第7章 新幹線旅情 88

五輪のある街 草の印刻、殺人行おくのほそ道、すずらん

名古屋―東京間の選択 統監、雑草群落、葦の浮船、

二重葉脈、史疑、年下の男、古本

経度と緯度 脊梁、Dの複合、混声の森、通過する客、

セント・アンドリュースの事件、留守宅の事件、(表4)

不条理への復讐

遠い接近、山の骨、表象詩人、告訴せず、黒の回廊

東京駅の別れ 火の路

○地図7

第8章 ディスカバー・ジャパン 102

車で殺される女たち 渡された場面、渦、馬を売る女

石狩川の畔 状況曲線、百円硬貨、天才画の女、

骨壺の風景、不運な名前

積み荷の中から我が死体

死の発送、彩り河、南半球の倒三角、信号、聖獣配列、

数の風景、黒い空、一九五二年日航機「撃墜」事件

セピア色の関東平野 神々の乱心

北への回廊 犯罪の回送

○地図8

鉄路は果てても (表5、6、7) 115

《注》 119

資料編 121

◇地図東、対照表

◇地図外1、地図外2

◇作品中の海外での初乗り区間一覧

◇作品中の旧国鉄・JRの初乗り区間一覧・注

◇路線詳細図(北海道・東北、関東・中部、首都圏、

関西・北陸、中国・四国、九州)

◇作品中の私鉄の初乗り区間一覧・注

終わりからの始まり

2013年4月17日14時15分、私は福井県の白山山系の谷間にある越美北線九頭竜湖駅に降り立った。残雪の谷間だった。目標としていたJR全線、この時点で1万9981・8^キを乗りつぶした瞬間である。

1両編成のディーゼルカーは、18分停車で引き返す。沿線の大野盆地は春爛漫だった。「鉄ちゃん」と呼ばれる人種の中で、私は「乗り鉄者」と自称する。田起しが進む風景を眺めながら、乗り鉄人生を振り返った。

幼いころから、列車の窓側席に座ると、いつまでも、どこまでも乗っていたいと願う鉄道少年だった。だが、旅をするのはせいぜい九州内。金がなかった。新聞記者になってからはヒマがなかった。40代終わりごろから、ようやくチャンスが巡って来た。取材競争の最前線を離れ、自分がいなくても紙面はできるという現実を噛みしめるようになってからだ。年に何回かある九州から東京への出張の帰りに浮気を始めた。例えば…。

羽田に向かわず、上野駅へ行く。長野行きの特急に乗り、東北、高崎、信越各線の車窓を見る。おかげで在来線の碓氷峠越えを体験できた。長野で中央線の名古屋行き特急に乗り換え、木曽川や駒ヶ岳を眺める。名古屋からは新幹線だ。午後の便に乗る時は、東海道線で藤沢まで行き、江ノ電で鎌倉へ回る。大仏を見上げたり、参道を歩いたりした後、大船から根岸線回りで横浜に至り、京急線へと乗り継ぐ。

50代、山口支局長という時間の融通がきくポストに就いた。朝一度職場に顔を出した後、夜の締め切り前に戻ってくる日もあった。昼間、宇部線や小野田線に乗り、瀬戸内海を眺めたり、旧産炭地の街並みの変化

をチェックしたりした。工業都市の岩国と徳山の間を、海岸線沿いの山陽線ではなく、山間部を走る岩徳線でたどる経験もした。そして、2009年に退職。この時点で、JR全線の45%ほどを走破していた。

思う存分鉄路旅ができる日々が来た。中四国から近畿、東海、関東。乗りつぶし路線は東へ東へと広がった。帰宅すると、鉄道白地図を塗りつぶし、走破区間と距離をエクセルに打ち込んだ。版図が広がる喜びである。それが、今回の研究の方法論につながった。

松本清張と最初に出合ったのは、映画『点と線』(1958年)であろう。小学4年生の私に筋はほとんど分からなかった。だが、鉄道少年は、タイトル部分で、特急「あさかぜ」が走る東海道、山陽、鹿児島各線と停車駅が文字通り、点と線になって表されていることに感動した。

1971年の就職後、推理ものを結構読んだ。そのうち、ストーリーよりも日本各地の風景を描いた部分が印象に残るようになった。自分も見たいと思った。絵葉書的な景色ではなく、働く人々が背景にいる寸描である。山田洋二監督の映画を見た時も膝を叩く感じだったのだが、『男はつらいよ』の冒頭やエンディングで出てくる、地方とそこで暮らす人々の姿である。

私の乗り鉄行脚も、車窓から日本の今をまぶたに焼きつきたい、という思いがあった。清張に引きつけて言えば、作品に描かれた風景を見つければ、車窓にかじりついていった。旅から帰って、印象に残った風景を作品で再確認することもあった。

自分の乗り鉄経験と清張の世界をもっと近づけたくなった時、「清張世界を読む乗り鉄」、しかも「完乗」をしたくなった。それが、この研究に

挑んだ最大の動機である。研究は、私のJR走破旅が終わってから始まった、とつくづく思う。

研究の手順は以下になる。

第1に、乗り鉄場面がフィクションとして出て来そうな作品を可能な限り読む。登場人物たちが鉄道乗車する場面をことごとく拾い出す。作品数で言えば、時代物や評伝、ドキュメントを除く320篇を読んだ。第2に、登場人物が乗った駅、降りた駅、その間の^{キロ}数を一覧性のあるデータにする。そして、作品発表順に並べ直す。最初はデビュー作である『西郷札』、最後は死去後に刊行された『犯罪の回送』ということになる。

第3に、その一覧表のうちから、最初に登場した線区・駅間を抽出する。東海道や中央、山手、東北など繰り返し登場する線区が多数あるが、2回目以降はカウン트의対象外とする。そうすると、最初に乗った線区だけが、日本列島の鉄道地図の中に次第に浮かび上がり、広がりを持ち始める。

本研究ではこれを「初乗り路線」または「区間」と呼ぶ。「初乗り」を発見、確定することこそ、私が最も情熱をかけ、かつ苦勞した部分である。つなぎ合わせると鉄道網、言い換えれば「清張鉄道会社」の路線図になる。年次的にいくつかの節目を作ると、路線の拡大プロセスがより明瞭に見えて来る。清張ファンに示し、ともに味わいたいと考えるのである。

清張鉄道の初乗り路線を経年的に見る意義を示したい。

(一) 作品舞台がどのように広がって行ったかが一目瞭然である。彼

は九州出身で、当初は九州がよく登場した。登場人物の足跡は次第に北へ東へと広がり、信州のほぼ全線を乗りつくした。東北や北海道にも足を踏み入れたが、一転して登場人物を中国山地や近畿圏に足しげく通わせる時代もあった。

(二) 乗り鉄の結果として数多くの車窓風景が登場する。清張が作家活動を始めた時期、日本は戦後から成長期へ移ろうとしていた。ベストセラー作家としての名声が不動になるころ、経済成長はより急ピッチになった。農漁村に工場ができ、大都市は急激に膨張した。清張の初乗り描写はそれらをいち早く捉えている。

(三) 彼が描く車内や駅頭には、老若男女様々な人がいる。金持ちから貧乏まで階層も多様である。登場人物はリアリティを持っている。善人か悪人かというよりは、煩惱に苦しみ、躓く人々が圧倒的に多い。それは戦後を生きた庶民の姿である。作品を積み重ねていくと、様々な庶民を描いたモザイク画を見ているような気になる。

前口上を切り上げる前に、表現、表記のルールを示す。

鉄道といっても、旧国鉄とJR、第3セクター(以後、3セクと略す)になった線区があり、私鉄も存在する。作品発表後に廃止された線区も少なくない。本研究では、旧国鉄、JR、3セクとその廃止区間を1つのグループ、もう1つのグループを私鉄とその廃線区間として別々に^{キロ}数計算する。主な理由は、私鉄は狭い地方に散発的に展開されるが、旧国鉄とJRは全国的にネットされている。ネットが広がって行く清張鉄道の醍醐味はそここそ味わえる。路面電車はまぎれもなく鉄道なのだが、研究の対象から外した。大部分が都電で、東京、しかも1964年

の五輪以前の地理に疎い私には解説ができない。それをまとめるのにふさわしい人に託したい。ただし、作品に登場する場面は紹介する。また、外国での乗り鉄も、数は多くないので書き残した。

年号は、原則西暦とし、下2桁にする。元号は必要に応じて使う。作品引用にあたっては、どの本の何版、何刷目であるということは明示しない。私は文庫本を中心に濫読したので、なぜその本が適当だったのかという説明ができないからだ。加筆や直しをすることが多かった作家だと聞かすが、作品によってはズレがあるかも知れない。

駅名は時代の変遷で変わったものがある。できるだけ現在のものにし、古い駅名は注を付けるよう心掛けた。だが、作品からの引用の際には、その原則が揺らぐ。韓国の地名はルビ抜き漢字を多用したが、ソウルについては引用以外、京城を避けた。

作品発表順は、単発モノの場合は問題ないが、連載の場合同じ時期に重なり合っている。先に始まったものが、より遅くまで続くことは少なからずある。また、年をまたぐことはもちろん、足掛け3年になるような超長編も書かれている。この本では、最終回の掲載月日を発表順の根拠とした。巻末にある初出の記載を最優先し、それが無い時には郷原宏の「松本清張事典決定版」を利用した。

鉄道、特にJRの駅間距離はいろんなカウントの仕方がある。線区名も広く呼ばれている名が通じない場合もある。例えば、京浜東北線は東海道か東北のいずれかの線になる。名古屋と2つ東京寄りの金山の間3・3^キは東海道線であり、かつ中央線なのだが、こうした特例箇所は全国でいくつもある。一橋大学鉄道研究会の学生やOBが運営しているとされる「乗り鉄オンライン」の計算法に準拠した。

苦労したのは、初乗りの認定法である。乗降駅がそれぞれ具体的に示されている場合は問題ないが、片方だけしか書かれていない例もある。また、「京都から東京へ帰った」という表現では、本当に鉄道に乗ったのか、という疑義が生じる。前後の文章の流れを勘案しながら判定するしかなかったのだが、厳しかったり、甘かったり、二重基準だと批判されるかもしれない。

引用する解説者たちの敬称は略した。線区名から「本線」という言葉避けたのは、一字でも短く表現したい新聞業界の慣習を踏襲したためである。

「初乗り」という言葉を多用する。文章が一本調子にならないよう、「一番乗り」「初登場」と言い換えた箇所が多いが、意味は同じことである。一方、既に乗った区間のことを「既乗区間」と呼ぶ。読み進むにつれ、違和感は解消していただけだと信じる。

発車のベルが鳴り始めた。延べ134作品の中で、旧国鉄、JR、私鉄を合せて1万3500^キの旅になると予告しておこう。一覧表や地図も適宜読んでもらうことで、旅への興味が深まるかもしれない。

第1章 明治一二年の陸蒸気

(1951年3月～1955年11月)

延岡への道

日本の鉄道の始まりは、1872(明治五)年10月14日、新橋(後の汐留貨物駅)と横浜(現在の桜木町駅)間の開業である。松本清張の世界に鉄道が登場するのは、その5年後の話として書かれた『西郷札』の中になる。主人公はやはり新橋―横浜間に乗る。

西郷札は、文壇デビュー作であり、1951(昭和二六)年3月、別冊週刊朝日春季増刊号に掲載される。奇しくも言うべきか、当然と見るべきか、後の作品群で鉄道乗車の話が多数出て来ることを予告しているように思える。朝日新聞の懸賞小説に応募して三席に入り、直木賞の候補作にもなった。以下のような粗筋である。

――新聞社勤務の私は、「九州二千年文化史展」の企画チームに入り、国宝など出品史料の収集を進める。「西郷札」の出品申し込みがあり、それは何かと調べると、西南戦争の際、西郷隆盛軍が発行した軍票であると分かる。続いて、西郷札とともに、1879(明治一二)年に書き残された旧佐土原藩士、樋村雄吾の覚書が届いた。それを読んだ私は、何か書こうと思いつ――

朝日新聞西部本社(北九州市小倉北区)の広告局で働いていた清張自身を等身大に見せながら話が進む。

――西南戦争で西郷軍に入った樋村は宮崎県延岡市郊外の戦場で負傷し戦線から離れた。戦後、上京する。継母の娘である義妹季乃は明治政府の官僚塚村圭太郎と結婚していた。紙問屋の幡生糸太郎と知り

合う。糸太郎は、薩摩軍敗北で紙屑と化した西郷札が、押し付けられた人々の救済のため、新政府によって買い上げられると見て、雄吾、季乃兄妹の伝手で塚村からその時期を聞き出す。だが、塚村は妻と義兄の仲を疑い、嘘の情報を流す。雄吾と糸太郎は宮崎に出向き、西郷札を買い占めるが、買い上げはないと知った時、糸太郎は身代をつぶす。雄吾は圭太郎に「太刀浴びせようとするが――」

庶民は官の力を利用して一儲けを企む、権力者の意地悪が庶民を破滅に追い込む、という話は、清張作品に数多いテーマの1つである。西南戦争の戦況の推移にも行数を割き、歴史小説群の嚆矢となっている。肥後の熊本城包囲戦や田原坂の死闘がよく語られるが、日向でも激戦が続いた。清張は地名や西郷軍の動きを細かに書く。ノンフィクションのような筆の運びである。雄吾と糸太郎の日向入りもリアリティがある。

《雄吾と糸太郎は横浜まで汽車で行き、横浜から郵便汽船に便乗して神戸に上った。ここから別の便船を求めて瀬戸内海を西へ西へと航行した》

《船は諸所に寄港してやっと臼杵港にはいり上陸した。ここから馬車また馬車に乗り継ぎして十日余を費やして東京からの旅は終わった。》

宮崎についたときは、明治十二年の秋の深いときであった》引用した2つの文章を読むと、当時、東京から宮崎に向かう際、速くて、疲れない旅とはこういうものだったのか、という思いにさせられる。延岡はいったん通りすぎた、と読み取れる。乗車駅がどこだったか書かれていないが、2人は東京の中心地で生活していたという記

述をもとに新橋と判定する。今の時刻表で言えば、東海道線新橋―横浜間 26・9^キと根岸線横浜―桜木町 2^キの計 28・9^キ。清張世界の鉄道の第1歩である。

どのような車窓風景が広がっていたのか、乗り合わせたのはどんな人たちだったのか、駅頭の賑わいぶりはいかなるものだったのか。それらは書かれていない。だが、2人の足跡を書かずにはおられない清張の作風とは何だろうか、と考えるきっかけとしたい。

大分県臼杵市は、豊後水道に面した港町である。近世以降、瀬戸内海海運の西のターミナルであったことは、街を歩けば今も実感できる。醸造業の野上弥生子の生家が象徴的なのだが、堂々たる商家造りの家が並び、寺も多い。雄吾と糸太郎は、臼杵から宮崎県延岡市に行く際、今の国道10号沿いに宗太郎峠という県境の山を越えたのだろうと眼に浮かぶ。細かに書きこむ時はそれを徹底するという清張の文章上の特徴を思い知らされるくだりである。

明治時代に瀬戸内海から船で延岡入りするという旅は、夏目漱石の小説『坊ちゃん』にもある（注1）。うらなり君こと古賀先生が松山から延岡に転勤する場面だ。待遇改善を願い出たところ、赤シャツの企みに遭って、僻遠の地に飛ばされるばかりかマドンナまでも奪われる。坊ちゃんも驚く。

《延岡と云へば山の中も山の中も大變な山の中だ。赤シャツの云ふ所によると船から上がって、一日馬車へ乗って、宮崎へ行つて、宮崎から又一日車へ乗らなくつては著けないそうだ。名前を聞いてさへ、開けた所とは思へない。猿と人とは半々（はんはん）に住んでる様な

氣がする《

宮崎市に2回、計7年近く勤務した私としてはストンと胸に落ちない文章である。太平洋に面した南北に長い県土を思い浮かべてほしい。延岡―宮崎間は単調な海岸線が続き、天然の良港は細島港（日向市）だけである。松山市を出たうらなり君一家は、八幡浜辺りから船で豊後水道を渡るのが普通の行き方である。その場合、臼杵が一番自然だ。細島は外洋に出る航行上のリスクが伴う。

赤シャツの言葉通りであれば、宮崎市よりさらに南の日南市の油津港辺りに上陸したことになる。でなければ、「馬車で宮崎まで一日、宮崎から又一日」という条件を満たさない。漱石は宮崎の地勢や交通事情に疎かったのか、分かっているながら話を面白くしたのか、そこは

分からない。ついでに言えば、延岡は山また山の中ではない。五ヶ瀬川と北川の河口に開けた城下町である。(地図A参照)

『坊ちゃん』の揚げ足取りをするつもりはない。漱石も清張も、いや多くの文豪、巨匠がそうなのだが、話の本筋から外れたちよつとした支流の部分でディテールを書き込み、その味付けが主流を読ませる推進力、ポテンシャルになることは多い。清張の場合、ディテールの対象の1つが初作品から、人が動く時の交通手段になっていたのだ、と思う。

清張は毎日新聞に『私の小説作法』という寄稿をしている(注2)。「文章」の項で「平明で簡潔なものを志したが、(略)文章は筋運びのためのみにあるのではないから、部分的な描写には、精緻な文章になるように努める」とある。なるほど、登場人物の容貌、着衣、経歴、住まいはもちろん神社仏閣や工芸品、絵画などでもディテールを書き込む。話の筋運びとディテールのコントラストが強く。読者が筋を追うことに疲れたところで、口直しの飲み物を出されるような快感を覚える。初期の作品からあったもう1つのパターンがある。

母と子のいる風景

52年3月の三田文学で、『火の記憶』が発表される。子どもの頃に両親を失った高村泰雄は母親が不倫していたという疑念が消えない。母が残っていた古い葉書を頼りに九州の炭鉱町へ行く。犯罪容疑者の父親を追っていた元刑事との間に男女の仲があったと確信する。高村と結婚した頼子の兄は「そうではなからう」と頼子に諭す。乗り鉄論的に重要なのは、次のくだりだ。

《僕は東京を出発して九州に向かった。N市は、僕の生まれた土地B市から汽車で二時間ばかりで、筑豊炭田ちくほうたんの中心地だった。僕がN駅に降りたのは二十五時間の車中の後だった》

かつての筑豊炭田は、直方、飯塚、田川の3市が正三角形の頂点を占め、辺に相当するのは筑豊、伊田(今は3セクの平成筑豊鉄道)、後藤寺の国鉄3線であった。飯塚、田川を流れる2つの河川は、直方で合流して遠賀川となる。石炭の大消費地である北九州工業地帯へも近く、昭和二〇年代、直方は筑豊の表玄関という風格があった。

N市は直方と断定してよいだろうが、傍証を挙げる。後述する『大臣の恋』も相手の女性は直方にいた。また、清張の自伝『平生の記』には、結婚を考えた女性が直方と飯塚の中間にある幸袋にいた、と書かれている。自らの貧しさゆえにあきらめたとあるが、直方という地名に想を得やすいものがあったのかもしれない。

この旅を時刻表に落とすと、東海道(東京―神戸589・5キロ)、山陽(神戸―門司534・4キロ)の両線すべて、鹿児島線の門司―折尾24・6キロ、筑豊線折尾―直方14キロの計1162・5キロになる。ただし、東海道線の新橋―横浜26・9キロは、『西郷札』で樋村雄吾が乗っている。従って、清張の作品群の中で、『火の記憶』の高村が一番乗りした区間は1135・6キロとなる。

清張作品中の鉄道乗車区間と距離をカウントするというのは、膨大な登場人物たちの中の誰が最初に乗ったかを調べることもある。清張の側からすれば、初めて書いた区間、距離ということになる。ぴつたりした言葉が見つからないのだが、本研究では「初乗り」のほか、「一番乗り」「初登場」といった言葉を多用することは既に述べた。タクシー

料金のイメージと重なるが、すでに乗ったところは「既乗区間」だし、どの登場人物も乗っていないければ「未乗区間」と呼び分けしやすい。既乗と初乗りを合わせて「踏破区間」という呼び方もする。

こう書くと、「それでは初期の作品の登場人物は初乗りを果たしやすいが、時代が下った作品の登場人物は初乗りする区間が少なくなっていて不利になる」と思われるかもしれない。まったくその通りである。東海道、東北、中央といった線区は何回、何十回と繰り返し登場する。60年代になると、登場人物は北海道、四国や僻遠の地の支線に行かなければ初乗りの認定を得られなくなる。これは私自身の乗り鉄経験でもある。

題名の『火の記憶』とは、帰京のためN市から夜行列車に乗ったところ、ボタ山で真つ赤な火が燃えているのを見て、幼児期、母親、元刑事と共に見上げた光景と同じだと気付いたことに由来する。ボタ山とは、石炭を採った後の岩石をズリ状に積み上げてできたピラミッドのようなものだが、残った石炭が自然発火することがある。

《車窓の闇の中をボタ山の火はしだいに遠のいていった。その火はあたかも僕の母に対する疑惑の確証のようであった。僕は頭に血が一時にのぼり、汽車の窓枠を力いっぱい掴んでゆすった》

夜汽車の窓辺。後の作品に比べれば、少し情緒過多で、ぎこちなさを感じる。しかし、車窓に登場人物の心象を反映させるという手法の始まりという押さえはできる。

52年9月の三田文学で、『或る「小倉日記」伝』が発表され、芥川賞を受ける。

——1909（明治四二）年に生まれ、福岡県小倉市（現北九州市小倉北区）で育った田上耕作は頭脳明晰だが、生まれつきの難病で障害者に似た差別を受ける。軍医でもあった森鷗外が小倉時代に書き残したものの所在不明になった日記の空白を埋めようと、ゆかりの人々から聞き書きを進める。母ふじが寄り添った。耕作の病気は進み、貧困の中で、昭和二五年に死去する。その直後、小倉日記が見つかる——耕作の人生は無意味ではなかった、という読後感が残る。

取材を進める中、田上親子は福岡県南部の柳川町（現柳川市）へ行く。水郷の城下町であり、北原白秋の生地として知られる。

《二人は汽車に乗った。もう、そのころは戦争がかなり進んでいた。汽車の窓から見る田舎の風景も、農家のほとんどの家が、“出征軍人”の旗をたてている。車中の乗客の会話も、戦争に関連していた。小倉から汽車で三時間、久留米で降りて、さらに一時間ほど電車に乗ると柳河に着いた。有明海に面し十三万石のこの城下町は、近年水郷の町として名を知られてきた。道を歩いていても柳を岸辺に植えた川や堀がいたるところに見られたが、町はどことなく取り残された静かな荒廃が漂っていた》（注3）

鉄道図で確認しよう。鹿児島線の小倉から久留米までは、102.9^キ。小倉—折尾間は『火の記憶』の高村泰雄が乗っているの、折尾—久留米間83・8^キが田上耕作の初乗り部分になる。電車とは西鉄天神大牟田線の西鉄久留米—西鉄柳川間19・8^キである。

「出征軍人の旗」は、さりげない描写だが、国家の非常時であれ、生きる情熱を燃やせるものに傾倒せずにはいられない親子の心情が行間に読み取れる。『火の記憶』で夜汽車の車窓が出て来たが、より磨

きがかった表現ではなからうか。

駅を降りた時の第一印象が出て来るのは、この作品からである。短いが、読むものは容易に情景を浮かべることができらう。ディテールを書き込むことに冴えを見せる清張だが、優れたデッサン力があったのことだと知らされる。

田上親子は柳川で目指す人をなかなか探し当てられない。

《二人は道端の石の上に腰をおろして休んだ。そこにも堀が水を湛^たえていて、向かい岸の土蔵造りの壁の白さをうつしていた。空は晴れ渡り、ただ一きれの小さな白い雲が不安定にかかっていた。それは妙に侘^{わび}しいかたちの雲だ。見るともなくそれを見ていると、耕作の心には、また耐えがたい空虚な感が広がってくるのだった。こんなことを調べてまわって何になるか。いったい意味があるのだろうか。空疎^{くそ}な、たわいもないことを、自分だけがものものしく考えて、愚劣な努力を繰り返しているのではないか。――

ふじは横にならんでいる耕作の冴^さえない顔色を見るとがわいそうになってきた。それで引きたてるように自分から起^たちあがり、「さあ、元氣を出そうね、耕ちゃん」と歩きだした》

本研究では、清張の描いた日本各地の風景のうち、車窓や駅前風景については論考の対象とする。だが、風景一般にまでは広げないつもりだ。收拾がつかなくなるし、清張の風景論自体で立派な研究テーマになると考える。ただ、堀端の親子の描写は、情景と心象を重ねる手法でも初期作品中の白眉だと思つて紹介した。

清張は後年、風景、心象ともっと短く、抑えた表現を目指すよう

になったと思う。

東京を離れて

『青春の彷徨』（53年6月、週刊朝日別冊）は、木田という25歳の男と21歳の佐保子が、佐保子の父に結婚を反対されたという書き出しで始まる。阿蘇山の火口に投身しようと九州行きの列車に乗った。

《いよいよ出発の晩は、しめしあわせて落ちあつて男の行きつけのホールで二人で踊った。酒も飲んだ。発車近くに東京駅にかけつけて、列車が動きだして、しだいに東京の灯が後ろに走り去ると、木田も佐保子も、はじめて涙を流した》

清張の鉄道世界に登場する最初の道行である。

《京都と大阪で降りて遊んで、熊本に着いたのは五日めぐらいであつた。

阿蘇に行くには、熊本から豊肥本線というのに乗りかえる。

列車はたえず山に向かつて勾配^{こうばい}をのぼった。溪流がある。滝がある。小さな駅をいくつか過ぎた。さんりぎ、ひごおづ、という駅々の立札を読みながら、木田と佐保子とは、ようやく死地に近づきつつある思いをした》

駅名は三里木、肥後大津である。実際の沿線風景とは異なる。溪流や滝があるのは肥後大津から阿蘇の外輪山に切り込んでいく辺りで、それまではのどかな熊本平野を走る。目につくのは加藤清正が整備させたという杉並木で、三里木とは熊本城から豊後街道の1里ごとに植えた巨木の所在地に由来する。

若い男女は阿蘇山登山口の阿蘇（掲載時は坊中）で降りて火口に登

るが、怖くなる。大分県の名勝、耶馬溪へ行き、山に分け入っては心中しようかどうか、と生と死の間を彷徨する。心中した白骨遺体を見て急に震えが来た。

木田と佐保子の乗車区間はまず東京―熊本の1293・3_キだが、久留米までは田上耕作らが踏破している。初乗りは久留米―熊本の82・7_キである。豊肥線熊本―阿蘇49・9_キも一番乗りになる。

熊本平野の車窓風景に疑義を示したが、同様なことは他の作品にもある。なぜか、という答えにはならないかもしれないが、清張が1976年11、12月号小説推理で五木寛之と対談した際の言葉に注目したい。

『ゼロの焦点』では能登を舞台に使ったけれども、取材に行ったわけじゃない。それも書くより前に、普通の旅行で行ったことがあり、そのときの印象を思い出して書いたんだね。だから、ぼくが行ったときと較べて、道順も鉄道の便も変わってはいるけれど、大抵二度目に行ってみると、印象も興味も一度目のときより薄らいでいる。だから、下調べのためにもう一度行くというのは、ぼくの場合には合わない》(注4)

清張の作品には多数の鉄道乗車場面が出て来るし、車窓風景が描かれる。作品発表のたびに確認の旅行をしていたら、締切日を守れなくなるだろう。清張の言葉からは、やはり乗ったことのある区間が書きやすいということをうかがい知るべきであろう。初期の作品で、長年住んだ九州が舞台になることが多い理由につながってくる。

『湖畔の人』(54年2月、別冊文藝春秋)は、長野県の諏訪湖一帯の風景が主人公の心象と重なっている。

――老記者の矢上は最後の勤務地となるであろう上諏訪通信部へ下見に来た。高冷地らしい湖に心惹かれる一方、父徳川家康に疎まれ、反抗するような生き方もし、この地に流された松平忠輝のことを知った。忠輝に付き添い、この地に根を下ろした家来たちの凜とした生き方を思うにつれ、自分も前向きに生きようという気持ちになる――風景描写が精緻である。

『矢上は寝がけに湯に入った。浴場の窓からも矢張り対岸の灯が見えた。

炬燵はあったが、夜中に布団の下ふとんの肩が冷え込んで寒かった。山国の冷氣だった。

翌朝、矢上はAと二人で踏切を越えて諏訪湖の岸に出た。湖水は明るく、深味のある色ではなかった。昨夜、灯を見た下諏訪の町が細長く対岸にあった。背後の山なみの間に、穂高ほたかの白い姿が挟はさまれていた。湖面に三、四艘そうの小舟があった。

城址しろあてはせまかつた。石垣だけだが、濠ほりには小さな橋がかかっていた。欄干らんかんにのせた擬宝珠ぎぼしが、いかにもこの小造りな城あとに似合った。高地に上ると、湖面一帯の展望があった。矢上は腰を下おろして眺めた。彼は見えているうちに、次第にこの湖水が好きになった。このような高原盆地に湛たたえられた水の静止の姿が、心に合うのであろうか。湖面の寂しさも、明るさも、好ましかった》

矢上は世渡りが下手で、忠輝同様どこに行っても人に好かれなと思う。似たような殿様に仕えていた家来はどんな心境だったのか。栄達に縁遠い者たちへの時を超えた連帯感が矢上に芽生えて来る。40歳を過ぎて作家デビューし、それでも文筆家として生きて行こうという

清張の心境が反映されているように思える。

乗り鉄的には、多分東京から来て東京へ戻ったのだろうが、はつきり書かれていない。中央線は今後もよく出て来る線区である。フォークスが絞れた作品に一番乗りを譲らせた。ただし、通信部管内の東端、富士見駅から上諏訪駅まで中央線に乗ったことは明示されており、この19^キは初乗りと認定する。

『大臣の恋』（54年4月、週刊朝日別冊）は、国務大臣になった元大蔵官僚の布施英造が、門司税関勤務時代の初恋の人、園田くに子に会いたいと願う話である。『火の記憶』でも触れたように、くに子は筑豊の直方市に住んでいたが、還暦前なのに身持ちが悪かった。夫から刺され、新聞に出た。直方へ遊説に来ていた布施はそれを読んでどう思ったか。

若いころの布施は、同僚の妹であるくに子を訪ねて玄界灘に面した遠賀郡の漁村へ行く。架空の地名だが、現在の岡垣町波津のことと見られ、駅で言えば鹿児島線の海老津になる。文中では門司から汽車に乗ったとあるが、大正時代という時代設定なので、現在の門司港駅である。山陽線の関門トンネル開通（42年）まで、門司港が門司を名乗り、今の門司駅は大里という名前であった。

布施が乗った門司港―海老津間39・4^キのうち門司港―門司間5・5^キは布施の一番乗りとなる。

大臣の回想に門司港が書かれている。

『布施英造は学校を出たばかりで門司の税関に回された。事務所の窓からは始終、せまい海峡に窮屈そうに出入りする外国船が見えた。洋菓子のように甘い色をした綺麗な外国船の煙突が眼を眩

るように美しかった。今から考えても、過ぎた青春の象徴のようだった』

列車に乗る自画像

『ひとり旅』（54年7月、別冊文藝春秋）は、自伝『半生の記』と重なる部分が多い。清張自身、終戦後の生活難の中、箒を問屋に売り込むため西日本各地を回っていた。

――田部正一は大分県の奥地でできる熊手や竹籠を問屋に売り込む仕事をしていた。夜行列車を乗り継ぐ味気ない旅ばかりだった。琵琶湖を望む大津駅前の食堂で男女が仲良くしていたのを見て、仕事をやめる。名古屋の無尽会社で働きだし、洋裁店経営の女と親しくなり、不正貸付けをする。ばれそうになり、2人で九州へ死出の旅に出る。博多―熊本間がかつての自分のように働いている男を見て、かえってうらやましく思えた――

初乗りとしては、中国地方での問屋回りが終わり、日豊線で小倉から大分へ夜行で戻る場面がある。小倉―大分132・9^キは田部が初乗りのした。大阪の天王寺で注文を取り、京都の東本願寺の横の店を訪ねた際、天満から京都へ向かった場面がある。京阪電鉄の天満橋から乗り、最低近鉄との乗換駅である丹波橋までの40^キを一番乗りしたと判断する。さらに、大津から電車に乗って比叡山の東麓にある坂本で宿に入った。京阪石山坂本線の浜大津―坂本間7・4^キも初乗りである。

博多から南下する際、熊本までは『青春の彷徨』で乗りつぶされているが、鹿児島線の熊本―八代間35・7^キと肥薩線八代―人吉間51・8^キは田部が一番乗りと見る。

未明の広島に着いた時の描写が印象的だ。47年の早春のことである。

《駅前には屋台の飲食店がならんで、たき火をして駅の客を寄せていた。燃えている火の色が暖かった。田部は火の傍で、うどんを喰べた。喰べ了ったら、そこを離れねばならない。食っている間だけの席だった。町に足を運んでみたが、どこも深夜のように戸を閉している。田部は寒いので前の場所にもどり、また火の傍に坐つてうどんをとった。》

そこから朝の始発の電車が出た時は、ほっとした。どこでもよいかから行つて、早く明るくなるのを待ちたかった。

着いたところは宇品であつた。海に突き出たところに小さな丘があつた。ここまで来ると潮の匂いが強かつた。(略)

夜のあけた景色は急に忙しいように田部に見えた。工場勤めの人が流れていた。四国通いの船着場にも多くの人間が群れていた。小舟や小さい汽船が動いていた》

被爆地ではあるが、人々の営みも分かる。路面電車登場の第1号がある。

『恐喝者』(54年9月、オール讀物)もまた九州が舞台である。前年の「二八水害」で筑後川が氾濫、K市(福岡県久留米市のこと)の拘置支所も浸水する混乱の中、受刑者の尾村凌太は逃げ込んだ家で若妻と一緒に流される。水の中で意識を失った若妻は自分が犯されたと思う。1年後、九州の山奥のダム工事現場で尾村は作業員として働き、女は電力会社の幹部社員の妻として来た。自分を恐れることを知った尾村は金をせびり出す。

ダムの場所はこう書かれている。

《九州の西海岸の幹線の駅から支線に乗り換えて山の方へ三時間。

終点からバスで四時間、さらに工事場専用のトラックで一時間を要する不便な地点である》

50〜55年に建設された上椎葉ダムしか考えられない。幹線の駅とは先述の八代駅である。肥薩線で人吉まで行き、湯前線(現在は3セクのくま川鉄道、24・8^{キロ})に乗るのが当時の唯一現実的行程である。作品中には誰が乗ったとは書かれていないが、尾村もまたこうしてきて、一番乗りをしたと考える。湯前から秘境米良^{めらのしろ}荘の中心集落、村所さらに椎葉村の大河内まで国鉄バスが走っていた。時間的にも矛盾点がない。

尾村は仲間とけんかして転落死する。上椎葉ダム建設時、労災事故で死んだが、無縁仏になった人が相当数いる。清張はそんな人々の存在を知っていたのだろうか。

『平生の記』を読むと、箒の部品の針金を融通してもらう男がいた。その妻は貧しさを短歌に詠み、容姿もよく好感を覚えていた。その夫婦が椎葉のダム工事に行つて消息が絶えたことが書かれている。

清張のモデル・伝記小説は主人公の鬼気迫るような生き方、彼らが筆者に乗り移ったかのような息をもつかせぬ文章が印象的である。弥生時代の稲作研究などで知られる森本六爾を木村卓治の名で登場させた『断碑』は、54年12月の別冊文藝春秋に載る。

奈良県の三輪山付近で代用教員をする木村は京都大学に通つて考古学の教えを受ける。

《卓治のいる土地から京都までは汽車で二時間ぐらいで行ける》
時代設定は大正末期。桜井線の三輪か巻向から奈良を経て京都に

行った。巻向駅は昭和三〇年代に出来たので、三輪駅と特定しよう。桜井線三輪―奈良18^キ、関西線奈良―木津7^キ、奈良線木津―京都間34・7^キが初乗りである。

木村は上京し職を得る。研究仲間と上総国分寺遺跡を見に行く。両国駅から乗った。遺跡最寄りの五井駅まで行ったと見る。その時、教師だった久保シズエと知り合い、結婚する。総武線の両国―千葉35・9^キ、外房線千葉―蘇我3・8^キ、内房線蘇我―五井9・3^キは2人の一番乗りである。

《帰りの汽車で、偶然卓治の座席がシズエと隣りあわせとなった。

彼女は体を堅くしていた》

男女の道行きは『青春の彷徨』に出て来るが、列車の座席で男女が並ぶシーンを明瞭に見せたのはここが初めてである。

大学出の学者が洋行するのを見て、対抗するように木村も欧州へ行く。シズエが資金の面倒を見た。旅費を切り詰めるため、シベリア経由だったという。作品中の主人公が洋行する第1号になる。だが、結核に侵され、成果もなく船で帰国する。靖国丸下船後、神戸か三ノ宮から東京駅まで列車だった。

シズエも感染し、奈良に戻る。卓治は京都で研究しながらも三輪にいるシズエのもとへ通う。シズエは死去し、卓治も上京して間もなく亡くなる。

乗り鉄ではないが、鎌倉の描写を紹介する。

《昭和十年二月、今までいた小石川水道端の家から鎌倉に転居した。鎌倉のほうが暖かく、空気もよいというので、卓治が歩きまわって捜したのだ。極楽寺の切通しを越えて由比ヶ浜の方へ一町ばかり、

り、谷間のような場所で、南向きの藁葺きの百姓家だった。

稲村ヶ崎へ抜けるせまい道端に真つ赤な寒椿が咲いていた。その紅と白い砂と蒼い海とは、彼に南仏の海岸を思いださせるような色の構成であった》

この時点で清張は訪欧経験がない。筆の力というべきだろうか。

『赤いくじ』（55年6月、オール讀物）は、清張の兵隊時代を色濃く映す韓国ものの第1作となる。全羅道や済州島を守る師団が高敵に司令部を置いたが、出征軍人の美人妻がおり、参謀長と高級軍医が張り合う。敗戦後、師団は進駐してくる米軍に対して「慰安婦」を差し出すことにし、日本人女性にくじをひかせ、赤いくじをひいた美人妻は慰安婦候補に入る。米軍は慰安婦を求めず、女性たちの貞操は守られたが、白い目でみられるようになった。

昨今の従軍慰安婦をめぐる歴史認識を清張だったら、どう語るだろうか。軍隊とはどんな存在なのか、庶民の視点で射抜くであろう、と信じたい。

師団や日本人女性23両編成の列車で釜山に向かう途中、2人の幹部は美人妻を奪い合い、高級軍医は参謀長を射殺し、自殺する。これが最初の海外乗り鉄である。ただし、経路が特定できない。大田まで北上して京釜線で行くのか、韓国南部の山岳地帯を漂うようにして行くのか、判断材料が見いだせない。

清張作品には自伝的要素を盛り込んだものが相当数ある。その第1作目が『父系の指』（55年9月、新潮）になる。主人公であり、九州のY市に住む「私」の父は、鳥取県の山奥で生まれるが、里子に出され、

貧しい人生を過ごしてきた。実の親に育てられた叔父は、東京に出て成功した。

父の出自が気になる「私」は、終戦から3、4年経った年の暮、大阪出張の帰り、思い立って広島から芸備線に乗る。備後落合まで114・5^キが初乗りとなる。そこで泊まり、翌朝、芸備線の残り、備中神代までの44・6^キを行く。伯備線に乗り換え、山陽山陰の分水嶺を越え、鳥取県の生山までの24・6^キ。これらはいずれも一番乗りである。父の故郷を訪ねると、叔父の西田民治の活躍ばかりが話題になり、父のことは忘れ去られようとしていた。「私」は屈辱を覚える。

2年後、「私」に初めて東京出張の機会が訪れた。田園調布の叔父の家を訪ねる。三田にある宿を出て、国電で渋谷に行ったと書かれている。山手線外回りで田町―渋谷間を乗ったことになるが、品川―渋谷7・2^キ、東横線渋谷―田園調布8・2^キは初乗りになる。

この作品では、乗降時間や車窓の景色がこれまでになく詳しく書かれる。

《広島駅を〓筆者挿入》午後二時ごろ出た汽車は備後十日市あたりで暗くなった。雨が降っていて遠い所に三次の町の灯が光っていた。汽車を降りた人たちがその灯の方へ肩をすぼめた黒い影で歩いていった。それから名も知らぬ駅が真つ黒い窓をいくつも過ぎた。顔を窓硝子ガラスによせると闇をすかして山奥らしく谷が迫っていて雪が深そうだった。車内は客がほとんど降りてしまつて寒々となった。終点の備後落合という駅についたときは十一時ごろだった。備後十日市駅は今の三次駅である。

「私」は父の過去を訪ねようとしている。空間的、時間的な距離を

埋めるものが鉄路旅という形で象徴されている。車窓風景を見ながら、その向こうに「私」と父が過ごした人生を走馬灯のように見つめている。暗く、幸薄い人生である。心象と風景の重なりが、『火の記憶』より抑制しながらも、深み、厚みを増している。

田園調布訪問も読ませる場面である。

《渋谷まで国電で行つて東横線に乗りかえた。渋谷駅では東横線の乗り場がなかなかわからないでうろうろした。

中目黒、祐天寺を過ぎたころの沿線は、いかにも東京の中流住宅地らしい風景であつた。低いなだらかな丘陵には、赤、青の屋根や白い壁がならび、秋の陽を吸っていた。それはやはり九州にはない都会的な雰囲気だつた。私は、これから訪ねていく西田民治の家を想像して怯みを覚えた。

田園調布の駅前の交番で番地を言つて道順を教えてもらった。白い、きれいな道路がいくつも交差していた。杉垣すぎがきや白い塀の内側は植込みが深く、ヒマラヤ杉が直線に秋空にのびていたり、黄ばんだ銀杏いちょうの葉が散り敷いていたりした。瀟洒しょうしゃな和洋建てのどの家も奥まつており、ピアノの音が聞こえていた。私は教えられたとおりに道をいくつも曲がつたが容易に分からなかった。人通りもなく高級な住宅街はひっそりとしていた。》

叔父は死んでおり、従兄弟にあたる息子は裕福で幸せな家庭を築いていた。食事の時に見た彼の指は、「私」と似て一族に共通する長い指であつた。不条理を感じつつ辞去する。貧者のルサンチマンという読み方もできるが、「私」がなお強く生きて行こうという気持ち伝わってくるラストではなからうか。

「私」を京成や東武ではなく、東急に乘せることは、貧しさと豊かさの対比を描くために必然のことであろう。東横線の車窓を見つめながら、芸備線を辿る「私」と従兄弟が歩いた道の違いを噛みしめたと読み取れる。従兄弟の道はまさしく東横線そのものではないか。

上り線、下り線

備後落合の一夜も読み落としてはならない箇所である。深夜に着いた「私」は宿屋に泊る。

《隣の部屋からは中年の夫婦者らしい話し声が高くいつまでも聞こえていた。こみいった面白くない話題とみえ乾いた声だった。この奥の出雲いずもの者らしく、東北弁のような訛なまりである。こんな宿で、人生に疲れたような夫婦の苦勞ありげな話し声を聞いていると、私は自然と自分の父と母のことを連想せずにはいられなかった》

豊かではなさそうな夫婦を見て好悪の感情が起きたわけではないが、何か気になる。旅で見かけた人に対する一瞥や凝視で、自らの心が高ぶったり、動いたりするという場面は、以後よく出て来る。「奥出雲の東北弁」は、後年の『砂の器』の謎解きのポイントになる。東京・蒲田のバーで、加害者が口にした「カメラ」は、秋田県の羽越線羽後亀田のことではなく、島根県の本次線亀嵩かめだけだった、という話だ。備後落合は芸備線と本次線の分岐駅で、本次線で分水嶺を越せば、亀嵩まで36キの距離である。中国地方のごく狭い地域にだけ擬似東北弁があるというネタを、清張はいつごろから温めていたのだろうか。

短編を集めた文春文庫『火神被殺』の「うしろがき」で、清張自身が備後落合の一夜のことを書いており、48年1月9日のことだと明ら

かにしている。小説同様の田舎宿で、囲炉裏を囲んで雑魚寝した、という。翌朝のことにも字数を割いている。

《翌朝八時ごろに起きて十二、三人がめいめいに自分の蒲団を片づける。それでもおかみさんは高脚つきの朱塗りの膳を各人の前に出した。田舎の宿だからそういう古いものはあった。朝食は何だったか憶えていない。九時ごろに客は宿を出て駅から本次線に乗る者、芸備線を乗り継ぐ者、雪の道を別れて歩いて行く者さまざまであった。わたしは芸備線の列車に乗って備中神代へ向かった。そこで伯備線に乗換えるためだった》

松本清張は、54年に朝日新聞西部本社から東京本社に転勤する。翌55年には家族を呼び寄せ、練馬区に居を構える。56年には退社して文筆に専念する。『父系の指』を書いた時期は、人生航路の舵を大きく切ろうと考えていた時期であろう。自らの来し方を振り返る過程で、自伝めいたものを書くとしたのだろうか。心の中は分からない。だが、清張はもっと大きな世の移り変わりを見つめていたはずだ、と思う。次に出て来る『青のある断層』とともに考えてみたい。

美術界の裏にうごめく権謀術数、インチキを描く作品群がある。『青のある断層』（55年11月、オール讀物）は、その第1作として位置づけられよう。

——銀座で一流画廊を経営する奥野は、自分が育てて売れっ子になった姉川滝治がスランプに陥ったことを見抜く。山口県萩市から画家を夢見て上京した畠中良夫が稚拙な絵を奥野画廊に飛び込みで売りに来る。「何か」があり、姉川の創作のヒントになると思い、奥野は次々

に買い込む。姉川は立ち直る。自信を得た畠中は本格的な絵の勉強をするが、かえって「何か」を失う。奥野は買うのをやめ、畠中は失意の中、妻と帰郷する――

冒頭、美術雑誌の作品評の詰らなさ、薄っぺらさを奥野に語らせるが、清張自身の見方だったのだろう。美術界モノでリフレインのように出て来るテーマである。

姉川が畠中の絵を見たのは、静養していた伊豆の山奥の船原温泉でのことだった。畠中夫婦が帰郷する際、思い出にと泊まったのも船原温泉で、時は違うが、同じ旅館の同じ部屋になる。姉川と畠中はお互いのことを知らない。偶然過ぎるという批判を読者に起こさせないのが清張の筆である。「必然的な偶然」は、清張ミステリーの大きな柱であり、たびたび出てくる。『青のある断層』とは、姉川が立ち直った作品の名前である。

船原温泉は後年、『球形の荒野』、『彩霧』にも登場する。清張世界では、東京の武蔵野や銀座、赤坂以外にも繰り返し描かれる特異な地点がある、と予告しておこう。

記録的には、奥野と畠中夫婦がそれぞれ船原温泉に行くため、東海道線で東京から三島まで乗り、伊豆箱根鉄道駿豆線で修善寺へ向かう。19・8^キの初乗りは、姉川との連絡調整をする奥野が先だった。

畠中の妻津奈子が生活を支えるためバーで働いているのだが、その帰りを良夫が駅頭で待つという風景が心に滲みる。

《東京から来る終電は荻窪駅が十二時三十五分である。この時刻になるとたいていの家は戸を入れていて、灯が明るいののは駅前の三四軒と、客待ちしているタクシーの“空車”の標識だけであった。

畠中良夫は三十分前に来て、南口の構内の灯の届かない場所に待っていた。ここに立つのは毎晩の習慣である。それでわかったのだが、やはり終電の人を迎えに待っている者は、ほかに一人か二人は毎晩必ずあった。

音をたてて電車がはいってきた。ホームが離れているから、降りる客の群れが跨線橋の階段に姿を見せはじめるのは、電車がふたたび発車の音をひびかせてからだ。

この一つ前の電車に乗っていなかったから津奈子は今度だった。酒場のその晩の都合によつては最終だったり、その前だったりする。はたして階段をぞろぞろと降りてくる二十人ばかりの人の中に、津奈子のピンクのセーターの色があった。改札口にいる夫の方を見て、手を上げる》

津奈子は東京から乗ったのか、新宿から乗ったのか、何も書かれていないので記録の対象にはしない。

この後、絵が売れそうな良夫は津奈子と寿司屋へ行き、睦まじく小宴を張った。清張が若い2人に優しい書き方をするのは珍しい。

電車が着いて、会いたい人が改札口に姿を表すまで、短くも長いと感じる寸時の流れ、見知らぬ待ち人同士が互いの気持ちを推し量る改札口。こうした若者の心象は、誰もが携帯を持つ平成の世にもあるのだろうか。

私は2015年秋、夜の荻窪駅に立ったが、降りて来る人を待っているという姿は探せなかった。駅の改札口周辺は半地下構造であり、跨線橋を偲ぶこともできなかった。

「もはや戦後ではない」。経済白書が日本の経済回復ぶりをそう総括したのは、56年だった。すでに54年からは神武景気が始まっている。産業別（3部門）就業者数の構成比の変化は裏表の関係にある。5年刻みで見ると、50年は、1次（農林水産）48%、2次（鉱業、建設、製造）21%、3次（卸売、小売、不動産など）29%だった。55年には、1次が41%に下がり、2次23%、3次35%に変わる。60年には3次が最大の38%になり、1次は32%と急減する。65年には2次が31%に増え、1次は24%まで減る（表1参照）。

当然の結果として、農村から都市へという人の流れが強まってくる。55年の都道府県別の転入者数を見ると、転出より転入が多いのは、北海道、埼玉、東京、神奈川、愛知、京都、大阪、兵庫、福岡の9都道府県で、残りは転出者の方が多い。北海道、福岡は石炭産業が最後の輝きを放っていたからであろう。

東京都は21万8291人の転入超過である。昭和三〇年代前半は毎年、中小県庁所在地1つ分の人口が増加した。30年代後半になると、飽和状態になって数が減るが、変わって神奈川や埼玉が10万人規模で増えていく。

仕事を変える、遠い所へ引っ越しをする。そうした場合の移動手段の最たるものは当時なら国鉄であろう。国鉄にとって、戦後に一つの区切りをつけたのは、一足早く50年10月のダイヤ改正だった。進駐軍

優先の列車運行から日本人向けの輸送力強化とサービス改善に乗り出した。寝台車や食堂車、特別2等車が連結されるようになった。長距離急行に「阿蘇」「きりしま」「雲仙」「みちのく」「北斗」「日本海」などの愛称名が付けられたのもダイヤ改正直後からで、旅情という要素が演出された。日本人の多くが列車に乗るようになり、列車に乗る人を見かける機会も多くなった。

清張の場合、文学賞受賞や出版社、先輩作家たちへのあいさつなどで上京する機会が増えたはずだ。車中で、駅頭で、旅する人を眼にしたことであろう。1人旅か、家族旅か、旅する理由とは何だろう、その心情は……。並外れた好奇心と洞察力、想像力で観察していたのではない。高度経済成長が始まった昭和三〇年代冒頭、日本と日本人を描く際に鉄道旅を使うことで、よりリアルなストーリーが展開できる、という考え、手ごたえを持ったのではなかろうか。

『青のある断層』の場合、山口県から上京した若夫婦が夢と富をつかもうとがく。だが、敗北して帰郷する。当時、上京するのは就学、就職など約束されたレールに乗ることを目指すことが多かった。しかし、帰郷という逆の流れがあることを見抜き、作品に仕立てたのは流石だと感服させられる。

地理的な水平移動だけではない。社会の階級、階層を上昇・下降する垂直移動もある。『父系の指』の「私」は、若いころは見習いや小僧をし、戦後になって商社会社に勤めるようになった。

《主任という役職も、私のそれまでの苦労からみれば、自らかちえたといえ言えた》

清張の実生活の反映ではなかろうか。

父の故郷を訪ねる前に大阪出張したのも主任ゆえの仕事だったのだろう。田園調布に行ったのも出張で初の東京行きの時だった。もっと偉くなれば、寝台車や特別2等に乗れ、食堂車で飲食できる時代になっていた。3等に超満員の復員列車や買い出し列車の時代とは大きな様変わりである。

その後の清張作品の展開を見る時、鉄路旅の描写やストーリー中における役割は、55年ごろを境に比重が大きくなったような気がする。

ここまで、初乗り距離は旧国鉄とJRが計1950・2^{キロ}、私鉄は95・2^{キロ}である。旧国鉄とJRの路線図が地図1である。

第2章 旅情・愛憎・ミステリー

(1955年12月～57年8月)

旅への誘い

刑事が容疑者を追う筋立ての作品の第1号は、『張込み』である。55(昭和30)年12月の小説新潮に載った。警視庁は、強盗殺人容疑者の石井久一が、故郷の山口県か、昔の恋人さだ子が後妻として嫁いだ九州のS市か、いずれかに立ち回ると見て、2刑事を西へ向かう列車に乗せる。乗車場面で始まる。

《ゆき柚木刑事と下岡しもおか刑事とは、横浜から下りに乗った。東京駅から乗車しなかったのは、万一、顔見知りの新聞記者の眼につくとまずいからであった。列車は横浜を二十一時三十分に出る》

柚木はS市へ行くのだが、車中の様子や車窓が、多くの駅名を被せて詳しく書かれる。

《列車に乗りこんでみると、諦めていたとおり、三等車には座席はなく、しかもかなりの混みようである。二人は通路に新聞紙を敷いて尻をおろして一夜を明かしたが、眠れるものではなかった。

京都で下岡がやつと座席にありつき、大阪で柚木が腰をかけることができた》

《柚木は、岡山や尾道おのみちの駅名を夢うつつのうちに聞いたように思ったが、はつきり眼がさめたのは、広島あたりからだった》

《岩国で駅弁おこりを買い、昼食とも夕食ともつかぬ飯を食った》

《小郡という寂しい駅で下岡は降りた。彼はここで支線に乗り換えて、別の小さな町にゆくのだった》(注5)

《柚木はこれから九州に向かうのである。門司に渡って、さらに三時間乗りつがねばならない》

《夜遅くS市に着き、柚木は駅前の旅館で寝た》

S市が佐賀市だとは書かれていない。しかし、「電車もない田舎の小都市である。堀がいくつも町を流れている」という描写があり、さだ子を見張るために泊まった宿の名前が「肥前屋」という。決定的なのは、宿の女将の濃厚な佐賀弁だ。

横浜から佐賀まで、東海道、山陽、鹿児島、長崎の4線を乗り継いで、1199・7キに達する。しかし、鹿児島、長崎両線の分岐点鳥栖までは『青春の彷徨』の木田と佐保子が乗っている。鳥栖―佐賀間25キのみ初乗りにカウントできる。

石井は柚木の眼を欺いて温泉宿でさだ子に会うが、追ってきた警察に逮捕される。柚木はさだ子に「今からだ」とご主人の帰宅に間に合いますよ」と急ぎ帰るよう諭した。

特徴的なのは、九州までの旅の長さを書き込んだことだ。『火の記憶』や『青春の彷徨』と比較すると歴然である。小郡に着く前、柚木が下岡に「君はもうすぐ降りるんだな」と話しかけると、下岡は「君は、これからまだまだだなあ」と答えた。

松本清張は長旅の辛さを書こうとしたのだろうか。いや、むしろ旅への誘いを書いているように思える。次のようなくだりをすべり込ませている。

《海の上には日光が弱まり赫あざくなっていた》

広島―岩国間のことで、宮島の海に浮かぶ朱い鳥居が見える辺りである。

《絶えず車窓に見えていた海は暮れて黝くろずんでしまい、島の灯がち
かちか光度を増していた》

これにぴったりの車窓は周防大島が沖合に迫る柳井付近だ、と指摘
できる。

石井自身が旅をしたかったのであろう。上京して、住み込み店員で働
いたが、失職。日雇い仕事や売血もした挙句、胸を病んだ。共犯者に「故
郷へ帰りたい」「昔の女が九州にいる」と語っていた。

日本人の多くは、明日への夢はあるのだが、日々の暮らしはまだ苦し
い時代。どこか遠くへ行きたい。読者は、瀬戸内海沿いを西に進む犯人
と刑事を、身近にあるいは羨ましく捉えたのではなからうか。

柚木や石井久一のように、長時間、長距離の旅をすると、乗車駅と降
車駅とは、時間も空間も大きくかけ離れる。列車は異なる時空間をつ
なぐタイムトンネルの効果を持つてくる。列車のダイヤグラムがまさ
しくそうなのだが、縦軸に列車の移動区間、横軸に時間の流れという図
を作れば、列車の軌跡がトンネルであり、車中の人も降りない限り抜け
出せない。

縦軸(移動区間)は行ったり来たりできるが、横軸(時間)は、過去→現
在→未来と流れていく一方通行である。しかし、列車に乗っていると、
心理的には時間を遡ったり、未来にいち早く到着したりする。『張込み』
の場合、石井久一はさだ子と愛し合った過去への旅をしており、柚木は
容疑者逮捕という未来に向かっていて。列車を降りてからも2人の意
識には時間的に反対のベクトルが働いている。逮捕の瞬間、2人は今と
いう時間を共有する。

只今現在という車窓を見ながらも、意識が時間の流れを超えている。
そのことに自ら気付く時、鉄路旅の旅情が生まれる。この現象を頭の片
隅に置いてみると、清張作品の旅の場面は魅力を増してくる。

旅情は人それぞれであり、それを言語化するのには難しい。清張以外で
成功している例を紹介したい。中央公論社常務だった宮脇俊三(192
6-2003)は、編集者を長年勤める一方、乗り鉄者としても有名だった。
国鉄全路線乗りつぶしを書いた『時刻表2万キロ』、北海道から鹿児島
まで、同じ駅を決して二度と通らない路線をたどる『最長片道切符の
旅』は、名著の評価が高い。広島県の三次盆地から江の川(別名可愛川)
沿いに日本海側の江津に至る三江線を描いた文章が印象的である。(注6)

《東京発20時24分の新幹線で出かけ、名古屋から電車寝台特急「金
星」に乗り継いで翌朝5時49分、広島に着いた。

広島からは芸備線げいびで三次みよしに入り、さらに三江線さんこうで江川えのかわの上流可愛川
に沿って口羽くちばに向かう。

空は青いが川面には淡く靄もやがただよい、嵐気らんきが山峡を包んでいる。
きのうの夕方はあの慌しい東京にいたのに、一夜明ければこの別
世界である。飛行機を常用している人から見れば、そんなことは日
常茶飯のことであろうが、私は夜行列車に乗るたびにそれを感じ
る。大げさに言う魔法にかかったような気さえすることがある。
それにしても、年月の経つのは早いと思う。可愛川を眺めている
とそう思う。三次―口羽間に乗るのは今日が二度目で、五年ぶりな
のであるが、とても五年経ったとは思われない。つい去年のことの
ように記憶が新しい。

旅行をしていて何年ぶりに同じところへ来ると、いつも時の

経過の早さが身に沁みる。街の場合はそれほどでもないが、相手が山や川だと時のスケールがちがうせいとか、こちら側の時間が短絡する。五年前の自分の周辺をいやでも振り返られる。下の娘は生まれたばかりだったなと、匍はいまわる姿を想い出したりする。死んだ人たちのことも思い出す。この五年間、あくせくと過ごしたものだと思う。できることなら、五年前に戻ってもう一度やりなおしたい、などと夢想する》

後半部分、石井久一が佐賀へ向かう心象と相通ずるものがある。

三江線は、江川沿いの里山の麓を走り、ベンガラ色の石州瓦の農家が続く。本州なのに、東京から日帰りの乗りつぶしができない稀有な線区である。山陽新幹線を降りてからもう1つ乗らないと乗車駅まで行けないし、運行本数が極端に少ないからだ。それが逆に首都圏の乗り鉄を誘うのか、私が10年7月に乗った時も彼らの姿が相当見られた。

ロマンスシートの魔界

『箱根心中』(56年5月、婦人朝日)は、列車の2人掛け席に座る男女の胸中に何が起きるのか、と考えさせられる。

——中畑健吉と喜玖きく子はそれぞれ別の結婚をしている従兄妹同士だが、気になる存在である。喜玖子の夫婦仲が悪くなる中、健吉は日帰りの箱根旅行に誘う。不倫のつもりはなかったが、事故で帰京できなくなり、2晩目には男女の関係になる。帰った時の親戚中の騒ぎを思い、2人は追い詰められた心境に陥り、死を選ぶ——

男女は小田急の新宿朝9時発に乗った。

《箱根行特急は、ロマンス・カーで、白いカバーの座席にすわると、

歩廊の向い側から出る車が貧乏たらしかった。乗客が混こんでいて、どの顔も真っ黒に見えた》

健吉は夫婦仲を心配するような言葉を吐くが、喜玖子は最初、心を開かなかった。

《電車は、多摩川の鉄橋を渡っていたが、冬の、寒い水の色が低い距離にあった。喜玖子の心を連想するような色であった》

以後、小田急で多摩川を超える場面や殺害現場としての鉄橋下が何度も出て来る。

電車は座間を過ぎた。

《喜玖子は、ビラの時間表を見ていた。

「ねえ、帰りは湯本発十七時よ。ちようどいいわ」

それは男に、日帰りよ、と念を押している利発な云い方なのであろうか。

「十七時。五時は少し早いな」

「あら、どうして。これ、最後の急行よ」

「小田原から湘南電車しょうなんで帰ってもいいじゃないか」

箱根が近づくにつれ、喜玖子の心が健吉によってこじ開けられて行く観がある。

2人は小田急小田原線の新宿——小田原82・5キと箱根登山鉄道小田原——箱根湯本6・1キを一番乗りする。強羅と早雲山を結ぶ同鉄道鋼索線、ケーブルカーにも乗るが、乗車駅が書かれていない。最低、早雲山に最寄りの上強羅から乗ったとして0・2キとする。

冬枯れの箱根をあちこち歩き、強羅を目指すタクシーで事故に遭い、健吉は重傷を負った。喜玖子1人を東京へ帰そうとするが、今度は喜玖

子が離れない。

『喜玖ちゃん、お帰りよ』

健吉は言った。喜玖子は黙って、彼の枕もとにすわっていた。

今から車で行けば、小田原の駅には十一時に着くだろう。すぐ上りがあるとして、東京駅着は午前一時である。彼女の家は西荻窪の奥だった。帰れと言っても、帰れる時間ではなかった。

電車の音が聞えてきた。

強羅駅を出た湯本行の最終登山電車が、あかあかと灯を連ねて闇のなかを走っていくのが、障子窓から見えた。

それが二人と東京を結んでいるロープの切断のように思えた。

「大変なことになったわ」

喜玖子が慄えていた

往きのロマンス・カーは、キューピッド役として機能している。一方、

最終電車は死に神として2人の前に現れた。

清張作品理解のキーワードとして「日常性の中に潜む非日常性」がある。何気ない日々が続くと思っていたら、恐ろしい世界への亀裂が生じていたという話が読者にリアリティを持って迫ってくる。『箱根心中』の場合、亀裂は小田急のロマンス・カーだった。2人掛けシートは、密室であるという捉え方もできる。ロングシートの座席で行けば、喜玖子の心は動かなかった、という印象が残る。

『顔』(56年8月、小説新潮)は、犯罪、しかも殺人に列車を利用するという趣向が採用される。

——福岡県八幡市(現北九州市)に住む井野良吉は、愛人の飲み屋女

給山田ミヤ子が身ごもって足手まといになった。島根県の片田舎まで山陰線を行く列車旅に誘い、殺害する。だが、行く時の車中にミヤ子の知人石岡貞三郎がいて、井野は自分が犯人として記憶されたのではないかと不安を持つ。井野は上京して劇団俳優として評価を得て、映画出演の機会も得る。だが、石岡が映画を見るかもしれない。彼も殺そうと計画を練る——

最初の殺害旅では、井野とミヤ子は八幡から西鉄の路面電車で門司へ行ったと見られる。関門海峡を渡り、下関から列車に乗り、温泉津を目指す。下関の次の駅、幡生までは山陽線であり、他作品の既乗区間だ。幡生—温泉津間235・9キが初乗り区間となる。2人が並んで座っていた時、ミヤ子が石岡に気付き話しかける。井野は車窓を眺め、ミヤ子とは無関係を装ったが、石岡はそうは見なかっただろう、との懸念が井野を苦しめる。

殺害の場所を山陰としたのは、遠隔地の故だった。井野は「なるべく人の気づかない遠方の土地を選んだ」と独白する。都道府県境を超える事件に対して、各警察本部の初動捜査が遅れることは今でもある。

列車で男女が並ぶ姿は他人にどう見えるのだろうか。無関係であつても、あれこれ詮索されがちである。『箱根心中』の場合、車内は2人だけの世界だったが、他人の視線を浴びる公共の通路・広場にもなりうる。

井野は、石岡の殺害場所を比叡山近辺と決め、口実を設けて九州から呼び出す。下見に行った際、京都駅下車後、比叡山の琵琶湖側の麓、坂本まで電車で行った。当時、米原—京都間は非電化区間だったので、京阪三条から浜大津まで京阪京津線で行ったと認定する。京阪三条—御陵3・9キは現在では京都市地下鉄に変わった。御陵—浜大津間7・5

キは今も当時のままである。浜大津から坂本までは、『ひとり旅』の田部が乗っている。

井野は比叡山に登った。比叡山鉄道のケーブル坂本―ケーブル比叡山2^キも初乗りに加える。

井野と石岡の対面の日が来る。井野の京都までの汽車旅はこうだ。

《東京から昨夜の「月光」で着いた。八時半。たっぷり時刻までには六時間もある》

初めて国鉄の優等列車の愛称名が出て来る。56年11月の時刻表によれば、東京22時15分発、京都8時26分着である。

石岡は、刑事とともに九州から来た。

《四月二日午後二時半、京都駅で会うという手紙の指定を実行するため、(略)折尾駅から急行に乗った。二十一時四十三分発の「げんかい」である。(略)》

さて、京都駅には十時十九分に着いた。指定の午後二時半にはだいぶ時間がある》

乗降時間を時刻表通りに書いたのはこれが初めてである。乗降時刻や愛称名を詳細に書くことで、映画なら合戦や決闘前の人間たちの興奮ぶりを描くのに、ズームを効かせたり、音楽を入れたりするのに似て、クライマックス前の雰囲気盛り上げに一役買っている。

どちらも、時間つぶしに「いもぼう料理屋」の同じ店に行き、隣り合わせになる。井野はあわてるが、石岡は何も気づかない。殺す必要はないのだ。井野は計画を中止し、自信を持って映画に出た。だが、石岡は映画を見て犯人の顔を思い出す。何故か。

その前に、初乗りチェックがもう1つある。井野の劇団は五反田にあ

る。劇団幹部のYさんと渋谷に出て飲む。

《帰りを山手線に乗って、電車の窓越しに原宿あたりの暗い灯りを
見ていると…》

最低代々木までは乗ったと見たい。五反田―渋谷は『父系の指』で乗りつぶされているが、渋谷―代々木2・7^キは井野が一番乗りした。

井野は映画の中で、東海道線上り列車の座席に座り、湘南沿線の車窓を眺める、という役を演じる。これは9年前の山陰線でミヤ子の横にいた男とそっくりの格好である。煙草をくわえているところも同じだ。石岡はもはやしていた記憶が鮮明になり、映画館から警察へ向かう。

列車の中にいると、そう突飛な行動はとれない。同乗の人と会話する、新聞や本を読む、飲み食いをする、眠る…。現代では圧倒的にスマホである。車窓を見ると、いうのも多いのだが、車窓を見る人を見る、ということも少なからずある。私の経験で言えば、車窓観察に疲れてふと車内に眼を転じると、私を見ている人と瞬間目が合う。同じ乗り鉄同士であることが多い。石岡の場合、ミヤ子と井野の足元に仲良く夏ミカンの皮が半分ずつ落ちていたので、アベックに違いなからうという「推理」をしていたのである。

井野は石岡の記憶から逃げ切っていたと信じていた。トリックやアリバイが崩れたわけで、刑事ものの『張込み』よりミステリー性が濃くなった。9年後に石岡の記憶が戻ったのは、車窓を見る姿の再現という形をとることで、「必然性」が高いラストにつながった。

『顔』では、車窓風景の描写に進化の跡がうかがえる。石岡が京都へ向

かった夜行列車が朝を迎えた時のことである。

《汽車のなかは、あまりよく眠れなかった。夜あけの六時ごろから、うとうととする。前の座席に腰かけた刑事は二人とも早くから寝ていた。

ふと眼をあけると、すっかり明るくなり、窓からは朝の光がさし込んでいる。刑事はたのしそうに煙草をふかしている。(略)

洗面具をもつて顔を洗いにいき、座席に帰ってくると、窓はいよいよ明るい。

汽車は海岸を通っているのだった。しずかな海の上を朝の光線がゆらいでいる。向かいの淡路島がゆるやかに滑り、窓ぎわの松林が急速に流れてゆく。

「これが、須磨・明石の海岸か」

刑事は、音にきこえた景色を、あかずに眺めつづけている》

夜が明けた夜行列車内の気だるさが伝わってくる。煤が入りこんでくる列車の中で顔を洗うのは当然なことで、庶民の暮らしの証言として記憶にとどめたい。犯人と接触に向かう刑事は、緊張の中で旅を楽しんでいる。多彩な要素が盛り込まれた。

3作品を、鉄道旅絡みで抽象化、普遍化したキーワードを求めると、次のようになる。

『張込み』——漂泊憧憬、旅への誘い

『箱根心中』——男女の愛憎

『顔』——犯罪と推理。必然的な偶然

以後の鉄道が登場する作品には、3要素のいずれかが盛り込まれ、時として複数で構成される。その意味を込めて、3作品を「清張鉄道世界

の初期3部作」と名付けたい。

後先してしまったが、『任務』(55年12月、文藝界)に触れる。清張が衛生兵として過ごした朝鮮での兵隊生活を描いた屈折した話である。朝鮮海峡を渡り、釜山からソウルまで列車に乗せられた。博多から出港したのだろうが、何も書かれていない。

旅先の人間模様

『九十九里浜』(56年9月、新潮)は、乗り鉄と風景描写がバランスよく描かれている。

——文化人名簿に載るようになった古月は、九十九里浜片貝の旅館主、前原岩太郎から「自分の妻は貴殿の異母姉であろう。会いたがっている」と連絡を受ける。行ってみると、姉は確かにいたが、どんな暮らしをしていたのかが分からない。海岸に出ると、陽焼けし、筋肉が張った女たちが漁船を出そうとしていた。姉もまたこうした貧しい漁村で育ったのだと思い知る——

古月は、お茶ノ水から千葉まで総武線で来て、外房、内房線に乗り換えて大網へ着く。まず、御茶ノ水——両国2・8^{キロ}が初乗りになる。その先、両国から内房線と分かれる蘇我までは『断碑』の木村卓治が乗っており、蘇我——大網間19・1^{キロ}が一番乗りになる。東金線に入り、成東まで5・8^{キロ}もまた初乗りである。

女たちが船を曳き出す場面が圧巻である。

《人間たちは黒く陽灼けした女どもで頭に手拭いをかぶり、腰に着物の布でつくった猿股をはいていた。襦袢のようなものを胴にま

とった者もいるが、何も着ないで乳房を出している者が多かった。たいてい中年の女で乳房は萎びていたが、胴体や腰廻りは、くりくりと張っていた。

彼女たちは懸声をかけ、船につけたロープを綱引きのように引っ張った。波打際に向ってゆるやかな斜面をなしている砂地の上を、船は少しずつ進んだ。その船の進むにつれて梯子のようなものを女たちは忙しげに船の底に宛てて継いでいった。それがレールの役をなしていた。そんな働きをしている女たちは、海水に濡れた身体 of 筋肉の動きを、なりふり構わず見せた。船の上には、これも猿股一つの男が突っ立って、旗を振っていた》

古月は小学校の地理の時間で、地図を見ながら犬吠埼を突端として雲形定規の背で緩やかに引いたような彎曲に魅力を感じていた。清張自身の思いであろう。憧れの地に立って見たものを書きたい、読者に知らせたかった、と受け止めたい。いきなり書くのではなく、経路を示しており、感度のいい読者であれば、東京からの距離感を味わうべきであろう。

九十九里の女たちは、筑豊の炭坑絵で知られる山本作兵衛の作品に通じるものがある。乳房を隠さず石炭を背負子にかつぐ女たちである。中年まで暮らしに追われて働いた清張自身の心境を思いたくなる。

『市長死す』(56年10月、別冊小説新潮)は、九州の市長、田山与太郎が元朝鮮半島西南部の戒厳司令官だったことが伏線になる。東京出張の際、終戦時に軍の金を持って帰国し、田山が世話をしていた女中まで自分のものにした副官が温泉旅館主におさまっているのを知った。確かめに行ったところ溪谷に突き落とされて亡くなった。

その謎解き小説なのだが、田山は司令官に赴任する際、ソウルから裡

邑(現益山)まで列車で行く。朝鮮半島の西海岸に近いところを南下する旅であった。

小説公園56年10、11月号の『声』の前半は、多くの人間の声を聞き分け、決して忘れない能力を持つ電話交換手が主役である。

——新聞社の交換手、高橋朝子は社会部デスクの命で取材先に電話をするが、間違つて強盗殺人が行われている家へ電話をし、犯人が出て来たため、その声を聞く。結婚した相手のワル仲間がこの犯人がいた。電話する機会があつてあの時の男だと確信するが、相手にも気づかれ殺害される——

殺害直前、朝子は犯人グループに呼び出され、都電で駕籠町から指ヶ谷町まで都電に乗る。さらに、水道橋に出て国電で国分寺まで行く。中央線の水道橋—代々木6・2^キ、山手線の代々木—新宿0・7^キ、再び中央線の新宿—国分寺21・1^キが朝子による初乗り区間である。中央線の営業区間は、代々木—新宿間で途切れている。

後半部は、田無町で発見された朝子殺害事件の捜査に移る。

——朝子の遺体には石炭が付着していた。京浜東北線が横を走る田端機関庫の貯炭場のものと分かる一方、そこから朝子のハンドバックが見つかる。殺人は田端で行われたのに遺体はなぜ武蔵野なのか。捜査陣を悩ませる。田端の石炭を小平町まで運び、それが付着するようにして殺害し、近くの田無で遺棄していたことが分かった。同じ都内でも雨が降る時間に差があることを捜査側が気付いたことが糸口だった——

犯人グループのアリバイ工作のため、1人が国分寺から新宿、いったん降りて田端まで行く。新宿から田端まで山手線外回りが一番素直な

行き方だと思いが、清張はそこまで書いていない。中央線で神田、総武線で秋葉原、それぞれ乗り換えの可能性も否定できないので、乗り鉄のカウントはしない。(注7)

犯人は鉄道の動力源や施設を利用して、犯罪の隠ぺい工作をした。『顔』の井野良吉と較べて格段に計画的である。以後、アリバイ作りや遺体の処理で様々な手口が登場してくる。容易に解けない謎としつつも、最後は犯行が明るみになるカギを残さねばならない。その優れたアイデアが清張を人気作家にしたのだと思う。

『鬼畜』が載ったのは、57年4月の別冊文藝春秋だった。

――印刷屋の竹中宗吉は、料理屋の女中と親しくなったが、自分の子供とも確信できない3人を押し付けられ、妻は怒り狂う。1番下の子供は事故死するが、妻の仕業のように見える。2番目の子は東京のデパートで置き去りにする。長男は宗吉が崖から突き落とす。救助されても、父の名前を明かさない。だが、宗吉が使った石版のかけらを石けり遊び用に持っており、印刷模様から宗吉が捜査線上に浮かぶ――

印刷屋はS市にあり、2人目を東京まで連れて行くのに急行で3時間。限りなく静岡市に近いが、はつきり書かれていない。東京駅から数寄屋橋まで都電に乗った。

清張は、主人公が東京から中央線に乗って甲州、信州へ向かう作品を多数書いている。『地方紙を買う女』(57年4月、小説新潮)はその第1作目である。

――バー勤めをしながらソ連に抑留された夫を待つ潮田芳子は、デパート警備員に万引き犯に仕立てられ、身体と金を奪われる。夫の帰国

が迫ったため、警備員とその愛人を山梨県の峡谷に誘い、毒殺して心中を装う。遺体発見と捜査状況を確かめるため、「連載小説が面白そう」との理由で県紙を東京に取り寄せる。犯罪がばれないと分かると、県紙の購読を打ち切ったので、不満に思う作家が調べ始める――

芳子は新宿11時32分発の中央線各停列車に乗り、14時33分に甲府に着いた。56年11月の時刻表では14時55分着となっており、22分差は気になる。ストーリー上、芳子が警備員らの到着を待つまでの間に県紙を読むという時間が必要なのであろう。時刻表通りでなくても、話の腰は折れない。リアリティも損なわれていない。

『声』の高橋朝子が降りた国分寺から甲府までの102・7^{キロ}が初乗り区間になる。

警備員と愛人は12時25分発の準急「白馬」を利用、15時03分甲府着だった。ここで3人が落ち合ったのだが、芳子が1列車早めたのは「列車の中で三人一緒にいるところを、知った人に見られたくなかったからです」と書き残している。『顔』の井野良吉の失敗例と較べると、清張は芳子をより用心深い犯人として描いたことになる。

芳子は作家が犯行に気付いたと知り、彼と女性編集者を伊豆のピクニックに誘う。「三人は昼前には伊豆の伊東に着いていた」とあり、東京から列車で来たと判断する。伊東線の熱海―伊東間16・9^{キロ}は彼らの一番乗りである。毒入りのジュースを用意し、バスで相模湾の見える丘まで行くが、作家が警戒する。機会を逸して、死を選ぶ。

芳子の勤め先は渋谷にあり、千歳烏山のアパートから電車を通っていた。京王線明大前まで4・7^{キロ}の一番乗りであることは間違いない。明大前からさらに新宿まで乗り、山手線に乗り換えたのか、井の頭線を

利用したのかは不明なので、記録にできない。(注8)

育ちがよく、学歴もあるお嬢さんが、姉の夫への思慕を断ち切るかのように身を落としてゆく『遠くからの声』(57年5月、新女苑)は、東京だけでなく、北海道や九州が登場する。鉄路旅をもっと描けそうな気がするが、ここぞという所では見事に決まっている。

——津谷敏夫と民子夫婦は見合い結婚だが、互いに愛し合っている。だが、民子の妹啓子は、デートの時ばかりか新婚旅行先の中禅寺湖まで押しかけるほど2人につきまとった。敏夫が好きだからだ。だが、高円寺に居を構えて民子が妊娠するところから男遊びを始め、津谷が札幌勤務になってからは、子持ちの冴えない男の後妻に入る。さらには学生時代の知り合いと駆け落ちして筑豊炭田の街に住む。津谷は福岡出張の折、訪ねて行った——

《啓子のいる所は、福岡からいくつめかの駅で支線に乗り換え、途中でまた支線に乗り換えねばならない幸袋こうふくという名の寂しい田舎町いなかだった。汽車の窓からは、三角形のボタ山が絶えず見え、いかにも筑豊炭田の真ん中にはいった感じだった。彼は、東京の女子大にかよ通ったところの啓子を思い、彼女がこんな所に埋まったように住んでいることが奇妙でならなかった》

当時、博多から幸袋へ行くには、鹿児島線を北へ上って折尾、南へ下がって原田のいずれから筑豊線に乗りかえる。さらに、小竹まで行つて幸袋線列車を待つ。どちら回りだったのか、文章から読み取れないのでカウントしない。小竹から幸袋まで幸袋線の4・9キロを初乗り区間として記録する。幸袋線はいわゆる盲腸線であり、69年に廃止となった。

幸袋線の終点は二瀬である。ここには日鉄二瀬炭鉱があり、野球部が都市対抗で活躍した。古葉竹識(広島)、江藤慎一(中日)、黒木基康(大洋)といった強打者の名前が浮ぶ。幸袋は、柳原白蓮が嫁いだ炭鉱王伊藤伝衛門の邸宅があったところだ。今も保存、公開されている。昭和三〇年代初めは石炭産業が光彩を放っていた。

題名の由来は、愛しているから遠くへ行く、遠くへ行くほど愛を深める、ということなのだろう。遠くとは、距離的にも階層的にも、二重の意味がある。筑豊炭田とはびつたりの場所を選んだものだと思う。《汽車が来て、二人は改札口で別れた。動きだした窓から見ると、啓子は顔いっぱい笑いながら手を振っていた。十日ばかりしたら、また会えそうな別れ方であった》

啓子が泣いたり、恨みがましいことを言ったりしないところがかえって心情を伝えている。この後、また妻子のある炭鉱夫と逃げた。ボタ山が風化した今、遠賀川沿いの筑豊地方は存外牧歌的風景が広がる。清張はそこにも視線を走らせていた。

《川幅は広いが、水は河床の真ん中を細く流れていて、葦や草が伸びていた。河床の両端は野菜畑や麦畑になっていた。放し飼いにしたたくさんな牛が遊んでいた》

崩れたタイムトンネル

57年8月の『白い闇』(小説新潮)で、清張世界の鉄路は東北に伸びる。

——信子の夫で石炭商の小関精一は、常磐と北海道へ商用の旅に出て失踪する。精一には青森に住む愛人常子がいたと、夫の従兄弟高瀬俊吉が知らせる。信子をわがものにした俊吉の作り話で、俊吉は十和田

湖で精一を殺害して湖底に沈め、自分の愛人である常子は奥入瀬溪流で毒殺した。それに感づいた信子は、俊吉を十和田湖旅行に誘う――

信子の最初の東北旅行は、夫の所在を常子に尋ねようと、青森へ夕方に発った。当時の青森行き急行列車は常磐線経由しかなかった。非電化の時代で、内陸部の白河の関などを越えて行く東北線より、常磐線の方が輸送力で勝ったのである。56年11月時刻表で見ると、上野―仙台間の場合、常磐線経由の方が15キ長いが、所要時間は東北線経由より40〜50分早い6時間程度で結んでいる。清張は、自明のことと見たのか、どちら経由で行ったか書いていない。

慎重過ぎるが、上野―青森間のうち初乗りにカウントするのは、①東北線の上野―日暮里2・2キ②仙台の手前で東北線と常磐線が合流する岩沼から青森まで405キである。②の相当な部分は現在、3セクのIGRいわて銀河鉄道と青い森鉄道になっている。細かく書くと、岩沼―盛岡201・1キ、盛岡―目時82キ、目時―青森121・9キの計となる。

初の東北旅は次のように書かれている。

《列車の内では一睡もすることができなかった。こんな思いで一夜の旅を独りでつづけるとは、なんという不幸であろう。蒸し暑いので、窓はあけられていた。窓の外には何も見えぬ夜が絶えず速度をもって流れていた。闇の底を東北の荒涼たる光景が魔のように駆けているように思われた。暗い風が冬のように寒かった。列車は人氣のない駅にときどき停まった。なかには、名前だけ知っている駅名があった。遠いところへ来た心細さで息が苦しくなった》

後年の清張の筆と比較すると、やや大仰なのは、初の東北という力み

からだろうか。

《信子は青森の街にさまよい出た。空虚な見物人であった。何をしても無色にしかうつらなかつた。

ただ、港に來たとき、青函連絡船の黄色い煙突が、彼女にはじめて色らしいものを点じた。夫は、この船に乗って本土と北海道を往復していたのだ。そう思うとなつかった。彼女は二時間近くも船を眺めていた。海には、半島の低い山が匍うように突き出て見えた》

2度目の東北行は、俊吉と常磐線回りの急行「みちのく」に乗った。上野発朝10時、仙台着夕方5時近いとある。56年11月時刻表では、上野発9時50分、仙台着15時49分である。最初の旅行で抜けていた日暮里―岩沼間343・1キが乗りつぶされた。俊吉は愛する信子との旅行に高揚した。

《日ごろ落ちついて、いくらか取りましている感じの俊吉も、信子と座席がならんで、うれしそうに少々饒舌じょうぜつになっていた。彼は沿線の風景で、ときどき、名所のようなところがあると、窓から指さして信子に教えた。(略)

よそ目には夫婦か、愛人同士のように見えた》

常子の兄で仙台にいる白木淳三に会った後、2人は十和田湖へ向かう。信子が、精一殺害の時と同じコースを目指すため、俊吉は犯行がばれたことを知る。白い霧が闇のように広がる湖上のボートで俊吉はすべてを明かし、信子と心中しようとする。その時、白木のボートが現れる。

信子と俊吉は、仙台から青森まで夜行列車の2等車(現在のグリーンに相当)に乗る。小田急のロマンス・カーは登場したが、旧国鉄の優等席は初めてである。それだけに、俊吉の心境が想像されるのだが、清張

は「混んでいて、信子と俊吉とは離れてやっと席をとった」と書く。

別冊文藝春秋同月の『捜査圏外の条件』は、先に述べた列車が持つタイムトンネル性を実感できるストーリーである。

——銀行員黒井忠男の妹光子は、黒井の同僚で妻のいる笠岡勇市と愛人関係になる。光子は亡き夫の墓参に山形へ行くと言いながら、笠岡と北陸の温泉に行つて急病死する。醜聞を恐れた笠岡は光子の身元が分からないようにして立ち去る。それを知り、妹を捨てた奴だと憎しみを深めた黒井は、笠岡の殺害計画を実行するため、銀行を辞めて山口県宇部市のセメント会社に転職する。7年の歳月の経過を待つ。上京して新宿の飲み屋で再会し、毒入りビールを飲ませる——

黒井は、笠岡が殺害された後、容疑者として自らが捜査線上に浮上しないようにした。笠岡の周辺捜査が始まって、7年前の職場関係者や1050^{キロ}も離れた地の人間には疑いの目はかかるまいという計算だった。7年前の東京と現在の宇部を結ぶタイムトンネルが列車なのである。

乗り鉄的には、黒井は妹の遺体確認のため北陸へ行く。I県Y町。三方を山に囲まれ、清流が流れていると書かれており、石川県の山中温泉であろう。夜行で発ち、翌日午後着いたという。当時、山中温泉の玄関口は北陸線大聖寺駅だった。上越線回りの急行「北陸」に乗るのが最も想定しやすい。が、東海道から米原乗り換えで行ったというルートも否定できない。今一つ不鮮明な描写なので、初乗りとすることは避ける。

黒井の一番乗りと認定できるのは、笠岡に東京駅まで見送られ、列車で宇部に向かったことである。降車地を書いていないが、東海道、山陽

の両線に乗った後、山陽線の宇部駅（当時は西宇部）で降り、宇部線の宇部新川駅（当時は宇部）までの6・1^{キロ}に乗車したとみなす。

宇部の街の描写は短行だが、味わい深い。

《宇部はセメントの町で、屋根には白い灰が降りている。薄雪をかぶったような家なみの向こうには蒼い海がおだやかに展がっていた。晴れた時は、九州の山が見える》

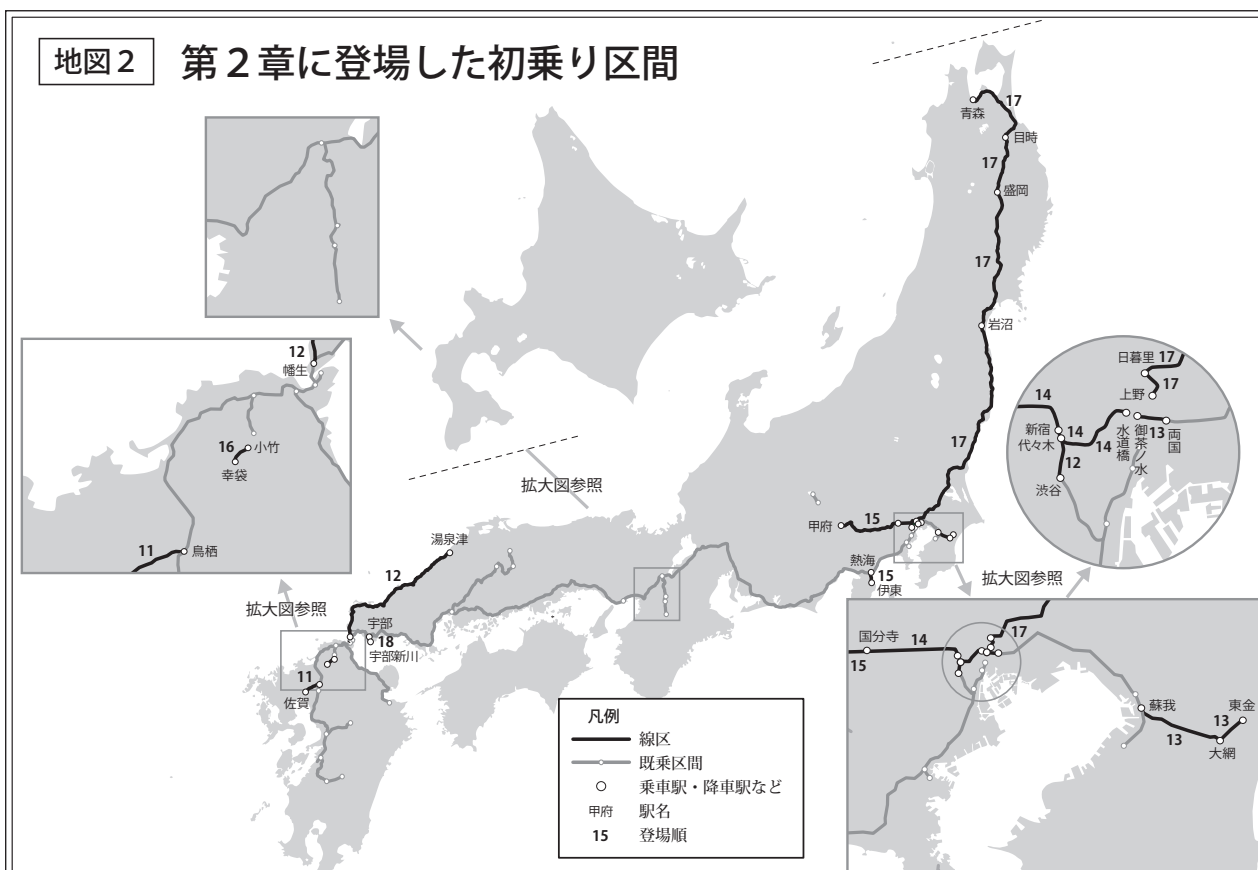
公害とか環境とかがうるさく言われない時代のことであろうが、変わらないのは宇部・小野田の海岸から九州を見る景色である。瀬戸内海の北西端、周防灘が狭まるあたりは、波静かな日は湖のように見える。九州の山とは福岡・大分県境にあり、修験道で知られる英彦山やシャクナゲが美しい犬ヶ岳の山々である。JR小野田線の本山支線の終点長門本山駅を降りて海岸線に出ると、こんな景色を見ることができ。

黒井が造ったタイムトンネルは、もろくも崩れた。笠岡が毒殺される前、7年前に流行った歌謡曲『上海帰りのリル』を歌った。光子の愛唱歌であった。それを飲み屋の女中が聞いていたのである。捜査は一挙に7年前の笠岡の交友関係の洗い出しに進む。それを知った黒井は死を決意する。黒井は時刻表マニアでもあった。犯行後すぐに東京を発てるよう、「下り列車の時刻はことごとく誦んじていた」という。

ここまでの、旧国鉄とJRの初乗り区間は計3150・4^{キロ}になった。私鉄は202・1^{キロ}である。鉄道乗車が様々な形で描かれているが、とりわけ犯罪と結びつく作品が多くなった。2章で出てきた旧国鉄とJRの初乗り区間を地図2で示した。東北線が北に向けて放たれた矢のようである。3章以下の章末にも同様な地図を掲げる。

地図2の番号対照表

		作品名	線区名	乗車駅	降車駅	キロ数
55年	11	張込み	長崎	鳥栖	佐賀	25
56年	12	顔	山陰	幡生	温泉津	235.9
		顔	山手	渋谷	代々木	2.7
	13	九十九里浜	総武	御茶ノ水	両国	2.8
		九十九里浜	外房	蘇我	大網	19.1
		九十九里浜	東金	大網	東金	5.8
57年	14	声	中央	水道橋	代々木	6.2
		声	山手	代々木	新宿	0.7
		声	中央	新宿	国分寺	21.1
	15	地方紙を買う女	中央	国分寺	甲府	102.7
		地方紙を買う女	伊東	熱海	伊東	16.9
	16	遠くからの声	幸袋	小竹	幸袋	4.9
	17	白い闇	東北	上野	日暮里	2.2
		白い闇	東北	岩沼	盛岡	201.1
		白い闇	東北	盛岡	目時	82
		白い闇	東北	目時	青森	121.9
		白い闇	常磐	日暮里	岩沼	343.1
	18	捜査圏外の条件	宇部	宇部	宇部新川	6.1



第3章 東京駅15番線

(1957年12月～59年8月)

一、二等待合室

『眼の壁』は、週刊読売で57(昭和32)年4月14日から12月29日まで連載された。『点と線』は、旅の同年2月～58年1月を飾った。同時期の作品だが、ともに初の長編推理であり、列車と駅施設が舞台やトリックとして数多く登場する。既に見たように、『地方紙を買う女』、『白い闇』、『捜査圏外の条件』もまた同時期の作品であり、鉄道が作品の中で重要な役割を占めている。

なぜ、こんなに鉄道旅が登場するのか、やはり時代を見なければならぬ。56年11月に国鉄の白紙ダイヤ改正があった。東海道線が全線電化され、東京―大阪間の特急「つばめ」や「はと」がスピードアップした。東京―博多間にブルートレインの元祖となる特急「あさかぜ」が登場した。長距離の急行については、2等車、3等車、寝台車、食堂車をフル装備するようになった。山手線と京浜東北線が分離運転、すなわちそれぞれが独自のレールを走るようになった。列車が個性を発揮し始めた、という言い方もできよう。

清張が人々の仕事、暮らしぶりの変化を見つめていて、自然に鉄道と乗客を描くようになったのだろう。

『眼の壁』の粗筋を書く。

——昭和電業製作所の会計課長関野徳一郎は、給料日に金が不足するため一時金を借りようと、手形を切るが、右翼団体でもある詐欺グループのバクリ被害に遭う。責任を感じて自殺するが、部下の萩崎竜雄

次長は友人の新聞記者田村満吉とともにグループを追いつめる——

事件の舞台は東京と信州が多いが、まずは初乗りチケットである。萩崎は東京駅で関野がバクリ屋と会う直前に別れ、阿佐ヶ谷まで帰る。東北線の東京―神田1・3^キと中央線神田―水道橋2・1^キは初登場区間である。バクリ屋集団の1人、黒池健吉はバクリ被害を調査する昭和電業の顧問弁護士、瀬沼俊三郎事務所で働く元刑事を射殺したため、逃げ回ることになる。飛行機で羽田から名古屋へ行き、名古屋から中央線で瑞浪(岐阜県)まで50・1^キに乗り、一味のアジトである精神病院に隠れた。犯行や逃走に航空機が登場するのはこれが初めてである。

萩崎と田村は列車で瑞浪へ来るが、田村は右翼団体首領の舟坂英明が伊勢に来ていたため、彼に会おうとする。名古屋から近鉄で宇治山田まで乗る。107・1^キに達する。

瀬沼弁護士は一味に拉致され、殺害死体が中央アルプス山中で発見された。警視庁の井手警部補は現地へ向かうため、新宿発8時10分の準急に乗る。時刻表によれば、「穂高」であり、塩尻着午後1時半も文中と同じである。新宿―甲府間は『地方紙を買う女』、『富士見―上諏訪間は『湖畔の人』で乗りつぶされており、甲府―富士見48・8^キ、上諏訪―塩尻36・2^キが初乗りである。今の特急は岡谷―塩尻間を短絡線で走るが、当時は辰野経由であった。井手警部補は塩尻で乗り換え、木曽福島までの41・7^キにも乗る。

舟坂や黒池の故郷は八ヶ岳山麓であり、萩崎は手掛かりを探しに行く。新宿から小淵沢まで来た後、小海線に乗りかえ、佐久海ノ口へ行く。39・4^キ。捜査が及んできたことを察知した一味は、邪魔になった黒池をアジトで殺害し、死体を北アルプスの麓にある青木湖近くで自殺に

見せかけて遺棄する。萩崎は遺棄現場を見に行く。塩尻から先、篠ノ井線の松本までの13・3^キと松本から大糸線の築場まで46・3^キは彼が一番乗りした。

瑞浪のアジトが摘発される前、萩崎は舟坂の過去を知る佐久海ノ口の古老を瑞浪へ連れて行く。この時、中央線で乗り残していた木曾福島―瑞浪間83^キも初乗り区間となった。

これほど鉄道乗車回数が多い作品は初めてである。ただ、時刻表を使ったトリックはあまり出てこない。むしろ、列車や駅が犯罪の場になっていることが注目される。

新鮮なのは、パクリ集団が会計課長に自分たちの融資話を信じ込ませるのに東京駅の一二等待合室を利用することである。高級な場所というイメージで惑わせた。以下のように描かれる。

《待合室は、広く外部と仕切られていた。青いクッションがテーブルを囲み、いくつも輪をつくつてならべられてあった。広く空間をとった大きな壁には、日本の名所の浮彫^{レリーフ}が取りつけられ、地名はローマ字だった。駅の待合室というよりも広いロビーという感じである。

じつさい、そこには外人が多かった。青い服を着た軍人が、一団となつてしゃべっている。子供をつれた夫婦がいる。正面の窓口で、何かきいている二三人の男がいる。椅子に腰を深くおろして、新聞をよんでいる者がいる。それらの外国人は、みな大きな鞆^{かばん}を横にひきつけていた》

東京都心に通うサラリーマンは、毎日のように一二等待合室を横目

にしていたかもしれない。だが、実際に入った人はどのくらいいたのだろう。作品の導入部として強い訴求力を持つ。身近な景観の中に非日常世界が始まるという清張作品のリアリティを、多くの人に感じさせたであろう。

現代であれば、高級ホテルのロビーということになる。グレードの高い空間への憧れを人々が持ち始める時代ではなかったか。一二等待合室を時代の先端を行く場所として取り上げたアイデアが際立つ。

パクリ集団に拉致された弁護士瀬沼俊三郎は、身動きならぬまま担架に載せられ、東京駅から東海道線下り急行「西海」で名古屋辺りまで運ばれるのだが、東京駅での乗せ方が意表を突く。宗教団体を装い、一人が急病になったので、人目につかぬよう乗せたい、と駅に頼む。駅は小荷物運搬に使う地下道を用意する。ここでも東京駅の中にそんな裏の抜け道があったのか、と読者を感じさせる。

この先、また芸が細かい。「西海」は九州の佐世保行きだが、一味は担架を証拠隠滅するため、小田原―熱海間の真鶴海岸で車中から捨てる。それが確認されたのは、9分前に通過した伊東行き準急「はつしま」が通過した時には何も捨てられなかったという沿線住民の証言に依る。「西海」と「はつしま」では、乗客の性格がガラリと違うが、東海道線を様々な人々が時間を空けずに利用していることが実感できる。ましてや、「西海」や「はつしま」に乗ったことがある読者は作品に誘い込まれるだろう。

黒池の死体が発見される直前、大糸線の築場駅でいかにも死体が入っているような荷物が到着し、駅の伝票に残っていた。黒池は硫酸液に漬けられ、数日の間に何ヶ月分もの腐乱が進行したのだが、一味が捜査の眼をあざむこうとしたのである。旧国鉄はほとんどの駅で荷物を

扱っていたが、そうしたことも犯罪を描くのに使ったのである。

こうして見ると、清張は『眼の壁』を通じて、鉄道も多数書いたが、死体の処理方法にも工夫している。遺体が中央アルプスで見つかった瀬沼弁護士¹の死因は道に迷った上での餓死とされたが、実際は瑞浪の精神病院に監禁して餓死させた。木の実を与えて実際に山中をさまよったかのような細工もしている。

長編故にというべきか、登場人物が多彩になった。犯人、被害者、愛人、刑事というコンパクトな顔ぶれではない。探偵役が萩崎と田村、一味も舟坂、黒池のほか黒池の妹が登場する。殺される瀬沼弁護士とその事務所員、萩崎らによる聞き込みを受ける国鉄職員もいる。昭和三〇年代前半の日本人の息遣いが伝わってくるようではないか。清張は長編を書くにあたって、そのような所まで目配りというか、読者サービスしたように思える。

『目の壁』について、ミステリー評論家の中島河太郎は次のような解説を書いている。

「推理小説という形からでも人生は描ける、動機をもつと重要な要素にすることによって、人間描写に通じ得られる。その動機も社会的な面に発展させれば、さらに小説の芯^{しん}は強まり、ひろがりをもつだろうというのが、著者の信念であった。そして『点と線』と本編が書かれた」(注9)

並走する殺害行列車

清張の作品群を大山脈に例えるならば、『点と線』は主峰の1つであり、ひとときわ高い。「社会派ミステリー」という言葉が出来るきっかけにもなった。伝説的に語り継がれているのは、博多行き特急「あさかぜ」が

東京駅で出発を待つ際、頻繁に発着する2本の乗り場を挟んだホームから、特急に乗り込む男女を目撃させるトリックである。

——機械工具商社経営安田辰郎は、官庁に食い込んでいるが、昵懇の仲である某省の石田芳男部長に汚職捜査の手が伸びて来たと知り、その芽を摘むべく課長補佐の佐山憲一を心中に見せかけて毒殺する。場所²は九州、福岡市の海岸。心中相手は、赤坂の割烹料亭「小雪」の女中お時だが、顔見知り程度の仲を親しく見せる必要が出て来た。

安田は鎌倉の家へ帰る際、東京駅まで見送ってくれと女中仲間2人を連れて、自分が乗る横須賀線13番に来る。すると、15番線には博多行き特急「あさかぜ」が停車中で、佐山とお時が話しながら一緒に乗り込むところが見える。13、14番の両線には横須賀、東海道線の列車が次々³に出入りするが、17時57分から18時1分までの4分間だけ、13番線があるホームから15番線のホームが見渡せる——

冒頭部分の描写が話題になったのは、時代の先頭を切って走るような「あさかぜ」の魅力を描いたからであろう。まずは速さである。作中でも東京発18時30分だが、博多着は翌日の午前中の11時40分である。急行では、1昼夜かかるのが当たり前だった。寝台中心の列車編成なので疲れも少なくてすむ。仕事をして東京駅に駆け付け、九州に着いてからもひと仕事できる。

掲載雑誌が「旅」であっただけに、清張の筆も旅情を誘う方向に傾いたことは想像に難くない。東京駅15番線は旅の出発点、憧れの場として機能していた。丸の内側から八重洲側に向って、中央、京浜東北・山手、東海道、横須賀の各線となり、15番線は関西以西に行く長距離の優等列車が多数発車していた。サラリーマンたちは15番線を見ては、ふっと旅

情をかきたてられたのではなからうか。

先に、刑事が犯人を追う『張込み』にも旅への誘いが滑り込んでいることを指摘したが、1年ちよつとの間に日本人は豊かになったというべきか、旅に対する需要レベルが高まった、と痛感する。単なる旅ではなく、快適でぜいたくな旅を、なのである。

2人は別々の思惑で「あさかぜ」に乗った。お時は熱海で降り、佐山は博多まで行き、石田や安田からの連絡を待った。2人旅に見えかけながら1人旅だったことから「完全犯罪」の謎を解く糸口が見え始める。佐山が食堂車に行き、その領収書が遺体のポケットから出てきたことである。日付のほか「列車番号7、御一人様、合計金額三百四十円。東京日本食堂発行」と書かれていた。心中に向かう最中、男1人だけで飯を食うものだろうか、という疑問を福岡の老刑事鳥飼重太郎が持った。

列車番号というのは、今の新幹線であれば、「1A」が列車名「のぞみ1号」、「501A」が「ひかり501号」と即物的過ぎるのだが、当時の列車名は数字を被せられることはなかった。急行の場合、「霧島」「雲仙」「十和田」「白山」など行先地周辺の観光地に因むものだった。番号は、特急なら1ケタ、急行は2ケタ、準急以下は3ケタという傾向もあった。

58年11月の時刻表によれば、東海道線の列車番号1は、大阪行き「つばめ」、3は同「はと」であり、5は長崎行き「平和」、9は鹿児島行き「はやぶさ」となる。2、4、6、8、10は同じ名前の上り列車になる。作中で、刑事が「列車番号7とは何のことだ」と叫ぶ一幕があるが、「旅」の読者には先刻承知のことに違いない。

佐山とお時の死体は、福岡市・博多湾の香椎海岸で並んで見つかるが、

食堂車での領収書に不審を持つ鳥飼刑事はもう1つの疑問を持つ。

——福岡市の中心部から香椎へ行くには、国鉄と西日本鉄道宮地岳線の2つの鉄路がある。国鉄駅から降りて海岸へ行く途中に西鉄駅が位置する関係だ。国鉄駅近くで佐山とお時らしい男女が目撃される一方、西鉄駅前でも男女が目撃される。同一のアベックと見られたが、目撃時間に11分の差がある。両駅間の距離からすれば、ちと大き過ぎる。せいぜい6、7分のはずだ——

ここにトリックがあった。

国鉄駅で降りたのは佐山と安田の妻亮子だった。2人が西鉄駅を通過した直後に安田とお時が宮地岳線に到着し、4、5分遅れで海岸に向かった。佐山とお時は騙されて毒入りの飲み物を口にし、安田夫婦が死体を並べて心中に見せかけた。夜の香椎海岸に2組の男女が来たのに加害者側の2人は被害者側の陰に隠れてしまったのである。

鳥飼は宮地岳線にも2人連れがいたのではないかと思い、目撃者を探して何度も乗る。当時、福岡市中心部から西鉄の路面電車が延び、競輪場前で宮地岳線に乗り継ぐようになっていた。鳥飼は競輪場前から西鉄香椎のさらに先西鉄福岡まで18・2_{キロ}を小分けして一番乗りした。

安田夫婦の手口を見て想起するのは、『顔』の井野良吉が殺す相手と列車内で同じ席に座って失敗したことである。『地方紙を買う女』の潮田芳子は、殺害相手を1列車先に行かせる「時間差」で目撃者が出る事を避けた。安田夫婦は、並行する鉄路を別々に来て、自分たちの気配を消そうとした。「現地集合型」とでも呼べる列車利用犯罪である。2組の男女が同時に目撃されたらトリックは崩れるし、時間が離れていても目撃時間の差が大きくなってしまい、技が空振りになってしまう。(地図B参照)

地図 B

安田夫婦と被害者 2 人が 香椎海岸へ行った経路

- ① 安田亮子と佐山憲一 国鉄香椎駅 21 時 24 分着
- ② 安田辰郎と女中お時 西鉄香椎駅 21 時 35 分着



危険なトリックにリアルさを吹き込んだのは香椎という場所の風景を丁寧に書き込んだことである。清張の筆は歴史から迫る。

《鹿児島本線で門司方面から行くと、博多につく三つ手前に香椎という小さな駅がある。この駅をおりて山の方に行くと、もとの官幣大社香椎宮、海の方に行くと博多湾を見わたす海岸に出る。

同時に作品自体がいつの間にか歴史として語られる客体となっていることにも注目したい。

福岡市東部の市街地外れと書かれた香椎は、今や東の副都心であり、万葉の時代を偲べた海岸線は沖合まで埋め立てられて人工島が出来た。タワーマンションが造られ、昔の海岸線の真上は都市高速道路が走る。

前面には「海の中道」が帯のように伸びて、その端に志賀島の山が海に浮かび、その左の方には残の島がかすむ眺望のきれいなところである。

この海岸を香椎潟といった。昔の「檀日の浦」である。太宰師であった大伴旅人はここに遊んで、「いざ子ども香椎の潟に白妙の袖さえぬれて朝葉摘みてむ」（万葉集巻六）と詠んだ（注10）

万葉の世界を引き寄せるだけでない。香椎に行く乗換駅も歴史の舞台なのである。

《競輪場前》というのは、博多の東の端にあたる箱崎にある。箱崎は蒙古襲来の古戦場で近くに多々羅川が流れ、当時の防塁の址が一部のこっている。松原の間に博多湾が見える場所だ（注11）

鉄道を使ったトリックに、風景や歴史を絡ませるという手法は、清張作品で様々に登場するし、清張ミステリーの特徴とも言えるだろう。

西鉄宮地岳線は元々宮地嶽神社への参拝鉄道の性格もあったが、人口が少ない部分が廃線となり、貝塚線と名を改めた。乗換駅の競輪場前も貝塚と名前を変え、路面電車は地下鉄に替わった。『点と線』自体が昭和三〇年代の福岡市を伝える歴史的資料になったのである。

究極の机上鉄

安田が犯人であることは、早い時点でおわせているのだが、鉄壁のアリバイを持っていた。犯行があつた4月20日の夜は、列車で上野から札幌に向かつていたというのである。しかも、某省の石田芳男部長と同じ列車に乗り合わせ、石田部長は「再々あいさつを受けた」と証言する。証言は虚なのだが、石田部長が北海道まで列車で行ったのは安田のアリバイ作りのための事実である。

上野駅19時15分発急行「十和田」は、常磐線経由で青森着9時9分。青森発9時50分、函館着14時20分の青函航路連絡船に乗る。この1113^キが初乗り区間である。さらに、14時50分発急行「まりも」に乗って函館線を往き、札幌に20時34分に着いた。道内に入ってから乗車距離286^キ。3^キも大変だが、24時間以上、列車と連絡船に乗りつづけているのである。札幌では降りなかった。安田と一緒に見え見え過ぎることか。旭川の手前の滝川まで来て、根室本線に入り、翌朝7時15分に釧路へ着いた。札幌―釧路間は391・9^キに達する。石田部長は2等に乗ったとは言え、2夜連続の座席泊は今では考えられない。清張作品で最もハードな乗り鉄をした1人であろう。名目は管内視察ということだが、飛行機はなかったのか。58年の時刻表によれば、羽田―千歳間にはJALが飛んでいたが、道東へは丘珠空港から1日1便しか出てい

表2 安田辰郎のアリバイ説明と三原警部補の推理

年月日	安田の申し立て	三原の推理
4月20日	19時15分 上野発急行「十和田」に乗車 「石田芳夫と同じ列車だった」と説明	15時 羽田から飛行機搭乗 19時20分 福岡空港着 香椎海岸で犯行、福岡泊
21日	9時9分 青森着 9時50分 青函航路連絡船乗船 14時20分 青函航路連絡船下船 14時50分 函館発急行「まりも」に乗車 20時34分 札幌着	8時 福岡空港発 正午 羽田着 13時 羽田発 16時 千歳着、札幌駅へ向かう 17時40分 函館線上りで小樽へ 18時44分 小樽着 19時57分 急行「まりも」を待ち受けて乗る 20時34分 札幌着

ない。点と線の設定は、現実離れはしていない。

安田は、石田が列車や船に乗っている間に飛行機で東京↓福岡↓東京↓札幌と移動した、というのは余りに有名なトリックである。某省の汚職に取り組んでいた警視庁捜査2課の三原紀一警部補は次のように推理した。

4月20日の羽田発15時の飛行機で19時20分に博多に着き、香椎海岸で犯行を行う。1泊して、福岡発8時の便で羽田へ正午に着く。13時発に乗り換え千歳に16時に降り立つ。札幌駅に駆け付けて17時40分発普通に乗れば、小樽に18時44分に着く。19時57分発急行「まりも」で札幌に戻り、20時34分着。出迎えに来た相手に証言させた。アリバイ申し立てと実際を比較すると、表2のようになる。進化した、多様化する清張の鉄道卜

リックに「空陸差し替え型」というパターンが加わった。飛行機はジェット化されておらず、プロペラの時代であった。

攻防はさらに続く。空路で札幌に行けば、青函連絡船の乗船客名簿に安田の名前はないはずだ、と三原は考える。だが、安田自筆の名簿が残っていた。一方、安田は3回に渡って飛行機に乗っているのだから乗客名簿を当たれば、偽名を使っているも浮かび上ってくるはずである。種明かしは、石田が手配し、①青函連絡船は予め安田が書いた名簿を部下に持たせた②飛行機は出入りの業者に「自分が乗った」と証言させた、ということである。部下自身が安田になっていたので、部下の乗客名簿がないというのが、突破口となった。「身代わり乗車(搭乗)」というトリックになるであろう。

安田の妻亮子の役割を書き落としていた。「あさかぜ」に乗り、熱海で降りた女中のお時は、亮子の指示で熱海に泊まっていたが、殺害される前夜女2人で博多まで旅行する。そして、香椎への2組のアベックが出来たのだ。亮子は病弱で、安田とお時が愛人であることを許しており、その関係でお時と顔見知りだった。

三原警部補は、亮子が事件に関与しているという予感があつて、鎌倉の自宅を訪ねる。横須賀線の大船から鎌倉までの4・5キロ、江ノ島電鉄鎌倉―極楽寺間2・4キロは三原が一番乗りした。

三原はここで、亮子の書いた随筆「数字のある風景」を目にする。鉄道トリックは亮子が考え出したものではないか、と思ひ当たる。

「時刻表マニア」という言葉が廃れて久しい。昭和三、四〇年代には結構聞かれた。旅に出たいが、金も暇もない。せめて時刻表をめぐっては

旅に出た気持ちになろう、という人々である。予定もないのに、毎月の時刻表を買う。ダイヤ改正の時は当然精読するので、盆暮れ、行楽期の臨時・季節列車にも詳しくなる。今でいう乗り鉄とは少し違う。机上鉄とでもいべき人々である。

安田亮子は病床で時刻表を繰る人である。随筆の一部を紹介する。

《時刻表には日本中の駅名がついているが、その一つ一つを読んでいると、その土地の風景までが私には想像されるのである。それと地方線の方が空想を伸ばさせてくれる。豊津、犀川、崎山、油須原、ローカル 勾金、伊田、後藤寺、これは九州のある田舎の線の駅名である。新庄、升形、津谷、古口、高屋、狩川、余目、これは東北のある支線である。私は油須原という文字から南の樹林の茂った山峡の村を、余目という文字から灰色の空におおわれた荒涼たる東北の町を想像するのである。私の目には、その村や町を囲んだ山のたたずまい、家なみの恰好、歩いていく人まで浮ぶのである》

前者は、瀬戸内海に面した福岡県行橋市と旧筑豊炭田の中心地、田川市を結ぶ田川線である(今は3セクの平成筑豊鉄道)。豊津―崎山間は、今川沿いに緑したたる田畑が続く、勾金―後藤寺間は当時ならボタ山群が見えてきたであろう。油須原だけは照葉樹林が折り重なる深い谷間にある。

後者は陸羽西線であり、古口―狩川間では最上川と並走する。両側に山が迫り、急流となる。芭蕉の「五月雨を」の句を最もイメージできる地点だ。余目は羽越線との接続駅である。吹雪の時は横殴りの雪が襲い、春夏は鳥海山や月山の万年雪を仰ぎ見ることが出来る。美田地帯である。亮子は随筆を書いている午後1時36分という瞬間に列車が停車中の

駅名を北から南まで次々に挙げる。関屋（越後線）、阿久根（鹿児島線）、飛騨宮田（高山線）、藤生（山陽線）、飯田（飯田線）、草野（常磐線）、北能代（奥羽線）、王寺（関西線）。そしてこう書き継ぐ。

《私がこうして床の上に自分の細い指を見ている一瞬間の間に、全国のさまざまな土地で、汽車がいつせいに停^{とま}っている。そこにはたいそうな人が、それぞれの人生を追って降りたり乗ったりしている。私は目を閉じて、その情景を想像する。（略）私は、今の瞬間に、展^{ひろ}がっているさまざまな土地の、行きずりの人生をはてしなく空想することができると

亮子は清張の分身であろう。彼もまた時刻表と地図を机の側に置き、空想しては作品に芯を通し、リアリティを吹き込もうとしたのではない。風景だけではなく、人々の暮らしの息遣いまで活写しようとしたのが清張作品の魅力になっている。全国各地で営まれる人々の暮らしを読者に知らせ、イメージさせるため、読者をもまた鉄道に乗せている。

昭和三二年のBGM

『眼の壁』と『点と線』が、東京駅を冒頭に持ってきたことは、一二等待合室や九州行き特急という首都圏の人々の旅情を誘う効果があったことは既に述べた。同時に、地方の人々に東京への憧れを深めさせる作品になったことも見逃してはなるまい。

金持ちで立派な肩書を持つ人間が集う待合室とはどんなところだろう、特急列車出発前の15番線ホームは華やかさをまとった人々が蛸集しているのだろう、知りたいと思いませんか。読者にそうしたメッセー

ジも送っている。55年の『父系の指』や『青のある断層』で、鉄路旅が上京、帰郷の双方向性を持つていることを指摘したが、そこには生活の糧を求めるひつ迫感があつた。2年後、人々は心の潤いを求めるようになっていた。それが、昭和三〇年代前半の急速な世相の変化であろう。

2作品にBGMを流すとすれば、以下の3つの歌謡曲だと思う。フランク永井の『有楽町で逢いましょう』、島倉千代子の『東京だヨおっ母さん』、コロムビア・ローズの『東京のバスガール』。いずれも57年にレコード発売された歌謡曲である。

東京駅から1駅乗れば、有楽町。「ビルのほとりのティー・ルーム」があり、「映画のロードショウ」が楽しめる。交通手段として国電が想定されていることは、歌詞の「駅のホームも濡れたろう」から分かる。バスガールは、「ビルの街から山の手へ」紺の制服身につけて「駆け巡る」。2つの歌の主人公は東京出身者であるかもしれないが、地方から来て東京での青春を謳歌している若者であつてもおかしくない。東京駅から続く風景の中に清張作品の登場人物も歌の主人公も捉えられるのである。

『東京だヨおっ母さん』は、地方出身の若い女性が、仕事か結婚で落ち着いた日々を迎え、田舎に住む母親の靖国参拝を送迎した1こまが浮ぶ。母娘は東京駅か上野駅で出会い、別れたのであろうとイメージできる。彼女らとすれ違った人間の中に『眼の壁』の萩崎竜雄や『点と線』の安田辰郎のような人物像を描くのは難しいことではない。帰って行ける故郷、活躍できる東京というものがバランスよくそれぞれの役割を発揮できた時代であつた。

清張が2つの作品を通じて時代の相を描こうと、どこまで意識したかは分からぬ。だが、何事も臨場感を出そうとする筆が、自然と時代を

すくい上げることになるのは、これまでの分析を見れば当然のことのように思われる。

書き残したことがある。警視庁の三原警部補は、捜査に行き詰まると、都電に乗りたがることである。警視庁から新宿まで乗り、さらに荻窪まで乗ったとある。れっきとした鉄路なのだが、前書きの中で説明したようにこの研究では路面電車を対象にしていない。

『拐帯行』は58年2月、日本で発表された。

——貧しさや世間の冷たさが嫌になった森村隆志と西池久美子は、森村の会社の金を持ち逃げし、九州へ死出の旅に立つ。列車内や観光地で、金持ちの中年夫婦風を見かける。彼らは強い生き方をしているのだ、と憧れを持ち、死ぬのをやめ、いま少し働こうという気になる。ところが、中年夫婦風こそ拐帯行をしており、鹿児島で心中していた——

テーマや舞台は、『青春の彷徨』や『ひとり旅』と重なるものがある。初乗りは、鹿児島線に乗り、熊本から不知火海に面した温泉へ行く部分だ。現在は3セクの肥薩おれんじ鉄道となった八代―日奈久温泉10・1^{キロ}である。八代までは『ひとり旅』の田部正一が乗っている。

2人が東京を離れる際、特急「さちかぜ」の特別2等車に乗る。

《窓に東京の夜景が流れた。密集した灯はしだいに凝結を緩め、薄くなり、疎らになった。東京が逃げ去ったのだ。(略)

特二の車内は、昼光色に輝いて、贅沢な旅客たちへ光を添えた。客は白いカバーに頭をもたせ、それぞれの姿勢を作っていた。みんな、屈託なく旅をたのしみに行くように見えた。男客は煙草の煙を吐き、女客はみかんや菓子食べていた。(略)

「ねえ」

と、久美子が言った。座席（シート）の角度が変わるのを楽しみながら、仰臥（ぎやうが）していた。

「こんな贅沢な汽車に乗るのはじめてだわ」

「さちかぜ」とは、『点と線』で触れた東京―長崎間の寝台特急「平和」の前身である。『点と線』では、読者はホームに立ち、特急列車を車外から見るという位置だったが、『拐帯行』では車内での視線を持つことになった。「はじめてだわ」という久美子の感想に、「自分はもう乗った」というより、「自分も早く乗りたい」と思う読者の方が多かったのではないか。

『水雨』(58年4月、小説公園増刊号)は、東京・渋谷の割烹料理屋の女中、加代の話である。客の川崎から手を出されそうになるが、うまくすり抜けて来た。ところが、水雨の夜、川崎は新入りの若手女中に気を見せ始めた。女の意地で川崎と関係を結んでしまう。

加代は目白に住んでおり、深夜の山手線外回りで帰る。『顔』の井野良吉が五反田から代々木まで、『声』の高橋朝子が代々木から新宿まで乗ったことは確認済みなので、新宿から目白までの3・6^{キロ}が加代の初乗りである。貧しい人々を描く時の清張の筆は、リアルで、かつ緻密である。

《かんばんになつて、女たちが支度をして店を出るのは十二時近くで、たいいてい電車で帰るものが多いから、渋谷の駅までいっしょに行く。(略)

加代は目白までの電車の中で、酔客を眺めながら、川崎のことを考えた。川崎にもずいぶん前から誘われたものである。座敷のうえのことなので、店が終わって行くから、代々木で待っててよ、とか、

原宿で待っててね、とか三度か四度言ったが、そのつどすっぱかした。(略)

加代は電車の床の上に唾を吐いた。川崎を軽蔑してやりたくなってくる》

《アパートの部屋は三畳だった。昼、出がけに湯たんぽを入れた蒲団が敷きつ放しに置いてある。読みかけの雑誌も小机の上にそのままだった》

2年後、加代はおでん屋を開いていた。

《加代さんは中央線のある駅前のでかい路地で、小さなおでん屋を開いている。客扱いが上手なので常連の客も多かった》

『日光中宮祠事件』(58年4月、週刊朝日別冊新緑特別読物号)は、警察署長が強盗殺人事件を無理心中事件と見たため、10年間もまともな捜査が行われなかったことを批判する。再捜査の必要を感じた隣県の吉田警部補と福島刑事が雪の中、日光から中禅寺湖へ登る。

東武日光軌道線の日光駅前―馬返9・6キを初乗りのした。鋼索鉄道線で馬返―明智平1・2キにも乗る。さらに、明智平ロープウエーで展望台駅まで行くと推測される。軌道線、鋼索鉄道線は昭和四〇年代、自動車の普及で廃線になった。

山男たちが乗った列車

『装飾評伝』(58年6月、文藝春秋)は、ディテールを書き込む清張の手法の究極の1篇ではなからうか。

——主人公の私は、「異端の画家」と呼ばれた名和薛治のことを書きたいと思う、親しい間柄で評伝を残した芦野信弘に会おうとしたが、芦

野が死んだ。関係者に会って評伝をもう1度見直す。友達らしい書き方の評伝であるが、芦野は名和に圧倒されて自らの才能を枯らしてしまい、妻までも奪われていたと考えられる。だが、それをテコに芦野は名和に脅迫的にまでつきまとい、名和の後半生を苦しめた。私は評伝に偽りの部分があると見抜く――

多くの読者は、主人公が清張その人であり、名和も芦野も実在の人と思うであろう。しかし、創作である。名和が岸田劉生をモデルにしているとの説もあるが、清張自身は、モデルは劉生だけではない、と書き残している(注12)。『装飾評伝』自体がノンフィクションのような体裁を持っていることも装飾であり、題名は二重の意味があるように思われる。

名和は昭和の初めに東京・青梅市の町はずれに住んでおり、六本木に住んでいた芦野は再々、電車に揺られて名和宅を訪れる。六本木から国鉄に出てさらに中央線に至る経路は分らない。だが、井の頭線が全線開通していない時代で、新宿から立川へ行き、立川から青梅線に乗ったと推測できる。青梅市内最初の駅河辺までは初乗りと判断したい。立川―河辺は15・9キである。

同じ月の別冊文藝春秋では、やはり美術界ものの『真贋の森』が掲載される。

——宅田伊作は日本画の鑑定能力が高いが、学者を目指したところ大御所の不興を買って、不遇な生活を送る。九州にいる優秀な贋作画家、酒匂鳳岳を発掘し、その絵を無能な大御所一派の門弟たちに本物と鑑定させ、一泡食わせようと企む。宅田の指導を受け、自信をつけた鳳岳が次第に尊大になり、不用意に秘密を洩らしたため計画は頓挫する――

鳳岳は九州の炭田地帯で日本画を教える貧しい画家で、宅田は急行

列車に乗ってI市まで会いに行く。F市から10里ばかり南とあり、F市は福岡、I市は飯塚と判読できる。

《東京から二十数時間も急行に揺られてI市に着くと、そこは町の中を軌道炭車が通っているような炭坑地帯であった。三角形のボタ山がどこに立つても眺められた》

飯塚市と街つづきになっている旧穂波町にあった住友忠隈坑のボタ山のことであろう。「筑豊富士」の別称があり、ひと際高く、形もよかった。今は風雨で形が崩れた。樹木で覆われ、平凡な山のように見える。

宅田はどこで降りたのだろう。飯塚市には市中心部から少し外れたところに飯塚、新飯塚の2駅があり、ともに優等列車が停まっていた。どちらとも判断できないので、より東京側の新飯塚までは乗ったと見る。『火の記憶』の高村泰雄が、筑豊の直方市まで来ているので、筑豊線の直方―新飯塚間12・8^{キロ}を宅田が一番乗りした。東京に帰る際に見た川は遠賀川である。

《俺は車窓の外に大きい川が流れ、土堤の夏草の上に牛が遊んでいるのを眺めながら…》

飯塚と直方の間で、筑豊線は遠賀川を渡る。その風景であろう。『遠くからの声』で津谷敏夫と啓子が立った場所からそう離れてはいない。

上京した鳳岳は、国分寺から支線に乗って三つ目を降りた所の農家に住んだ、とある。西武鉄道多摩湖線か国分寺線かは分からない。武蔵野の風景が出て来る。

《そこは武蔵野の雑木林が、畑に侵蝕^{しんしょく}されながら、まだ諸方に立ち^こまわっていた。車の通る道から外れて、林の間の小径^{こみち}を歩いて行き、木立を屏風^{びょうぶ}のように回した内に、その百姓家は残っていた。

東京の住宅建築攻勢がこの辺にも波を寄せていて、あたりは新しい瀟洒^{しょうしや}な家やアパートが見えるけれど、まだ、それは疎^{まば}らであり、古い部落と畑が頑固に抵抗していた》

初乗り場面はないのだが、見逃せない作品がある。『遭難』(58年10月5日)12月14日、週刊朝日)は、鉄道を含めて時代を色濃く映している。ヒマラヤの8千m超の未踏峰マナスルに日本の登山隊が登頂したのが2年前。登山ブームが起きる一方、谷川岳で登山者の遭難が相次ぐようになった。ダークダックスの『雪山讃歌』がレコードになったのは、連載開始の1ヶ月前だった。

――銀行の支店長代理の江田昌利は登山のベテランである。後輩である岩瀬秀雄、浦橋吾一とともに北アルプスの鹿島槍ヶ岳に登るが、わざと道に迷い、岩瀬は疲労と寒気のために死亡した。岩瀬と妻の不倫を知った江田が仕組んだ殺人事件だった――

3人は22時45分新宿発の松本行に乗る。同年11月の時刻表によれば、準急「アルプス」である。座席掛けで行くのが当たり前だった時代に、3等寝台車に乗った。疲れないようにという江田の心遣いと見えたが、実は他人に知られないようにして、妻との不倫について何かささやいたのである。岩瀬は眠れなくなり、体力消耗―遭難へと続く道に踏み入れた。

『眼の壁』では、拉致被害者を東京駅から列車で運ぶというトリックがあったが、ここでは、車内を殺人の助走路として使っている。「アルプス」は、客車部分7両編成で、最後尾から3等寝台車、2等車と続く描写も時刻表通りである。こうした部分にも丁寧に入力するのが清張の

魅力だ。旅への誘いの力が生じる。

当時の新宿駅の様子が、浦橋の手記という形で描かれている。

《季節中^{シーズン}には毎度のことながら、この夜行列車を待つ登山姿の乗客が、ホームから地下道の階段、通路に二列になって長くすわりこんでいる。早くから汽車の入構を待っているの、退屈と身体の不自由のためにすでに疲れた顔つきをしているのが多い》

『失踪』(59年4月26日～6月7日、週刊朝日)は初めて地下鉄が登場する。

中野区に住む21歳の女が手切れ金代わりにもらった家の売買交渉を始めたとたん失踪し、東京西郊で殺害遺体となって発見される。ワルで知られる主犯容疑者と被害者が銀座線で渋谷―新橋6・3^キを往復したことは間違いないが、その後主犯は祐天寺へ帰宅したと言い、従犯は井の頭線、中央線と乗り継いで、武蔵小金井に行ったという。死刑になるが、初動捜査の遅れが冤罪につながった、というトーンが強い。従って、井の頭線乗車はカウントできない。

週刊朝日で引き続き連載された『紐』(59年6月14日～8月30日)は、岡山県津山市から大金を持って上京した神官梅田安太郎が、小田急の多摩川鉄橋近くの河川敷で、絞殺死体となって発見されたところから始まる。当初から妻静子がマークされるが、アリバイがあり、迷宮入りしかける。だが、多額の保険金がかかっていたことから、犯行が分かる。静子は津山と東京の間を往復するが、山陽線をどこで降りたのか。岡山まで行って津山線に乗り継いだのか。手前の姫路から姫新線に入ったのかはつきりしない。乗り換えの具合や支線の所要時間の差などで津山線経由と判断し、岡山―津山58・7^キを初乗りと認定する。東京

では、都心遊覧をした際、地下鉄線銀座―新橋0・9^キに一番乗りする。保険会社の調査員戸田正太は会社の所在地がはつきりしないが、千住や田端、K大医学部まで都電で行ったと読み取れる。K大とは慶応のことだろうか。渋谷から警視庁まで都電で来たという場面もある。

戸田は遺体発見現場にも行く。小田急の多摩川鉄橋は多くの作品に出て来る特異地点なのだが、この作品では以下のように書かれている。

《人家は堤防から離れて、遠いところに見えている。間には、畑とか、草の茂った空地とかがある。大きな声を出しても聞こえないように思われる。

堤防ぞいには人家が一軒もない。はるか遠方にアパートみたいな建物が見えるが、これはかねて聞いていた映画会社の撮影所かもしれない。川を越した向い側は、こちらよりもっと寂しく、松林や雑木林がところどころあって、あとは一面の畑である》

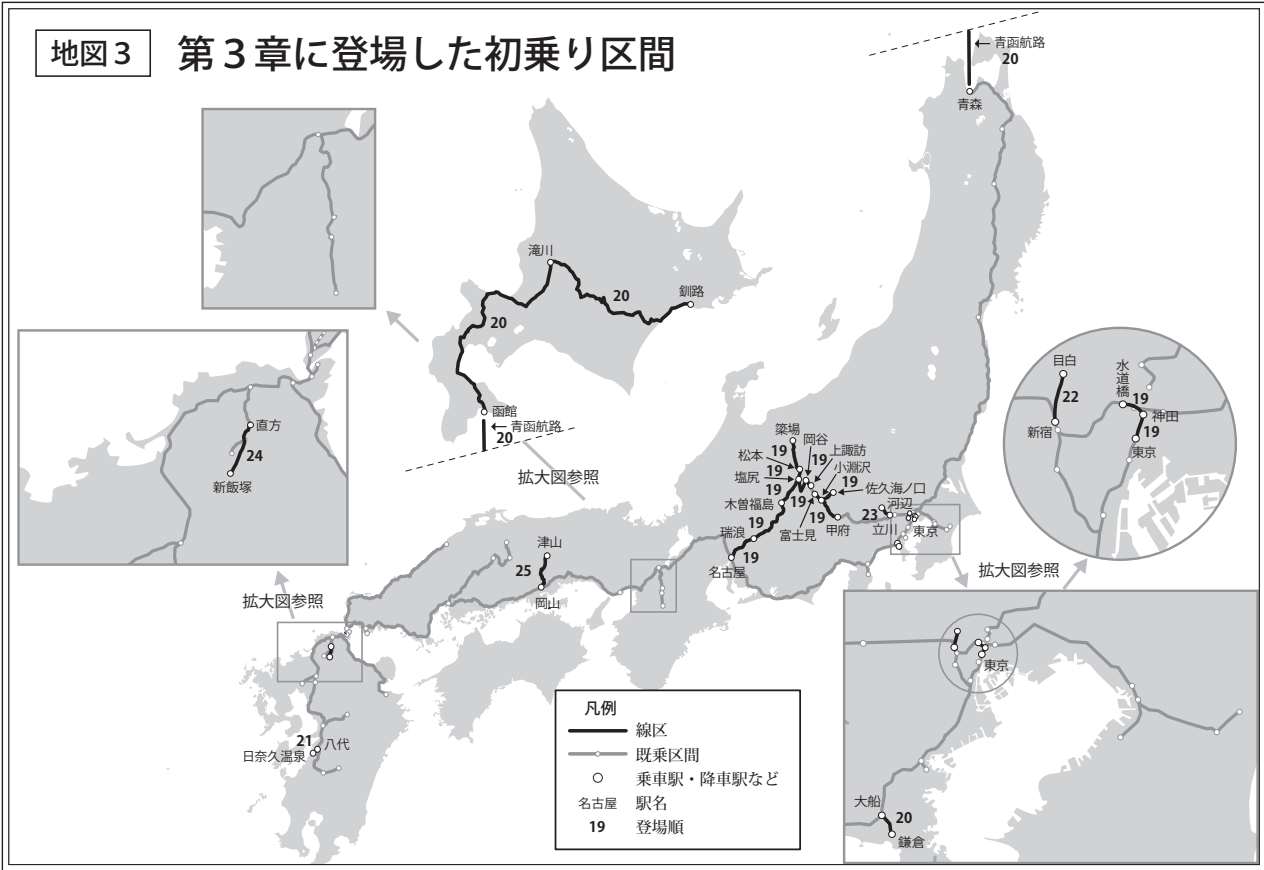
後年、発表される『微笑の儀式』(67年4月28～6月30日、週刊朝日)は、初乗り区間はないが、多摩川渡河が出て来る。

《電車が多摩川を渡ると、東京を振り切ったという感じがする》
清張が筆を動かしたくなるポイントなのか。

初乗り距離は、旧国鉄とJRが4409・4^キ、私鉄が347・8^キに伸びた。旧国鉄とJRは、日本列島を南北に貫いた(地図3参照)。

地図3の番号対照表

	作品名	線区名	乗車駅	降車駅	キロ数
57年	19 眼の壁	東北	東京	神田	1.3
	眼の壁	中央	神田	水道橋	2.1
	眼の壁	中央	名古屋	瑞浪	50.1
	眼の壁	中央	甲府	富士見	48.8
	眼の壁	中央	上諏訪	岡谷	8.5
	眼の壁	中央	岡谷	塩尻	27.7
	眼の壁	中央	塩尻	木曽福島	41.7
	眼の壁	小海	小淵沢	佐久海ノ口	39.4
	眼の壁	篠ノ井	塩尻	松本	13.3
	眼の壁	大糸	松本	築場	46.3
	眼の壁	中央	木曽福島	瑞浪	83
58年	20 点と線	青函航路	青森	函館	113
	点と線	函館	函館	滝川	369.8
	点と線	根室	滝川	釧路	308.4
	点と線	横須賀	大船	鎌倉	4.5
	21 拐帯行	鹿児島	八代	日奈久温泉	10.1
	22 氷雨	山手	新宿	目白	3.6
	23 装飾評伝	青梅	立川	河辺	15.9
	24 真贋の森	筑豊	直方	新飯塚	12.8
59年	25 紐	津山	岡山	津山	58.7



第4章 鉄路を急ぐ女たち

(1959年8月～60年6月)

恋膨らむ車窓―椎原典子

『眼の壁』『点と線』をベストセラーにした松本清張は、58(昭和三三)、59(同三四)年にも鉄道旅を登場させる長編を書く。しかも、多くの女性を主人公とした。女性向け雑誌が相次いで創刊されたことが大きいのだろう。旅への誘い、恋愛、そしてミステリーがバランスよく書かれた作品への需要が高まり、それに応えた格好だ。

時代を振り返ると、女性の高学歴化、有職率の向上などが進んだ時期だろうか。いや、そうではなくて、学歴や素敵な職場に対する憧れが高まった頃かもしれない。58年秋に皇太子と正田美智子(現皇后)の婚約が発表された。社会で活躍する女性に対する期待、羨望が顕著になって来た時代ではあるまいか。まずは、58年7月27日から59年8月30日まで週刊明星に連載された『蒼い描点』である。

――入社2年目の出版社編集部員の椎原典子は、箱根・宮ノ下で執筆中の女流作家村谷阿沙子に原稿督促に行った際、田倉義三というたちの悪いフリーランサーに会う。原稿はもらう一方、田倉は溪谷で変死体となって見つかり、村谷は自殺する。典子は、好意を持つ同僚の崎野竜夫とともに事件を追う。村谷の父は高名な京都文化人で、その教え子グループがあった。早世した畑中善一が草稿を多数残しており、それが村谷のネタだった。田倉は、それを理由に関係者を脅す。畑中の妹で、上品な女性の邦子が、田倉を殺害した――

典子は清張作品中に登場する男女通じて、初乗り最長距離のタイト

ルホルダーである。田倉の妻(実は邦子がなりすましていた)の行方を追って、秋田を目指す。上野から夜行に乗り、東北、奥羽線で秋田の北、八郎潟(当時は一日市)まで行く。上野―日暮里間は失踪した夫を追って北に向かった『白い闇』の尾関信子が乗っているが、その先594・7^キは典子が走破した。注意すべきは、日暮里から赤羽までは中長距離列車が走る尾久経由を通ったという計算である。田端経由のいわゆる京浜東北線より0・2^キ長い。さらに、一日市から五城目までの3・8^キを秋田中央交通線(69年廃止)に乗った。

はかばかしい成果は上げられず、その日のうちに引き上げる。秋田まで同じ道を帰ったのだろうが、そのことは詳細に書かれていない。秋田発羽越、信越、上越、高崎、東北線回りの急行「羽黒」で帰って来た。58年11月の時刻表によれば、秋田発19時0分で、上野着6時40分である。新潟経由ではなく、新津から信越線に入るのだが、秋田行の時に通過した大宮までの560・1^キもまた初乗りである。

後に出て来る井の頭線も含めた総計1162・6^キは、亡き母の不倫の跡を探ろうと東京から九州・筑豊の直方まで行った『火の記憶』の高村泰雄を27^キ上回る最長初乗りである。2日続けての夜行に加え、3等車だったと描かれている。当時のSL列車であれば、空調はなく(作品の季節は夏)、窓から煤煙いわゆるススが入りこんでくる。1人旅でもあり、若い女性には難行苦行であったに違いない。そのバイタリティが支持される時代に入って来たとも言えよう。

この作品では、風景や車窓描写にそう力を入れているようには見えない。ただし、清張作品に何度も登場する小田急での多摩川越えは紹介しよう。

《多摩川の鉄橋を渡るころ、川の中では人間やボートが浮んでいるのが見えた。七月の太陽は傾いているがまだ水の上に燃えている。それからしばらくして相模の平野が青くひろがってきたが、暑い陽ざしがなだれこむように窓からはいつてきたので、典子のすわっている側の乗客は、あわててカーテンをおろした》

風景描写より目立つのは、崎野への想いが列車に乗ることで増幅されることである。2人は田倉の家を訪ねるため、神奈川県藤沢市へ行く。

《東京駅から藤沢までの一時間は、典子にとって妙にくすぐったい時間であった。今まで取材で方々をたび歩いたが、白井編集長といっしょだった以外、男の社員と同行したことはなかった。ことに、崎野竜夫と同じ座席にすわって、湘南電車に揺られようとは思わなかった。これが社内だとか、喫茶店などで二人きりで話しあっても気持ちの拘束はあまりなかったが、一時間の距離にしても東京を離れたという意識が、気持ちに落ちつかない動揺を与えた。藤沢くらいは旅とは思えない。が、どこかにその錯覚がはじまって平静を失わせるような危惧を感じる》

《横浜駅のホームで典子はシューマイを二つ買った。別にほしくはないが、気をまぎらわすためだった》

男女が列車の席に並んで座ると、不思議な磁場ができることは『箱根心中』で見たとおりである。

藤沢からの帰り、品川、渋谷を経て井の頭線の渋谷―東松原4キロに一番乗りした。崎野とともに村谷の家を訪ねるためだった。

崎野が行先も告げず独り旅に出た時、典子は車窓にもたれているで

あろう、恋心深める相手と思うのだった。典子が1人で岐阜へ畑中邦子を訪ねる番になった。

《翌朝、東京駅を九時三十分の下り急行で、典子は発った。行く先は岐阜だった。

「今度は、君が帰ってくるまでの二日間を僕がかわりに働くよ」

ホームに見送りにきた竜夫は、窓から手をさしのべて言った。それが、典子にとって彼との最初の手の触れ方であった。典子はその感覚をしばらくおぼえていた》

1泊旅行だったが、典子は竜夫へ手紙を書く。

《畑中善一さんの妹さんは、いいかたでした。この人に会っただけでも、こちらに來た甲斐があったと思います。帰りには日が暮れたので、バスの来る通りまで、提灯を持って私を送ってくださいました。真暗な濃尾平野にひろがった畑の匂いの中を、ほおずきのような提灯の火が先を歩いていく印象は、これから、忘れられないでしょう。

いま、木曾川の河畔の宿でこれを書いています。犬山のかわいなお城が夜の底に沈んでいます》

列車が非日常的な経験への入口となる時、つられるように愛の形も変化する。それは清張の世界のことだけではなく、多くの人が体験していることであろう。

椎原典子は、元気で職場の人気者という描かれ方をされている。

『蒼い描点』が若い女性にどこまで読まれたかは分からない。だが、典子は好ましい人物像であり、大学を出て、カッコいい企業に就職し、素敵な男に出会いたいと願う時のモデルの1人であり得たに違いない。

作品は、事件解決後、2人は結婚するであろうという予感を与えて終わる。

夫のいない新妻―板根禎子

女の幸せはやはり結婚なのか。今では信じられないが、昭和三〇年代は、そんな命題が成り立った、と記憶する。58年1月から60年1月まで太陽、宝石と書き継がれた『ゼロの焦点』は、清張山脈の名峰である。切り口の多い作品なのだが、導入部で新婚旅行と鉄道という場面が展開される。

――26歳の板根禎子は、36歳の鵜原憲一と見合いしてすぐに結婚する。鵜原は広告代理店の金沢出張所主任だったが、東京へ戻ることが決まっていた。新妻を残して最後の引き継ぎに金沢へ行くが、失踪した。鵜原はかつて米軍立川基地周辺の風俗犯罪を取り締まる警察官をしていた。その時知った田沼久子と金沢で再会し、内縁関係を結んでおり、その後始末を迫られていた。田沼の娼婦仲間で、今は金沢の有力経済人の妻となっている室田佐知子が能登半島の断崖から遺体不明の偽装自殺を勧めるが、現場で鵜原を背後から突き落とし、殺人になってしまう。田沼との生活では偽名を使っていたため、鵜原の死はなかなか分からず、佐知子はその秘密を知ろうとする人間を次々に殺害する――

新婚旅行先として、禎子は北陸を希望した。夫の未知の部分の早く知りたいという思いからだ。だが、憲一は熱海か箱根、関西あたりにしたいと伝えて来た。北陸は暗く、陰鬱な土地だというのである。禎子はそれを押し返して、信州を回ることにした。結婚は異なる価値観や文化の衝突、融合であるのだが、この時代、主に経済的な事情から妻は夫

に従うものだとされていた。新婦が強く言えるのは新婚旅行先ぐらいだったのではないか。禎子にしてみれば妥協だったのか、意地を通したのか。

11月半ば、中央線で出発した2人は甲府市郊外の湯村温泉で初夜を迎えた。翌日上諏訪に向かった。

《汽車は信濃境を越え、富士見のあたりを速力を出して走っていた。高原の傾斜に、赤や青の屋根と白い壁の家が建ちならんでいた。

「きれい」

と禎子は、小さく言った

鵜原はちらりとその方を見たが、すぐ膝の上に縦に折った週刊誌をひろげた。が、それを読むでもなく、ほかのことを考えているふうであった》

車中で、新婚旅行先選びのことが蒸し返された。

《夫の仕事をしている土地を見たいという妻の希望を、鵜原憲一は考慮して、いや、考慮というよりも、なぜ、喜ばないのだろうか。

まったくそのことを意識から塞いでみえる彼が、急に距離遠く思われた》

鵜原は、旅行の最中、能登半島の寒村にいる久子とどうやって別れようか、ということまで頭がいっぱいであった。初めから心身一体の新婚旅行もある。だが、相手のことがすべて分かっている旅行するのでは存外つまらない。緊張や不安、戸惑いこそが新婚旅行の一面の真理とも言える。清張は、列車内での様子を描くことでそこにアプローチしている。

旅行後、鵜原憲一は夜汽車に乗って金沢に向かい、そのまま失踪した。

列車は急行「北陸」以外に考えられないのだが、列車名や路線名は書かれていない。あえて初乗りにはカウントせず、描写が鮮明な禎子の旅を一番乗りにする。禎子が金沢に向かったのは12月と読み取れる。夫の行方を追って、上野から会社の関係者と夜行の2等車に乗った。

作品の時期設定は、昭和三年のこととしかとらえない、鶴原憲一の別名曾根益三郎の死亡日が同年となっているためだ。58年11月の時刻表を見ると、上野から金沢へ乗り換えなしに向かう夜行列車は急行「北陸」のみである。上野発21時15分で、高崎から上越線経由でいったん長岡まで行き、そこから信越線、さらには直江津から北陸線を南下するルートである。金沢には8時15分に着き、さらに終着の福井へ向かう。

群馬県高崎と新潟県直江津間は、長野経由の信越線の方が50^{キロ}近く短いのだが、碓氷峠や黒姫・妙高の山裾を通る分、輸送力が劣っていたのか。禎子が一番乗りしたのは、長岡の1駅手前にあり、信越、上越線の分岐点である宮内から金沢までの247・2^{キロ}と認定できる。宮内から直江津までの70^{キロ}は信越線だが、その先は北陸新幹線全通(15年)に伴い3セクになっており、直江津―市振59・3^{キロ}はえちごトキめき鉄道、市振―倶利伽羅100・1^{キロ}はあいの風とやま鉄道、倶利伽羅―金沢17・8^{キロ}はIRいしかわ鉄道と区分される。

《沼田、水上、大沢、六日町と駅名が寂しい灯の中で過ぎた。》

北陸路がしだいに近づいてくる。なんとなくあこがれていた北国に、こういう気持で来ようとは、禎子は想像もしていなかった。彼女は少しも眠れなかった》

駅名を並べるのは、タイムトンネル的描写部分では効果的である。列車の進行を許可するタブレット(通票)的役割を持っているし、時間進

行のリズム感が出て来る。

富山を過ぎて、禎子は積雪を見た。朝の化粧に立つ。

《禎子は洗面室のよごれた鏡に向かつて化粧した。車体の動揺で足に安定感がなかった。重心のとれない恰好が、胸がふるえているようで、不安だった。皮膚が荒れて、化粧が思うように伸びなかった》
女の夜行旅の大変さが、具体的に書き込まれている。そして、日本海の登場である。

《くろい海が遠くに現れた。日本海は思ったよりせまい線だったが、それは向うになだらかな山脈がのびているからだだった。山の上の雪だけが、灰色の空から牙のように白く出ている》

この作品では、冬の北陸の暗鬱さが繰り返し登場し、北陸への旅の誘いになった面がある。後年、ディスカバー・ジャパンの旅行地として金沢と能登半島がセットで若い女性を引きつけたことにも影響があるのではない。しかし、この描写は虚構である。

旧北陸線は、富山から金沢の間で海岸線を通らない。描写に相当するのは、新潟県境を越えて富山に着く前、魚津辺りである。が、急行「北陸」は日の出前の時間に通過するので、ねじれた表現になったのだろう。これを持って清張は嘘を書いたという批判は当たらない。フィクションであり、作品の文学的效果に大いに寄与している。

乗り鉄者として言えば、冬の北陸は暗く、重いだけではない。禎子が見た風景とは逆の視線がある。能登半島の東海岸の根もとを走る氷見線の越中国分―雨晴間では、晴れた日、群青色の富山湾の向うに屏風のようにそそり立つ立山連峰を望める。ゴツゴツとした銀嶺の上に青空が広がり、神々しさを放っている。

闘争と逃走の日々―室田佐知子

金沢に着いた禎子は、憲一の私生活を知る者が少ないことを知る。手掛かりもつかめない中、能登半島西海岸の断崖、能登金剛で身元不明の投身自殺があったと聞き、もしかと思いい地元の警察署へ確認に行く。

金沢発13時5分発の輪島行き列車に乗り、津幡で北陸線から七尾線に入る。羽咋で降りる。津幡―羽咋間29・7^キが初乗りになる。時刻表によれば14時16分着で、「一時間ばかりで着いた」という記述と一致する。禎子は「この駅から乗りかえて、さらに小さな電車に乗り、能登高浜まで行くには一時間以上要した」という経路で着いた。この鉄道は北陸鉄道能登線であり、禎子は羽咋―能登高浜間14・6^キに一番乗りした。ただし、電車ではなく、気動車（ディーゼルカー）である。72年に廃線になった。

自殺者は夫ではなかった。だが、近所に住む男が自殺していたことを聞く。彼は曾根益三郎と名乗り、田沼久子と暮らしていた。まさしく鵜原一郎であり、室田佐知子に突き落とされていたのである。それはずっと後になって分かる。

禎子は夕闇迫る断崖へ行った。

《断崖の上に立つと、寒い風が正面から吹きつけて禎子の顔を叩いた。髪が乱れたが、彼女はそのままにして海と向かいあっていた。

その辺は岩と枯れた草地で、海は遥か下の方で怒涛を鳴らせていた。雲は垂れさがり、灰青色の海は白い波頭を一めんに立ててうねっていた。陽のあるところだけ、鈍い光が溜まっていた。

なぜここに自分が立っているか、禎子には合理的な説明ができない。とにかく、海が鳴っているという断崖の上に立ってみたかっ

たのだ。北陸の暗鬱な雲とくろい海とは、前から持っていた彼女の憧憬であった》

作品の前半のヤマ場である。読者もまた北陸憧憬を深める場面かもしれない。ただ、能登の人々の生活の匂いがしない。禎子は計3回、金沢・能登に来るのだが、2度目の時、鵜原の遺体を検分した西山医師を訪ねた時の描写を見よう。

《西山医院は小さな家であった。玄関をはいると畳敷きの患者待合室があり、寒そうに子どもをかかえた母親が火鉢にうずくまっていた。受付の小窓をあけると、十七八の、いかにも田舎くさい看護婦がすわっていた》

能登半島の冬の暗さ、寒さ、貧しさが伝わってくる。3度目の時は、自殺する佐知子を追って、七尾線で羽咋よりも先の和倉温泉に向かう。

《見覚えのある羽咋の駅を過ぎると、千路、金丸、能登部と小さな駅に次々と停まる。この辺まで来ると、片側に大きく山が迫りはじめる。見知らぬ小さな駅を過ぎるのが、何がなしの悲哀があった。ホームの雪の中で、助役がタブレットの輪を振って、動きだす汽車を見送っていた。ホームから駅の方に歩いて行く女たちは、たいてい、ほとんどが黒い角巻をまとして、背をかがめていた。その群れの中には、どの駅でも魚の行商人が混じっていた》

繰り返しになるが、清張は庶民のいる地方の風景を読者に伝えるため、そこまでの距離感を知ってもらうため、作品に多数の鉄道乗車場面を書いている。

初乗りチェックに戻ろう。先ほど紹介したように、禎子は羽咋―和倉

温泉(当時の駅名は和倉)間29・8_ロに乗った。

作品では、内陸部の白山方向に走る北陸鉄道の2つの路線も重要な役割を果たす。

鵜原憲一の兄宗太郎は、禎子とは別行動で弟の行方を追う。憲一が2つの名前を持って二重生活していたことを薄々知る宗太郎は、田沼久子や室田佐知子に1歩早く迫る。だが、佐知子から金沢市郊外の鶴来の旅館に誘い出されて、毒殺される。2人は、金沢市街地から鶴来まで北陸鉄道石川線に乗る。乗った地点は書かれていないが、当時の始発駅白菊町だったと見る。14・6_ロが初乗り区間になる。今の始発駅は西茶屋街に近い野町である。

宗一郎殺害後、佐知子は石川線で金沢に戻るのではなく、鶴来から北陸線能美根上(当時の寺井、北陸鉄道の駅名は新寺井)に通じる北陸鉄道能美線(80年廃止)に乗った。さらに能美根上から国鉄で金沢へ戻った。初乗り距離としては、それぞれ16・7_ロ、22・6_ロになる。金沢、鶴来、能美根上で形づくられる直角三角形の線上で、佐知子は金沢→鶴来の1辺をたどって犯行地に至り、帰りは鶴来→能美根上→金沢の2辺を大回りした(地図C参照)。なぜか。謎解きはこうだ。

佐知子が鶴来行きに乗った時は、けばけば



しい街娼のような服を着ていた。スーツケースも抱えていた。その後、能美線の中でも目撃されている。だが、北陸線の列車が金沢に着く時にはそのような女はいなかった。佐知子はスーツケースの中に、有名人の夫人にふさわしい衣服を用意し、寺井—金沢間で洗面所などを利用して着替えた、というのである。洗面所やトイレは旧国鉄の列車に設置されているが、北陸鉄道にはない。

清張は、禎子に次のような推理をさせる。

《鶴来の駅から、佐知子と同じ線を帰らなかったのは、彼女が金沢に着いた時、ふたたび、室田夫人にかえる必要があったからだろう》

佐知子は三角形を一周する間に、昭和三〇年代を金沢で生きる有名な夫人から終戦直後の立川基地周辺の街娼にタイムスリップし、また金沢に戻るといふトンネルを抜けていた。このタイムトンネルは、佐知子だけのものではなく、終戦前後と昭和三〇年代との間を結ぶものとして、少なからぬ日本の女性に普遍化できるものではないか。佐知子が死を目指し、荒海へ小舟を漕ぎ出したのを見ながら、すべてを知った夫の室田儀作はこう語る。

「家内は、房州勝浦かつうらの、ある網元あみもとの娘なんです。幸福な時代に育ち、東京で、ある女子大にはいりました。それから終戦が来たのです。得意だった英語が彼女にわざわざいしたことも、敗戦後の日本の現象として、私はそう深く咎とがめません」

松本清張は、『ゼロの焦点』の連載が終わった60年1月から文藝春秋でノンフィクション『日本の黒い霧』の連載を1年間にわたって始める。下山事件、松川事件、もく星号墜落など昭和二〇年代の奇怪な出来事の真相に迫ろうというものだった。清張は昭和二〇年代史の構想を練りながら、その時代を人々がどう生きたかにも考えが及んだことだろう。その一端が室田儀作の述懐となった、という見方ができる。

後先するのだが、鶴原宗太郎が殺害された際、禎子と宗太郎の妻である嫂は東京から駆け付ける。10時間かけて午後7時過ぎに着いたというので、当時の時刻表からすれば上野9時10分発信越線經由の急行「白山」になる。金沢19時9分着である。

1本の列車だが、北陸新幹線が開通した今となつては細分化されており、以下が初乗りである。信越線高崎―横川29・7キ、バス輸送に替わった同線横川―軽井沢11・2キ、しなの鉄道になった軽井沢―篠ノ井65・1キ、信越線篠ノ井―長野9・3キ、再度のしなの鉄道北しなの線長野―妙高高原37・3キ、えちごトキめき鉄道妙高高原―直江津37・7キ。計190・3キに達する。

『蒼い描点』と『ゼロの焦点』で、旅への誘い、男と女、ミステリーという3要素が鉄道乗車という描写によってより有機的、重層的につながってきた。特に冒頭またはそこに近い部分で鉄道乗車が登場して、作品の色調を予測させ、読む側にリズム感を与えている。主人公が女性というのも読みやすさにつながっており、清張は充実期を迎えたのだと分かる。

男を許せぬ理由―笠原祥子

『黒い樹海』(58年10月―60年6月、婦人倶楽部)は、冒頭に鉄道事故が起き、その謎解きによって話が進む。

――R新聞文化部記者の笠原信子は、不倫の愛人であり、マスコミの知名人でもある小児科医の西脇満太郎と浜名湖畔の弁天島へ旅行する。浜松駅で落ち合ったもののバスが踏切事故に遭い、信子は死亡する。西脇はスキヤンダルを恐れて逃げ、信子の取材相手でもあった妹尾郁夫がそれに協力する。工作がばれようとすると、口封じの殺人事件が続くが、信子の妹でその跡を継ぐ形で新聞社に入った祥子が真相に迫る――

浜松への浮気旅行の際、信子は東京から下り急行「西海」で行き、西脇は名古屋での仕事の帰りに上り急行「なにわ」で来る。浜松到着は2分

差という練られたプランである。以前、『顔』では目撃者の殺害を企てる男が、相手を呼び出し、それぞれ東京と九州から京都に集合する乗り鉄を紹介したが、その発展形と言える。

2人に乗せたバスは事故に遭うのだが、その原因は、臨時列車が来ることを失念した踏切番の職員が遮断機を上げたままにしていたことだった。清張がどこまで計算していたかは分からぬが、時代の特徴を見事に切り取っている舞台設定ではないか。

当時、国鉄の輸送力は増強され、ダイヤは過密化していた。大都市圏では「開かずの踏切」が、住民の安全と利便を脅かした。一方、モーターゼーションも進む。踏切の立体交差化は遅れ、警報機・遮断機なし踏切の危険が叫ばれた。自動列車停止装置（ATS）も緒についたばかりであった。

62年には三河島事故、63年には鶴見事故が起き、多数の乗客が死亡した。清張が予言していたわけではあるまいが、彼が書く筆は、いつも時代を先取りしている、とは言える。

瀨死の信子を「見捨てた」男について証言できるのは現場近くにいた斎藤常子であり、事故後、いったん富士川沿いの故郷に戻った。祥子は彼女に会おうと、新宿から中央線、身延線に乗る。身延線の甲府―波高島38・2キロが初乗り区間になる。

甲府盆地の車窓が出て来る。東京から近くにありながら、壊れていない風景である。

《汽車は甲府盆地に向って下降するところだった。両方の車窓からは房を垂れた葡萄畑が際限なく続いた。八合目から上だけを見せた裏側の富士山が連山の向うにのぞき、甲斐駒や北岳の南アルプ

スの稜線が片方の側につづいていた。

甲府駅につくと、祥子は身延線に乗りかえた。車輛が急に小さく、貧しく見えた。

その汽車も間もなく、盆地を南に突き切って進行した。広い平野が次第に狭まると、山峡の入口の駅についた。鰍沢かじがさわという駅名が祥子に詩のような旅愁を感じさせた。川の一部が見えたが、笛吹川と釜無川とはその辺で合流して、富士川がはじまっていた》

美しい響きの駅名を逃さなかったのは流石である。

文化部記者の町田知枝は、妹尾と愛人関係にあったが、妹尾の行動に疑惑を持ち始めたため、彼から殺される。その現場が、小田急線の多摩川鉄橋下なのだ。「紐」でも遺体が見つかった所だ。夜、祥子が訪ねる。

《昏いが、足もとの枯れ草がほの白く見えた。彼女はそれを踏みながら、急な斜面を気をつけながら降りた。眼が闇に慣れてきて、近いところなら少しは分かった。曇っていて、月も星も見えないのである。（略）

電車が灯を連ねて橋を過ぎていく。その音が遠い山鳴りのように暗い空間を渡って聴こえた》

長編推理『影の地帯』が、地方紙連合に掲載された。河北新報の場合、59年5月20日から60年6月1日までだった。当時、清張は超多作期に入っていた、とは光文社の編集者であった高橋呉郎が新潮文庫版で指摘している（注13）。最盛期には、週刊誌5本、新聞3本、月刊誌5本。ひと月の生産量は900枚に達した、という。作家デビューが遅かった清張が「書きたいことはたくさんあるのに時間がない」とこぼしていたこ

とは多くの証言がある。

『影の地帯』の掲載期間に重なっている乗り鉄作品を上げると、既に紹介した『紐』『蒼い描点』『ゼロの焦点』のほか、これから『黒い福音』『波の塔』『黄色い風土』が登場する。初乗り区間がないため本研究では触れない2篇もある。『霧の旗』は、無実の殺人罪で獄死した男の妹、柳田霧子が弁護を引き受けてくれなかった大塚欣三弁護士に復讐するため、九州―東京を行き来する。『濁った陽』は、清張作品で繰り返し出て来る「汚職と課長補佐の死」というテーマだが、当時深刻化した首都圏の通勤ラッシュが描写される。

よくぞ乗り鉄のアイデアが次々に湧いて出るものだと感心するが、逆に多彩な鉄路と風景が書けるがゆえにマンネリ化を避けられた、という見方も成り立つのではないか。男女とトリックだけなら行き詰まるかもしれない。旅への誘いは、日本全国が舞台なのだから、旅行や地図、時刻表が好きな清張は、アイデアの引き出しに多くのネタを隠し持っていたのであろう。

清張は取材のための旅行はしなかったと述べている。締め切りとの闘いの中、かつて行った場所を登場させるせいだろうか、この時期、甲信越が良く出て来る。

影の地帯の粗筋を紹介する。

——若手写真家の田代利介は九州からの帰りの飛行機で、河井文作と礼子という兄妹と言葉を交わす。兄は地域開発を巡る政治家の争いの中、反対派代議士を殺害後、バラバラにしてパラフィン付けにして信州の湖に投げ込む。さらに引き上げて粉砕し、オガクズとともに信州の湖水にばらまく。ホラーな殺人集団の首領だった。妹は田代を死地から

救ってくれたこともあり、彼は魅かれていく——

初乗りチェックをしよう。田代は信州の湖を撮るため、新宿から中央線の夜行、篠ノ井線、大糸線に乗り、海ノ口で降りる。『眼の壁』で踏破された区間であるが、木崎湖、青木湖で物を投げ込む不審な音と波紋を見聞き、野尻湖へ移動する。松本に引き上げた後、篠ノ井線に乗り換え、松本―篠ノ井53・4_キを一番乗りした。さらに、篠ノ井から黒姫まで既乗の信越線に乗り継いだ。黒姫は作品発表当時の駅名は柏原だった。

河井らの犯行を追う田代は、伊那谷で谷に突き落とされ、負傷する。有力政治家の失踪を追うR新聞記者の木南は、飯田の病院で治療を受けていた田代に話を聞こうと取材に来る。早朝の新宿発列車に乗り、辰野で飯田線に乗りかえて飯田まで来た。辰野―飯田間66・4_キが木南の一番乗りである。事件の真相に迫るが、河井らに殺害される。

中央線の新宿発優等列車と言えば、現代では松本行の「あずさ」、甲府行きの「かいじ」が頻繁に出ている。正時発が「あずさ」、30分発が「かいじ」という金太郎館のようなダイヤは、乗客が覚えやすいという配慮があるのだが、旅情という点で物足りない。

59年の時刻表によれば、朝8時10分発が「穂高」、昼過ぎ12時25分発が「白馬」、深夜22時45分発が「アルプス」という3本の準急であった。旅情を誘う列車名であり、清張はそれを書くことが多かった。『地方紙を買う女』では「白馬」、『眼の壁』では「穂高」、『遭難』では「アルプス」であることは既に紹介した通りである。新宿発の優等列車に乗ると、東京の人は旅を感じる。清張はそのことをよく見抜いていたから、詳細に書いたのではなからうか。

行く方向が東西逆になるが、東海林さだおは『潮来の与太郎たち』という随筆(注14)の中で、新宿駅から急行「水郷3号」で総武線に乗った経験を書いている。

《新宿駅から列車に乗った。

正午ちょっと前、という時間である。

旅行の出発点が上野駅や東京駅だと、いかにも「旅に出る」という感じになるが、新宿駅からだとその感じがまるでない。(略)

車窓の風景は、いつも見慣れた市ヶ谷の堀ばたや、後樂園球場などである。(略)

中年の夫婦が圧倒的に多い。この人たちは、列車が動き出すとすぐ、弁当をひろげ、

「おつ、あれが順天堂病院！」

「あつ、後樂園球場！」

と、早くも旅行気分である。

どこか近郊の商店街の人らしい。

とうちゃんたちは、ナンキン豆の袋を破いて、早くもお酒である》

おなじみの風景が、初めての街のように見えるのは、むしろ旅の解放感によるものだが、ベンチ式シートではなく、4人掛けボックス席だからだ。通勤通学時と違い、車窓がワイドで奥行きもある。また、各駅停車しないからでもある。このことを瞬時にとらえ、文章に綴る東海林の眼力が見てとれる。

中央線に戻る。77年にヒットした『あずさ2号』という曲は、新しい恋人と信州へ行く前日、前の恋人に対する別れの気持ちを歌ったものである。

《明日私は旅に出ます あなたの知らないひとと二人で

いつかあなたと行くはずだった 春まだ浅い信濃路へ

行く先々で想い出すのは あなたのことだとわかっています》

この傷心は翌日、中央線で東京西郊を走る時にも繰り返されるだろう、と予感している。2人掛けの席に座り、中野、三鷹、国分寺といった特快停車駅をすつ飛ばしてゆく時、見慣れたはずの車窓が新鮮に見え、旅情が高まっていく。

『影の地帯』では、アルプスの山々や高原の湖沼を描いているが、先述の高橋はやはり解説で指摘する。

「清張氏の絵心は、絵葉書になるような観光名所には関心がない。日本の風土の原風景をとらえたときに、シャッターが落ちる」として、次の文を例示する。

《田代が降りたのは、海ノ口^{うみぐち}という小さな駅である。ここからは、北に爺岳^{じいだけ}、布引岳^{ぬのびだけ}、それに北寄りには鹿島槍^{かしまやり}の頂上が見える。

駅前の広場の近所に、飲食店とも宿屋ともつかぬ貧弱な家が建っているが、その反対の駅の裏が木崎湖なのである》

清張は山や湖よりもひなびた駅前に注目している。河井は大糸線の複数の駅でバラバラ遺体を鉄道荷物にして、駅留めにしたり、駅前の運送店留めにしたりしていたのである。作品でも荷物取り扱いの駅員や運送店の小母さんが出て来る。庶民のいる駅前風景の中にミステリーを絡ませている手法を味わいたい。

話は、田代と礼子が新しい道を一緒に歩き出しそうところで終わる。

よるめきの果てに――結城頼子

『黒い福音』(59年11月3日)60年6月7日、週刊コウロン)は、重量感のある作品である。昭和二〇年代から三〇年代の武蔵野が舞台になっている。実際に起きたBOAC(英国海外航空) スチュワーデス殺害事件がモデルであり、清張は自らの見立てを書いた。60年安保に対する反対運動の高揚期に書かれた。そのことが投影されているのか。

――カトリックのバジリオ派は、日本で布教活動しているのだが、進駐軍の物資を横流しするなど密輸組織でもある。若き神父トルベックは、教会付属の幼稚園の保母、生田世津子を愛人にしたものの、密輸組織から世津子を客室乗務員にし、密輸品の運び屋にするよう命じられる。世津子が断つたため殺害する。日本の捜査当局やメディアはバジリオ派の犯行と見て追及する――

乗り鉄チェックとしては、世津子が殺される直前、自らが住む東京西郊で私鉄が交差するM駅から、20分ぐらい乗ったことである。作品中に地図が出ており、M駅とは京王電鉄の明大前であることは間違いない。ただ、降りた駅が不鮮明である。作品中では、車窓から仮名としての玄伯寺川が見える。神田川と善福寺川をスクランブルさせている。現実の殺害現場は善福寺川で、西永福が最寄り駅だろうが、京王井の頭線のもっと吉祥寺寄りの車窓風景も出て来る。

M駅は二つの私鉄線によって、4つのブロックに区切られるが、世津子は西北側でかつ甲州街道よりは南側の民家に間借りしていた。清張は書く。

《この辺りは、住宅と田園とが入りまじっていた。田畑は次第に宅地に狭まっていくが、それでも、家々の屋根の上には、まだ武蔵野

特有の雑木林が聳えていた》

今では、まさかと言いたくなる描写ではないか。次は井の頭線の車窓である。

《窓外は次第に家並みが少なくなつてゆく。その代わり田園の向うに高級住宅地などが見えたりした。春のうららかな陽の下である。

雑木林は新芽が吹き、桜は芽をふくらませていた。(略)

畠は麦が伸びている。その間に川が流れていた。澄んだ水である。

うねうねと田圃の間を曲がっていた》

今、井の頭線に乗っても、高架部分でないと川面を見下ろせない。雨水管が中小河川に導かれ、大雨で氾濫しないよう、川床を低くするのは全国の市街地に共通のことである。線路と川が近接する高井戸までの3・8キロには一番乗りしたと認定する。

『黒い福音』の冒頭部では、昭和三〇年前後の武蔵野の風景が書きこまれている。今読むと随分雑木林が多かったことが印象的である。清張は、宅地開発が進み、様子が一変することを予測していたのだ、と思う。西武鉄道の新宿、池袋線を使って位置関係を読者に語りかける。

《東京の北郊を西に走る或る私鉄は二つの起点をもっている。

この二つの線は、或る距離を置いて、ほぼ並行して、武蔵野を走っている。東京都の膨れ上がった人口は、年々、郊外へ住宅地を押し拡げてゆくから朝夕は乗客で混み合う。

しかし、二つの線の間、中間地帯は、賑やかな街にもなりきれず、田園のままでもなく、中途半端な形態をとっている所が多い。

この辺りになるとナラ、カエデ、クヌギ、カシなどの雑木林が到るところに残っている。旧い径は、その林の中に入っている。林の

奥には農家の部落がひそんでいる。が、それについて行くと、部落の隣は、忽ち新しい住宅地^{たちま}に変わる。この辺は、古い武蔵野の田野と、新しい東京の部分とが、ちくはく^{さくそう}に錯綜している地帯であった。警視庁の捜査は、トルベックに対する疑惑を深めたものの、彼は欧州へ帰国した。外交上の駆け引きのため、「タカが女のひとり」ぐらいという判断が政権中枢であった、と書かれている。当時は岸信介内閣だった。安保改定に臨む時期だったので、あれこれ想像できるが、そうしたことは匂わせていない。

60年安保の後、池田勇人が首相に就任、再び高度経済成長が謳歌される時代になった。テレビでは、「よろめきドラマ」が流行る。電化製品の普及で主婦の家事労働時間が短縮されたり、爆発的なテレビの普及で様々な番組の需要が高まったりしたせいだろうか。『波の塔』(59年5月29日〜60年6月15日、女性自身)もまた、時代を先取りしているように見える。

——若手の特捜検事小野木喬夫は、政治ブローカーで違法なことも厭わない結城庸雄の妻頼子と恋心を深め合い、山梨県の下部温泉まで旅行に行くようになった。それを感じた結城は二人の行動を調べ、汚職事件で身辺の捜査の手が延びてくると、スキャンダルとしてばらし、小野木は検事をやめざるを得なくなる。頼子と暮らすことを決心するが、不貞の妻の立場になった彼女は、死地を求めて富士山麓の樹海に入ってゆく——

作品の舞台は東京、東海、甲信越にまたがり、乗車場面も多い。初乗りとしては、まず小野木と頼子が下部温泉に行った際、台風に遭い、帰り

を急ぐため、富士川沿いに歩いたり、列車に乗りたりして東海道線の富士駅までたどり着いたことだ。富士宮の2つ手前の駅、沼久保から富士宮まで6・2^{キロ}に乗ったことは明確な記述である。風雨を避けて、農業小屋に泊まったため、1泊旅行が2泊になり、庸雄が不審を持つことになった。

恋に苦悶する小野木は、思い詫びて上野発の夜行列車で佐渡を目指す。朝新湯に着き、港から船に乗った。新津—上野間は、『蒼い描点』の椎原典子が乗っており、新津—新湯間15・2^{キロ}が初乗りである。

甘ったるいストーリーと見る向きもあるが、女性週刊誌ゆえのサービスだろうか。頼子がファッションショーのように次々に和服を替えて登場する描写が細かい。2人が横浜のニューグランドホテルで食事するなどブランドがキラキラ光っている。

風景描写も多いのだが、2人がデートした東京・武蔵野の深大寺が話題になった。

《ケヤキ、モミジ、カシの樹林は陽をさえぎって、草を暗くしていた。径の脇には去年の落葉が重なって、厚い朽葉^{くは}の層の下には、清水がぐぐつている。路^{みち}が、茂った草の中で老^おいていた。

深大寺付近はいたるところが湧き水である。それは、土と落葉の中から滲みでるものであり、草の間を流れ、狭い傾斜では小さな落ち水となり、人家のそばでは笕^{かき}の水となり、溜め水となり、粗^{あら}い石でたたんだ水門から出たりする。

歩いていて、林の中では、絶えずどこかで、ごぼごぼという水のごぼれる音が聞こえてくるのである。下枝を払いおとした木は、高い梢^{こすえ}に、木箱の小鳥の巣がかかっていた。下は暗いが、見上げると、

太陽の光線が葉を透^すかして、緻密な若い色をステンドグラスのように、透明に輝かしているのである》

藤井康栄(注15)の解題によれば、連載中「女性自身」の部数は急増し、深大寺は頼子と小野木の「逢^あびき」の場所として一気に名を知られるようになったという。

車中の風景として、小野木の佐渡行きの時の上越国境越えを忘れてはならない。

《日曜、月曜と連休なので、車内は若い人で混んでいた。重い荷を持った登山姿の若者が多い。どれも厚ぼったい支度をしていた。なるほど、もう冬山なのである。

荷物棚には登山の用具が並び、通路にはリュックが両側からはみだしていた。小野木のすわっている座席の近くでも、山の話をする声がつづいていた。

発車後、しばらく小野木が眠っていると、騒ぎの声で目を覚まされた。リュックを背負いあげたり、登山用具を抱えおろしたりして、若人たちが汽車を忙しそうに降りていく。汽車が山の地帯を過ぎるまで、それが何度となく繰り返えされた。沼田^{ぬまた}でも、水上^{みなかみ}でも、湯^ゆ檜^ひ曽^そでも、湯沢^{ゆざわ}でも、小野木が目をあけるたびに、灯の寂しいホームを、若い群れが、リュックを背負って歩いていた》

登山ブームはまだ続いていた。

小野木が佐渡から帰ってきた時、頼子が上野駅まで迎えに行く。これを結城の仕事仲間が目撃して、夫に伝える。結城はそこから推理を働かせるのだが、乗り鉄的には平仄が合わぬことが多い。

小野木の上野到着は5時30分と書かれている。目撃者は6時1分の列車で仙台に向かった。59年の時刻表によれば、5時半ごろに上野に着くのは、新潟18時33分発信越線經由の準急「妙高」で、正確には5時40分着である。小野木はなぜ、行く時と同様に上越線に乗らなかったのだろう。新潟22時30分発の上越線準急でも上野着は6時0分なのである。

目撃者は、小野木が乗って来た列車について、「あの時刻に到着した列車は福井から来た急行だけだ」と語る。『ゼロの焦点』に登場した「北陸」の上り列車のことだが、時刻表に書かれた到着時刻は7時0分である。目撃者の仙台行き列車は、東北線にも常磐線にも該当するものがない。早朝6時の普通列車に乗るより、9時台の急行の方が早く着ける。

全体に1〜2時間繰り下げた出来事としたらよいと思われる。清張の意図したことが分からない。

時刻表をにらみながら頼子の行動を推理する結城の姿は、不倫の愛とともにこの作品の大きな柱になっていて、迫力がある。女中の話では、頼子は上野駅に人を見送りに行ったというのに目撃者は迎えに出ていたというではないか。すると、以前不問に付したが、1泊旅行と言っていたのに2泊して帰って来たことに疑いの目が向かう。女中に聞くと、スーツケースの中の着物が雨に濡れていて、洋服の襟には梨の葉が隠れるようにくっ付いていたという。

旅行の時、紀伊半島から進んできた台風は東海地方から甲州、新潟へ抜け、山梨、長野で被害が大きかった。頼子の帰京が遅れたのは列車の不通が原因ではないか、行ったのは温泉地ではあるまいか、1人ではないはずだ、と思う。

《東京から一泊で帰れる温泉地。中央線なら、甲府の湯村^{ゆむら}、諏訪、松本

の浅間温泉あさまなどがあるが、浅間は、ちと遠かろう。甲府から分かれる身延線みのぶには、西山にしやま、下部しもべがある。上信越線は伊香保いかけ、四万しよま、水上みなかみがある。そのほか、鬼怒川きぬがわ、塩原しおばら、福島県の飯坂いざかなどがあるが、東北方面は台風の被害をあまりうけていないので、線路の切断は、なかったはずである》

結城が魅力的人物なのは、実際に下部温泉まで行って、梨の木が多い地である、2人が泊まった日は台風襲来で温泉宿も被害を受けてみならず濡れになった、偽名ながら小野木が書いたと思われるカップルの宿帳があった、などを確認したことである。そして、2人が雨風に阻まれた富士川沿いを自らも下る。結城は頼子を冷たく突き放しながらも深い愛を持っていたのではないか、と感じられる場面である。

結城は逮捕されるが、検事が被疑者の妻と交際しているという記事が出た。

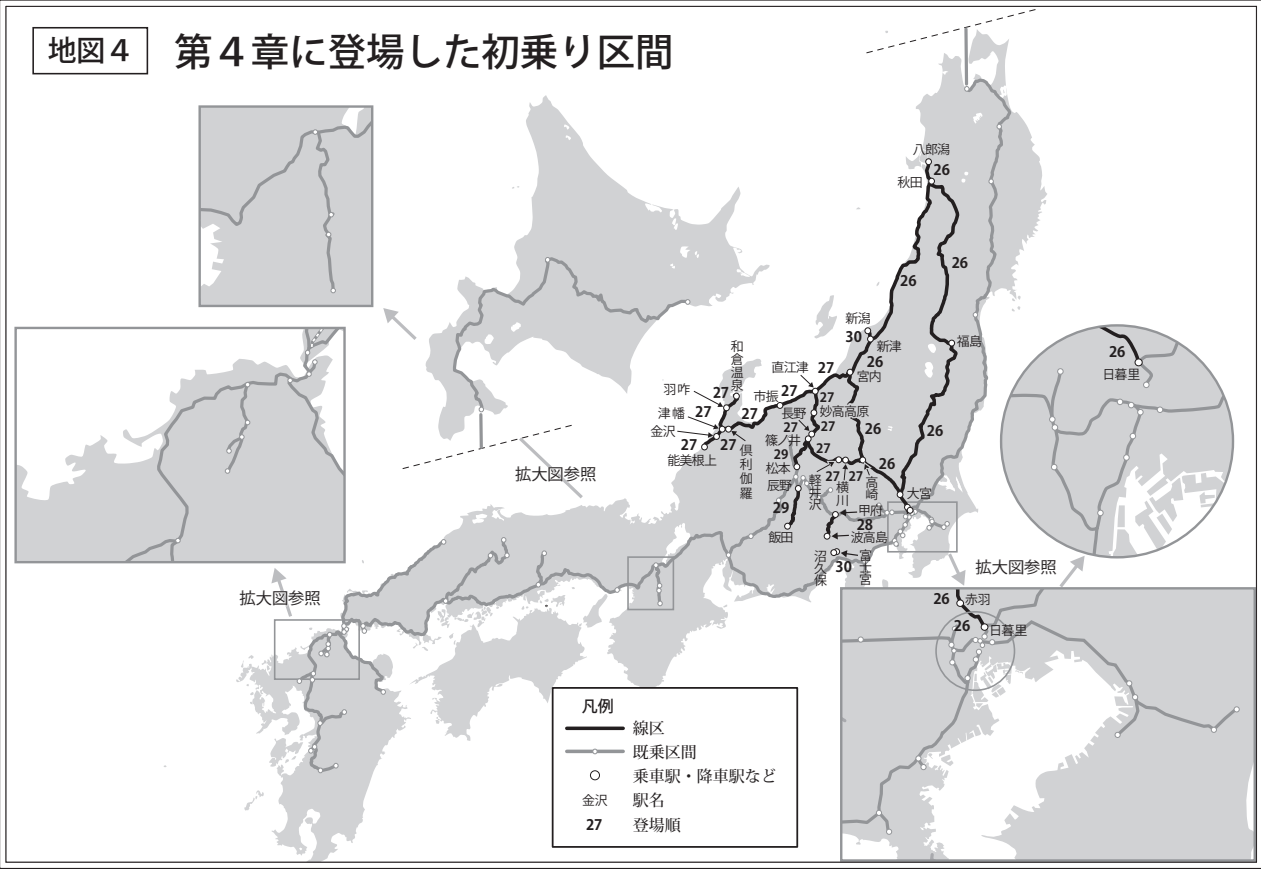
小野木は頼子と東京駅で待ち合わせて、西へ向かう約束をした。だが、頼子は新宿から中央線に乗った。大月からはタクシーに乗り換え、富士五湖中でも俗化されておらず、原生林が迫る西湖へ行った。

ここでも、藤井の解題を借りれば、「頼子が走り込んでいく富士の樹海も、自殺の名所となった。(略)ベストセラーは、思わぬ社会現象を生み出すことになったのである」。

走破距離は、旧国鉄とJRが6263・2キロ、私鉄が405・3キロに伸びた(地図4参照)。この時期、清張が甲信越に魅かれていたことが明らかではなからうか。

地図4の番号対照表

	作品名	線区名	乗車駅	降車駅	キロ数
59年	26 蒼い描点	東北(尾久経由)			
			日暮里	赤羽	7.6
	蒼い描点	東北	赤羽	福島	259.6
	蒼い描点	奥羽	福島	秋田	298.7
	蒼い描点	奥羽	秋田	八郎潟	28.8
	蒼い描点	羽越	秋田	新津	271.7
	蒼い描点	信越	新津	宮内	51.1
	蒼い描点	上越	宮内	高崎	162.6
60年	27 ゼロの焦点	信越	宮内	直江津	70
	ゼロの焦点	北陸	直江津	市振	59.3
	ゼロの焦点	北陸	市振	倶利伽羅	100.1
	ゼロの焦点	北陸	倶利伽羅	金沢	17.8
	ゼロの焦点	七尾	津幡	羽咋	29.7
	ゼロの焦点	信越	高崎	横川	29.7
	ゼロの焦点	信越	横川	軽井沢	11.2
	ゼロの焦点	信越	軽井沢	篠ノ井	65.1
	ゼロの焦点	信越	篠ノ井	長野	9.3
	ゼロの焦点	信越	長野	妙高高原	37.3
	ゼロの焦点	信越	妙高高原	直江津	37.7
	ゼロの焦点	北陸	能美根上	金沢	22.6
	ゼロの焦点	七尾	羽咋	和倉温泉	29.8
	28 黒い樹海	身延	甲府	波高島	38.2
	29 影の地帯	篠ノ井	松本	篠ノ井	53.4
	影の地帯	飯田	辰野	飯田	66.4
	30 波の塔	身延	沼久保	富士宮	6.2
	波の塔	信越	新津	新潟	15.2



第5章 歩廊に佇む男たち

(1960年8月～61年12月)

短すぎた解放の時―小塚貞一

今、平均的な男性サラリーマンだったら、65歳まで働き、80歳前後まで生きる。60(昭和三五)年8月7日のサンデー毎日に載った『駅路』の殺人被害者小塚貞一はもともと長生きさせてやりたかった、と思う。

――銀行員として幹部社員に昇り詰めた小塚は、魅力ある再就職先を断り、同僚らを不思議がらせる。妻子には十分な資産を残したうえで、広島支店長時代の部下で愛人の福村慶子と新しい人生を送ろうと、多額の金を持って家を出る。詳細を語らぬままの蒸発である。だが、2人の連絡役になっていた慶子の従兄妹よし子とその愛人が金目当てで小塚を殺す。小塚の年齢は出てこないが、定年55歳の時代だった――

行方不明の届け出を受けて捜査に当たった48歳の刑事呼野は、小塚の家を訪ねる。几帳面で、仕事も家庭もおろそかにしないが、旅行と写真という趣味にはこだわっていた生活を知る。そして、小塚が撮った様々な観光地のアルバムを見た。

《三冊のアルバムは、各地方に互っている。福井県の東尋坊から永平寺、岐阜県の下呂温泉付近、犬山付近、長野県の本曾福島、京都と奈良、和歌山県の串本、愛知県の蒲郡などが撮られている。美しい風景だった》

呼野は推理する。アルバムは名勝地ばかりだが、小塚のような性格だと、1人旅であれば、名も知らないような田舎に行くのではないか。家を出るときは1人だが、旅先では相手がいたのではないか。自分もまた

人生の黄昏が見え始め、このまま定年を迎えるばかりか、と焦燥を深めているので、小塚の気持ちが分かる。

もう1つの推理は、写真が中部地方に多いことである。小塚は東京から西に向かっていたが、人目を避けるため愛人はもともと西から来て、中間地帯で逢瀬を重ねていたのではないか、ということだ。そこで、広島支店時代を注目する。

呼野は広島へ行き、福村慶子の存在を知る。さらに、彼女が住んでいた可部へ足を延ばす。横川―可部14^キを初乗りした。

《可部は、古い、狭い町だった。町の真ん中を川が流れている。大田川という名前で、この下流は広島に注いでいる。山と水の町だが、そこはかかない頹廃が旧い家並に沈んでいた》(注16)

小塚はこうした風景を好んだのではないか。まさしく松本清張の趣味でもあろう。

可部線の車窓は大きく変わった、と思う。今、宅地開発が進んだ太田川右岸の傾斜地の下を進む。広島駅を出た可部線の列車は、横川を過ぎて太田川を渡ると、山に突き当たるように大きく右カーブする。いったん川を離れるが、列車は態勢を立て直して川沿いに出て来る。それが山陽新幹線の山側の席から分かる。私の好きな車窓の1つで、撮り鉄系の鉄ちゃんなら、いろんなアングルを探したくなるであろう。

慶子は病死していた。小塚はそれを知らないまま家を出て、遺体で見つかった。

会社人生の終着駅に降りた時、人はそこで肅々と旅の終わりを迎えるべきなのか。もう1列車に乗り換えてはいけなのか。半世紀たった今も、作品は光を失っていない。

長編の『黄色い風土』は、59年5月22日から60年8月7日まで、北海道新聞で続いた。他のブロック紙、中日、西日本も同時期に載った。そのせいか、北海道や中京圏が事件の舞台になる。東京駅15時0分発伊東行き準急「いでゆ」に、新婚旅行風のカップルが息せき切って乗り込んでくるといふ場面から始まる。鉄道のある風景を使い、読者に「近ごろありそうな出来事だ」と思わせ、一気にフィクションの世界に連れて行く手法に磨きがかかってきた。

——R新聞の週刊誌記者若宮四郎は、談話とりのために熱海のホテルに行くが、カップルのうち男の方が錦ヶ浦の下で死んだことを知る。それをきっかけとして、北海道の小樽市の港や愛知県犬山市の木曽川でも変死が相次ぐ。旧軍の謀略機関にルーツを発するドル紙幣偽造団の仲間割れが背景にあった。首領はともに取材をしていた熱海通信局の嘱託記者村田壮八と分かる。若宮が魅かれた沈丁花の香りがする女は、村田の妻だった——

初乗り区間を見る。まず、若宮は犬山の変死事件を追って、名古屋で降りて名古屋鉄道に乗る。名古屋から東枇杷島——西枇杷島駅間にある枇杷島分岐点までの3・3^{キロ}は名古屋本線であり、ここから犬山線に入る。木曽川を渡ったという描写もあり（列車かどうかは不明）、岐阜県側の新鵜沼まで行ったようにも読める。愛知県側で最も木曽川に近い犬山遊園までの26・1^{キロ}に乗ったと判定する。

若宮と沈丁花の女は、S駅で待ち合わせした後、「東京と横浜を結ぶ線」に乗る。渋谷駅から東急東横線に乗ったと見たい。2人は桜木町で降りて、外人墓地へ行った。品川から京急に乗ったのではスムーズな流れにならない。女は事件を解くヒントを与えてくれたが、若宮が抱き寄

せると苦しそうに逃げた。東横線の渋谷——田園調布間は『父系の指』で乗りつぶされている。田園調布——桜木町18・1^{キロ}が一番乗り区間である。このうち、横浜——桜木町2・1^{キロ}はみなとみらい線開業に伴って、04年に廃止された。

物語の最後は、村田から偽造団のメンバーがいる富士山麓に行こうと誘われ、熱海から東海道線の国府津経由で、御殿場線の駿河小山まで乗る。国府津——駿河小山間24・6^{キロ}もまた初乗り区間である。村田はここで本性を表し、縛りあげた若宮を自衛隊の砲撃訓練の着弾地に放り出す。

村田は捜査が身辺に及びそうなので、若宮を始末した後外国へ逃げる計画だ。沈丁花の女は若宮に気があったが、既に出国させたという。若宮は縄をほどき、村田と格闘する。村田の方が被弾し、若宮は死地を抜け出す。

長編だが、事件を追っかけるのに行数を割いたせいか、風景の方は少し物足りない。注目したいのは若宮の仕事の紹介の中で、当時の週刊誌の編集事情を書いた部分である。

『近ごろの週刊誌は、毎号必ず特集記事というのを巻頭に出している。毎週、とにかく、それを編集しなければならない、というのは苦しいことだ。』

雑誌が校了になって、すぐに編集会議を開くのだが、このトップ記事でいつも一同が頭を悩ましている。一週間毎に、そう新しく変わった材料がある訳ではない。

それに、近ごろ、週刊誌がとみにふえて、もとは新聞社系だけだったものが、大手筋の雑誌社が、続々と週刊誌を発行して、いま

では、或る克明な人の計算によると、週刊誌と名のつくものは、全部で五十五種あるとのことだった。

これだけの週刊誌が、特集記事に特色を出し、他誌を圧倒しようとするのだから、競争は劇甚とならざるを得ない。いま、ジャーナリズムでの最大の激戦場は週刊誌である」

週刊誌に引つ張りだこだった清張の貴重な「証言」ではあるまいか。「中身のないトップ記事より俺の連載で売れているんだよ」と言っても不遜ではないように思われる。

組織びとの宿命——大蔵エリート尾山正宏、新聞記者石内

清張は60年度の所得額が3842万円に達し、作家部門の第1位になった(注17)。税務署に対してどんな思いを持っていたか分からぬが、『歪んだ複写』(59年6月、60年12月、小説新潮)は、国税当局の不正、腐敗を告発するトーンに貫かれている。

——税務署員の崎山亮久と野吉欣平は、中小零細の商工業者に税務調査というムチを持って、あくどいばかり行為をする。大蔵官僚の若手署長である尾山正宏は、2人を処分すると自らの経歴に傷がつくと思いい、手を出せない。2人の不正を追う元署員を誤って死なせ、それを知った業界紙記者や脅しに出た崎山も殺害し、エリートは破滅する——

作中では、税務署が零細業者の所得額を推測する虎の巻が紹介されている。取材の深さと理解能力、執筆力が分かる。今も新鮮である。初乗りとしては、R新聞記者の田原典太が殺人の手助けをする病院周辺を洗うため、東急池上線の五反田——洗足池4・3キロに乗る。

洗足池の畔や死体遺棄現場となった武蔵境駅北方の田園などが描か

れているが、都電杉並線が出て来る場面を紹介しよう。尾山の自宅周辺である。

『田原典太は、阿佐ヶ谷駅あさぎやで降りて、南の方へ歩いて行った。

商店街を過ぎ、都電を越して奥に入ると、ひっそりした住宅街で、大きな家がいくつも両側に並んでいる。長い塀と広い庭をもった家ばかりで、歩いていると、到る処にまだ武蔵野の名残りと言っているような雑木林があった。が、その林も、奥の方に瀟洒しょうしゃな家があつて、実は庭だったりして、いかにも高級な住宅地の感じだった』

明けて61年1月の小説中央公論冬季号に『金環食』が掲載される。

——新聞記者の石内は48年3月に北海道のR島で起きた金環食の取材に行き、観測地点の予測が米国よりも日本の研究陣の方が正確だったことを書く。それが、G H Q(連合軍最高司令官総司令部)の検閲に引つかかった。米国の観測が日本に後れを取るはずはない、というのである。新聞社は石内を地方に飛ばすことで始末を図る——

R島とは礼文島のことであり、金環食は48年5月に起きた。掲載時から13年前のことを書いたのは、既に触れた『日本の黒い霧』で取材したことことの一端が現れたと見たい。石内の難行が書かれている。

『石内が社の命令でそのR島に着いたのは、観測の一週間前だった。リュックサックリュックサックに米や甘藷かんしょを詰め、殺人的な列車に乗って、ようやく、北海道の稚内わっかぬいに五日がかりで着いた』

初乗りとしては、北海道の中央部滝川から旭川までの函館線53・3キロと旭川から稚内までの宗谷線全線259・4キロがカウントされる。上野から滝川までは、『点と線』の収賄側部長の石田芳男が既乗している。

興味深いのは、新聞社の取材態勢である。記者、カメラマン、電送係、オートバイまで持ち込んだという。私が新聞社に入った70年代前半もこんな感じだった。記者は1面本記と社会面雑観が必要なので、最低2人はいる。とすれば、本社との調整に前線デスクも必要だ。人数が増えると、飯の心配をするロジ担も連れて行く。電送とは、アナログ回線しかなかった時代、写真をドラムに巻き付けて、7、8分かけて本社に送る作業のことで、とりわけ回線を確保できるかどうか、前線取材の成否を分けていた。

清張の乗り鉄作品は、旅への誘い、男女の愛憎、ミステリーの3要素があることは繰り返し述べたが、『万葉翡翠』（61年2月、婦人公論）は歴史ロマンも加わり、豪華メニューの作品である。

—— S大学の助教授は、万葉集の歌を基に新潟県西部地方からヒスイ石が出るという仮説を立て、その実地調査を3人の学生に勧める。夏休み、3人は自らの判断を入れて、それぞれ異なった場所を探す。自ら選んだ場所は望み薄と見た杉原忠良は2回目の調査の際、最も有望そうな姫川沿いに行った今岡三郎の後をつけ、翡翠が見つかったところを襲い、一帯での採掘を画策する。今岡の許嫁者、芝垣多美子が犯行を見破る——

1回目の調査で3人の学生は、新宿発の遅い列車に乗る。22時45分発の「穂高3号」と見られる。松本着後、今岡と岡村忠夫は大糸線に乗る。『影の地帯』の萩崎竜雄が築場まで乗っているが、その先は一番乗りである。今岡は新潟県に入った小滝で降りるが、岡村は終点の糸魚川まで59・1_{キロ}に乗る。

杉原は長野に出て、信越・飯山線に乗り換えた。豊野―津南（当時は越後外丸）57・9_{キロ}が初乗りである。バスで東頸城丘陵に入った。2回目の旅行の際、そう行くはずであると書かれているので、1回目の行程として認定する。信越線で長野に来るか、上越線で越後川口まで来たらどうだろう、という乗り鉄者としての私の疑問は残る。

2回目の旅行の際、杉原は松本で今岡らが乗りかえた大糸線の次の列車に乗り、姫川の河原で今岡を殺害して、遺体を埋めた。北アルプスと妙高・戸隠山系に挟まれた深い谷なので、遭難として片づけられそうになった。

秋になって殺害現場付近を山歩きした女性がフジアザミの花を見て、こんな短歌を作って同人誌に投稿した。「越の山はろかに来にけり谷川にのぞきて咲けるフジアザミの花」。選者は「フジアザミは富士山周辺で咲く大ぶりの花なので作者の虚構であろう」と評した。投稿者は「事実である」と反論した。

そのやり取りを読んだ芝垣多美子のはっと思う。2回目の旅行の3人を新宿駅まで見送った時、杉原がリュック姿の少年から紙包みを受取っていた。少年は富士山麓に出かけ、種子を集め、大月から出ている私鉄に乗って東京へ帰って来たのではなかろうか、と想像した。杉原はその通りのことを自供、今岡と格闘した際落としたという。少年が富士急行大月線に乗ったことは間違いない。富士山麓のどこから乗ったかは不明だが、登山客が多い富士山駅（当時富士吉田）―大月23・6_{キロ}には乗ったと判断する。

清張は後年、『清張通史』に代表されるように古代史の世界にも大きな足跡を残し、邪馬台国論争にも独自の見解を展開した。古代ロマンと

犯罪を結び付けた作品という位置づけができる。

大糸線の新潟県側は、急峻なV字谷を走る。杉原が乗った飯山線は、戸狩野沢温泉から津南の先まで信濃川左岸を走る。丘陵の中腹を走るので、眺望が素晴らしい。

『考える葉』（60年4月3日～61年2月19日、週刊読売）は、旧日本軍の隠匿物資を巡る話である。

——山梨県の山奥で硯作りをする崎津弘吉は仕事が好きになれず、若き実業家、板倉彰英の息のかかった会社で働く。板倉は終戦直後、軍事物資をくすねたのだが、旧日本軍が持ち去った貴金属の行方を追うアジア某国の調査団が来ることになり、そのリーダーを殺害する。崎津が事件の背景を追及すると、板倉もまた政治家や旧憲兵隊員にむしられていた——

旧憲兵隊将校で戦後は書家になった村田露石は身延山の麓へ硯を買い求めに行き、新宿から甲府乗り換えで身延線の身延まで来る。『黒い樹海』の笠原祥子と同じコースで波高島まで来ており、波高島——身延6・7^{キロ}が村田の初乗りとなる。

東奔西走する刑事——今西栄太郎

清張作品の登場人物たちが乗りつぶした路線を鉄道地図に落とすと、やや東日本に偏っていることが見えて来る。初期の作品においては九州——東京間が多かったのだが、東北へ駆け足旅行した『蒼い描点』と甲信越ものが続いたことで、このような結果になった。60年5月17日から61年4月20日まで読売新聞夕刊に連載された『砂の器』は中・四国地方の初乗り区間が相次ぐ。乗り鉄ものの代表作の1つであり、清張山脈の

高峰である。

——岡山県の山間部で隠居暮らしをする三木謙一は、各地の名所旧跡を巡る旅をする。伊勢の映画館に行った際、島根県の駐在所勤務の折、巡礼旅をするハンセン病患者を助け、その子供を引き取ったことがあるが、その子は和賀英良という音楽家になったことに気づく。東京まで会いに行く。和賀は過去と決別し、有力国会議員の田所重喜の娘と婚約した折、三木の登場は自らの人生を脅かすものに見えた。三木を殺害し、それを隠すために新たな殺人を繰り返すのだが、警視庁の老刑事今西栄太郎が懸命に追う——

三木は国鉄蒲田操車場で殺され、顔はレールの上に乗せられていた。待機中の電車が動き出せば、顔はつぶれ身元捜しが大変になる。蒲田は旧国鉄のほか東急多摩川線（当時は目蒲線）、池上線もつながり、足どり捜査が困難になるポイントである。2人が近くのバーで飲み、「カメラは今も相変わらずでしょうね」という東北訛りの会話がいった、と分かる。捜査本部は人の名前と判断したが、今西は地名ではないか、と思う。その判断が「全国名勝温泉案内」という地図に由来する。

《知らぬ駅名を見るのも、たのしいものだ。今西は、一度も東北地方に行ったことがない。だが、未知の駅名を見ると、その辺の景色が頭の中にぼんやり浮ぶような気がした。

たとえば、左の方に八郎潟^{はちろうがた}がある。その先が男鹿半島^{おが}だった。

今西は、その辺の駅名をちらちらと読んでいた。

能代^{のしろ}、鯉川^{こいかわ}、追分^{おいわけ}、秋田^{あきはま}、下浜^{しもはま}などの文字が漫然と目にはいった。

ところが、彼は、その次に目を移して、はっとなった。

「羽後亀田^{うご}」

とある》

今西と蒲田署の若き刑事、吉村弘は夜行で秋田まで行く。犯人に結び付く成果はないが、挙動不審な男がいた。和賀を慕う劇団職員成瀬リエ子に恋する俳優宮田邦郎である。本当のカメダには目を向けさせたくない和賀の眩惑作戦だった。和賀自身も若き文化人集団「ヌーボー・グループ」の旅行で亀田へ来て、今西とすれ違う。彼らは秋田へ向かう所だった。鉄道をさりげなく使い、フィクション世界へ導く筆は、ここでも小気味よい。

捜査は進まず、蒲田署の捜査本部は解散する。その日、今西と吉村は、渋谷で2人だけのささやかな慰労会を開く。蒲田から京浜東北線に乗り、品川で山手線に乗りかえたとは書いていないが、ほかの選択肢はなからう。吉村は代々木に住んでおり、今西は別れた後、1人で自宅のある滝野川へ帰った。最寄り駅はどこなのか。最低、池袋までは乗ったと見る。山手線は南から、『父系の指』、『顔』、『声』、『水雨』と乗りつぶされているが、『水雨』の加代は目白で降りている。目白―池袋間1・2キロは今西が初乗りしたと認定する。通勤の際、新宿まで行つて、地下鉄に乗り換えたとある。丸ノ内線で霞ヶ関まで行つたしか思われないのだが、それ以上の言及がなく、慎重を期して、敢えて好球を見送る。

成瀬リエ子が和賀の犯行時のレインコートをずたずたにして中央線の筐子トンネル辺りで紙吹雪にして捨てたことが分かる。証拠物の遺棄をロマンチックに描いたという点で、読者の記憶に残る部分だが、初乗りチェックの対象にはならない。

三木謙一の身元が判明する。東北弁を話していたという目撃証言と

矛盾するようだが、奥出雲地方では「ズーズー弁」に似た方言があるということが分かった。今西は再び地図を凝視、中国地方を山越えする木次線に「亀嵩」という駅があることを発見する。「かめだけ」の語尾が欠落、「かめだ」という音に聞こえやすい。今西は、三木の亀嵩時代に事件を解く謎があると信じ、亀嵩へ向かう。

東京発22時30分発の急行「出雲」に乗る。61年11月の時刻表通りである。

《京都で弁当を買って朝飯をすませた》

時刻表通りなら8時34分着である。作品ではこの後、山陰路に入る。

《それからが長い旅だった。京都を過ぎて福知山に出るまで、山中ばかりで退屈だった》

ちよつと書き急ぎがある。「出雲」は京都から大阪を経て、福知山線に入る。淀川を2回渡る間に梅田の街並みも見えたはずである。だが、長旅であることには変わりない。

《豊岡で昼飯を食べた。一時十一分だった。》

鳥取二時五十二分、米子四時三十六分。大山が左手の窓に見えた。

安来四時五十一分、松江五時十一分。

今西栄太郎は、松江駅に降りた。(略)

夕食を食べて、街に出た。

長い橋がある。宍道湖が夜の中にひろがっていた。湖岸には、寂しい灯が取り巻いている。橋のすぐ下から、灯のついたボートが出ていた。

初めての土地に来て、いきなり夜の水の景色を眺めるのは旅愁を覚えた》

東京―尼崎間は既乗だが、尼崎―福知山間の福知山線全線106・5^キと福知山―松江間263・4^キは初乗りである。通過時刻もほとんど時刻表通りだ。

松江で泊まった後、松江から宍道まで山陰線17^キに乗る。宍道湖の南側湖畔を走る風光明媚な区間である。北側もまた松江と出雲大社を結ぶ一畑電車という私鉄が走っている。実にいい車窓である。夕暮れ迫るころ、西日が湖面に映える様は当時と変わらないだろう。

今西は宍道から木次線に乗り換えて、亀嵩より1つ手前の出雲三成までの41・5^キに一番乗りする。亀嵩は山の中の駅であり、警察署などは三成駅に近い所にあるためだ。今西としては、三木が恨まれるような事件があった、という見込みで来た。だが、土地の古老らは、三木が事件事故に対して警察官としての対処をただけでなく、災害に遭った人々の面倒をよく見たと語り、思惑は外れる。善行の数々の中に、子連れのハンセン病患者を隔離し、男児を託児所に預けたという話があった。この子供こそ和賀英良である。

それが分かるのはずっと後のことだが、和賀は放浪癖故か、貧しいままの生涯を送りたくなかったのか、亀嵩を出て放浪生活に入る。どこをどうたどったのか不明だが、やがて大阪に至る。この辺りは清張自身の父親峯太郎と重なる。『父系の指』でも触れたが、鳥取県米子市の貧しい家に里子に出された峯太郎は、17、8歳の時、出奔して徒歩で岡山県の津山に出る。さらに大阪に行ったらしい。自伝『半生の記』によれば、広島で書生暮らしをするようになるまで、父の足跡は分からないままだという。

島根から帰った今西は、成瀬リエ子が撒いた紙吹雪に血痕がついて

いるという想定のもと、中央線の塩山から相模湖までの中央線沿いを歩く。炎天下でのことであり、今西の刑事魂が描かれる。その距離は36^キに達する。今西は線路わきの草むらの中から三木の血液がついた布きれを見つけ出す。

だが、「紙吹雪の女」リエ子は今西の自宅近くに住んでいながら、今西が接触する前に自殺する。

潰えた野望―和賀英良

リエ子と和賀の関係を知る宮田邦郎は羽後亀田に現れた不審者でもある。今西に事件を語ろうとするが、和賀によって殺害される。死因は心臓麻痺とされたが、前衛音楽で使う超音波機器で異様な周波数の音を聞かせるという手口だった。今西と吉村は、遺体発見現場を見に行く。渋谷から井の頭線に乗り、下北沢で小田急線に乗り換え6つ目の駅で降りたという。祖師ヶ谷大蔵になる。既乗区間だが、沿線風景としてチエックを入れる。

《駅前の短い商店街を通ると、このあたりは新開地らしい住宅地がそうきはやし雑木林の間に点在していた。稲が色づいていた。

バスが通る道を二人は歩いた。

稲田の向うに住宅があり、その後ろに林がつづき、また住宅の丘が続いた。郊外らしい地形だった》

世田谷区粕谷町とあり、環状8号線の西側、芦花公園付近である。ここが、清張作品によく出て来る地点になる。

ヌーボー・グループの仲間で評論家の関川重雄は、バー勤めの愛人三浦恵美子が身ごもり和賀の超音波で流産させて死なせる。そこも祖

師谷であった。関川が恵美子の死後、和賀に好意的な評論をするようになったこともあり、今西は疑問を深める。

恵美子が埼玉県川口市から祖師谷に突然引っ越した経緯を知ろうと、今西は川口から大久保まで国電に乗る。「新宿で中央線に乗り換えた」と書いてある。川口から赤羽、池袋を経て来たのだろう。埼京線の赤羽―池袋間5・5^キを初乗りと認定する。

被害者、三木謙一も相当な乗り鉄者である。息子夫婦と暮らす岡山県江見町（現、美作市）からまず岡山に出た。その交通手段が書かれていないが、岡山駅前の旅館にしばし滞在したので国鉄を利用したと見たい。姫新線の美作江見―津山間23・3^キを初乗りして津山線で岡山へ来た。と見る。四国に渡り、金比羅参りをする。宇野線の岡山―宇野間32・8^キ、宇高航路18^キ、予讃線の高松―多度津間32・7^キ、土讃線の多度津―琴平間11・3^キも三木の一番乗りである。四国が初めて登場した。

本州に引き返して京都周辺を周遊し、奈良に行く。このあたりの鉄路が不明である。だが、奈良で宿をとり、吉野まで足を延ばした。近鉄奈良線の近鉄奈良―大和西大寺間4・4^キ、同橿原線の大和西大寺―橿原神宮前23・8^キ、同吉野線の橿原神宮前―吉野間25・2^キにも乗ったと判断できる。この後、名古屋駅前、伊勢市と回るが、途中の経路が書かれていない。

約1カ月の旅行の後、岡山へ帰るはずだった三木は伊勢市の映画館に2度入った後、行く先を東京へ変更する。館主とゆかりがあり、娘のフィアンセである和賀と並んだ田所代議士の写真が館内に掲げられていたのである。三木は和賀英良に幼いころの本浦秀夫の面影を見て、間違いないと確信した。近鉄で名古屋に向かうが、『眼の壁』の新聞記者田

村満吉が既に乗っている。

今西は、映画の中に三木の旅程を変えさせる何かがあったと考え、映画の中の端役にさえ注目するが、これというものが見当たらない。だが、田所との関係が分かると、和賀の犯行を確信するようになる。

今西は都電もよく利用した。

A 忙中閑ありの夕、妻と巢鴨のとげ抜き地蔵の縁日に行くため自宅近くから乗る。

B 奥出雲のズーズー弁について調べるため、警視庁から一ツ橋まで行き、国立国語研究所を訪ねる。

C 伊勢で上映された映画を見るため、警視庁から三原橋まで乗る。

D 成瀬リエ子や宮田邦郎が所属していた劇団が上演に持っていたレインコートが事件に使われたと見て、警視庁から青山4丁目まで行つた。

E 駒込にある宮田の自宅を訪ねて吉祥寺町で降りるが、乗車停留所は不明。

F 宮田と三浦恵美子の死後、大塚の監察医務院へ行って医師の話聞き、水道橋から神田方面へ乗る。

三木が巡査時代に助けたハンセン病患者の息子が、和賀となったのではないかと見立てた今西は出生の地、石川県山中温泉を目指す。東京から夜行で米原まで行き、北陸線に乗り換えた。

東京発21時40分とあるが、該当する列車はない。21時30分発の博多行き急行「筑紫」が最も近い。米原着6時7分、6時39分発普通に乗ると、10時58分大聖寺着となる。以下の記述とぴったりである。

《関ヶ原あたりで夜が明けた。

米原から北陸線に乗り換えた。余呉湖に朝陽が射していた。賤ヶ嶽の山岳地帯では、もう雪が積もっていた。

大聖寺におりたのは午まえだった》

米原―大聖寺間の初乗り距離は130・2^キ。今西は、北陸鉄道山中線に乗り換え、終点の山中温泉まで8・9^キも一番乗りする。沿線は温泉郷である。71年に廃止となった。

今西は、和賀の出生前後の話を聞いて確信を深める。問題は、本浦秀夫が和賀英良になった経緯である。大阪まで夜行列車で往復して戸籍を調べた。

――45年3月、大阪市はB―29の大編隊による空襲を受ける。天王寺公園近くにあった民家や店舗が焼け、和賀という名の商店主夫婦は死亡する。子供はいなかったが、音楽好きの住み込み小僧風の少年がいた。区役所も法務局も焼け、少年が申し立てた通りの戸籍が「再生」された――和賀は音楽家としての箔をつけようと、米国行きをする予定が迫る。今西らは飛行機に乗り込む直前の羽田空港で逮捕する。

和賀は殺人者であるが、時代の被害者という見方もできる。ハンセン病に対する差別と偏見、貧しい少年時代。日本の戦前、戦中の歴史を抜きにしては動機を語れない。『ゼロの焦点』の室田佐知子が裕福な乙女から街娼になり、それを知る人間を殺害したのと相似している。

叶わぬ恋と知りつつ和賀への愛を貫く成瀬リエ子を犯罪に巻き込み、フィアンセの父田所重喜の政治力を自らの立身出世に利用する。後年、次第に増えてくるピカレスク・ロマン(悪漢小説)の要素も持っている。

清張作品での悪漢たちは、地方の貧しい青年が上京して金持ちの女をだましたり、地方に行って殺人を起こしたりすることが多い。だから、列車に乗ることも頻繁になってくる、と予告したい。

61年6月の婦人公論に載った『田舎医師』では、中国山地の陰陽越え路線の木次線が走破される。『砂の器』の今西刑事が乗り残した部分というべきか。

――杉山良吉は九州出張の帰り、島根県の山奥にある父の故郷を訪ねる。一族の中では成功している医師の杉山俊郎を訪ねるが、俊郎の従兄弟の博一宅へ往診に出ていた。その帰り、雪道の崖から転落して死亡しているのが見つかった。良吉は葬儀の手助けをするが、帰京後、博一が突き落とした容疑で捕まった、と聞く――

同じ姓を持つもの同士でも、恵まれた者に対して貧者側が屈折を持つことがテーマであり、既述の『父系の指』にミステリーを絡ませた作品になっている。良吉は広島から芸備線に乗り、備後落合で泊まった後、木次線で八川まで乗った。25・6^キが初乗りである。

《この列車は、中国山脈の分水嶺を喘ぎながらよじ上る。トンネルを過ぎると、大きな山が眼の前にあった。隣の客に訊くと、船通山だと答えたのでやはりそうかと思った。この名前も父の口からたびたび聞いている。この辺は、出雲伝説につながっている》

今も、そのままの景色が残る。スキー場が多い地域である。良吉は帰途、宍道に出て山陰線経由にした。八川―出雲三成間14・8^キも初乗り区間となる。

番外地にて―戸谷信一

『わるいやつら』(60年1月11日)61年6月5日、週刊新潮)は、本格的悪漢小説の第1号という位置づけができようか。

――2代目病院長の戸谷信一は、仕事は怠け放題だが、金持ちの妻横武たつ子と女実業家藤島チセを愛人にして金を巻き上げる。だが、結婚したい相手は美人で金持ちのデザイナー榎村隆子であった。年上の女2人が邪魔になり、横武夫婦や藤島チセの夫の不審死にかかわる。だが、榎村は戸谷の長年の付き合いがある弁護士を巻き込んで、戸谷の不動産を奪い、戸谷は不審死の一切の責任を負わされる。悪い奴と見えた戸谷こそ大変な甘ちゃんだった――

戸谷はチセを追いかけて東北本線を浅虫温泉まで往復する。その際、福島から常磐線と合流する岩沼まで61・4^{キロ}に一番乗りする。上野駅から網走まで移送されて行く際にも初乗り区間が現れる。宗谷線は、『金環食』の新聞記者石内が踏破しているが、途中の新旭川から網走までの石北線部分23・4^{キロ}が一番乗りだ。車窓や臨場感ある描写はない。

『山峡の章』は東西冷戦の緊張が高まった時代、60年6月から61年12月まで主婦の友に連載された。婦人雑誌ゆえか、夫を失った新妻が探偵役になるのだが、スパイ事件と国家、権力の筋書きに踊らされる小官僚というテーマも透けて見え、戦後の奇怪な事件にも取り組んでいた清張の問題意識の一端がうかがえる。

――朝川昌子は九州旅行をした際に知り合った経済計画庁の堀沢英夫と結婚したが、何か屈託を抱えており、幸せな新婚生活とはならない。失踪後、昌子の妹伶子と一緒に宮城県の作並温泉で遺体となって見つかった。世間は心中事件とみなした上、米国亡命したソ連人スパイに

堀沢が協力していたというスキャンダルも明るみになる。実は、大友了介という密輸にかかわる病院経営者が堀沢と伶子の殺害者であった。また、ソ連のスパイが日本で暗躍していることを印象付けたかった元内閣情報室員である堀沢の上司も連携、堀沢を協力者として仕立てたのだった――

推理小説評論家の権田萬治が以下のように解説した。

『興味深いのは、国家機密をもらすスパイ行為が、不倫の恋との関連で大々的に報じられるという点である。昌子は「つまり、不倫な男だったという宣伝です。不倫な男だから、そんなスパイ行為のできた男だ、という印象を世間に与えたかったと思うのです」と述べているが、この小説が書かれた十年後の昭和四十六年に起こった毎日新聞西山太吉記者による外務省公電事件などを見ても、こういういわば道徳的な非難によって事の真相をくまってしまうというのは国家権力のしばしば用いる手といってもよいようである。松本清張の推理小説の面白さは、このように何の変哲もない風俗小説のように始まりながら、それが次第に社会の闇の部分に触れて行くところにあるのである』(注18)

初乗りとしては、昌子が2人の遺体を確認に行く際に列車で行き、仙台から作並まで仙山線28・7^{キロ}に乗った。

物語のラスト近く、昌子は大友の病院に乗り込むため渋谷から吉祥寺まで井の頭線で急いだ。同線の渋谷―東松原は『蒼い描点』の編集記者椎原典子、明大前―高井戸間は『黒い福音』のスッチー生田世津子がそれぞれ既乗している。昌子の一番乗りになるのは、東松原―明大前の0・9^{キロ}と高井戸―吉祥寺4^{キロ}である。

松本清張は61年、井の頭沿線の杉並区高井戸東に新居を構えた。駅としては浜田山の方が近い地点になる。この後も、井の頭線は頻繁に登場する。同時に、沿線風景の変化も再々書き留めることになった。

『球形の荒野』（60年1月～61年12月、オール讀物）もまた、権力の舞台裏や不気味な政治勢力に向けた清張の眼力と想像力を感じさせる作品である。死んだと思った父が生きていたことを知った娘の心の揺れが話の中心だが、信州、京都、奈良と旅の舞台が多い。

——元外交官野上顕一郎は、終戦間際の欧州で日本の敗戦を急がせる秘密工作をしたため日本を捨てたが、望郷と娘久美子への思いから名前を明かさずに帰国する。それを知った国粋主義者の一派が「売国奴」として野上を狙う。それを阻止する勢力もあり、殺傷事件が続く。久美子の恋人である新聞記者添田彰一が隠された工作と暗闘に迫ったが、野上は何も語らぬまま日本を去る——

野上の帰国が分かる発端は、姪の芦村節子が奈良の唐招提寺や明日香の安居院で見た芳名帳に特徴ある叔父の字を見つけたことだ。

《薬師寺から唐招提寺へ出る道は、彼女の一番好きな道の一つである。八年前に来たときは晩春で、両側の築地塀の上から、白い木蓮が咲いていたものだった。この道の脇にある農家の切妻の家に、明るい陽が照って、壁の白さを暖かく浮き出していた。が、今日は、うすく曇って、その壁の色が黝く沈んでいる。

相変わらず、この道には人通りが無い。崩れた土塀の上には、鳶が匍つている。土の落ちた塀の具合も、置物のように、いつまでも変わらないのである。農家の庭で、糶をこいていた娘が節子の通る

のを見送った

近鉄橿原線に沿った、西ノ京駅近くの道である。車窓からもその雰囲気が見てとれる。叔父は唐招提寺とともに安居院も好きだったので、節子は橿原神宮前駅まで南下して、再び芳名帳を繰った。叔父の字があった。橿原線は砂の器の被害者三木謙一が吉野に行く際乗ったと判断したので、今や既乗区間である。節子が奈良へ来たのは、夫で医学者の亮一が京都の学会に出席したのに合わせたもので、奈良の宿で落ち合った。そのとき、亮一は京都から電車で1時間かけてきた。当時は国鉄奈良線が電化されておらず、近鉄線で来たと見るしかない。京都線の京都—大和西大寺間34・6キロが初乗りである。

国粋主義者側で野上の字を知ったのは大和郡山市に住む伊東忠介だったが、上京して殺害される。遺体は『砂の器』の宮田邦郎とほぼ同じ所で見つかった。添田がその経緯を調べようと、夜行列車で大阪に来る。続いて、奈良行き電車に乗るのだが、最低、鶴橋から乗ったと見る。大和西大寺で乗り換えて近鉄郡山まで行く。鶴橋—大和西大寺間25・3キロが彼の一番乗り区間になる。ややこしいのだが、鶴橋—布施3キロは大阪線であり、布施—大和西大寺間22・3キロが奈良線になる。

添田は次のような風景を見た。

《河内平野には刈り取った稲が野積みになされていた。生駒トンネルを過ぎると、あやめ池付近の山林も紅葉しはじめていた。西大寺駅に来て乗り換えた。

郡山近くになると、城の石垣が電車の窓に流れて来た。幾つもの四角い池が、人家の間に空の色を映して過ぎた。金魚の養殖場だった。「葉の花のなかに城あり郡山」添田はこの近くに来るたびに、許六

の句を想い出す。この地方特有の切妻造りの壁が方々に見えていた》
生駒トンネル前後は宅地開発が進み、今、秋を深く感じるのは難しい。大和郡山付近は当時を偲べる景観が残っている。

久美子は荻窪に住み、外務省関連の事務所勤務だった。通勤は、新宿までが中央線で、新宿―霞ヶ関は地下鉄だった。東京メトロ丸ノ内線5・8^キは久美子の初乗り区間である。

野上に久美子の肖像画を贈ろうと、かつての仲間が画家に描かせるという1こまがある。その理由について、画家が「電車の中で見かけた。代々木だったかな」と説明した。久美子は自分が通らない駅なのに、と不審に思う。切れ味のよい小トリックである。今は荻窪から1本で行ける。

『球形の荒野』で印象深いのは、路線バスの登場だ。添田彰一が野上の仲間でもある新聞社の先輩を長野県・蓼科に訪ねるため、中央線の茅野駅で降りた。

《駅前にはバスが四、五台停まっていたが、みんな上諏訪行だった。蓼科行を訊くと、近ごろは回数が少なくなっているという返事だった。夏場だと頻繁に通うが、秋の終わりになればずっと減ってくるのである。》

次の蓼科行が出るのには、一時間も待たねばならなかった。添田は、バスを諦めてハイヤーを頼んだ》

路線バスが国鉄の乗客輸送の補完をしていた時代の姿である。今、駅前でも乗り継ぎ客を待つバスの姿は減った。バス会社は町の中心部にバスセンターを構え、高速道路を経由して遠くへ行く客を乗せることに力を入れている。一方、JR各社は昔の駅の間に新駅を作り、通勤・通

学者をバスから鉄道へ追い込もうとしている。互いに背を向けている。
添田は1時間待ちに耐え切れなかったが、今ならラッキーな方かもしれない。タレントの太川陽介と漫画家の蛭子能収が出演する旅番組『ローカル路線バス乗り継ぎの旅』は、演出が大半なのだろうが、当然路線がありそうな都市間にバスが走っていない現実を突き付けており、ユニークである。(注19)

蓼科から帰る添田が乗ったバスも今とはずいぶん違う。

《バスの停留所には、三人の客が待っていた。一人は猟銃を担いだ中年の男で、あとはリュックサックを背負った若い男女だった。

しばらく待つと、バスが下から喘(あえ)ぎながら登って来た。

降りた乗客は五人だった。土地の人ばかりで、下の町での買物の包みを提げているのが多かった。バスが出るまで、運転手は崖縁(がけつぶち)にしゃがみ、蒼い煙草の煙を吐いていた。

バスが出るころになって、別の男連れのハイカーが駆けつけて来た。彼らは手にアケビの実の成った小枝を持っていた。アケビは熟れて、割れ目から黒い種子(たね)が覗いていた。気づくと、前の男女のリュックサックの蓋の間に、竜胆(りんどう)の花が挿し込まれてあった》

折り返し停留所の様子を描いたのだろう。猟銃を持ってバスに乗ることは法律的にどうなるのか。だが、それが可能であり、断られたら困るという庶民の暮らしがあった。

国交省の統計で乗合いバスの乗客数の年次変化のデータがある。70年に100億人だったが、以後減り続け2008年には43億人となった。マイカーの普及による影響であることは言うまでもない。

地図5の番号対照表

	作品名	線区名	乗車駅	降車駅	キロ数
●●年	31 駅路	可部	横川	可部	14
	32 黄色い風土	御殿場	国府津	駿河小山	24.6
●1年	33 金環食	函館	滝川	旭川	53.3
	金環食	宗谷	旭川	稚内	259.4
	34 万葉翡翠	大糸	築場	糸魚川	59.1
	万葉翡翠	飯山	豊野	津南	57.9
	35 考える葉	身延	波高島	身延	6.7
	36 砂の器	山手	目白	池袋	1.2
	砂の器	福知山	尼崎	福知山	106.5
	砂の器	山陰	福知山	松江	263.4
	砂の器	山陰	松江	宍道	17
	砂の器	木次	宍道	出雲三成	41.5
	砂の器	赤羽	赤羽	池袋	5.5
	砂の器	姫新	美作江見	津山	23.3
	砂の器	宇野	岡山	宇野	32.8
	砂の器	宇高航路	宇野	高松	18
	砂の器	予讃	高松	多度津	32.7
	砂の器	土讃	多度津	琴平	11.3
	砂の器	北陸	米原	大聖寺	130.2
	37 田舎医師	木次	備後落合	八川	25.6
	田舎医師	木次	八川	出雲三成	14.8
	38 わるいやつら	東北	福島	岩沼	61.4
	わるいやつら	石北	新旭川	網走	234
	39 山峡の章	仙山	仙台	作並	28.7

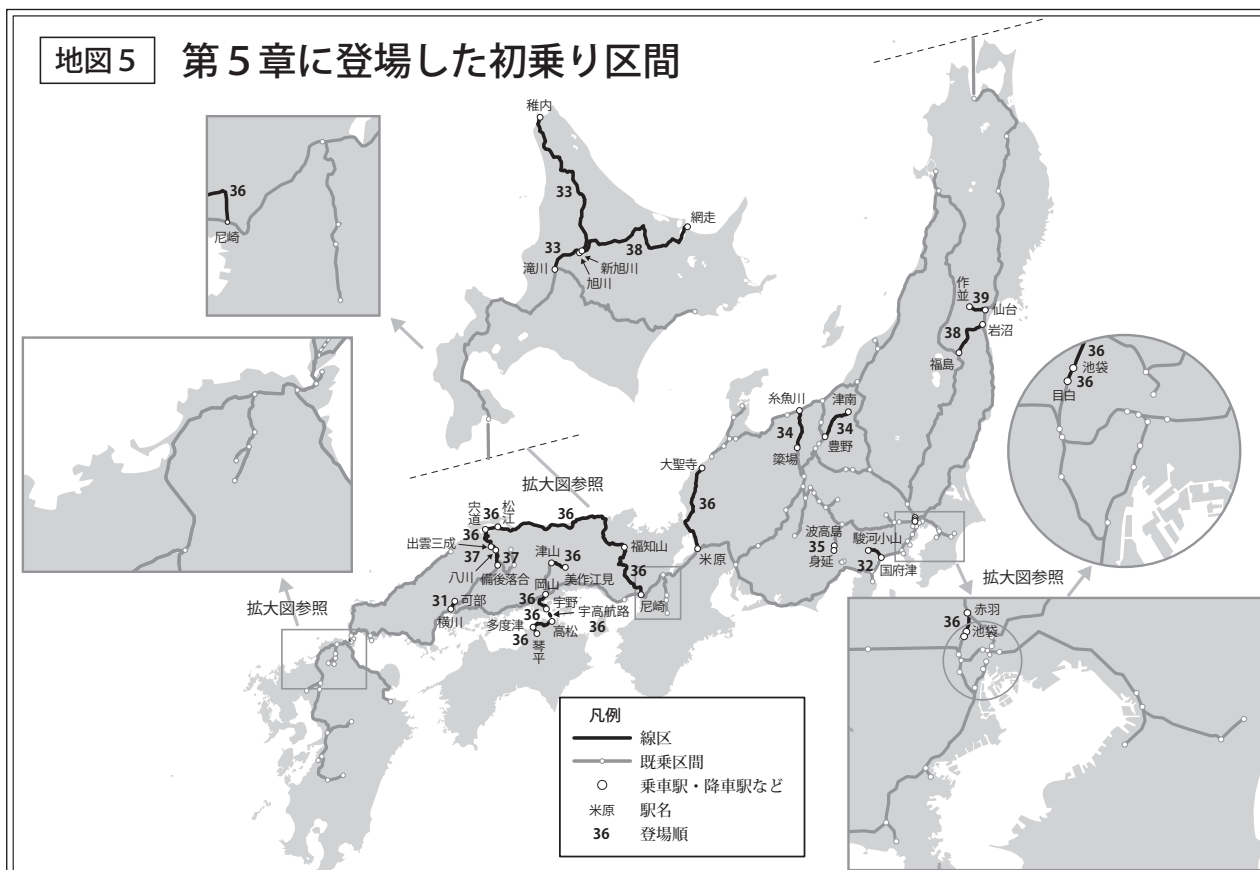
野上が離日する直前、久美子は観音崎で父と会う。

《久美子は脚を渚のほうに運んだ。前が房州の連山になっている。しかし、海を隔てているとは思えなかった。灯台下の岬を廻った地つづきのような感じだった。山の襞や、山崩れがあったらしい茶色の地肌まで、くつきりと見えるのだった》

久美子は横浜からタクシーで行き、横須賀線や京急は利用しなかった。

初乗り区間は、旧国鉄とJRが7786・1キロ、私鉄が613・6キロになった。地図5で旧国鉄とJRの初乗り区間を示した。日本列島が形づくられてきたことが分かる。

地図5 第5章に登場した初乗り区間



第6章 遠くへ行きたい

(1961年12月～65年2月)

津軽へ、国東へ

『風の視線』は、元伯爵家生まれの一流商社幹部の夫がいながら新聞社の腕利きデスクを愛し、新進のカメラマンからも慕われる美しき妻が主人公である。『波の塔』の結城頼子に似ているのだが、最後に自らの愛を貫き、強さも感じさせる。61(昭和36)年1月3日から12月18日まで、女性自身に連載された。樹海での自殺から1年、女を強く描いている、と支持されたのではないか。旅への誘いもたつぷりで、絢爛たる筆運びである。

——竜崎亜矢子はR新聞社事業部次長の久世俊介と心を寄せ合う一方、彼女に憧れる写真家の奈津井久夫を野々村千佳子と結婚させる。千佳子は亜矢子の夫重隆の部下として心身を縛られた状態にあった。奈津井夫婦の苦しみの一方、亜矢子は毛利と逢瀬を重ねる。だが、一緒になれないことを悟った毛利は佐渡の地方取材網を志願する。重隆が密輸の罪で摘発され、奈津井夫婦も再出発を誓う中、亜矢子は心を決め、佐渡へ来た——

奈津井は、亜矢子への思慕を振り切るかのように新婚旅行中にも仕事を入れた。青森県・浅虫温泉での初夜の後、津軽の五所川原へ行った。十三湖付近の荒涼とした風景を撮るためである。奥羽線の青森―川部間31・1^{キロ}と五能線の川部―五所川原間21・5^{キロ}に乗る。その先は路線バスだった。清張は五所川原駅の様子を書く。

《五所川原駅は混雑していた。農産物の集散加工の中心地のため、

田舎の駅とも思えぬくらい人が多い。弘前、青森方面から来る人びとや、鰯ヶ沢方面から来る人、津軽鉄道で金木方面から来る人たちで、狭い駅はごった返していた。(略)

駅前に出ると、ここもバスが蝟集していた。駅前の田舎らしい町並みに似合わず、バスだけはいやに多いのである。(略)

見知らない町の、見知らないバスに乗るのは、千佳子に、未知の旅路に出た気持ち濃くさせた》

賑わいは今も続いている。私が10年秋に行った時もそうだった。太宰治を偲び、五能線に乗り、日本海に沈む夕陽を眺めようというツアーが盛んなのである。車内では津軽三味線の実演もあった。

亜矢子への恋心を断ち切れない奈津井は一転して大分県の国東半島・富貴寺の石仏取材に行く。東京から列車で行って、豊後高田という小さな駅で降りたとある。九州に入って日豊線の宇佐まで行き、宇佐から大分交通宇佐参宮線(65年廃止)に乗り換えた。豊後高田まで4^{キロ}が一番乗りになる。

国東半島は、大分空港ができたり、道路整備されたりして観光客も入りこむようになったが、三〇年代は陸の孤島という観があった。ルートが平安仏教に遡る寺の取材の動機について、松本清張は奈津井にこう語らせる。

《宇治の鳳凰堂や、平泉の金色堂を見るよりも、この荒廃した藤原時代の遺構が気持ちの中に密着した》

清張自身の心境ではないか。一帯は経済的にも文化的にも宇佐神宮の勢力圏の中にあった。後年、古代史に切り込んでいく作家活動の原初の一つと見てもよからう。

垂矢子と久世は2人で川治温泉へ行く。東武浅草から乗った。当然ロマンシートだろう。降りたのは今市(駅名としては下今市か)で、その先はタクシーにした。伊勢崎線の浅草―東武動物園41^キ、日光線東武動物園―下今市87・4^キが初乗りである。

《広い関東平野の北のはしの山なみが、ぽっかり現れて、それがしだいに近づいてくる。はじめ、うす曇りの中にぼけて見えた男体山^{なんたいさん}のかたちがやがて大きくなり、頂上だけ残った夕陽の中に火山の皺^{しわ}が見える》

垂矢子が1泊旅行を誘い、東京駅で待ち合わせた。久世が行くと、タクシーで浅草まで移動した。東海道線方面は良いところがない、と言うのである。ちよつと身勝手なようだが、初めて契りを結ぶと同時に一緒にはなれないという意思も伝えねばならない。旅先を選ぶのにあれこれ思案したのでろう。

奈津井が新婚旅行で行った十三湖の描写は、これまでの清張の筆とはちよつと違う要素がある。日本海からの強風に押されるように砂が押しよせ、荒涼とした風景が広がる。集落の家々は今にも砂に埋もれそうにしている。美田はない。昔、夷船^{えいふね}や京船が入って来た船着き場は荒廃した。港がほしい、という漁師の声が出て来る。

今どき、こんな場所があるのだ。奈津井は驚き、シャッターを切り続ける。その熱意が伝わったのか、地元の名はこう訴えた。

《こした貧乏な村は、村があるということをし、写真で東京の人に知らせてあげてけへ》

61年は、所得倍増計画を掲げる首相、池田勇人の下、経済成長がピツ

チを上げる。64年の東京五輪に向け、「建設の槌音高く」の時代であった。振り返れば、清張が作家デビューしてからの日本は、復興と成長の時代が続いてきた。だが、地方はどういう状況にあったのか。成長から取残される地域と人々が現れ始めたのである。清張が何を見ていたかは分からないが、筆先はそこに届いていた。

東京五輪と表裏にあつて日本を工業化させようとしたのが、64年に全国15地域が選ばれた「新産業都市」である。港湾整備をしたり、工場用地を造成したりして企業立地を図る「拠点開発方式」と呼ばれるものだ。全国総合開発(旧全総)の目玉であった。企業立地が進めば、地域の商店街がうるおい、農漁業では食っていけない若者の就職先も見つかる、というバラ色イメージが振りまかれた。62年に「新産都建設促進法」が制定されると、全国各地から手が上がり、激しい誘致合戦が繰り広げられた。勝ち残ったのは以下の地域である。カッコ内は道県名。

道央(北海道)、八戸(青森)、秋田湾(秋田)、仙台湾(宮城)、磐城・郡山(福島)、新潟(新潟)、富山・高岡(富山)、松本・諏訪(長野)、中海(鳥取・島根)、岡山県南(岡山)、徳島(徳島)、東予(愛媛)、大分(大分)、日向・延岡(宮崎)、不知火・有明・大牟田(佐賀・福岡・熊本)

東北や中四国、九州に多い。戦後10数年、均等な経済発展が出来なくなり、底上げが必要と判断された地域と言つてもよい。立地企業は優遇課税の恩典を受け、インフラ作りをする自治体には手厚い補助金・交付金が出た。白砂青松の海岸線が岸壁や港湾道路に変わり、田園風景の中に工場群が割って入って来た。地方の景観が変わる序幕であった。新産都に限ったわけではないが、大気汚染、水質汚濁もこのころから顕在化して行く。

国の開発計画をいち早く知って、誘致活動を始め、地域間競争に勝つということが、自治体首長や職員の腕の見せどころとなった。そのためには国会議員や官僚にアプローチせねばならぬ、事業の新展開を目指す企業がこれに絡んでくる。そこに、不明朗な金が動き、犯罪の温床にもなる。清張が書く対象にならないはずがない。ミステリーやロマン小説の横糸として織り込まれることが多くなる。

例えば、『蒼ざめた礼服』(62年)では東京湾の海苔漁の衰退、『落差』(同)では高知県の山間部でのダム建設が登場する。首都圏の広大な国有地払い下げが絡む『花氷』(66年)、土建業界と政治の腐れ縁を描いた『状況曲線』(78年)などがある。清張鉄道の終着駅、『犯罪の回送』(92年)も苦東開発を想起させる。

東京湾を挟んで

『風の視線』とはほぼ平行する形で載った『不安な演奏』(61年3月13日〜12月25日、週刊文春)は、ヒロインらしき人物がおらず、男っぽい筋書きである。

——雑誌編集者の宮脇平助はラブホテルに仕掛けられた録音テープで連続殺人計画を知り、予告通りに日本各地で人が死ぬ。選挙違反事件に伴う失職から国務大臣を守るための組織に仲間割れが生じたことによるものだった。宮脇は知り合いの映画監督久間隆一郎らと追い詰めて行く——

第1の遺体は新潟県柏崎市の海岸で見つかる。テープとの関連を調べに久間が信越線経由の夜行の寝台車で直江津まで乗る。上野23時0分発の準急「妙高」であろう。『ゼロの焦点』の既乗区間であるが、信越の

国境越えが描かれている。

《雪の平原の向うに白い山が見える。そのかたちで妙高山と分かった》
その直前に黒姫山も見えたはずだ。

テープに声を残した男らの活動拠点が京王線布田駅周辺にあると見た宮脇は、新宿から布田まで何度も乗る。京王線は『地方紙を買う女』の潮田芳子が渋谷のバーに通う際、千歳烏山から明大前まで乗ることは確実と判断している。宮脇は新宿―明大前5・2^キと千歳烏山―布田5^キを一番乗りした。

宮田は武蔵野台地に続く辺りを歩いたのか、こう書かれている。

《調布から布田あたりの青い田が真下に見える。問題の京王電鉄の電車が緑色の車体を連ねて玩具のおもちゃのように走っていた。正面に多摩丘陵が霞んでいる》

今は地下を走っている部分である。

組織の有力メンバーで区議の南田広市は、関西から南紀にかけての議会の視察旅行に行くが、新宮で一行と離れ、三重県の尾鷲駅で駅員と話したのが最後で失踪する。新宮―尾鷲56・9^キを初乗りした後、布田詰め遺体となって汐留駅まで送られた。

南田の娘の菊子が駆けつける。急行「那智」で行ったと書かれている。名古屋から伊勢路を南へ下る夜行である。名古屋から関西線に入り、まづ亀山まで59・9^キを行く。亀山から紀勢線に入り尾鷲まで123・3^キ。いずれも初めての登場である。

選挙違反逃れ組織の主な仕事は、総括責任者だった千倉練太郎を転々とさせて隠すことであつた。だから、追う宮脇もあちこちに行く。組織の拠点があつた山梨県の小淵沢から身延線を経て東海道へ抜ける

場面がある。『考える葉』で身延まで南下、『波の塔』で沼久保―富士宮間が走破されていたが、宮脇は身延―沼久保26・6^キ、富士宮―富士10・7^キを乗りつぶした。静岡県西部、遠江の山間地を2回訪ねるのだが、1回目は掛川から遠州森まで二俣線の12・8^キに乗った。浜名湖の北を走るのんびりとした風景の線区である。今は3セクの天竜浜名湖鉄道に生まれ変わった。

2回目は尾鷲からの帰りで、浜松で途中下車し、私鉄で終点まで行ったという。遠州鉄道新浜松―西鹿島17・8^キに初乗りしたとカウントする。

大団円では、千倉が九州・大分県の由布院温泉にたどり着いた。殺人と逃亡の続く生活に嫌気が差したのである。宮脇は夜行で九州へ向かい、久大線の由布院駅で降りたと記述されている。だが、小倉から由布院まで色んな経路があるので、乗車区間の絞りようがない。

三〇年代前半、作品の舞台として甲信地方が多いこととその意味は、『影の地帯』で書いたが、三〇年代後半に入って全国へ広がり出した。ストーリーを一本調子にさせないという点で、登場人物を鉄道であちこちに行かせるという手法は効果的であると思う。

これは並みの作家が真似できないことだろう。かつて見た風景を思い浮かべ、地図や時刻表を駆使してアイデアを練る。地方の風景をしっかり見つけて来たからできることだと考える。長編の多作を支えた要因の1つではなからうか。

東京湾岸の鉄道に乗る2篇を紹介する。

『蒼ざめた礼服』は、61年1月1日から62年3月25日までサンデー毎

日に連載された。

――いかがわしい政治研究所の新人として所報作りに関わる片山幸一は、自衛隊の次期潜水艦の導入をめぐり2大国が売込み合戦を繰り広げていることを知る。防衛庁に顔が利き名家の出とされる工学博士、東洞直義の動向が注目される中、彼の経歴を知ろうとする者が次々に殺される。実は詐欺師同然の男だったのである――

片山は殺人事件の周辺取材で椎名町へ行く。まず山手線で池袋へ行った。会社は京橋なので、山手線内回りで東京から乗ったと見る。意外なようだが、神田―上野間（営業路線としては東北線）が初めて登場する。2・3^キ。次いで日暮里―池袋間6・5^キも初乗りになり、周回としての山手線はようやく全線踏破となった。ただし、日暮里―田端1・3^キは東北線になる。池袋から西武池袋線に乗り、椎名町までひと駅1・9^キを初乗りした。

宮脇の取材では、新宿のバーで取材した後、赤坂のナイトクラブへ移る場面がある。都電なので、「少々情けない」と思った。

殺害方法として、遺体を海苔工場で処理し、死亡推定時刻を誤らせるという手口がある。その調査のため、宮脇は東京から横須賀線に乗って横須賀で降り、バスで浦賀へ向かった。鎌倉までは「点と線」の三原警部補が来ており、鎌倉―横須賀11・4^キが一番乗りになる。宮脇が見た景色である。

『浦賀の町に降りた。現在では、ペルリが上陸したといわれるこの町も、ドックなどの工業地帯になっているが、それでも漁村は追い詰められた格好で残っている。(略)』

穏やかな海はまるで瀬戸内海にある水道のようだ。ここは、東京

湾が一番狭ま^{せば}つているところで、房州^{ぼうしゅう}の山がまるで川向うのように近い》

追いつめられる漁民という捉え方は『風の視線』の津軽の声に通じる。東京湾の海苔生産量がいかに減ったか、現況解説風のくだりもある。

房総の山は、『連環』(61年1月～62年10月、日本)の殺人の場となる。主人公の笹井誠一は、女から金を巻き上げて殺す悪漢である。

——九州の印刷所勤務時代、主人下島豊太郎と愛人を事故に見せかけてガス中毒死させ、妻の滋子からは遺産を巻き上げる。東京で春本の出版社を立ち上げて成功しそうになるが、滋子が笹井を頼って、子供とともに上京する。金のない女は邪魔になるばかりで、房総半島南部の鋸山で殺害する。子供を逃したばかりに、やがて犯行が発覚する——

笹井は母子を鋸山へのピクニックに誘い、お茶ノ水から千葉乗り換えて内房線の浜金谷駅まで来る。途中の五井までは『断碑』に出て来る考古学の鬼才、木村卓治が乗っており、五井—浜金谷54・7^キが笹井による一番乗り区間となる。犯行後、遺留品が気になる笹井は母子が泊まっていた江古田の旅館へタクシーで行き。帰りは西武池袋線に乗る。江古田—椎名町2・4^キもまた初登場である。

笹井は、内房線でこんな車窓を見る。

《ここに来るまでの景色は美しかった。右側の窓には絶えず青い海が見えている。東京湾の東海岸に当たるこの辺は、ほとんどが海苔の養殖場だった》

2010年代になって私が見た景色とはずいぶん違う。笹井が鋸山から見た景色を清張は書く。

《前には相変わらず東京湾の海が展^{ひら}がっていた。晴れてはいるが、

霞がかかって対岸の三浦半島は見えなかった。そのうすい靄^{もや}の端を港から離れたばかりの白い船体が出っ込んでいた。フェリー・ボートだった。

反対のほうに眼を向けると、様子の違った海岸が大きく曲がって伸びている。外房州がそこから始まっていた》

羽田に降りる前、飛行機から見える景色に近い。

和布刈から潮来まで

マザコンの夫と別れ自立を目指す、その肉体を奪おうとする男たちから狙われ、金でも苦労する。井沢恵子の奮闘を描いたのが『美しき闘争』である。京都新聞(62年1月11日～10月4日)などで連載された。

良識ある雑誌と思って勤めた婦人誌は、方針転換したため、恵子は熱海の風俗ルポ取材を命じられる。その時、新幹線で行ったという。開業2年前なのにと首をひねるばかりだ。私が読んだのは85年の角川文庫版なのだが、文庫版化の時に手が加えられたのだろうか、初乗りとしては認定しない。知り合いの作家梶村久子が病気で倒れたため、恵子はカンパ呼び掛けや見舞いで、東京西郊の私鉄を細切れに乗る。

自宅のある西荻窪から東急池上線の池上へ行くのだが、五反田、蒲田のいずれ側から来たのが判読できない(注20)。その後、電車で田園調布へ行った。まず、池上—蒲田1・8^キ。東急多摩川線蒲田—多摩川5・6^キ、さらに東横線に乗り入れたと認定したい。当時は目蒲線時代で多摩川乗り換えではなかった。(注21)

見舞いは、吉祥寺からバスで西武新宿線の武蔵関へ出る。西へ8・5^キ行った小平で降りるのだが、正解ではなかった。青梅街道まで乗り直

す。拝島線小平―萩山1・1^キ、多摩湖線萩山―青梅街道1・2^キを恵子の一番乗りに加える。

『時間の習俗』は、事件を追う刑事として警視庁の三原紀一、福岡県警の鳥飼重太郎という『点と線』コンビが再登場する。連載誌も旅(61年5月―62年11月)である。

――タクシー会社専務の峰岡周一は、役所との癒着など自分のスキャンダルを追う業界紙の編集責任者土肥武夫を相模湖畔で、「女」と協力して殺害する。その時間は飛行機で福岡へ飛び、関門海峡の和布刈神事の写真を撮っていたというアリバイを作った――

峰岡は、土肥の死亡時刻の2月6日の夜9時台のことを次のように説明する。

「6日15時発の羽田発便で夕方に福岡空港着。博多から鹿児島線の列車に乗り、23時23分に門司港に着いた。趣味がカメラなので、旧暦元旦の和布刈神事を撮り、朝8時ごろ小倉の旅館に入った」

だが、三原は次のような移動が可能だと考えるし、その通りだった。

「6日15時発の羽田発便に乗るが、伊丹から羽田へ引き返す。19時35分着。川崎まで行って南武線に乗れば、立川まで1時間程度で行ける。立川発21時5分の中央線列車があり、相模湖には21時48分に着く」

可能なようだが、61年9月の時刻表を見ると立川20時55分発、相模湖21時29分着となっており、立川駅で中央線に間に合うかどうか、きわどいタイミングである。

土肥殺害後はどうしたのか。

「相模湖から中央線で新宿へ。新宿から羽田までタクシー。羽田1時

表3 峰岡周一のアリバイ説明と三原警部補の推理

年月日	峰岡の申し立て	三原の推理
2月6日	15時00分 羽田発日航機 19時10分 福岡・板付着 19時40分 博多駅着 21時48分 博多発各駅停車 23時23分 門司港着 和布刈神事を撮影	15時00分 羽田発日航機 16時55分 伊丹着 18時05分 伊丹発 19時35分 羽田着。川崎へ 南武線で川崎→立川 21時05分 立川発中央線 21時48分 相模湖着 土肥武夫を須貝新太郎と殺害 2人で相模湖から中央線で新宿へ 2人で新宿からタクシーで羽田へ
2月7日	明け方 ？ 小倉の旅館へ 博多へ移動 西鉄福岡から電車で都府楼巡り 16時30分 博多発特急「あさかぜ」	1時30分 羽田発ムーンライト便 5時10分 板付着 小倉の旅館へ。須貝は時間つぶし ？ 夕刻水城跡で須貝を殺害 ？ 飛行機で東京へ戻った
2月8日	9時30分 東京着	

？は、時刻が特定できない部分。

30分発の福岡行き深夜便ムーンライト1号に乗れば福岡着5時10分。小倉の旅館に十分間に合う(表3参照)

南武線の川崎から立川まで35・5^キは初乗り区間となる。この時代、東京―福岡、東京―千歳に夜行の航空便があった。

土肥が殺害される前、相模湖の旅館でいっしょにいた「女」は女装した須貝新太郎だった。このため、初動捜査で女を探すが、男の服に着替えた須貝は網から漏れた。峰岡と須貝が親しいと見た警視庁は、東京以外のゲイバーが接点と見て稲村と大島の2刑事に大阪出張を命じる。2人は名古屋へも足を延ばすが、その際近鉄の急行で移動する。

上本町から大阪線に乗り、伊勢中川で名古屋線に入るが、名古屋線は『眼の壁』で新聞記者の田村満吉が乗っている。大阪線も『球形の荒野』で記者添田彰一が鶴橋―布施間を通った。2刑事の一番乗りは、上本町―鶴橋1・1^キと布施―伊勢中川104・8^キとなる。

三原と鳥飼が苦労したのは、和布刈神事を写した写真の前後のスナップや人物が特定できる時間なので、峰岡が和布刈にいたことは否定できない。だが、予めカラ撮りした部分に、他人が撮った写真のネガフィルムをプリントして写したのだと気付く。デジタル化した現代では考えられない手口である。他人のネガを店から失敬するのに、身分証代りに他人名義の定期券を作る。身分確認が厳格になった今、可能だろうかと思う。

作品の最後は、潮来のあやめ祭りの撮影に行った峰岡を逮捕するため、三原と鳥飼が成田線に乗る場面である。当時、鹿島線は開通しておらず、佐原で降りたと判断する。ただし、東京から総武線の千葉回りで来たのか、常磐線の我孫子経由なのかは分からない。成田―佐原26・9^キを2人の一番乗り区間とする。当時の成田線は気動車中心で、窓が開く時代だった。今も、利根川の堤が近くにあることを感じられる田園が

広がる。

《成田線の列車の内には、畑から吹く風が溢れこんでいる。(略)

列車が走るにつれて、広い平野に麦の熟れがすすんでいた》

都電のことを書く。三原は三宅坂から神田方面に聞き込みに出かけるが、行きは神田司町まで乗り、帰りは駿河台からだった。

歴史教科書を執筆する学者が登場する作品は多い。戦前の皇国史観から戦後の民主化、さらに右傾化という潮流の変化に合わせる節操のなさを、清張は痛烈に書いた。ライバルへの嫉妬、女と金への執着も絡む。『カルネアデスの舟板』(57年)がその第1弾であろうが、『落差』(61年11月12日) 62年11月21日、読売新聞)もまたその系譜になる。

――島地章吾は、歴史学者で教科書監修でも著名である。時流に合わせるのに腐心する一方、女に手が早い。左翼的教科書作りをし、貧困の中で死んだ細貝貞夫の妻景子に迫り、高校時代の同期生佐野周平の妻明子の身体も奪う。景子と佐野夫婦が苦しむ中、島地は教科書会社から高い執筆料を取る交渉に熱を入れる。教科書出版会社に入り、大阪をベースに高知県でセールス活動をする景子は義憤を感じ、島地を刺す傷害事件を起こす。佐野夫婦は、島地に翻弄されることを克服し、夫婦の絆を深める。うまく立ち回ろうとする島地の人間的な貧しさが浮き彫りになる――

島地は箱根で教科書会社の接待を受け、小田急で帰る途中下北沢で降りて、雪ヶ谷の佐野宅へ行く。帰り、雪が谷大塚(文中では雪ヶ谷)から五反田へ電車が出る。池上線の五反田―洗足池間は『歪んだ複写』で登場しているが、雪が谷大塚―洗足池1・3^キが初乗りになる。

景子が高知県担当を命じられた後、高知駅に降り立つ場面が書かれる。景子は高知へ行く手順として、山陽、宇野、宇高航路、予讃、土讃の各線に乗り継いで行く旅程の長さを覚悟する場面が以前にあり、その通りに行つたと判断する。土讃線の琴平までは『砂の器』の被害者三木謙一が乗っており、琴平―高知115・3^キが景子の一番乗りになる。

景子は高知県西部担当を任されて、当時の土讃線の終点窪川まで行つた。高知―窪川72・1^キもまた彼女が最初に乗つた。

冒頭、東海道線上りに乗つた島地が出て来る。何気ない筆に懐かしさを感じる。

《列車が沼津駅に着いた。

島地章吾は窓から首を出したが、あいにくと一等車がホームの端に停まつたので、売子がここまで来てくれない。ずっと後ろのほうの二等車のあたりにかたまつてうろろしている。(略)

沼津は一分間停車だ。

島地章吾はホームを歩いた。(略)ようやく、ジュースを二等車の窓に渡している売子のそばに近づいた。

「ウイスキーをくれ」

島地章吾はポケットから財布を出した。

売子は二等車の客にジュースを渡すと、こんどは甘納豆か何かを窓にさし出している。まだ無数の手が伸びていた。

「おい、早いとこしてくれ」

彼は催促した。

「はいただ今」

売子も釣銭の勘定をしたりして忙しい。

「幾らだ？」

「百三十円です」

島地章吾は五百円札を出した。

「細かいのありませんか？」

財布の中は、十円玉が五、六個あるだけだった。あとは、一万円札が六枚と、千円札ばかりになっている。

「ないね。それで取ってくれ」

売子は仏頂面をして五百円札を受取ると、うつ向いて釣銭を探している。ベルが鳴り出した。

島地章吾が足踏みしていると、売子はようやく、小銭ばかり掻き集めてポケット瓶のウイスキーと一緒に手渡してくれた。

もう、ホームを走って前部の一等車まで追う余裕なかった。それに、窓から見ている乗客の前で駆け出すのはみっともない。彼はすぐ目の前の二等車のステップに足をかけた》

短時間により多くの飲食物の売買をするには双方が呼吸を合わせる努力が求められた。島地の身勝手さをも象徴する書き出しとなっている。

『地の指』(62年1月8日～12月31日、週刊サンケイ)は、東京西郊の精神病院のあくどい儲け方とそれにたかる都の担当職員の話である。都職員山中一郎は、武蔵野にある不二野病院の事務長飯田勝治と結託して、悪の限りを尽くす中、追及する新聞記者や情報提供する看護婦が殺害される。しかし、山中や飯田もまた殺される。利権に食い込みたい大森のラーメン屋大野謙太郎の仕業だった。桑木刑事や若い重枝三郎刑事らが追う。

2刑事は、高円寺松ノ木町へ行つて、飯田の妻から話を聞く。その後、

青梅街道に出て、地下鉄で新宿へ行く。地下鉄丸ノ内線新高円寺―新宿4・9^キであろう。地下鉄が伸びて速くなったと2人は感心する。延伸は61年秋である。

日高山脈の麓

絵画の模倣・贋作をテーマにした作品として『青のある風景』や『真贋の森』を紹介したが、小説の模倣を扱ったのが、『影』（63年1月、文芸朝日）である。

――宇田道夫は、人気時代小説家の笠間久一郎の代筆をしてそれが好評を博し、慢心する。時代考証がずさんな作品を書いて笠間の人気を引く張る形になり、これを契機に独り立ちしようとするが、なぜか売れない。影であつてこそ存在感のある人間がいる――

長い年月の後、宇田は中国山地のU温泉の旅館の主人になるが、落ちぶれた笠間が何も知らずに客として泊まりに来る。宇田はわが人生を振り返る。

U温泉とはダム湖の下にある湯原温泉であることは間違いない。清張はここへ来るルートを丁寧に書く。岡山から伯備線（起点は倉敷）に入り、新見で乗り換えて東に向かう。勝山という町で降りて、麻川の溪谷を12^キ北へ行く。麻川は旭川のことだろう。笠間は伯備線の倉敷―新見64・4^キと姫新線の新見―中国勝山34・3^キを初乗りしたと認める。『人間水域』（61年12月―63年4月、マイホーム）は美術界の虚構に眼を向けた作品である。

――前衛的水墨画で名前を売り出した久井ふみ子と滝村可加寿子とともに美人で、ライバルだが、有力なパトロンを得ることで人気を保つ

ていた。2人から頼られる立場の学芸部記者島村理一はともに才能はないと見て、北海道出身の若手の森沢由利子を育てようとする。ふみ子は長い付き合いの愛人から顔に硫酸をかけられ、作家生命を失う。パトロンを奪った形の可寿子も創作活動に行き詰まり、危ういものが迫っていると感じる――

島村は札幌出張の折、帯広に帰省していた由利子を訪ねる。「札幌から四時間半の旅だった」と書かれており、不在の由利子宅を訪ねた後、しばらく時間をつぶした。61年9月の時刻表で言えば、札幌7時38分発帯広11時52分着の急行「第1狩勝」がぴったりなのだが、島村は旭川まで大回りして富良野線を南下している。首をひねるしかないが、富良野線の旭川―富良野54・8^キを乗ったことにする。今は夕張山脈を越える石勝線が出来たので最速2時間半の行程である。

不思議なのは、札幌を発車した後、島村が「石狩川の長い鉄橋を渡った」ことである。旭川の途中滝川までは石狩川の左岸をひたすら遡る形なので、渡河しない。石狩川を挟んで右岸を遡上する札沼線は市街地を離れると、鉄橋がある。風雪対策なのか、夏も目隠しがしてあり、残念に思った記憶がある。

帯広で会った由利子は子供のころの思い出として、遠足で日高山脈の麓を歩き、帰りは広尾線の更別から列車に乗ったと語る。87年に廃線になったが、同線の更別―帯広35・4^キは由利子が一番乗りした。この間には、縁起切符ブームの第1号とも言える「愛国」と「幸福」の2駅があった。

『塗られた本』（62年1―63年5月、婦人倶楽部）は、出版に夢をかけたヒロインの悲話である。

——小さな出版社社長の紺野美也子は、大手銀行の頭取であるパトロンの金と自らの美貌、誘惑で人気作家の作品を出版して実績を作ろうとする。純情で売れない詩人の夫卓一の作品集を出すためだった。それを知った近くに住む劇団俳優野見山房子は美也子に反発を覚え、卓一に伝える。卓一は八ヶ岳山麓で自殺する。美也子もまた姿を消す——

神戸、湯河原、小海線と舞台はあちこちにあるが、初乗りは美也子と房子による青梅線の河辺―奥多摩（当時は氷川）21・3^{キロ}である。卓一が姿を消す前、奥多摩に行ってみたくと話していたので探しに行ったのだが、手掛かりは得られなかった。

新宿から乗った『装飾評伝』では、青梅に引込んでいた名和薛治を芦野信弘がしばしば訪ねていた。河辺から先が未乗区間であった。

『絢爛たる流離』（63年1月～12月、婦人公論）の主人公は3カラットのダイヤの指輪である。北九州の金持ちが娘のために購入したのだが、多くの女性の指にはめられ、最後は溶接作業員が溶かしてしまう。その間、関わる人間たちは殺人や不幸に巻き込まれる。1回ごとに完結した短編になっている。

第8話『切符』では、山口県宇部市に住む足立二郎と顔見知りの坂井芳夫が金に困り、ダイヤを持つ米山スガを大分県の耶馬溪に連れて行って殺害する。宇部、山陽、鹿児島、日豊の各線に乗って中津まで来るが、既乗区間である。中津で大分交通耶馬溪線に乗り換え、柿坂まで24・8^{キロ}に乗る。山国川に沿って、青の洞門や羅漢寺、守実温泉などの観光地を結ぶ同線は75年に廃線となった。

坂井は「スガの死体から宇部―柿坂間の切符を持ち去るのを忘れた。警察にばれるとアシがつく」と言って、足立にもう一度現場へ向かわせる。先回りして殺害するつもりだったが、意外な結末が待っていた。

第4話『走路』では、終戦のころ韓国西海岸の街から日本に脱出する軍人の話が出て来る。主計大尉篠原憲作の勤務地、金邑という地名は、井邑のことだろうか、高敞のことだろうか。光州や木浦まで乗るのだが、韓国ものの新たな初乗り区間である。

『彩霧』（63年1月～12月、オール讀物）は、銀行員安川信吾が行金を持ち逃げし、愛人でキャバレーホステスの小野啓子と九州へ遊ぶ話である。『拐帯行』の森村隆志と西池久美子と似たような設定だが、彼らは死に向かっていた。安川はしたたかで、銀行の仮名口座一覧資料を盾に追及を逃れようとする。啓子から背を向けられ、結局殺されるが、学生時代の友人が弔い合戦をしてくれた。

安川は熊本県水俣市の湯ノ見温泉をベースに鹿児島や宮崎の観光地を遊んで回るのだが、なぜか鉄道乗車としては書かれていない。ただ、霧島神宮から湯ノ見へ帰る時に列車に乗った。現在の鉄道地図を見れば、日豊線で鹿児島中央まで行き、鹿児島新幹線で新水俣まで乗り継いだということになる。だが、当時は鹿児島県北部を貫いて水俣へ抜けるルート（肥薩、山野線）もあり、判断が難しい。最低、霧島神宮―隼人15・3^{キロ}は乗ったと言える。

東京に戻った後、安川は銀行と交渉する金融業者に助けを求め、東海道線を下る。それに合流するため、啓子が町田（当時は原町田）から横浜へ向かった。横浜線の町田―東神奈川22・9^{キロ}は彼女が一番乗りした。



見えて来た邪馬台国

今でも、乗り鉄問題として辛うじて成り立つと思うのだが、東京から北陸へ行く場合、高崎経由の信越回り、東海道線の米原乗り換えのいずれを選択するか。昭和三〇年代においては、加賀温泉郷あたりが、どちらから行ってもほぼ同距離だった。

金沢が舞台の『ゼロの焦点』で板根禎子が入信越回りをするのは当然として、『砂の器』の今西刑事は、和賀英良の出生捜査のため、米原回りで大聖寺に降り、山中温泉へ向かった。『けものみち』(62年1月8日) 63年12月30日、週刊新潮に登場する久恒刑事は、金沢の先の能美根上から大聖寺までを初乗りする。北陸線は全線踏破され、清張世界の鉄道地図は密度が高くなってきた。

——高級連れ込み旅館の女中成沢民子は、一流ホテル支配人の小滝章二郎の紹介で政界の黒幕、鬼頭洪太の愛人になる。寝たきりの夫と手を切ることが条件なので、家に放火して殺す。不審を持った警視庁刑事の久恒が民子につきまとう。民子は鬼頭の力とその手下の無法ぶりを見る。だが、鬼頭が死ぬと裏の世界でも権力闘争があり、民子も含めて手下たちは死に追い込まれる。小滝は上手く立ち回る——

久恒は鬼頭の力で辞めさせられた総合高速路面公団総裁の愛人殺害事件を追って片山津温泉や芦原温泉へ行く。上野から急行「白山」に乗り、動橋^{いぶりはし}まで行った、と書かれている。だが、三〇年代後半、「白山」は午前9時台発である。しかも、金沢着が日暮れており、そこから乗りかえると効率が悪い。その後の行動も併せ読むと、『ゼロの焦点』に再々出て来た夜行の「北陸」が自然である。

『ゼロの焦点』で室田佐知子が立ち回った能美根上から動橋までの

16・5^キが久恒の一番乗りである。さらに、芦原温泉に向かうため、動橋—大聖寺7・3^キに初乗りする。

米原に抜けて、東海道線で帰京するのだが、鬼刑事が車窓に旅情を感じる一瞬がある。

《ようやく熱海^{あたみ}を過ぎた。日が昏れて熱海の街のネオンが下に輝いている。久恒は遠い旅に出ると、いつもこの辺から東京に帰ったという気がしてくる》

人が旅から帰る時、「戻って来た」と感じるポイントがそれぞれにあるのではないか。久恒は捜査の矛先を鬼頭に向けたため、警視庁内で担当を替えられ、さらには微罪を理由に免職される。新聞社にネタを売り込むが、そこにも手が回っていたのか、相手にされず、やがて殺される。個人が組織に立ち向かう時、いかに無力かを感じさせる。

『陸行水行』(63年11月25日) 64年1月6日、週刊文春は、タイトルからも邪馬台国ものと想起できる。四国に住んで邪馬台国研究にのめり込んだ浜中浩三が詐欺まがいのやり方でマニアから研究費を集め、魏志倭人伝の跡をたどるうち、水難で死ぬ。後年古代史で大胆な説を披露する清張の構想のユニークさが分かる。

浜中は四国の八幡浜から豊後水道を別府に渡り、別府から日豊線で北上し豊前善光寺まで来た。大分交通豊州線に乗り換え、豊前四日市で降りて、バスで安心院へたどり着いた。そこで会った大学講師に自説を吹き込む。豊前善光寺—豊前四日市4・1^キが初登場する。廃線が53年と早く、作品の舞台設定時期がよく分からない。

金集め行脚では中国地方を歩くのだが、岡山から伯備線に乗って鳥取県に入ったという記述がある。米子まで乗ったと見られるが、新見ま

では『影』の笠間久一郎が乗ったばかりだ。備中神代―生山間は『父系の指』の私が走破している。浜中の初乗りは、新見―備前神代6・4^{キロ}と生山―伯耆大山43^{キロ}と認定できる。

文壇デビューから12年、当代随一の流行作家となった清張は、自伝『平生の記』を書く。63年8月から65年1月まで文藝に寄せる。フィクションに出てこない乗り鉄が1つある。48年の1月、雪の比叡山に八瀬側から登った。京福電鉄鋼索線のケーブル八瀬―ケーブル比叡1・3^{キロ}である。他に乗客はいなかったと書く。現在は冬季休業する。ロープ比叡―比叡山頂のロープウェイにも乗り継いだであろうが、触れていない。乗り鉄ではないが、朝鮮への出征の際は博多港から乗船した。釜山からの引き揚げ港は山口県の仙崎であった。

『潮れ谷』は64年1月―65年2月に小説新潮に載った。業界紙の記者大屋圭造は、自由化を前にした製糖業界の権益に食い込もうとするが、思惑外の展開に政治の世界の深淵を見る。同業他社のライバル的動きをする藤岡真佐子の経歴を調べようと、西武池袋線で練馬まで行く。『連環』の笹井誠一らが江古田―池袋に乗っており、江古田―練馬1・7^{キロ}が初乗りになる。

昭和史の裏面を抉り出す数々の問題提起をしてきた清張の妖剣というのか、怪奇なストーリーが展開されるのが『屈折回路』（63年3月―65年2月、文藝界）である。60年代初頭に北海道や九州で大流行したポリオをテーマにした。

――「私」の従兄弟、香取喜曾一は熊本県の衛生試験所の医師だったが、自殺した。北海道の産炭地夕張や大牟田の三井三池鉱で流行したボ

リオにアンチモラルな形でかわったのが原因らしい。流行は、旧日本軍や米国、三池闘争で組合を切り崩したい経営団体などの手によると考える。さらには製薬資本が薬を売りつけるために病気を流行させている、と信じる。「私」はノイローゼになる一方、喜曾一の妻江津子との愛憎に振り回される。その子を殺し、精神病者とされる――

自らの研究の結果を知ろうと、香取は北海道各地を回るが、「私」はその跡を追い、今は廃線となった鉄路に乗る。まず、函館線黒松内から寿都まで寿都鉄道16・5^{キロ}。噴火湾側と日本海側にあるニシン漁の街を結ぶ鉄道だったが、72年に廃線となった。続いて、函館線から別れて日本海側に至る岩内線の小沢―岩内14・9^{キロ}を走破した。同線も85年に姿を消した。

札幌から夕張に向かうため、いったん岩見沢まで北上した後、室蘭線で19・5^{キロ}南下、栗山で北海道炭礦汽船夕張鉄道に乗り換えた。どこまで乗ったか書かれていないが、行政機関の多い地区というので、終点の夕張本町まで30^{キロ}に一番乗りしたと認定する。駅はJR夕張駅より少し北側にあったらしい。同線は75年に廃線となった。

私は12年夏に夕張を訪ねた。本町界隈はほとんど無人の街並みだった。映画『幸せの黄色いハンカチ』で、高倉健が傷害致死か殺人を犯した場面のロケ地である飲み屋横丁を見たが、両側の家が倒れて来そうだった。炭鉱閉山のせいである。

清張の筆は活気があった時代を捉えている。

『丘陵の上には炭鉱特有の建物や、竪穴の櫓や、高い煙突が見えた。街は雑然としている。私が保健所を聞いて、その建物の前にたどり着いたとき、山の上から昼休みのサイレンが吼えた。』

地図6の番号対照表

	作品名	線区名	乗車駅	降車駅	キロ数
●1年	40 風の視線	奥羽	青森	川部	31.1
	風の視線	五能	川部	五所川原	21.5
	41 不安な演奏	紀勢	新宮	尾鷲	56.9
	不安な演奏	関西	名古屋	亀山	59.9
	不安な演奏	紀勢	亀山	尾鷲	123.3
	不安な演奏	身延	身延	沼久保	26.6
	不安な演奏	身延	富士宮	富士	10.7
●2年	42 蒼ざめた礼服	東北	神田	上野	2.3
	蒼ざめた礼服	東北(田端経由)	田端	上野	1.3
	蒼ざめた礼服	山手	田端	池袋	5.2
	蒼ざめた礼服	横須賀	鎌倉	横須賀	11.4
	43 連環	内房	五井	浜金谷	54.7
	44 時間の習俗	南武	川崎	立川	35.5
	時間の習俗	成田	成田	佐原	26.9
●3年	45 落差	土讃	琴平	高知	115.3
	落差	土讃	高知	窪川	72.1
	46 影	伯備	倉敷	新見	64.4
	影	姫新	新見	中国勝山	34.3
	47 人間水域	富良野	旭川	富良野	54.8
	人間水域	広尾	更別	帯広	35.4
	48 塗られた本	青梅	河辺	奥多摩	21.3
●4年	49 彩霧	日豊	霧島神宮	隼人	15.3
	彩霧	横浜	町田	東神奈川	22.9
	50 けものみち	北陸	能美根上	動橋	16.5
●5年	けものみち	北陸	動橋	大聖寺	7.3
	51 陸行水行	伯備	新見	備中神代	6.4
	陸行水行	伯備	生山	伯耆大山	4.3
●6年	52 屈折回路	岩内	小沢	岩内	14.9
	屈折回路	室蘭	岩見沢	栗山	19.5

街全体が三菱炭鉱の就業システムに支配されているようにみえた。炭鉱が昼休みになれば街の人も食卓を囲み、三時の短い休憩時間には商売を一休みするといった状態のようにみえた》

作品では朝一番に札幌を出て、昼前によく夕張に着いた。今は、南に向かい、南千歳から石勝線に入り、追分乗り換えで1時間半である。

走破区間は旧国鉄とJRが8809・6キロ、私鉄が987キロになった。

地図6(旧国鉄とJRの初乗り区間)を見ると、日本列島に血管が太く、かつ微細に通い始めた、と感じる。

地図6 第6章に登場した初乗り区間



第7章 新幹線旅情

(1965年5月～74年10月)

五輪のある街

64(昭和39)年、東京五輪が開催された。開会式があった10月10日の青空を記憶している日本人は最早少数派なのだろう。10月1日には東海道新幹線が営業を始めた。日本は変わった、と実感したことを思い出すが、松本清張の作品の中にも投影されている。

『草の印刻』は、64年5月16日から65年5月20日まで、読売新聞に連載された。

——松山地検杉江支部で火災が起き、当直事務官が死に、古い裁判記録の一部が焼けた。以前、信用金庫で強盗殺人事件が起きた際、容疑者として浮上しながら今は名前を変えて群馬選出の代議士となった佐々木信明が証拠隠滅のために放火を命じたのだった。支部長検事瀬川良一は、前橋地検に転勤した後も真相究明を目指す中、強殺事件当時の支部長の娘、大賀芽子の協力を得る。佐々木が絡む汚職事件の突破口にもするため、東京地検特捜部が乗り出す、政治的圧力でしぼむ。放火事件の際、最初は失火として処理した瀬川は検事を辞める——

杉江とは宇和島のことである。四国の西海岸の漁港と記述されている。火災の夜、宿直だった事務員の竹内平造は息抜きに出て、女たちに飲まされ、翌朝気づくと小洲にいた。大洲市のことに違いない。急いで杉江に帰る。予讃線の伊予大洲—宇和島48・1^{キロ}は初乗りである。瀬川は火災報告のため松山地検へ出張する。宇和島—松山間のうち、伊予大洲—松山55・1^{キロ}を一番乗りした。

帰途の風景が書かれている。

《落日の瀬戸内海は、油を浮かしたように重くどろりとなっている。瀬川は、町や村に遮られて断続する内海の夕風を窓から見ていた。島が黒く昏れて、家々の灯が輝いてくる。線路沿いの国道にはヘッドライトをつけたトラックが頻繁に通っていた。(略)》

海岸が無くなり、代りに黒い川が流れていた。肱川^{ひじ}だった》

伊予長浜前後の車窓なのだが、海岸線は瀬戸内海に沈む夕陽が美しい所である。ひなびた無人駅や菜の花畑が旅情をかきたてる。伊予長浜で左へ直角に曲がると、肘川河口近くで跳ね上げ式の赤い可動橋や小さな川舟を瞥見できる。

瀬川は2年ぶりに私用で東京に戻る。

《東京の街の様子が激しく変っている。道路が立派になって、大森から上馬^{かみうま}に向かう道が広くなり、いくつも立体交差のトンネルをくぐった。

街の様子が一変しているので見当がつかない。以前の建築物が建変ったりして、まるで新しい土地にやって来たようだった。僅かに立退きから取残された古い神社が目標になる程度で、四国に暮した年月の遅れが実感に滲みてくる。

しかし、母と兄夫婦がいる家の付近は昔のままだった。七号線から東に入ると、途端に昔のままの狭い路になり、商店とした家の通りがひしめいている。この辺はいつまで経っても忘れられたような地域だ》

環状7号線は、羽田空港と駒沢競技場や戸田漕艇場を結ぶ道路として五輪向けに整備された、と聞く。

瀬川は下北沢から井の頭線で吉祥寺へ行く。

《下北沢の駅は変っていなかったが、ホームが大きくなっている。この電車に乗って吉祥寺に行くのも久しぶりだったが、乗客の数もふくれている。窓から見ると、以前は田圃^{たんぼ}だった井ノ頭沿線がすっかり住宅地になり、ほとんど田圃が眼につかないくらいだった。吉祥寺駅で降りて関町行のバスに乗った。吉祥寺の街も見違えるように賑かになっている。前は駅前通りだけが商店街だったのに、現在はその横の公園通りが繁華街になっている》(注22)

下北沢の小田急線乗り場が地下に潜ることなど予想もつかなかった時代である。しかし、時代の変わり目が見事に描かれている。

『殺人行おくのほそ道』(64年7月6日〜65年8月23日、ヤングレディ)は、題名からすれば東北や北陸地方の初乗りが予感されるが、東京以西が登場する。

——倉田麻佐子は、義理の叔父芦名信雄と芭蕉の足跡を訪ねて東北旅行をした際、怪しげな男横山道太と顔を合わせる。信雄の妻で麻佐子の叔母隆子を昔レイプしていた男なのだが、叔母と姪は瓜二つなので、隆子の所在地を探し出し、昔のことをたねに隆子から金を脅しとる。洋装店を経営する隆子は金が続かなくなり、元大名の芦名家の山林を売ったり、高額な借金をしたりする。追い詰められて横山を殺害し、自らも命を絶つ——

芦名信雄は大分県長留の旧大名の子孫で、麻佐子と里帰りする。長留は架空の地名だが、阿蘇の噴煙やくじゅう連山が見える城址があるというので、竹田市以外に考えられない。寝台車に乗り、本線から支線に

乗り換え2時間かかったと記述されている。東京から大分まで乗り、豊肥線で豊後竹田へ来たと読み取る。大分までは『ひとり旅』の田部が乗っており、2人は豊肥線の大分―豊後竹田60^キに初乗りした。

帰りに阿蘇登山の観光をするため、長留から豊肥本線に乗った。阿蘇で下車するのが一般的だが、2つ手前の宮地で降りても見どころは多い。最低、豊後竹田―宮地34・6^キは乗ったと見る。

隆子は借金のため、京都の金貸しに会いに行く際、東京から京都までの513・6^キを東海道新幹線で行く。これが清張作品に初めて登場する真正銘の新幹線である。出発前、麻佐子とこんな会話を交わす。

《あなた、京都に行ってみない?》

「京都? あら、叔母さま、いらつしやるの?」

「用事があつて、明日の新幹線で行くつもりなの」

「いいわね、どのくらいお泊りになるの?」

「一泊で帰るの。少し忙しいけれど」

それまで、ビジネスにしても京都1泊旅行は忙しい。それが可能になったことを実感させるやりとりである。

芦名信雄は、隆子と別居して赤羽に住むようになった。麻佐子が訪ねて行く際、有楽町から乗り、赤羽行き電車に乗った。東北線の日暮里―赤羽間は、中長距離が尾久を回り、京浜東北線は田端や王子を走る。ようやく田端―赤羽6・1^キが初乗りに加算される。

事件の発端は昔の強姦事件にあることが見えてくる中、麻佐子は隆子の娘時代を知る仙台の婦人を迎えに行くため、地下鉄銀座線の銀座―上野4・9^キに乗る。ここも一番乗りであった。

『すずらん』(65年11月、小説新潮)は、アリバイとトリック、殺す女と

のアベック旅など初期ミステリーが揃い踏みしたかのように、内容豊富である。北海道に咲くスズランが八ヶ岳山麓でも花開くが、知る人はほとんどいないという点が面白さの源泉になっている。

——画家の秋村平吉は、世話になってる画廊の主人の愛人砂原矢須子との関係がばれることを恐れ、女の殺害を計画する。まず、矢須子が北海道旅行すると、周囲に語らせる。彼女には長野の信越線沿いにある信州の戸倉温泉に行くと言いが、「人目につかないように」と言って中央、小海線回りにして清里で降りる。スズランの群生の中で砂原矢須子を彼女のカメラで撮った後、殺害する——

別の愛人に北海道へ行かせ、撮ったフィルムを札幌の写真屋に預ける。その間、秋村は東京にいる。矢須子とスズランの写真を見た警察は、一緒に北海道旅行した男がいると見て、捜査が難航する。彼女が小淵沢で乗り換えた際、身に着けていた新趣向のブローチが駅に勤める女性の印象に残った。北海道に行つてなかった、と分かる。

秋村は殺害後、野宿して清里から小諸へ出た。小海線は、『眼の壁』の萩崎竜雄が小淵沢——佐久海ノ口に乗っており、佐久海ノ口——小諸⁵が一番乗りになる。

名古屋——東京間の選択

『統監』(66年3月、別冊文藝春秋)は、初代の朝鮮統監だった伊藤博文のソウルでの女中兼妾という立場の新橋芸者、光香から見た人間像である。日露戦争後の圧倒的な軍事力を背にして、伊藤は朝鮮王朝の外交、内政の権限を奪おうと策略をめぐらす。といっても交渉というのではなく、脅しと暴力の連続である。

光香は伊藤より1日早く新橋を出発、下関、釜山、ソウルへと乗り継ぐ。当時の東海道線の箱根越えは現在の御殿場線である。『黄色い風土』の若宮四郎が国府津——駿河小山間を乗っており、駿河小山——沼津⁶を彼女が一番乗りした。京釜線の釜山——ソウルは『任務』で出て来ている。ただし、光香は韓国の車窓を語る。

『汽車の窓から見える沿道の景色は日本で聞いて想像していたよりはきれいでした。ポプラ並木道はうつくしく、梢の上を飛ぶ胸毛の白い朝鮮鵲^{かさぎ}もはじめて見ました。でも、山という山はほとんど禿げて白い岩か赤土があらわれ、藁^{わら}ぶき屋根の百姓家はまるで腐った茸のようでした。ところどころの丘には土饅頭のような墓も見えます』

印象的なのは、光香は伊藤が好きではなく、日本にしたたかに抵抗する朝鮮の人々に共感と同情を寄せていることである。昨今、日韓の歴史認識の違いが越えられない壁のように言われるが、権力側が支配される側かという視点で見れば、庶民同士の連帯は可能である。それを清張は説いている、と思いたい。

2人の古美術商が、関西の成金経営者に贋作を売りつける競争を繰り広げる『雑草群落』(65年6月18日〜66年7月7日、東京新聞)は、清張の筆が冴える分野である。

——日本橋で「草美堂」を経営する高尾庄平は、ライバルの「駒井竜古堂」の駒井孝吉と競り合う形で、大阪の大薬品メーカー明和製薬を一代で築き、肉筆浮世絵をほしがっている村上為蔵に取り入ろうとする。両者とも同じ貧乏画家に写楽と春信の贋作を作らせ、国立総合美術館日本画課長の鑑定まで付ける。一方で、「あちらのは贋作です」と足を引つ

張り合う――

高尾は大阪府堺市の工場にいる村上に会おうと、大阪から南海電鉄に乗った。堺で降りたとあり、難波―堺9・8^キを一番乗りしたと認定する。作中だけの架空の建物であろうが、景色が思い浮かぶ。

《堺駅で降りると、タクシーを走らせた。東の仁徳陵を過ぎてしばらくすると、なだらかな百舌鳥の丘陵地帯に立つ真っ白い大病院のような明和製薬堺工場が近づいてきた》

飛驒高山がようやくという感じで登場するのが『葦の浮船』（66年1月～67年4月、婦人倶楽部）である。

――私立大学の国史科助教折戸二郎は、学業に秀で、プレイボーイでもある。同僚の小関久雄は対照的に野暮ったい男だ。金沢であった学会の後、折戸は人妻の笠原幸子と京都へ旅行に行き、小関は飛驒高山へ研究のために行き、近村達子と知り合う。達子は小関に魅かれるが、折戸が興味を示し、策を弄して接近する。幸子は自殺し、その夫は折戸に切りつけようとするが、小関がかばって負傷する。しかし、折戸は教授に昇進し、小関は山陰の大学に左遷させられる――

折戸は『落差』の島地章吾に似て、清張はこれでもかという感じで悪徳学者として描く。

小関は高山で途中下車するが、高山線の富山―岐阜225・8^キは彼に初踏破される。面白いのは、小関と達子は高山―名古屋間を同乗して東京に向かうが、達子は新幹線に乗るのに小関は在来線で帰ることだ。当時はまだ九州、大阪発の急行群が在来線を多数走っており、新幹線は贅沢だという感覚が残っていたのであろう。達子は、新幹線に乗ろうという誘いを断る小関の唐変木ぶりにあきれれる。

67年9月の時刻表によれば、高山線の列車は、高山発8時20分の「ひだ2号」と思われ、名古屋着は12時0分。達子は急げば12時8分の「ひかり20号」に間に合い、東京着が14時10分となる。小関は西鹿兒島発の急行「高千穂」に乗り、東京着が17時33分となる。小関の乗り方も今となっては魅力的である。

清張は、高山から岐阜に向かう際の車窓の大事なポイントに触れている。《線路の横に溪流が流れていた。富山からずつつづいてきた川だったが、気づいてみると、川の流れの方向が変わっていた。列車はいつの間にか分水嶺を越えていた。水は大小の岩を噛んで白い泡を湧かせていた》

飛驒高山の街中は、飛驒川（木曽川の上流）が流れているというイメージがあるが、実際は神通川の上流の宮川であり、日本海に注ぐ。高山と下呂温泉の間に分水嶺がある。それを知っている乗客は少ないように思える。私自身がそうだった。

『二重葉脈』（66年3月11日～67年4月17日、読売新聞）は、乗り鉄チェックが煩わしい作品である。弱電メーカーのイコマ電器は偽装倒産し、社長の生駒伝治、専務の前岡、常務の杉村らは売掛金などを着服し、山分けの相談を大阪府下でする。一方、椅子取りゲームのように相手を殺害して行く。アリバイを聞かれると、もつともらしい鉄道旅を言うのだが、虚偽まじりである。本当の鉄旅はこれだった、という警察の見立てが正しかったのかの説明が不十分などところがあるので確実なところだけを拾う。刑事も容疑者も新幹線利用が増えるのだが、意表を突くような在来線利用もある。

3人は大阪の東郊、古市で落ち合うのだが、杉村は京都まで新幹線で行き、いったん奈良を回り、近鉄に乗った後、大阪の天王寺に現れる。大阪環状線の鶴橋―天王寺³に乘ったことは認定可能である。杉村はほどなく岡山県で殺害される。前岡は再び大阪に行く際、北陸へ旅するといつて急行「能登」に乗るが、併結された急行「大和」に乗り移り、関西本線を西行して天王寺に現れる。亀山―木津⁶⁷、奈良―天王寺^{37・5}を初乗りに加える。

「大和」はちよつと変わった列車で、67年9月の時刻表によれば、東京を22時35分に発車して、名古屋で「能登」と別れ、伊勢路、大和路を経て翌朝9時8分には天王寺、9時17分にJR難波(当時は湊町)に着く。東京駅で5分後に発車する急行「銀河」の大阪着が9時15分である。「銀河」に乗ったような目撃証言を作為すれば、大阪のミナミで犯罪を起こすのに少々時間が稼げた。72年、新幹線利用が増える中、「大和」は姿を消した。

前岡は古市の古墳で殺害されて見つかる。杉村事件を追う警視庁の神野、塚田の2刑事は何度か東京―大阪を新幹線で往復する。最初は前岡の遺体発見の報を受けて行った。京都までは「殺人行おくのほそ道」の芦名隆子が乗っており、京都―新大阪³⁹を2刑事が乗った。2人は大阪府警本部に立ち寄った後、市電で阿部野橋に向かう。この風景イメージが私には描けない。彼らは近鉄南大阪線で、古市に向かう。18³が一番乗りにカウントされる。

生駒もまた河内長野で殺害される。下請け業者に恨みを買っていたうえ、下請け業者たちも生駒らの金の分捕り合戦を始めたのである。乗り鉄チェック上、難解なのは生駒殺しの男が果たして昼近い時間から半日で東京と往復できるかである。刑事たちは飛行機、タクシー、地下

鉄、近鉄を総動員して可能だとする行程を想定するのだが、相当無理でもある。そうしなければ犯罪が成り立たないのだが、関係者がすべて死んだ。ここではチェックを外したい。

新井白石の幻の著が現存しているという噂が引き起こす殺人事件を描いた『史疑』(67年5月、小説新潮)は、歴史ものの要素もある。

――福井県の山奥に住む蔵書マニアが、近代史学の祖と言われる新井白石の記念碑的な幻の書「史疑」を持つているという噂が広がり、新進の歴史学者比良直樹が見に行くが、断られる。盗み見ようとして見つかかり、殺害する。人目を避けて県境越えして岐阜県側に行くが、途中で地元の女と契る。7年後、その時の子供が比良そっくりに成長し、隠していた悪事がばれる――

比良は夜行で福井に行くが、東京発としており、米原回りのような印象を受ける。福井着後、私鉄に乗り換えて田舎の終着駅で降り、さらに山間部へバスに乗った。福井駅で乗り換えて山に向かう私鉄はえちぜん鉄道勝山永平寺線しかない(掲載時は京福電鉄越前本線)。九頭竜川に沿いにのんびりとした谷間を勝山まで27・8⁸を上るのだが、当時は京福大野までさらに8・5⁵延びており、比良はそれぞれを初乗りした。殺害後、人目を避けたい比良は、夜通し歩いて岐阜県境を山越えする。美濃側の鉄道で名古屋に出るといふ目論見であった。昔の越美南線、今の長良川鉄道に乗ったと見る。北端の駅は北濃だが、福井から来たとすれば美濃白鳥の方が自然なので、美濃白鳥―美濃太田^{66・1}に乗ったと認定する。水量が豊かで、かつ流れが速い、美しい川に沿って走る。『年下の男』(67年6月、小説新潮)では、35歳の新聞社の電話交換手大石加津子が年下の男と婚約するが、別に恋人がいると知って高尾山の

崖から突き落とす。加津子は写真を撮ってあげると言って、男を崖に立たせるのだが、そのカメラを東京駅で捨てたつもりなのに常習の置引き犯に拾われ、アシが付く。

加津子は高尾山の麓まで電車で2時間乗った、と書かれている。新宿からひたすら京王線に乗って来たとも考えられるが、他の鉄道との乗り換えが多い線である。最低京王高尾線の高尾―高尾山口1・7^キには乗ったと判断する。高尾登山電鉄清滝―高尾山1^キにも乗った。

『古本』(67年7月、小説新潮)の前半の舞台は、広島県東部の山間部に位置する府中市である。人気凋落した作家長府敦治は講演旅行先の古本屋で室町幕府の大奥ものを見つけ、それをネタにベストセラーを書く。盗作をかぎつけた、原作者の孫と名乗る男に恐喝される。東京西郊の自宅近くにある鉄橋を近道する恐喝男に列車通過時刻を偽り、死亡させるが、警察が事件として捜査を始める。

福塩線の福山―府中23・6^キは長府の一番乗りになる。芦田川と里山が見える昔懐かしい車窓が広がる。

経度と緯度

これらの作品を見て思うのは、清張は小説の舞台として日本中の土地を自在に取り出していることである。奇術師のポケットを思わせる。『脊梁』(63年)の冒頭でこんなことを書いている。

《ほとんどの小説には背景になる土地が指定されてある。東京だったり、地方だったり、小都市だったり、山村、海浜だったりする。しかし、これは雰囲気を出す以外にあまり意味がない場合が多い。どこにでも起りうる人生の話には、舞台の指定を必ずしも必要とし

ないからである。(略)東京××区にしてもよいし、青森県××郡××村にしても一向に差し支えない。

しかし、ぼんやりした具体的なイメージを読者に与える上から、とにかく東京の或る郊外の新興地としておく。都心から西北に電車に乗って約四十分、付近は、十年前までは農村とまばらな市街地とであつたが、近年、工場の誘致と住宅地の激増で発展したところである。場所を描くことなど大した問題ではないといながら、簡にして要を得た書き方をする。池袋発の東武か西武のイメージが広がってくる。『Dの複合』(65年10月―68年3月、宝石)は乗り鉄の場面が多く、浦島や羽衣伝説が出て来る。

――作家の伊瀬忠隆は「僻地に伝説をさぐる旅」を雑誌連載することになり、編集者の浜中三夫とともに東は成田、館山から西は鳥取まであちこちを旅行する。いずれも東経135度か北緯35度線上にあり、その先々で事件めいたものにぶつかる。最後は殺人事件に巻き込まれる。かつて、東経135度上にある紀淡海峡で船舶火災と殺人事件があつた。冤罪で服役した父の復讐を果たそうとする浜中が仕組んだものだった――

最初の旅は空路関西入りし、京都から列車に乗る。山陰線で綾部まで行つて乗り換え、西舞鶴、天橋立を経由し、夕日ヶ浦木津温泉(作品中は丹後木津)で降りる。奇妙な大回りであるが、行程を350^キにしたい意図の反映であろう。京都―綾部76・2^キが初乗り。舞鶴線の綾部―西舞鶴19・5^キも初登場する。宮津線(現在は3セクの京都丹後鉄道宮津線)の西舞鶴―夕日ヶ浦木津温泉61・1^キも2人が一番乗りした。

木津温泉で泊まった翌日、タクシーで城崎に出て和田山経由で姫路に抜けた。播但線の和田山―姫路65・7^キが初乗りになる。明石で泊ま

り、淡路島を通過して海路和歌山に上陸する。4日目、和歌山市から南海電鉄で加太へ行く。南海本線と歌山市―紀ノ川2・6^キ、加太線の紀ノ川―加太9・6^キが初乗りである。いったん和歌山市に戻り、南海本線で大阪へ戻る。加太線との分岐点紀ノ川―堺51・8^キの一番乗りも果たす。その先は、『雑草群落』で登場した。

2度目の初乗り旅は、補陀落国渡海説話に題材を求め、房総半島南部へ行く。内房線は鋸山の麓の浜金谷まで『連環』の笹井誠一が乗っている。その先、九重までの27・7^キが初登場になる。

この辺りから殺人事件が起きたり、不審な人物が相次いで登場したりする。伊瀬たちはその1人を訪ねて成田へ行く。京成電鉄本線の京成上野から京成成田まで61・2^キに初乗りする。人探しの旅は鳥取県の三朝温泉にも及ぶ。その際、京都から山陰線で倉吉(文中では上井)へ急行「白兎」で行く。綾部―福知山12・3^キは、1回目の旅行と『砂の罫』の今西の亀嵩行きのいずれからも漏れ落ちた未乗区間であり、ようやく解消された。この旅行では、京都駅前から三条の飲み屋街まで路面電車に乗った。

作品は、伝承説話の歴史的解説に行数を結構割いており、風景描写は少ない感じもする。山陰線の上り線の車窓を抑制的に書いている部分は印象に残る。

《左手に青く澄んだ日本海がひらけていた。冬陽^{ふゆび}をうけた波打際^{なみうちぎわ}の水がきれいな小石を透かして見せている。陸地になると、枯れた畑と裸の梢^{こずえ}の林だった。沿線はそれを交互に繰り返した》

海岸線の美しい線区と言えば、第1に五能線(青森、秋田)を挙げる鉄道ファンが多いだろう。山陰線もまた海岸線をよく見せてくれる。

私立大学の理事長ポストを巡る争いをテーマにした『混声の森』は67

年8月25日から68年9月2日まで、信濃毎日新聞夕刊に連載された。専務理事の石田謙一は、現理事長大島圭蔵を失脚させるため、学生たちの京都旅行に大島を愛人と同行させ、醜聞に仕立てる。理事長は京都から奈良、伊勢と泊まり歩き、最後は鳥羽のホテルへ行く。清張作品に出て来る伊勢・鳥羽方面の鉄道利用は近鉄が圧倒的に多いのだが、彼らは参宮線の鳥羽―多気29・1^キに乗り、紀勢線、関西線で名古屋に出て帰京する。効率の悪い行程である。

石田自身も愛人を複数持ち、不倫旅行で事故に遭った女を見捨てた。夫婦の仲の悪さから高校生の息子がぐれて、盛り場でチンピラのようなワルをする。浅草まで行って身柄を受け取り、地下鉄で渋谷まで一緒に帰る。銀座線の浅草―上野2・2^キは初登場である。苦勞の末、理事長を追いつめたが、傀儡のはずだった学長から失脚させられた。

『通過する客』(69年3月、別冊文藝春秋)は、再婚相手に少しも愛情が湧かない山根波津子の複雑な心理を描く。英語力を活かして通訳ガイド役を引き受けた際、米国ボストンの上流婦人を日光や京都に連れて行く。駄々をこねたり、払うべき支払いを拒否したりする扱いにくい客の上、詐欺師のような米國青年に好意を抱き、金をだまし取られる。倦怠期で刺激を求めていることを知り、わが身を思う。

日光へはロマンスカーで行くが、下今市で降りた。帰りは上野行きの電車というので、旧国鉄と見る。乗車地は今市と想定する。日光線は今市―宇都宮33・9^キを一番乗りとみなすことができる。

『セント・アンドリュースの事件』(69年10月、週刊朝日カラー別冊)は、スコットランドにあるゴルフの聖地を舞台にしたミステリーである。

カウント対象外なのだが、英国鉄道をトリックに使っており、紹介したい。

——矢部製作所専務矢部開作、同社顧問弁護士庄司正雄、印刷会社専務鈴木吉蔵、矢部の愛人で銀座のバーのマダム山宮篤子の4人は、ゴルフの聖地でプレーをする。矢部は篤子を巡って庄司と争っていたうえ、社の経理問題で弱みを握られていたので庄司を殺害する計画を立てた。4人を不審なアジア人が狙っているという状況を作り、彼が変装してアジア人になったが、気づかれた庄司に逆に殺される——

4人はロンドンまでそれぞれの航空便で来て、エンジンバラまでは一緒の便に乗った。エンジンバラからアバディーン行き列車の1等車に乗り換え、ルーカーズ・ジャンクション駅で降り、昼から1ラウンドした。矢部は翌日、ロンドンで仕事があるため、17時39分発エンジンバラ行きに乗った。ところが、行方不明になり、翌朝ゴルフ場近くの断崖下で遺体となって発見された。矢部はエンジンバラに着く前のキューコルディ駅で18時21分に降り、18時32分発でルーカーズ・ジャンクションに引き返す。その際、変装して自らの足跡を消した。

清張は日本でと同様に、自在の鉄道トリックを展開する。もう1点言えば、難コースの描き方も細かで、ゴルフファンを喜ばせただろう。

鉄道乗車のある作品は70年も相次ぐのだが、未乗区間が少なくなるので、初乗りは71年5月の小説現代で発表された『留守宅の事件』になる。

——都内西新井に住む自動車セールスマン栗山敏夫が、足掛け10日間に及ぶ東北方面の出張から帰って来たら、妻宗子が殺害されていた、と届ける。実は保険金詐欺のため、妻を東北に呼びつけて絞殺した。遺体の傷みが遅い真冬だったので、自動車のトランクに入れて少しずつ南下させ、自宅で殺されたように見せかける。栗山自身は東北で多くの

人に会い、東京へ戻るのとは不可能というアリバイ作りをする——

栗山は1〜3日目は仙台や一関で仕事をし、4日目に仙台から山形県入りし天童に泊まる。仙山線は、『山峡の章』の朝川昌子が仙台―作並間に乗っているが、作並―羽前千歳29・3^キは、栗山が初乗りした。6日目にサクランボで有名な寒河江まで往復して、蔵王温泉に泊まる。左沢線の北山形―寒河江15・3^キもまた一番乗りである。最上川を渡り、蔵王連峰や月山が見える。

7日目に仙台に戻って宗子呼び出し、名取市付近で殺害、盗んだ車のトランクに入れた。8日目に盗難車で福島市へ移り、仕事の合間に郡山まで運び、再び列車で福島市へ戻り、知人宅に泊まる。9日目、列車で郡山へ行き、盗難車で西那須野まで行き、仙台まで列車で戻る。10日目は東京へ戻る。翌11日目に東京から自分の車で西那須野へ行き、妻の遺体を載せ換えて、自宅に戻り、寝間着に着せ替えて物置に入れた。12日目に警察へ届けた。(表4参照)

宗子が仙台へ着ていったスーツは栗山が廃棄したが、それをもらうつもりだった宗子の妹が訝しんで犯行がばれるきっかけになる。

当時、上野―仙台間は特急で4時間半に短縮されていた。だが、日中に仕事先の人間に合ったり、夜に食事をしたりすると、1日で東京に帰るとは思われないし、実際不可能でもあった。だが、小刻みに動き、福島、栃木県境まで南下し、また仙台に戻るといふのは意表をつくトリックである。鬼ごっここの「だるまさんが転んだ」のミステリー版と言える。

今、東北新幹線は東京―仙台間が最速で約1時間半。この作品の犯人が申し立てた不在証明は相手にされない。

表4 栗山敏夫のアリバイ説明と実際の動き

月日	栗山の申し立て	実際の動き
2月1日 (7日目)	? 蔵王温泉から山形駅へ 12時42分 山形発仙山線急行 13時49分 仙台着 旅館投宿	? 蔵王温泉から山形駅へ 12時42分 山形発仙山線急行 13時49分 仙台着 旅館投宿。自動車窃盗 18時58分 「ひばり4号」で来た妻と落ち合う 名取市付近まで自動車で行き妻殺害
2月2日 (8日目)	11時11分 仙台から特急「やまびこ」乗車 12時09分 福島着。証言が残るように仕事をする 20時30分 知人宅へ行き宿泊	9時00分 旅館を出発 12時00分 遺体を載せた自動車福島へ 仕事の合間に車を郡山へ運ぶ 18時41分 郡山発急行 19時21分 福島着。知人宅へ行き宿泊
2月3日 (9日目)	10時21分 福島発急行 11時50分 仙台着 松島観光をして仙台泊	8時27分 福島発特急 9時01分 郡山着 遺体乗せた車を西那須野近辺に隠す 11時35分 急行「まつしま1号」で西那須野発 14時31分 仙台着
2月4日 (10日目)	12時20分 仙台発特急 16時18分 上野着	申し立て通り
2月5日 (11日目)	宇都宮辺りで外回り	自分の車で西那須野近辺に行く 遺体を載せ換えて、自宅小屋に放置
2月6日 (12日目)	妻の殺害死体を発見と警察に届ける	申し立て通り

?は、時刻が特定できない部分

不条理への復讐

戦争によって生業を奪われ、肉親を失うことがどんなに辛い。翻弄される庶民の姿をミステリーの中で描いたのが『遠い接近』(71年8月6日)72年4月21日、週刊朝日)である。自伝『平生の記』と重なる話が多い。

——戦時中、自営の色版画工の山尾信治は仕事に追われ、近所である軍事教練に出なかった。それが役所の兵事担当に不熱心とされ、召集にかかる。古兵の安川哲次一等兵にいじめられ、朝鮮にまで送られた。妻、両親、二人の息子は疎開先の広島市で原爆に遭って死んだ。帰国後、兵事係長だった河島佐一郎と安川に復讐を誓う。四日市に近い鈴鹿山中に旧軍の銀が隠されているという情報を利用して、安川を転落死させ、さらに河島を首吊り自殺にみせかけて殺す。だが、雑誌の原稿だとして河島に書かせた反省の手記を遺書に改ざんしたところ、手記は妻が清書していたことが分かり、トリックは崩壊する——

敗色濃くなる中、福岡から玄界灘を渡り、ソウル郊外に至る様子が書かれている。

『福岡の聯隊を完全武装で出発したのは未明であった。銃と背囊(はいのう)に冷たい雨が降りそそいでいた。港までの沿道には憲兵がところどころに立った。うす暗い道を市民が三々五々にかたまり、隊列に沿って歩いていた。女が兵隊に近づいて話す。憲兵が追い払う。それでも、家族は雨に打たれて執拗についてきた。妻は泣いていた。出動は秘密にされているのに、この出発時間を家族に知らせる兵隊がいたのだった』

『釜山(釜山)の港からすぐに汽車に乗った。見送りの群衆もなく、万歳の声もなかった。ホームは憲兵と駅員の姿だけで、乗車と同時に窓に

鑛戸^{ようじ}が下ろされた。行先が京城^{けいじょう}らしいとは皆の話でわかったが、どこをどう走っているのかわからなかった》

寂しいとも不安だとも言えない兵隊たち。清張はそうした心情をくどくど書かないが、怒りさえ伝わってくる。出港の部分は『平生の記』とほぼ同内容である。

山尾はまず安川と国鉄、近鉄を乗り継ぎ、四日市まで行き、山中の崖から突き落として殺害、亀山に出る。翌日、河島と四日市で落ち合い、三重電鉄で湯ノ山温泉へ行く。今は近鉄湯の山線となっており、近鉄四日市―湯の山温泉15・4^キが初乗りである。そこから山に入った。安川は新宿周辺の国鉄や西武、都電に再々乗ったが、既乗区間ばかりだ。

『山の骨』(72年5月19日～7月14日、週刊朝日)は、高級官僚を勤め上げた谷井秀雄の悲劇である。優秀な息子と娘に恵まれたが、養子に出した次男の守山政治だけは悪に染まった。知人が扱いに困っていた女をあっさりと殺害し、八王子近くの山中に埋める。が、開発で遺体が発覚されそうになったため、一家の恥をさらすまいとする秀雄がもつと山奥の檜原村の山中に埋めなおす。次男の行く末を悲観した秀雄は政治を殺害し、白骨化した後東京西郊に埋める。長い年月の後、二つの死体はやがて見つかる。別々の事件と思われたが、一本につながってくる。

谷井は、檜原村山中で女の遺骨を埋めなおした際、五日市線の終点、武蔵五日市から立川に戻る。武蔵五日市―拝島11・1^キの一番乗りになる。谷井は政治を大田区洗足の長男宅で殺し、白骨化した後に多摩丘陵へ捨てに行く。行きはタクシーだったが、帰りは聖蹟桜ヶ丘―府中間で京王線に乗る。4・4^キが初乗りにカウントされる。

政治の骨は、以前谷井の娘夫婦の家に届けられた洋服生地^{たんぽ}の包み紙

の中にあつた。警視庁は当時の女中で、今は宮城県石巻市の船具商に嫁入りした女に事情を聞くため刑事2人を上野発夜行列車で派遣した。仙石線の仙台―石巻48・5^キに乗ったと判断する。松島の島々が見える線区である。震災後、一部区間が長らく不通になった。

『遠い接近』が清張の戦時下の投影とするならば、『表象詩人』(72年7月21日～11月3日、週刊朝日)は昭和時代初期、清張の20歳前後の思い出の反映である。文学青年たちとの付き合いが、甘酸っぱいトーンで書かれている。

――昭和初期、小倉市で私鉄会社の駅員であつた三輪には、製陶会社に勤めて、詩作をする久間英太郎、秋島明治という仲間がいた。製陶会社の高級技術者深田弘雄の家がサロン風であり、若い3人は深田の妻明子に憧憬や思慕を抱いていた。三輪は、久間と明子の間に関係があると想像する。盆踊りの夜、帰宅途中の明子が殺害され、久間と秋島に容疑がかかるが、迷宮入りする。約40年後、三輪は秋島を宮崎県に訪ね、昔話をする中、明子と関係があつたのは秋島と思い当たる。久間がそれを深田に伝え、夫が妻を殺したという構図も見えて来た――

製陶会社とは今のTOTOのことである。三輪の私鉄会社は、現JR日田彦山線だ。小倉鉄道が経営していた時代もあつたが、大正期には国鉄になつている。筑豊炭田の主要都市田川と北九州工業地帯を結んでおり、貨物輸送上重要であつた。清張はこんな風景を描いた。

《この鉄道の沿線に炭坑地帯があり、客車よりも炭車が多く、そのために経営がどうにかやっていたいける会社であつた。わたしは、駅の出札や改札係をしていたのだった。どの駅にも田圃^{たんぼ}を背景にして

必ず真つ黒な山の貯炭場があり、待避線には炭車の長い黒い列が捨てられたように置いてあった」

初乗りは彼らが老境を迎えてからのことだ。三輪は、宮崎県日町の議員になっている秋島を訪ねる。日之影町と見られる。小倉から急行列車で6時間、Nという駅から支線に乗って2時間と書く。Nは延岡、支線は高千穂線と断定できる。降りたのは5つ目の駅で、もう少し行けば裏阿蘇という表現も出て来る。昭和一〇年代であれば、川水流という旧北方町の中心地域になる。

日豊線の大分までは、『ひとり旅』の田部正一や『殺人行おくのほそ道』の倉田麻佐子が乗っており、大分―延岡123・3^キが初乗りである。高千穂線(08年廃止)の延岡―川水流17・1^キも三輪が一番乗りした。『告訴せず』は73年1月12日から11月30日まで週刊朝日に載った。この年、石油ショックが起き、企業が売り惜しみしたり、投機に走ったりしてモラルが問われた。高度成長時代の果てにたどり着く日本人像を予言していたかのような内容である。

木谷省吾は、代議士をしている義弟の選挙運動資金を持ち逃げして、小豆相場に投資し、大儲けする。資金は「実弾用」に派閥の親分からもらった選挙違反用であり、告訴できない。木谷は水上温泉の女中お篠を愛人にして福島県白河市でモーター業を始める。お篠は別の男に通じており、木谷の預金口座をだまし取る。義弟らの追及の手を逃れるため、偽名を使っている木谷は本名を明かして告訴することができず、自殺する。

初乗りは、2人が群馬県の八塩温泉に行った帰り、列車で帰るため八高線沿いの藤岡に出る。木谷は上野、お篠は水上が行き先なので、群馬―倉賀野7・3^キを2人で乗ったと見てよからう。

『黒の回廊』は、71年4月から74年5月までの文藝春秋社版「松本清張全集」の月報で続いた。欧州に行った女性ツアーの中でダブル殺人事件が起き、それを添乗員らが謎解きする。海外ツアーが盛んになる時期のタイムリーな作品である。

国内の乗り鉄はないが、英国のロンドン―エジンバラが夜行列車だった。途中駅としてドンキヤスターを挙げており、ペニン山脈の東麓を通ったと見る。スイスでは、ベルン―インターラーケンが列車旅。インターラーケンからユングフラウヨッホに登山電車で登り、グリーンデルワルトに降りた。今もアルプス観光の定番であろう。

東京駅の別れ

乗り鉄場面のある作品の3要素として、旅への誘い、男と女、ミステリーを繰り返して強調してきたが、『火の路』は古代史、大学の研究室の欺瞞に満ちたヒエラルヒーも加わり、重厚感のある作品である。73年6月16日から74年10月13日まで、朝日新聞に連載された。舞台は東京から西に向けて、長野、滋賀、奈良、京都、大阪、兵庫、愛媛、福岡、さらにはイランと大きなスケールである。先人たちの既乗線区が多いが、いい場面が多い。

――T大学史学科助手の高須通子は、奈良盆地の飛鳥・奈良時代の遺跡がベルシャ文明、ゾロアスター教の影響を受けているという仮説を深めるため、明日香村の酒船石などを調べる。カメラマンの坂根要助と知り合い、坂根は通子に魅かれる。奈良市の路上で起きた殺傷事件で、通子は海津信六を助ける。海津は元T大史学科助手で高須に学問上のアドバイスをする。前後して発掘物の贋作が出回っている騒ぎが起きたが、海津は贋作づくりにかかわっていた。海津の娘は父の不倫相手と

の間に生まれたことを知って自殺、海津は漏らした贗作仲間を殺し、自らも自殺する。大胆な説を唱える通子は研究室から疎まれ、四国の大学へ追い払われる――

初乗りチケットをする。通子は河内地方の遺跡見学を兼ねて海津を訪ねる。新幹線で大阪入りした後、阪和線で和泉府中まで乗る。天王寺―和泉府中20・9^キは初登場である。海津が不在だったので、いったん安福寺横穴群へ行き、近鉄の道明寺から河内長野へ移動する。道明寺―古市間は南大阪線で『二重葉脈』の警視庁刑事が乗っている。長野線の古市―河内長野12・5^キは通子の一番乗りとする。左手は葛城山や金剛山の麓であり、古代ロマンと大阪近郊の猥雑さが交じり、武蔵野の面影を探りたくなる東京近郊とは趣が異なる。そう思うのは無教養な私だからであり、清張の筆は格調高い。

《道明寺駅から古市駅を過ぎるまで、電車の両窓には人家や工場の建物の間に松林の繁る独立した丘が、なだらかな形でいくつも見えた。ほとんどが前方後円墳で、古市古墳群と呼ばれ、応神、仲哀、仁賢、安閑など天皇名でいわれる大きなものが多い。昔、付近に人家が少なく、この辺が原野や田園だったところは、陵墓の遠望は空にそびえる大きさだったにちがいないが、住宅や工場がたてこんだ今は、その頂上部をちらちらと見せているだけだった》

坂根は通子に依頼され、益田岩船の測量に行く。その時、近鉄南大阪線を踏破するのだが、古市―橿原神宮21・4^キを一番乗りする。通子は再び海津を訪ねる。1回目と経路は同じなのだろうが、新大阪から天王寺まで大阪市交通局の地下鉄御堂筋線で行ったと清張は書いた。11^キを踏破区間としてカウントする。

冒頭、早春の明日香村の風景が描かれる。

《ひろい丘陵にも田にもまだ冬の色が残っていたが、晴れた午後、かなり強くなってきた陽ざしにそれがぬくめられていた。田は鋤き返されたままの粘りのある黒い土を見せ、畑には短い麦が青色を伸ばしかけていた。(略)

梅だけは満開だった。農家の垣根の中にも、寺の塀の内側にもそれがある。くすんだ百姓家の屋根を背景にしてみると、枝に雪を置いたように見えるのだが、大和に多い白壁が後ろだと花の様子が分らない。げんに松林の中に咲いている一本の梅も、せっかくのことながら寺の細い白塀のために目立たずにいた。その寺が川原寺だった。

川原宮、岡本宮、浄御原宮、^{きよみきはらのみや}板蓋宮と、この道のどこかの位置にたたずむと、それらの旧址を眺望して身はひとりでに「飛鳥の古代」に包まれるしくみになっている。田圃の向うには、これも冬枯れがまだ残っている甘櫓^{あまかしのおか}丘が見える。川原寺とは反対の北側には飛鳥寺の屋根が高い。飛鳥川が甘櫓の丘の裾から香久山の方へ流れているが、低いので平地からは水が見えない》

今も変わらぬ風景である。

新幹線の車窓は旅情がない、という言い方がある。トンネルが多く、近くの景色はじっくり見る間もなくすつ飛んでいく。ましてや夜は窓外に目を向ける人自体が少ない。清張は、1回目に海津を訪ねた通子が大坂発19時40分発「ひかり」で帰京する際の夜汽車の窓外を描いた。名古屋では南紀方面の取材旅行から帰る坂根と偶然席が一緒になった。

《京都駅を過ぎて間もなく大津の夜景が流れる。湖畔の船の灯がちらりと写った》

《どこかの駅を通過して構内の灯が何秒間か光った》

米原か岐阜羽島であろう。

《列車は豊橋のあたりを走っていて、蒲郡付近らしい平坦な黒い野がつづいていた》

《列車は浜名湖の鉄橋にかかった。湖水に弁天島の料理屋や旅館の灯が映っていた》

《浜松駅の明りが通過した》

《静岡はとうに過ぎていた。乗客の半分は睡っていた》

《清水付近のコンビナートが下からの照明をうけて闇に青白く浮び出ていた》

《列車がトンネルに入った。音響は長くつづいた》

新丹那トンネルであろう。

《長いトンネルが終わると、熱海の賑やかな灯の集まりがいちどきに右に現れた》

《坂根は、暗い蜜柑畑の中の寂しい灯にちらりと眼を走らせて言った》

《小田原の町の明りが過ぎた》

11時ごろ東京に着いた。

《東京駅に着くと、坂根は重いジュラルミンの写真器材函を肩にかけ、三脚をたたんだ棒を手に抱え、通子とホームを歩いた。階段から新幹線の改札口までは同じ列車から降りた人むれに揉まれたが、そこを出ると構内は閑散としていた。壁の時計は十一時すぎになっている。遅い夜行列車に乗る団体客が長くならんで、立ったり

座ったりしていた。

「高須さんは、これから？」

「下北沢ですから、山手線の電車で帰ります」

「そいじゃ山手線のホームまでお送りしましょう。ぼくは駅の前からタクシーでも拾います」

「けっこうですわ。そんな重い荷物を持ってらっしゃるんですもの」

「これですか、これはいつものことで、馴れていますよ」

坂根は、通子ともっと伴れになっていたそうだった。

五、六番線ホームの昇り口に向かって長い構内を歩いた。(略)

階段を五番線ホームに上がって坂根は言った。

「……どういふ恋愛だったんでしょうね。軽薄なようですが、その相手の女性にぼくは興味をひかれますよ。そして、その女性はどこかに健在なんでしょうがね」

外回りの電車に乗る前、通子はその話にはふれずに、坂根に言った。

「思いがけず名古屋からごいっしょになれて、ほんとうに愉しかったですわ。ここまで送っていただいて、どうもありがとう」

電車が動き出しても、坂根要助は寂しいホームに立っていた》

坂根は通子が好きなのだが、日常的に会える間柄ではない。恋人同士なら「明日またね」とか「今度は渋谷で会いましょう」などとサヨナラの約束ができるだろうが、彼はそれができない。山手線のホームまで行くのが精いっぱい表現なのである。

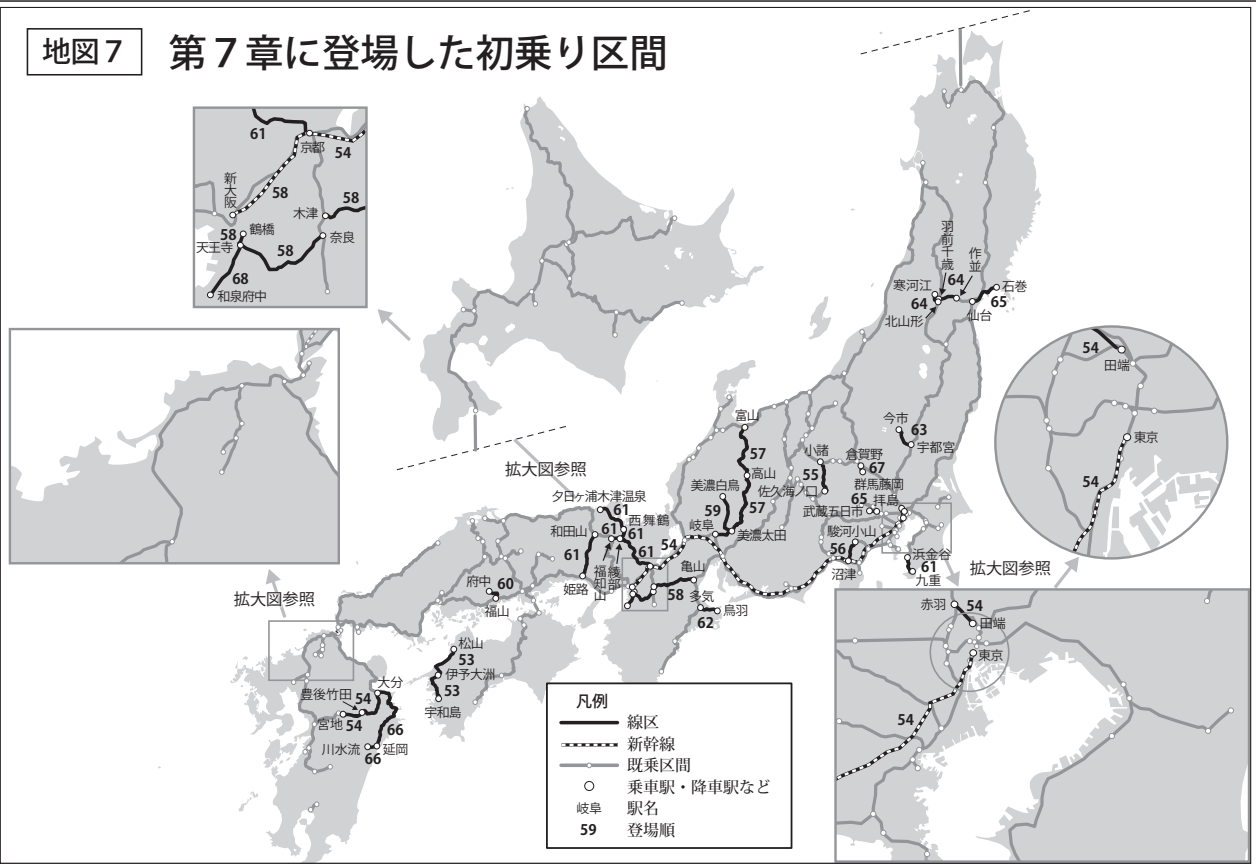
通子は坂根が嫌いではないが、どこかガードを固めている。昔、仲の良かった二従兄弟が結婚した後、「離婚したい」という言葉につられて

地図7の番号対照表

		作品名	線区名	乗車駅	降車駅	キロ数
65年	53	草の印刻	予讃	伊予大洲	宇和島	48.1
		草の印刻	予讃	伊予大洲	松山	55.1
	54	殺人行おくのほそ道	豊肥	大分	豊後竹田	60
		殺人行おくのほそ道	豊肥	豊後竹田	宮地	34.6
		殺人行おくのほそ道	東海道新幹線	東京	京都	513.6
		殺人行おくのほそ道	東北	田端	赤羽	6.1
	55	すずらん	小海	佐久海ノ口	小諸	39.5
66年	56	統監	御殿場	駿河小山	沼津	35.6
67年	57	葦の浮船	高山	富山	高山	89.4
		葦の浮船	高山	高山	岐阜	136.4
	58	二重葉脈	大阪環状	鶴橋	天王寺	3
		二重葉脈	関西	亀山	木津	67
		二重葉脈	関西	奈良	天王寺	37.5
		二重葉脈	東海道新幹線	京都	新大阪	39
	59	史疑	越美南線	美濃白鳥	美濃太田	66.1
	60	古本	福塩	福山	府中	23.6
68年	61	Dの複合	山陰	京都	綾部	76.2
		Dの複合	舞鶴	綾部	西舞鶴	19.5
		Dの複合	宮津	西舞鶴	夕日ヶ浦木津温泉	61.1
		Dの複合	播但	和田山	姫路	65.7
		Dの複合	内房	浜金谷	九重	27.7
		Dの複合	山陰	綾部	福知山	12.3
	62	混声の森	参宮	鳥羽	多気	29.1
69年	63	通過する客	日光	今市	宇都宮	33.9
71年	64	留守宅の事件	仙山	作並	羽前千歳	29.3
		留守宅の事件	左沢	北山形	寒河江	15.3
72年	65	山の骨	仙石	仙台	石巻	48.5
		山の骨	五日市	武蔵五日市	拝島	11.1
	66	表象詩人	日豊	大分	延岡	123.3
		表象詩人	高千穂線	延岡	川水流	17.1
73年	67	告訴せず	八高	群馬藤岡	倉賀野	7.3
74年	68	火の路	阪和線	天王寺	和泉府中	20.9

旧国鉄とJRは1万0662・5^{キロ}、私鉄は1251・1^{キロ}になった。
それぞれ大台に乗った。地図7（旧国鉄とJRの初乗り区間）を見ると、
日本列島の骨組みはますます強靱になった。

不用意に男女の仲になった。男性不信というよりも自己嫌悪の面が強い。
新幹線でトンネルが少ない箇所の一つは琵琶湖東岸である。清張はそ
こを書き落としたりはしない。通子の2回目の海津訪問の際に出て来る。
《車内にはこころよい暖かさが流れている。窓には大津市内の建物
超しに琵琶湖の寒そうな青い色が見えていた。粉雪が斜めに降っ
ていて、比良の白いかたちはかすんでいた》



第8章 ディスカバー・ジャパン

(1976年7月～92年9月)

車で殺される女たち

四国で起きた強盗殺人事件と北部九州であった愛人殺しはまったく無関係に発生したのだが、両方の地を訪れた作家がいた。彼の書き残した小説の下書きが真相を明らかにする。76(昭和五十一)年1月1日から7月15日まで、週刊新潮で連載された『渡された場面』は、文学への向かい方にも触れた秀逸な作品ではなからうか。

——小説家の小寺康司は、四国の中都市に滞在して小説の一部を書きかけるが、そこに強盗殺人事件の犯人の姿が出ていた。原稿用紙を佐賀県の坊城町(呼子町のこと)の旅館で捨てるが、書き写した女中真野信子が恋人の下坂一夫に渡す。彼はそのまま盗作して発表、評価を得る。下坂は別の女と結婚するため、妊娠した信子が邪魔になり、殺害する。四国の殺人事件捜査本部の香春銀作捜査一課長らは、強殺現場のことをなぜ佐賀県の男が書いたか不審に思っ、捜査し、信子殺しが分かる——

下坂は佐賀県唐津市の陶器店の放蕩息子で、博多のバーへ列車で通い、そこで働いていた景子と結婚する。列車は筑肥線で、今ならば唐津——姪浜を乗った後、福岡市営地下鉄に乗り入れて博多まで来る。だが、当時は地下鉄が開通しておらず、唐津市内も別路線だった。東唐津——姪浜39・3_{キロ}と、廃止された同線の姪浜——博多11・7_{キロ}が下坂の初乗り区間と認定する。

信子は佐賀県の中央部の多久市で育った。四国のA県警捜査一課の越智達雄警部補ら2刑事は失踪した信子の行方を追って多久へ行き、

その帰りに唐津線の多久——唐津25・1_{キロ}に一番乗りする。多久市は米どころ佐賀平野と旧松浦炭田の双方の性格を持つ町である。清張の筆は、そこに触れる。

《多久駅のホームに立つて唐津行の電車を待っていると、すぐ前がピラミッド形のボタ山だった。炭鉱はエジプトへの連想だけを残して消滅している。どんよりとした灰色の雲が重く垂れて、冬のうすい光りが亀裂の間から斜線を洩らしていた。ホームの掲示板には名所案内として多久聖廟、若宮八幡宮、天山登山口などとならんでいた。炭鉱の名はなかった》

唐津線は非電化であり、齟齬がある。

信子は林芙美子に憧れる一方、騙されていることも知らずに下坂に尽くす薄幸の女として描かれている。松本清張には珍しく、優しい筆で描いており、読者の共感を呼ぶ。

信子が好きだという林芙美子の『風琴と魚の町』をそのまま引用している。《柳の木に向うに、煤で汚れた旅館が二三軒並んでゐた。町の上には大きい綿雲が飛んで、看板に魚の絵が多かつた。

浜通りを歩いてみると、或る一軒の魚の看板の出た家からヒュッ、ヒュッ、と口笛が流れて来た。……………

口笛の流れて来る家の前まで来ると、鱗まびれになつた若い男達がヒュッ、ヒュッ、と口笛に合わせて魚の骨を叩いてゐた。

看板の魚は、青笹の葉を鰓にはさんだ鯛であつた。私達は、しばらく、その男達が面白い身ぶりやかまばこをこさえてゐる手つきにみとれてゐた。

(略)

浜には小さい船着場が沢山あった。河のようにぬめぬめした海
の向こうには、柔かい島があつた》

言うまでもなく、尾道の風景である。小寺は信子に優しい言葉をかけたわけではないが、執筆を夢見る女の気持ちをしっかりと受け止める。作品中では間もなく病死するのだが、清張の分身であろう。小寺の下書きを写して、文芸雑誌に投稿して一時の評判を得た下坂に対しては、屈辱的なまでの破滅を用意する。

インチキな文学修行に対して何か言いたかつたのだろうか。

下坂は遠くの殺害現場まで信子を自動車に乗せていく。過去の列車利用の犯罪者たちが同乗者に目撃されたが、今回は完全犯罪になるはずだった。だが、「犬に目撃された」という強迫観念にとらわれ、自ら転んでしまう。

清張作品ほど多くの作品がテレビドラマ化された作家はいないだろう。BS(放送衛星)、CS(通信衛星)番組では再放送が続く。だが、『渦』(76年3月18日～77年1月8日、日本経済新聞)だけは該当するドラマが見つからない。テレビ視聴率調査は正しく行われ、かつ正確なのか、というテーマである。

喫茶店を営む一方、油絵を描く小山修三は新劇の重鎮に頼まれ、視聴率調査が本当に行われているかを調べるため、端末機の記録紙を回収するアルバイト主婦らを尾行する。その中の1人の不倫絡みの殺人事件も追いはじめる。犯人は視聴率調査会社の課次長だった。視聴率に手心を加えてもらいたいテレビ局員や視聴率を予想する評論家が出てくる――

調査員たちが新橋にある調査会社と自宅を電車で往復する経路がいくつも出て来る。小山らがE号と名付けた川端常子は会社を出た後、地下鉄で茅場町へ行き、乗り換えて西船橋へ行く。茅場町まで日比谷線に乗ったことは疑いようがないが、どこで乗ったのか。最低、銀座であるを見て、銀座―茅場町2・5^キを初乗りとする。東西線茅場町―西船橋は18・8^キ。ここも一番乗りと認定する。

終点の西船橋で乗り換えたのだが、京成とは書いておらず、ホームが近接するJRと受け止める。佐倉で降りた。総武線の千葉―佐倉16・1^キが初登場である。翌日、川端は京成線に乗り、高砂駅前を回って、新橋に向かった。その経路は分からない。

西伊豆で車が転落、車内にいた主婦が死んだ。事故ではなく、殺人だった。小山は検視した下田の医者に会いに行く。新幹線で熱海、伊東線、伊豆急行と続く。伊豆急行の伊東―伊豆急下田45・7^キが初登場した。引き続き日本経済新聞に『馬を売る女』が連載された(77年1月9日～4月6日)。

――日本橋の外れにある繊維会社の社長秘書星野花江は、馬主でもある社長の電話を盗聴して本命馬がダメだという情報を流して、商売にしていた。不審に思った社長が孫請けの業者に調べさせる。業者は星野の口を知る一方、金を借りる。借金が増えたと、首都高速の永福―高井戸間の非常駐車帯に止めた車の中で星野を殺害、相模湖周辺で捨てる。カーセックスを装う完全犯罪になりかかったが、車のナンバーが目撃されており、破たんする――

会社からの帰り、星野は地下鉄で人形町から秋葉原へ出る。日比谷線1・5^キに一番乗りする。総武線に乗りかえた後、小岩で降りてからは

徒歩になる。清張は東京西郊の風景はよく書いているが、下町は少ない。千葉県境付近は初めてである。

《小岩駅前の広場はバス待ちの客で行列ができている。タクシーは次々と客を運んで去る。夕方七時ごろは電車を降りた勤め人で混雑していた。》

広場を右側にとって南へ行く通りは商店街になっていて、入り口に「フラワー・ロード」のアーチ看板がかかっていた。左側から南へ行く通りはずっと寂しい。星野花江はそこを歩く。わき目もふらぬ足どりだった。帰りの勤め人たちも流れていた。

七分ばかり歩くと賑やかな通りに出た。色のついた灯が連なっている繁華街で、キャバレー、バーなどが両側にならんでいる。星野花江はその通りを左へ行つて八百屋に入る。ジャガイモとタマネギとタマゴを二つ。その買いものをしている間、隣の小さな映画館からはベルが鳴りっぱなしであった》

私は15年秋、小岩駅の南口側を歩いた。昼間だったので、歓楽街のざわめきは聞こえてこなかった。星野とすれ違うキャバレーの呼び込みの男のような若者はおらず、高齢者が目立ったように思える。

東京はかつて若者の街と思っていた。近年、駅頭や車内で高齢者を見ることが多くなった気がする。では、地方はどうなっているのか。若者も高齢者も姿を見せない。なぜなら、人間よりも車の方が圧倒的に多く、中に誰がいるのか、よく見えないのである。

石狩川の畔

土建業界の談合と足の引っ張り合い、それに介入する政治家、役所の

工事情報を伝える黒幕……。ロッキード事件捜査と裁判で政財界の癒着が国民の前に明らかになっていく時代、相似形となった作品が『状況曲線』（76年7月29日〜78年3月9日、週刊新潮）である。

——大手の日星建設専務味岡正弘は、談合組織の仲間や部下に疎まれ、殺人事件の犯人に仕立てられそうになる。観光道路計画の視察や談合組織のゴルフコンペで行った北陸、京都でさらに追い詰められ、静岡県で殺害される。天竜市の刑事矢田部護親が捜査に乗り出し、錯綜した利害関係を解き明かし、黒幕も追い詰める——

味岡は名古屋から自動車で長良川を上り詰め、加賀を連想させる「きたぐに温泉郷」で泊まる。翌日、大阪行き特急のグリーンに乗る。京都まではほぼ2時間とあり、加賀温泉駅から乗ったと推定できる。75年に湖西線が開通し、関西と北陸を結ぶ特急が通るようになった時代である。同線の近江塩津——山科74・1^キの一番乗りを果たした。

味岡は北陸で知り合った芸者と京都で過ごそうと計画、叡山電鉄に出町柳から乗り、鞍馬線の貴船口で降りる。この間11・4^キを初乗りした。ただし、出町柳——宝ヶ池間3・8^キは叡山本線になる。ラブホテルに行くと、芸者はおらず、談合組織黒幕の事務所の女が死んでおり、あわてて逃げる。鞍馬まで行き、そこから電車で京都市街地へ戻る。鞍馬——貴船口1・2^キも味岡が初乗りした。

矢田部刑事は味岡の逆コースを行き、殺害の実行役に土建屋の現場グループが関与していることを調べ、長良川沿いを列車で南下した。越美南線（現長良川鉄道）は『史疑』の比良直樹が乗っており、初乗りではないが、美濃加茂から多治見へ抜けた。美濃加茂市の中心駅は高山本線のみ濃太田駅である。太多線のみ濃太田——多治見17・8^キは矢田部に

よって初踏破された。

作品の冒頭、談合屋たちがJRの東京駅界隈のガード下に集まる。

《都心のガード下に沿った狭くて細長い地帯を走る路地は、ちよつとした迷路となっていて、屈折したり行きどまりになったりしている。そのようなガード下、区域的には有楽町と大手町の中間とでもいうか、やはり迷路じみた中に、すし屋とバアにはさまれた狭い間口の喫茶店があった》

土地の所有や使用の権利はどうなっているのか知らないが、結構踏ん張っている昭和の景観ではなからうか。

『百円硬貨』(78年7月、小説新潮)に登場する相互銀行勤めの村川伴子は、微罪の発覚から人生を棒に振る。年上の妻子ある男と愛人関係になるが、妻にばれて離婚するなら3000万円出せと迫られる。銀行の金を持ち出して、新しい生活を始めようと鳥取県の片田舎へ向かう。男の妻の実家があり、待機している彼に渡すためだった。

ところが、夜行列車の車内販売の弁当を買っているうちに、百円硬貨が切れてしまい、男に電話がかけられない。早朝のため、1万円を崩す機会が来ない。倉吉線の終点山守の窓口で、近くまでの切符を買って崩そうとするが、着いた駅で替えてくれと断られる。横の客が出札窓口に100円玉を置いたままにしているため、手を出して騒がれ、警察が駆けつける。

東京から新幹線、福知山線、山陰線の夜行に乗り継ぎ、倉吉で乗り換えた。倉吉線の倉吉―山守20キロ(85年廃止)は、伴子が一番乗りした。

列車に乗る際、どの程度小銭が必要かを想定することは大事である。ローカルのワンマン列車の場合、降りる時になって「1万円札しかない

い」という客を時に見かける。

絵画の贋作、模倣は清張作品に何度も出て来るテーマであるが、登場人物を東京から離れた場所に置くと、その秘密を探ろうとする者が列車旅をする。地方色や旅情が出て来る。『天才画の女』(78年3月16日)10月12日、週刊新潮)もそうした作品の1つである。

――本格的な絵を勉強したことがない降田良子は、福島県の実家で面倒を見ている脳神経障害だが、天才的な絵を書く小山政雄の作品を模写して、画壇デビューする。制作の秘密を隠すため、かえって天才と称される。彼女の絵で儲けを企む光彩堂画廊に対し、ライバルの芸芸堂支配人の小池直吉が盗作の疑惑を持つ。偵察のため隣の部屋に住ませた男に夢中になった良子は、仕事をしなくなり、天才画家の鍍金はあつさりはげる――

良子の実家は、作中では福島県真野町と書かれており、東北線で上野から2時間半、支線に乗り換えて15分だという。中島河太郎は「三春町」のことだと指摘する(注23)。作品中の歴史的データ部分を読めば確かにその通りである。磐越東線の郡山―三春11・9キロは小池によって初乗りされた。

小池は小山のルーツ探しのため大分へ空路で行く。着陸直前の機窓を描写する。

《空港は、瀬戸内海に突き出た国東半島こくとうはんとうの東南にある。下降する機上から見たのだが、豊予海峡ほうよかいをはさんで九州の鑑やじりのような半島(佐賀関)と四国の長槍ながやりのような半島(佐田岬)とが対い合むかい、鑑の根もとが手前にぐっと挟えくりこんで国東半島につらなるのが別府

湾である。上空から見ても絵ハガキのような風景だが、空港から別府市に向う海岸沿いの道路もなかなかの佳景である。小池は初めてなのでタクシーの窓から見惚れた。おりから夕日が西の山脈の上に落ちかけ、別府湾は朱に輝いていた。何という名か富士山に似たかたちの山がある」

正確な描写が美しさにつながっている好例である。富士に似た山は、由布岳だ。

『骨壺の風景』(80年2月、新潮)は、『平生の記』の補完的位置づけになるのか。父方の祖母カネに対する思い出であり、遺骨を長年置き去りにしていたことへの済まなさも滲み出ている。父の養母なので、血縁関係はない。だが、貧乏をともした絆は深い。清張は飛行機で福岡まで飛び、山陽新幹線で博多―小倉67・2キロと小倉―新下関19キロに自ら一番乗りした。トンネルが多い山陽新幹線が登場する作品はほかにない。

『不運な名前』(81年2月、オール讀物)は、明治一〇年代、政商の藤田組が起こしたとされる贗札事件で有罪となり、北海道の樺戸集治監で亡くなった熊坂長庵を調べるルポライター安田の旅行記である。安田は清張の分身と見てとれるが、冤罪であり、長州の井上馨が黒幕であったとの思いを強める。石狩川に沿った月形町にある樺戸集治監跡の資料館に来て、熊坂と同郷で彼の無罪を訴える神奈川県の伊田平太郎や事件当時の紙幣寮の女工監督の遠縁筋にあたる神岡麻子と会い、意見を交わす。元福岡藩士で初代典獄だった月形潔の明治期官僚として不遇な生き方も話題になる。

監獄横を流れる石狩川を見て、熊坂は相模川、月形は遠賀川、それぞれ故郷の川に似ていると思ったことであろう、と締める。歴史の彼方

に埋もれなかった人々を、1世紀後にも忘れない庶民がいる。清張の言いたいことではないか。

安田は取材を済ませた後、札沼線で新十津川へ行き、バスに乗り換え、滝川に向かった。石狩月形―新十津川30・2キロが彼の一番乗りになる。

《月形駅のホームに立って安田は町のほうを眺めた。(略)いかにも穀倉地帯の集散地にふさわしい米穀倉庫の切妻の高い屋根が、密集した住宅街の上にならんで見える》

《さっぴない、おそきない、さつてき、しもとつぷ、など札沼線の駅名を読みながら安田は、白頭短軀の前高校長伊田平太郎と、上背があつて眼が細く頸の長い、神岡とのみ告げる青いコートの女を思い出していた。夕闇の中にうら寒い雨催いの風景が窓につづいていた》

かな書きの駅名は、それぞれ札比内、晩生内、札的、下徳富である。札沼線の起点札幌から北海道医療大学までは、電化された都市圏路線だが、石狩月形の先、浦臼―新十津川間は今、1日1往復しかない。乗りつぶし困難線区の代表である。2012年夏、無人の新十津川駅を訪れると、地元の人がきれいに清掃し、彩り豊かな花壇に心癒された。「わざわざ内地から来られたのですか」と声をかけられた。

積み荷の中から我が死体

『死の発送』は、61年4月から62年12月まで、週刊公論、小説中央公論に掲載されたのち、82年に加筆してカドカワ・ノベルズ版として出版された。トリックは、ミステリー全盛期の切れがある。

――公金を使い込んだ元N省官吏岡瀬正平が出所した。まだ1億円を隠していると見た夕刊紙の編集長山崎治郎は記者の底井武八に取材

を命じる。岡瀬は1億円を元代議士立山寅平に貸し、その借用書を隠しており、無効としたい元代議士に近い調教師西田孫吉に殺害される。山崎も殺害され、郡山の北、五百川駅近くでジュラルミンのトランクに詰められた死体となって見つかる。ところが、その直前に山崎自身がトランクを田端駅で預けており、その謎解きが話の本線となる。

西田は山崎と東北線の夜行に乗った際、荷重調整用の砂などを詰め、山崎の体重と同じにしたトランクを山崎に荷物として駅で預けさせ、途中駅で自らが受け取るようにする。一方、同じ荷札を付けた空トランクを前後して走る貨物列車の家畜車の中に用意、人気馬を見せると言って誘い出して殺害、空トランクに詰め、五百川駅で捨てた。砂が入ったトランクは福島競馬場に運んだ。西田は、自分が旅客列車にばかり乗っていたかのようなアリバイを作る――

登場人物は競馬関係者が多く、東京、福島の両競馬場への往来が激しい。底井が東京競馬場へ行ったある日のルートは中央線に乗った後、支線で国分寺から府中へ向かうものだった。当時は下河原線と呼ばれる中央線支線があり、府中とは東京競馬場前のことに違いない。底井は5・6^{キロ}を一番乗りした。この区間は73年の武蔵野線西国分寺―府中本町開通で廃線になった。加筆の際、61、62年ごろの線路地図をそのまま引きずったのだろう。

別の日は新宿から京王線で行った。布田までは、『不安な演奏』の宮脇平助が何度も行っており、布田―東府中5・5^{キロ}と東府中―府中競馬正門前0・9^{キロ}が底井の初乗りとなる。

既に紹介した『告訴せず』がそうだが、清張は晩年に向けて企業や投機市場を舞台にした作品を数多く書くようになった。金、女、犯罪が絡

むと同時に、難しい取引システムを解説風にかみ砕くように書いた。経済成長は爛熟し、モラルの荒廃が目立つようになった時代を先取りしている。『彩り河』(81年5月28日)―83年3月10日、週刊文春)は、普通銀行化を目指す一方、消費者金融を法的に認知された存在とし、そこを貸出先にしたい相互銀行業界の思惑が背景として描かれる。

――昭明相互銀行社長の下田忠雄は、クリスチャンとしての信仰を経営の理念に掲げながらもライバルを蹴落とし、愛人でナイトクラブのママ山口和子も疎ましくなれば裏世界を使って殺害する男だ。この相互銀行によって倒産に追い込まれた二流商社の昔の重役、井川正治郎は、かつての愛人の子を追ううち下田の存在に気付く。同様に企業情報誌の契約記者である山越貞一も真相を追うが、逆に殺される。井川は、下田を親の敵と思う元相銀社長の息子である田中譲二と協力して復讐を果たす――

山越殺害の関係者には銀座のクラブが一枚絡んでいると見た井川は、偵察に行く際新宿から地下鉄に乗り、銀座で降りた。丸ノ内線は『球形の荒野』の野上久美子が霞ヶ関まで通勤で乗っており、霞ヶ関―銀座1^{キロ}が初乗りである。

83年12月と84年1月の文藝春秋に出た『南半球の倒三角』は、インドが舞台だ。インド旅行へ行った主人公の私(清張自身)は、ベンガル湾に臨むマドラスに滞在した際、米国カリフォルニアから来た白川保雄という造園師に会う。白川は、地球上の大陸の南がことごとくとがっていることに触れ、昔、月が二つあり、その一つが地球と衝突した結果であるということ力を説く。科学的根拠に乏しいとは思いつつ、私は関心を示す。大陸移動説などが出て来る。

白川はインド大陸南端のコモリン岬を見た後、トリヴァンドラムからマドラスまで列車で来た。17時間かかったという。

『信号』は84年2、4、6の各月、文藝春秋に載った。広島県呉市で海運業を営む一方、中央文壇でも名の売れた穂波伍作。その文学サロンに入りする取り巻き連中の生きざまを広島市のデパート広告部員である白石信一が見聞する。豪放磊落な穂波は、北九州市若松区で石炭荷役に従事する労働者を束ねる家に生まれた火野葦平を思わせる。文中でも昭和十三年にA氏文学賞を受賞したと書かれているが、芥川賞の『糞尿譚』であろう。取り巻き連中を冷やかに見ていた白石は、清張の芥川賞受賞後の姿に近いように見える。

白石は穂波の出版記念祝賀のために呉へ列車で行く。山陽線と呉線の分岐点海田市―呉20^キが初登場区間である。

穂波に遅れて華やかに文壇デビューした七里庄兵衛は、その後伸び悩み、東京で穂波の温情にすがすが、耐えられなくなる。東久留米に居を移した。上京した白石は清瀬に行った帰り、西武池袋線に乗り、東久留米で降りた。七里を訪ねるためで、清瀬―東久留米1・8^キに乗った。七里は毎晩のように池袋で飲み、終電車近くに帰って来ていた。池袋線は『溺れ谷』の大屋主造らが池袋―練馬間を乗っており、七里の一番乗りは東久留米―練馬11・8^キになる。

『聖獣配列』(83年9月1日―85年9月19日、週刊新潮)の主人公で、銀座のクラブのマダム中上可南子は、訪日した米国大統領の一夜の相手になった際、迎賓館で密談する日米首脳の写真を撮った。それをネタに米国側から多額の金を受け取るが、スイス銀行にだまし取られ、スイスの山奥で行倒れる。欧州が舞台で、チューリッヒ郊外の小駅から湖畔の

街、ラパスビルまで列車に乗る。

欧州での乗り鉄部分を地図外1(資料編)とした。

荒唐無稽のようだが、清張はロッキード事件に刺激を受けて、国際的な秘密の金の流れに迫ろうとした、という解説もある(注24)。可南子は銀座一丁目から自宅がある市ヶ谷まで地下鉄有楽町線4・2^キに一番乗りした。

清張世界の鉄路乗りつぶしも、残存線区が少なくなってきた。これまでもなぜか未乗だった区間が次々に登場する。『数の風景』は86年3月7日から87年3月27日まで週刊朝日に連載された。

――不動産業者だった谷原泰夫は多額の借金を抱え、死地を求めて山陰に来た際、送電線下の補償問題を知って一儲けする。その際、地場の大企業経営者が石見銀山跡に殺人遺体を遺棄したという推測を立て、金を脅し取るうとするが、逆に殺される。谷原に世話を受けた出版社員の夏井武二らが事件の謎解きをして、企業経営者の犯行が分かる――

谷原は大阪南港からフェリーで死出の旅に出て、別府、由布院に来る。由布院から豊後森まで久大線に乗り、25・9^キを初乗りした。この辺りは、『青春の彷徨』『波の塔』『不安な演奏』などに登場するのだが、乗り鉄描写がなかった。日田まで歩き、その後転々として山口県の山陰側にとどり着く。

山陰線で大田市まで東進して、石見銀山近くの宿に泊まる。途中、温泉津という駅がある。『顔』の井野良吉が殺人殺しのために降りた駅だ。温泉津―大田市20・7^キも一番乗りは谷原である。前後して、銀山の観光開発の手助けを求められた設計士板垣貞夫が空路米子入りした後、

松江から大田市まで急行「おき3号」に乗る。途中、宍道までは『砂の器』の今西刑事が亀嵩行きのために乗っていたが、宍道―大田市48・3^{キロ}は板垣が初乗りした。この瞬間、長大路線の山陰線は全線踏破され、青森から下関までの日本海側は五能線の相当部分と小浜線、越後線を除いてつながった。

谷原は送電線が走る土地を求めて江津から三江線に乗って、中国山地に入る。〇町で降りたと書く。三瓶山の南西に続く山間部とあり、旧^{おおち}邑智町であると推定できる。ならば、江津―粕淵48・1^{キロ}に乗ったと見なせる。

『黒い空』(87年8月7日―88年3月25日、週刊朝日)に登場する山内定子は、関東管領家の血筋を引く。経営手腕を持ち、都心に住んでコンツエルンを率いる。夫善朗はハンサムだけが取り柄で、高尾で結婚式場のみ任されている。経理係の千谷規子と懇ろになるが、定子が突然式場を訪れたため誤って死なせ、式場の庭園の一面に埋めた。

やがてばれるのだが、空一面が黒いように群れるカラスが謎解きのヒントになる。武蔵野の林野を造成して霊園を作ったのがカラス増加の原因であるとき、武蔵野の姿が変わってしまったことを批判しているように思える。定子と規子とともに管領家の流れを汲むのだが、管領家も内部抗争があり、その怨念が現代にも残っているというのが、清張らしい。史実「河越野戦」を面白く紹介している。

定子は高尾の式場に行く際、新宿から京王線の各駅停車に乗って高尾まで行く。京王線は、多くの作品で部分的に乗りつぶされていたが、ようやく東から西の端までほぼ完乗に至る。定子が初乗りしたのは、東

府中―府中1・5^{キロ}、聖蹟桜ヶ丘―北野9・8^{キロ}、京王高尾線北野―高尾6・9^{キロ}である。なぜ、高尾特快に乗らなかったのだろうか、との疑問が残る。

『一九五二年日航機「撃墜」事件』は、92年4月に角川書店から書下ろしとして出版された。山前譲の角川文庫版解説によると、52年に起きた墜落事故について、清張は『もく星』号遭難事件(60年)、『風の息』(73年)の2作を書いていたが、71年の岩手県雫石上空で起きた全日空機と自衛隊機衝突を受けて、『風の息』を全面的に書き改めたのだという。過去2作も、日本の空を支配していた米軍側の管制ミス、米軍機の関与という指摘をしていたが、3作目では米軍演習機による銃撃が旅客機に向けられていた、という推論が色濃く出ている。

フィクションというよりほとんどドキュメンタリーである。ただ、事故で死亡した女性乗客の烏丸小路万里子(仮名)がなぜ乗り合わせたのか、どのような経歴の女性かというテーマが物語風に展開される。

事故後10年が過ぎ、食品会社の宣伝雑誌編集長、下坂孝一とR新聞社の嘱託である老評論家岸井善太郎が追う。この女性は宝石デザイナーと称していたが、実は米軍人が絡む宝石密売関係者であると推理する。終戦後の世を生きるためオンリーになった先に悲運が待っていた。戦後を生きる女性の悲劇という点で、『ゼロの焦点』の室田佐知子を思わせる。

下坂は万里子の墓を探して成田へ行く。千葉まで行き、乗り換えたところある。成田線の佐倉―成田13・1^{キロ}は、『渦』で登場した調査員夫人の居住地の先であり、初乗りになる。

セピア色の関東平野

『神々の乱心』は未完の大作である。90年3月29日から92年5月21日まで、週刊文春に連載された。終わって間もない昭和時代を広く、深くとらえようという執筆意図が感じられる。鉄道の登場のさせ方が、セピア色を深めているように思える。

——埼玉県梅広町（仮名、実際は東松山市か）に本拠を置く宗教団体的組織で降霊術の「月辰会研究所」は、国や軍の阿片による資金作りに関わった平田有信会長（別名秋元伍一や横倉健児）が、大本教を手本に立ち上げた。不審の目を向けるのは埼玉県警察部の特高課係長吉屋謙介と、信心する女官、掌侍^{ないじ}深町（萩園彰子）の弟で、子爵家の次男萩園泰之であった。33（昭和八）年、吉屋は月辰会に出入りした深町の使いを職質して、自殺に追い込んだことがきっかけで捜査に乗り出す。萩園は月辰会と宮中関係者との間に何かあると感じた。

平田が麻薬密売で使った男たちは、会の繁盛ぶりを聞きつけて脅し風にきたが、逆に殺害される。会のご神体ともいえる剣の盗掘品故買の骨董商も殺された。渡良瀬遊水池や埼玉県の横穴古墳で見つかる。満州での麻薬密売が発端であることが分かる——

職質を受けた北村幸子は、月辰会からの帰途、梅広駅で誰何され、警察に連れていかれるが、会から深町女官あての書簡を持っていたため、解放され、電車で帰った。東武東上線の池袋—東松山49・9^キを往復したと考えて間違っているまい。

北村幸子は故郷の奈良県吉野で入水自殺し、吉屋は自殺の真相を知ろうとして、萩園は姉の依頼を受けて、それぞれ葬儀へ行き、挨拶をする。吉屋は「自分は群馬県下仁田の小学校教頭である」と自己紹介する

が、不自然と見た萩園は下仁田まで行って嘘と確認する。上信電鉄の高崎—下仁田33・7^キに乗る。街の様子が昭和初期を映している。

《山間盆地の町である。中心地は駅前通りからはじまって、山に突き当たる。

山の斜面は段々畑だが、栽培しているのを見れば麦でも野菜でもない。桑でもない。豆の葉にしては丈が高いのがならんでいる。

旧い町だとは、通りを少し歩いただけでわかった。往時の中山道^{なかせんどう}の脇街道。屋根の向うに妙義山の突兀^{とつこつ}とした山容が遠望できた。昔から近在の物資の集散地だが、桐生、伊勢崎、足利の絹織物の不況はここから遠いとしても、隣り町の富岡の紡績が火の消えたようになっている。土産物店の前にならんでいるのは人形でも菓子でもない。コンニャクばかりだった。そのほかは椎茸^{しいたけ}がある。さつき山の段々畑に見た作物はコンニャクの葉だった》

萩園は古い新聞を調べる中、大正天皇の病が重くなる時期、宮中女官の間で宗教熱が高まる一方、旧満州で日本政府の出先の幹部がかかわる阿片密輸事件が摘発されたことを知る。直接の関係は見えないが、阿片密輸の関係者の妻川崎春子を訪ねて広島県三次まで行く。

山陽線の福山駅で降りた後、福塩南線で府中まで行き、タクシーで山あいを抜け、福塩北線^{きさ}吉舎—塩町10・7^キに乗った。南北の福塩線が全通したのは38（昭和二三）年であり、考証にも抜かりがない。福塩南線部分は『古本』の作家長府敦治が既に乗っている。

渡良瀬遊水池の第1の遺体は、秋元の元手下で南紀白浜の農園主津島久吉なのだが、身元がなかなか割れなかった。浅草の木炭問屋の支配人が紀州の産地に行く時に持って行った東京の新聞がきっかけで分かっ

た。支配人には名前が与えられていないが、備長炭のことが丁寧に書かれ、通行人Aというわけではない。紀勢線の南部―白浜19・1^{キロ}に乗った。渡良瀬遊水池で第2の殺人死体が見つかった。同じ日、吉屋は浦和から東北線で古河、萩園は東武伊勢崎・日光線で藤岡まで行き、池のほとりで再会する。作中人物を同じ場所へ違う交通手段で行かせる手法は、『顔』や『点と線』でも見られたが、サスペンス感を高める効果がある。2人は互いの手の内を明かさぬまま別れる。

吉屋は萩園と別れた後、東武伊勢崎線館林―羽生8・4^{キロ}に初乗りする。埼玉県警察部の捜査本部へ行くためだった。

東京市電もセピア色効果を高めている。北村の兄は妹の死の背景が宮中にあると思いい、萩園に相談に来る。その際、渋谷から南青山一丁目まで乗るが、萩園は不在。連絡のあった日比谷まで乗る。別の日、萩園は皇居に姉を訪ね、坂下門から出た後、東京会館で昼食をとり、図書館で調べ物がしたくなり、内幸町まで乗る。

舞台は22(大正一一)年、旧満州の瀋陽(作品中では奉天)へ廻り、平田は横倉健児と名乗る銃砲店主として登場する。元海軍少佐で大本教を信仰する宇野陽太郎から宗教団体の動かし方を学ぶ。商売になると見たのか、大本教の「お筆先」に相当するような靈感を持つ女性を探しに北へ進む。

瀋陽から長春へ南満州鉄道で行き、乗り換えて吉林まで行く。いずれも初乗りである。泊まった旅館の女中、坂下キクが案内に協力的だった。吉林―長春間にある九臺という町で、お筆先に似た降霊術を持つ江森静子と会い、男女の契りをして、日本に連れて帰る。

月辰会の存在が作中で大きくなる中、吉見百穴近くでの遺棄死体を見るため、吉屋は浦和から大宮へ行き、川越線大宮―川越16・1^{キロ}に一番乗りする。東武線で現場へ行き、タクシーで羽生へ移動する。室町將軍の末裔で、高級女官だった足利千世子を訪ねて、佐野まで東武佐野線で行く。館林―佐野11・5^{キロ}が初乗りになる。

荒川、利根川の渡河が描写されている。

《関東平野がひらけてきた。桑畑がつづく。茶畑が見える。狭山茶の延長であった。

三キロも走ると、大きな川に出た。高い川土手^{どて}を往還へ上下する小道がついていた。その小道を降りてくる二台の馬車があった。馬が挽^ひいているのはまわりに板囲いをつけた荷車だった。砂利を積んでいるのだ。

川は荒川である。このへんの川幅は三十メートルくらい。

橋を渡る。車窓から見下ろすと川の中に中洲ができていて葦^{あし}が生い繁^{あし}っていた。葦のないところが川敷の砂利や礫^{れきせき}石のひろがりであった。そこに馬車がとまっていて、三人が砂利を掘っていた。

橋を渡りきると、鴻巣である。その鴻巣街道にも砂利運びの馬車が悠々と歩いていた》

《このあたりを上利根(上流から栗橋までが上利根、栗橋から布川^{ふかわ}までが中利根)といっているが、さすがに音に聞こえた坂東太郎^{ばんとう}で、中流でも川幅は五百数十メートルもある。車窓から覗くと中洲がとびとびにあつて、葦が茂っている。その葦にも初秋の色があった。上流にはもつと中洲が多いのを埼玉県警察部の吉屋は知っている。利根川にくらべると荒川はずっと狭い》

川砂利採取が規制され、護岸改修が進んだ今、このような風景があるのか分らない。昭和三〇年代には見られたのではないか。

吉林の旅館で横倉の世話をした坂下キクは、広島にいる川崎春子の妹だった。病気の姉を見舞うため、咸興港^{ハムフ}から船便で敦賀に来る。

宇野陽太郎は、張作霖の護衛を頼まれたが、瀋陽郊外で関東軍の手によってなされた列車爆破事件に巻き込まれて命を落とす。宇野は錦州から乗っていた。

戦時色が濃くなる描写が多いのだが、吉屋が見た檀原神宮前駅での風景を紹介する。

《ホームに降りると吉野線の下り側に、軍服の一群が整列していた。上等兵の肩章だが、兵卒ではなく、幅広の帯革^{たいかく}（ベルト）を締め、留金^{がね}（バックル）は円形で、旭日章を中心に桜模様のふちどりがあった。それを釦（ボタン）の掛け目の筋にきつちりと当てるのが作法らしい。吉屋も東京で見かけたことのある陸軍士官学校の生徒であった。長靴^{ちやうか}をはいた六十人ばかりの生徒たちが二列にならび、「休め」の姿勢をとっていた。かれらはきれいに折りたたんだ外被^{がいひ}（コート）を片手にし、同じ規格の旅行鞆^{かばん}を足もとに置いていた。

列の右に、すこし離れて、大尉の肩章を付けた引率の将校が手をうしろに組んで立っていた。生徒たちの凛々しい姿はホームで上下線の電車待ちの人々の眼を集めるに充分だった。まだ幼な顔が残っている生徒たちは「休め」の姿勢でも私語一つせず、わき目も振らなかった。各自が瞳を正面の一点に向けていて、まるでそこに射撃場の標的があるかのようなようだった。周囲にどんな叫び声が起こると、命令がない限りふりむくことはできないみたいだった》

吉屋は、伏見の桃山御陵、檀原神宮、吉野神宮、後醍醐天皇陵を参拝する途中なのだろうと見る。満州事変や満州国建国宣言などがあり、精神教育をたたみこむためのだと合点する。戦争を予兆させる風景は作中に数多く、栃木県では満州へ移る農業移民団の壮行ムードが高まっていた。坂下キクが帰国した時、満州国皇帝の来日に向けた時期だったので、敦賀では憲兵らによる厳しい検問を受けた。

清張作品のアジアへの展開は、地図外2（資料編）でより実感してもらえらるだろう。首都圏中心部の私鉄初乗りも終わりを迎えた。地図東（資料編）で清張鉄道の広がりを確認してもらいたい。

北への回廊

最後の旅を迎えた。『犯罪の回送』は62年1月から63年1月にかけて小説新潮に連載された後改稿され、死去後の翌年9月、角川書店から単行本で出版された。

——北海道北浦市長の春田英雄は、東京への陳情活動中に行方不明になり、日野市で絞殺死体となつて見つかる。東京に泊まったと見せかけて飛行機で北海道に帰り、妻美知子と春田の弟雄次の不倫現場を押さえようとするが、逆に殺害される。遺体は酒樽に積み込まれて東京に逆送されるが、それを受け取って遺棄したのは市議会で反市長派の早川準二だった。弟雄次と早川は昔、春田の前夫人登志子を争った仲で、雄次が登志子をいとしさ余つて殺し海に捨てた。早川も承知していた。市長が進める港湾開発工事が進むと、遺体発見につながるので早川は開発に反対していた。早川も雄次に殺される——

北浦は架空の都市だが、限りなく苫小牧市をイメージさせる。既存の

港があるが、企業誘致につながる新港を建設しようというのは、苦東開發を連想させる。市郊外には湖沼が多い。美知子と雄次の不倫の場合は、苦小牧が分岐点である日高線の終着駅の様似であった。

書き直し版の時代設定がいつなのか書かれていないが、東北新幹線が盛岡終点である。盛岡開業（1982年）と八戸延伸（2002年）の間ということになる。さらに、北海道から上野までの寝台特急が走っており、青函トンネル開通（1988年）以降でもある。死去の92年まで、4年の間の出来事となる。

東京と九州の間で空陸2つのルートを巧みに使ったトリックは、『点と線』『危険な斜面』（59年）『時間の習俗』にあった。『犯罪の回送』では、東京と往来するのが北海道に変わり、鐵路が寝台と新幹線の2通りとなる。二〇世紀末の短い期間の3ルート並行を登場させて、人々がどのように使い分けたかを書いたのはフィクションとは言え、貴重な記録となっている。時代の特徴をすくい上げる清張の筆を感じる。

春田は東京出張の際、市議らとともに寝台特急「北斗星2号」に乗った。東室蘭を過ぎて、食堂車に行ったというから苦小牧乗車とする根拠にもなる。長万部で函館本線に入る。室蘭線の苦小牧―長万部135・2^{キロ}が初乗りされた。列車は函館到着後、1駅戻って五稜郭から江差線の五稜郭―木古内37・8^{キロ}、海峡線の木古内―中小国87・8^{キロ}、津軽線中小国―青森31・4^{キロ}を次々に一番乗りする。2016年3月の北海道新幹線開業で、江差線は第3セクターの道南いさりび鉄道と名を変えた。海峡線は北海道新幹線によって消えた。

江差線とは元々、五稜郭から木古内を経て日本海側の港町江差を結んでいたのだが、木古内―江差42・1は、2014年に廃線となった。

緑と清流の山地を越えると、上ノ国^{かみのくに}駅から日本海が見えて来る。

春田の失踪後、同道の市議らはいったん帰途することになり、上野発17時6分の「やまびこ53号」に乗る。市長殺害の連絡を受けて、新花巻から上野へUターンする。新花巻着が20時15分で、「やまびこ58号」は20時18分発だった。上野を夕刻に立って岩手県まで行き、その夜のうちに帰京する。以前の東北旅行の通念を打ち破る行程である。東北新幹線の上野―新花巻496・4^{キロ}が初踏破された。

警視庁は青木、岡本の2刑事を北浦市に派遣する。夕方発の新幹線で盛岡まで行き、在来線特急に乗り継ぎ、青森にたどり着く。夜行急行「はまなす」で未明に北浦市に着く。新花巻―盛岡35・3^{キロ}が清張鉄道の初乗り旅行の打ち止めになる。

この時代、東京から北海道の札幌へ鉄道で行く場合、在来線の寝台特急で行くより新幹線を使った方が早いのだが、2度の乗り換えは煩わしく、疲れたであろう。寝台特急はそうした旅行客へのサービスを指したのだろうが、やはり時間がかかり過ぎる。結果的に飛行機利用を促す結果になった。

初乗り距離は、旧国鉄とJRが1万2046・4^{キロ}、私鉄が1479・1^{キロ}に達した。合計は1万3525・5^{キロ}になる。地図8が清張鉄道の旧国鉄・JRの全路線図ということになる。

地図8の番号対照表

		作品名	線区名	乗車駅	降車駅	キロ数
76年	69	渡された場面	筑肥	東唐津	姪浜	39.3
		渡された場面	筑肥	姪浜	博多	11.7
		渡された場面	唐津	多久	唐津	25.1
77年	70	渦	総武	千葉	佐倉	16.1
78年	71	状況曲線	湖西	近江塩津	山科	74.1
		状況曲線	太多	美濃太田	多治見	17.8
	72	百円硬貨	倉吉	倉吉	山守	20
	73	天才画の女	磐越東	郡山	三春	11.9
80年	74	骨壺の風景	山陽新幹線	博多	小倉	67.2
		骨壺の風景	山陽新幹線	小倉	新下関	19
81年	75	不運な名前	札沼	石狩月形	新十津川	30.2
82年	76	死の発送	中央線支線＝下川原線	国分寺	東京競馬場前	5.6
				呉	呉	20
84年	77	信号	呉	海田市	呉	20
87年	78	数の風景	山陰	宍道	大田市	48.3
		数の風景	久大	由布院	豊後森	25.9
		数の風景	山陰	温泉津	大田市	20.7
		数の風景	三江	江津	粕淵	48.1
92年	79	一九五二年日航機「墜落」事件	成田	佐倉	成田	13.1
	80	神々の乱心	福塩	吉舎	塩町	10.7
		神々の乱心	紀勢	南部	白浜	19.1
		神々の乱心	川越	大宮	川越	16.1
	81	犯罪の回送	室蘭	苫小牧	長万部	135.2
		犯罪の回送	江差	五稜郭	木古内	37.8
		犯罪の回送	海峡	木古内	中小国	87.8
		犯罪の回送	津軽	中小国	青森	31.4
		犯罪の回送	東北新幹線	上野	新花巻	496.4
		犯罪の回送	東北新幹線	新花巻	盛岡	35.3

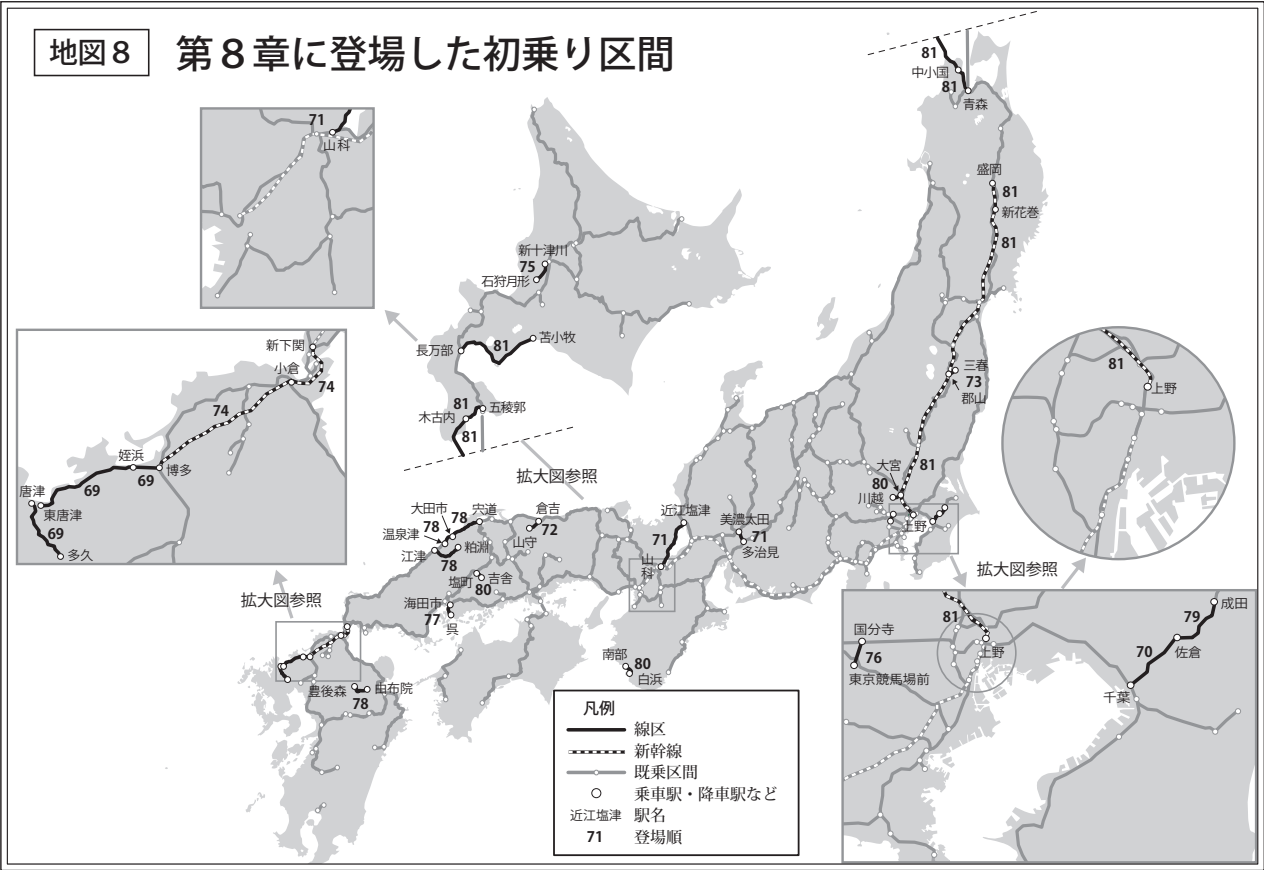


表5 年次別の鉄道乗車場面の有無

年次	初乗り あり ①	既乗 のみ ②	外国で 初乗り ③	鉄道 なし ④	計	乗り鉄 作品率%
51	1	0		0	1	100
52	2	0		1	3	66
53	1	0		4	5	20
54	5	1		1	7	85
55	3	0	2	4	9	55
56	4	0	1	9	14	35
57	5	2		8	15	46
58	6	3		9	18	50
59	3	3		10	16	37
60	8	4		5	17	70
61	10	2		12	24	50
62	6	4		4	14	71
63	6	8		6	20	70
64	1	3		4	8	50
65	6	0		2	8	75
66	2	4		6	12	50
67	5	9		10	24	58
68	2	2		5	9	44
69	1	3	1	8	13	38
70	0	2		6	8	25
71	1	2		6	9	33
72	3	0		4	7	42
73	1	0		2	3	33
74	1	1	1	0	3	100
75	0	1		3	4	25
76	1	1		0	2	100
77	2	0		2	4	50
78	3	0		7	10	30
79	0	1		3	4	25
80	1	1		0	2	100
81	1	1		0	2	100
82	1	0		2	3	33
83	1	1		0	2	100
84	1	0	1	1	3	33
85	1	0		1	2	50
86	0	0		0	0	—
87	1	0		1	2	50
88	1	0		1	2	50
89	0	0		1	1	0
90	0	0		4	4	0
91	0	3		0	3	100
92	3	0		0	3	100
計	100	62	6	152	320	52.5

表5は、私が読んだ作品を年次別に分けて、①初乗りが出て来る②既乗区間だけが書かれている④鉄道乗車場面が全く出てこない、という3種類に分けて作品数を書き出したものである。①②に該当しないが、外国の線区に乗ったものは、③外国で初乗りと

鉄路は果てても

私は前書きの中で、新聞記者的図々しさをあらわにし、「乗り鉄が出て来そうな作品320篇を読んだ」と書いた。松本清張の小説は約450篇とされる。そのうち約100篇は時代小説である。『恋情』『歌々吟』のように、江戸時代から明治中期以降に至る流れの作品もある。『西郷札』以外に乗り鉄は登場しないというのが私の見方なのだが、あるいは間違っているかもしれない。

350篇は読むべきだったが、刊行されたかどうかとも分からず、入手できなかった本がある。SFものは除外した。困惑したのは、ノンフィクションやドキュメンタリーか、境界線がはっきりしない作品群と外国を舞台にした作品である。私は早めにチェックを放棄したが、そうしてよかったのか、読まないことには分らない。一番気になる点だ。

言い訳は用意している。広く、高く、深い清張山脈を探検する際、拙速で分かったような論を立てるのは、かえって危険なことではないか。私は第2次調査として残余の分をチェックしたいと思う。ただ、『小説帝銀事件』の例を挙げたい。平沢貞通元死刑囚が小樽から上野まで護送されたことや、事件直前に東京から池袋まで山手線内回りに乗ったことなどが書かれているが、これが清張世界の乗り鉄と言えるのか、やや分類に困る例である。清張世界を線引きするのは、丸い地球の姿を平面の地図に落とすような困難が伴う。

清張作品から初乗り部分を抽出する意味と意義も説明しえたかどうか。本文中で、初乗りは初期の作品に偏して登場する理由を書いた。時代が下ると、作中で乗り鉄部分があっても初乗りでなければ、いわゆる既乗区間であれば、カウントしなかった。その辺りの偏差を補足的に論じたい。

してカウントした。①～④を合せると、320篇になる。興味深いのは、鉄道場面がある作品と、ない作品がほぼ半数ずつであることだ。熱心な清張ファンであれば、現代ものを読み進めながら感じ取っていることかもしれない。また、年次によって乗り鉄小説の数と率が上下していることである。この理由は少しこじつけができる。

以前にも紹介した『私の小説作法』（注2参照）の中で、清張は「交換作業」という言葉を使っている。

《私の場合、ひとつのものを長くつづけてやれないという意味である。極端な例でいうと、現代小説と歴史小説とを交互に進行して書いたほうがどちらにも新鮮さを感じて、自分の体質には向くようである。だれにでもすすめられる作法ではない》

鉄道乗車のある作品を書くことに力が入る時期が、周期的に訪れたのかもしれない。

作品中に現れた旧国鉄とJRの初乗り区間距離、既乗区間距離それぞれのトップ30作品を、表6、表7として示す。乗り鉄場面が多いからと言って、文学性が高いとは限らない。しかし、長々分析してきたように、鉄道を使って文学性、時代性を吹き込んだ作品は多数ある。初乗り、既乗のいずれでも上位に入る作品にはそれが特に感じられる。『点と線』、『ゼロの焦点』、『砂の

表6 初乗り距離の上位30(旧国鉄・JRのみ)

	作品名	年次	キロ数
1	蒼い描点	59年	1154.8
2	火の記憶	52年	1135.6
3	犯罪の回送	92年	823.9
4	点と線	58年	795.7
5	白い闇	57年	750.3
6	砂の器	61年	683.4
7	殺人行おくのほそ道	65年	614.3
8	ゼロの焦点	60年	519.6
9	眼の壁	57年	362.2
10	金環食	61年	312.7
11	わるいやつら	61年	295.4
12	不安な演奏	61年	290.2
13	Dの複合	68年	262.5
14	顔	56年	238.6
15	葦の浮船	67年	225.8
16	ひとり旅	54年	220.4
17	父系の指	55年	190.9
18	落差	62年	187.4
19	二重葉脈	67年	146.5
20	数の風景	82年	143
21	表象詩人	72年	140.4
22	青春の彷徨	53年	132.6
23	影の地帯	60年	119.8
24	地方紙を買う女	57年	119.6
25	万葉翡翠	61年	117
26	断碑	54年	108.7
27	草の印刻	65年	103.2
28	影	63年	98.7
29	状況曲線	78年	91.9
30	人間水域	63年	90.2

表7 既乗区間距離の上位30(旧国鉄・JRのみ)

	作品名	年次	キロ数
1	点と線	58年	6307.2
2	時間の習俗	62年	5699.4
3	砂の器	61年	5102.1
4	神々の乱心	92年	4491.2
5	不安な演奏	61年	4336.8
6	混声の森	68年	4073.9
7	犯罪の回送	92年	4000.5
8	火の路	74年	3595.2
9	二重葉脈	67年	3548.6
10	死の発送	82年	3448.6
11	屈折回路	65年	3303.6
12	統監	66年	3276.6
13	波の塔	60年	3212.6
14	ゼロの焦点	60年	3080.7
15	Dの複合	68年	2949.8
16	顔	56年	2776.1
17	眼の壁	57年	2650
18	断線	64年	2500.6
19	連環	62年	2469.2
20	紐	59年	2319.5
21	花実のない森	63年	2303.2
22	殺人行おくのほそ道	65年	2300.5
23	真贋の森	58年	2294.4
24	彩霧	63年	2280
25	黄色い風土	60年	2215.6
26	わるいやつら	61年	2104.3
27	絵はがきの少女	59年	2073.5
28	葦の浮船	67年	2016.2
29	遠い接近	72年	1990.5
30	半生の記	65年	1961.6

器』を高く評価する理由でもある。初乗りに焦点を絞って作品を分析することで、清張文学の理解に迫る1つのルートになりうるという愚見を重ねて強調したい。

意味ある文学の旅であった、と自負することを書く。路線図が広がっていく地図を作りながら気づいたのだが、清張の鉄道世界には3つの聖地があると思う。「中国山地」「信州」「武蔵野」を挙げたい。

「中国山地」の鉄道を『父系の指』で初登場させた後、清張は繰り返し登場人物を送り込む。清張にとつて、父峯太郎がなぜ出奔してどのような青春時代を送ったのか、永年のテーマだったと考える。父を投射した人物が繰り返し出て来る。故郷の伯備線だけでなく、木次線や三江線にも乗せた。研究では触れなかったが、最晩年の『夜が怖い』（91年）も父親への尽きぬ思いが語られる。自らの貧しい半生については納得していたのだろうが、父がなぜ貧しかったのか。最期まで考え続けたのではないか。

「信州」は、九州から東京へ移り住む前後に諏訪湖を見た、と受け止める。『湖畔の人』以降、相当数の作品が諏訪湖周辺を舞台にしている。³、4章末尾の地図を再確認してもらいたい。私もそうなのだが、九州の人間が信濃路の旅をする、と山河の造りの大きさに感動を覚える。2章末尾の地図で分かるように、『白い闇』のころには、東北への関心も高かったのだらう。だが、結果的に信州に厚く、東北に薄い作品展開となった。超多忙な執筆生活の中、東北をゆっくり見聞する機会が少なかったのかもしれない。三陸海岸や会津盆地など清張の筆なら自在に描けたのに、と少し残念である。信州を書き尽した後、甲州ものが多くなったの

も時間の制約故だろうか。

「武蔵野」については新たな言葉を費やすことはなからう。15年秋、私は武蔵野の各地を歩いた。作品世界がどんどん消えていく。どうすべきなのか、私が物申せる筋合いではないが、焦燥を感じてならない。

東京と地方が対極として語られることが多い時代である。20年五輪が象徴的だが、東京には富と情報が集まる。一方、原発被災地や沖縄に代表されるが、地方はそれらを搾り取られていると言うより、生命を維持して行く条件さえ踏みつけられるような状況がある。車窓から瞥見するだけでも一端は分かる。

駅前商店街は県庁所在地も含めてシャッター街化が進む。特に、昭和時代には工業、港湾都市として栄えた県内第2、第3の街が厳しい。生産拠点が外国に行ったのか、利益最重視の産業技術が地方の工場を無用にしたのか、あるいは物流の形態が変わってしまったのか。深夜未明にも飲食店の賑わいに触れられる24時間勤務の街。そうした都市が持つ猥雑な魅力は、急激に姿を消した。

不思議なのは、農村の風景である。車窓から人は見えず、車ばかりだ、とは研究の中でも書いた。それでも田植えと稲刈りは確実に行われている。鳥取市から岡山県津山市に抜ける因美線の物見峠は、山陰・山陽の風土の違いを実感でき、かつ沿線の集落が限界化したことを直視させられる地点である。だが、田植えのころになると、谷間の奥まで見事に苗が続いていた。米作を止めない人々がいて、それを可能とする地域社会が死に絶えたのではない、と思うしかない。

地方に住む人々にとって、地域内での移動手段は今、車が圧倒的な重

みを占める。昔なら路線バスが走っていた地域では、運行本数と利用者が競うように減り、廃線に至ったことは、『球形の荒野』で触れた。ローカル鉄道線が廃止に追い込まれた現実とは、初乗り区間一覽でも確認できる。

地方と東京という関係に視点を変えると、飛行機と新幹線の比重が高くなる。とりわけ、北海道、山陰、四国、九州に至っては、飛行機の利用が決定的に多くなる。清張が鉄道の登場する作品を盛んに書いた昭和時代は、長距離列車中心の旅があった。変化したのは、速度、効率性を求める時代の要請からであり、経営的に立ち行かなくなった交通機関が舞台から去るのは致し方ないところである。

県庁所在地に絞れば、東京で暮らす人々は、羽田を立って地方の飛行場に降り立つまで窓から人々の暮らしを見る機会はない。飛行場に降りて、瞬時、遠い、暑い、寒いなどの印象を抱いて、用事が終われば早々に帰京する。新幹線もまた遮音壁やトンネルが増えた結果、車窓観察の機会は減ってしまった。

江戸時代、江戸表と国元という言葉があった。参勤交代の駕籠に乗った殿様は、街道脇ではいつくばる庶民を見ていたであろうか。早飛脚で送られる情報は、街道沿いの風物が盛り込まれただろうか。江戸表と国元しか見ていないのは、今の政治家、役人、メディア人の有り様でもあらう。

東京から地方に向かう際、その地方の手前にも先にも別の地方がある。その横にも地方がある。そうした意識というか、国土観が極めて薄くなった時代である。地方と地方との間の連絡も細ったと思う。例えば、大阪から新潟に向かう際、昔は東海道、北陸、信越線をたどる特急が何

本も出ていた。今は、東京へ出て新幹線で行くように誘導されている。高速道路にしても、山陰地方同士のつながりは薄く、山陽側からのルートばかりだ。

日本の交通ネットワークは過剰なまでに東京中心となり、代替が効かない方向にある。そのことを意識するうえでも清張作品を読む意義は大きい。地方なくしては国土の発展はないと思う人は、あの時代から何がどう変わったか、今から何が必要なのか、と考えさせられるであらう。

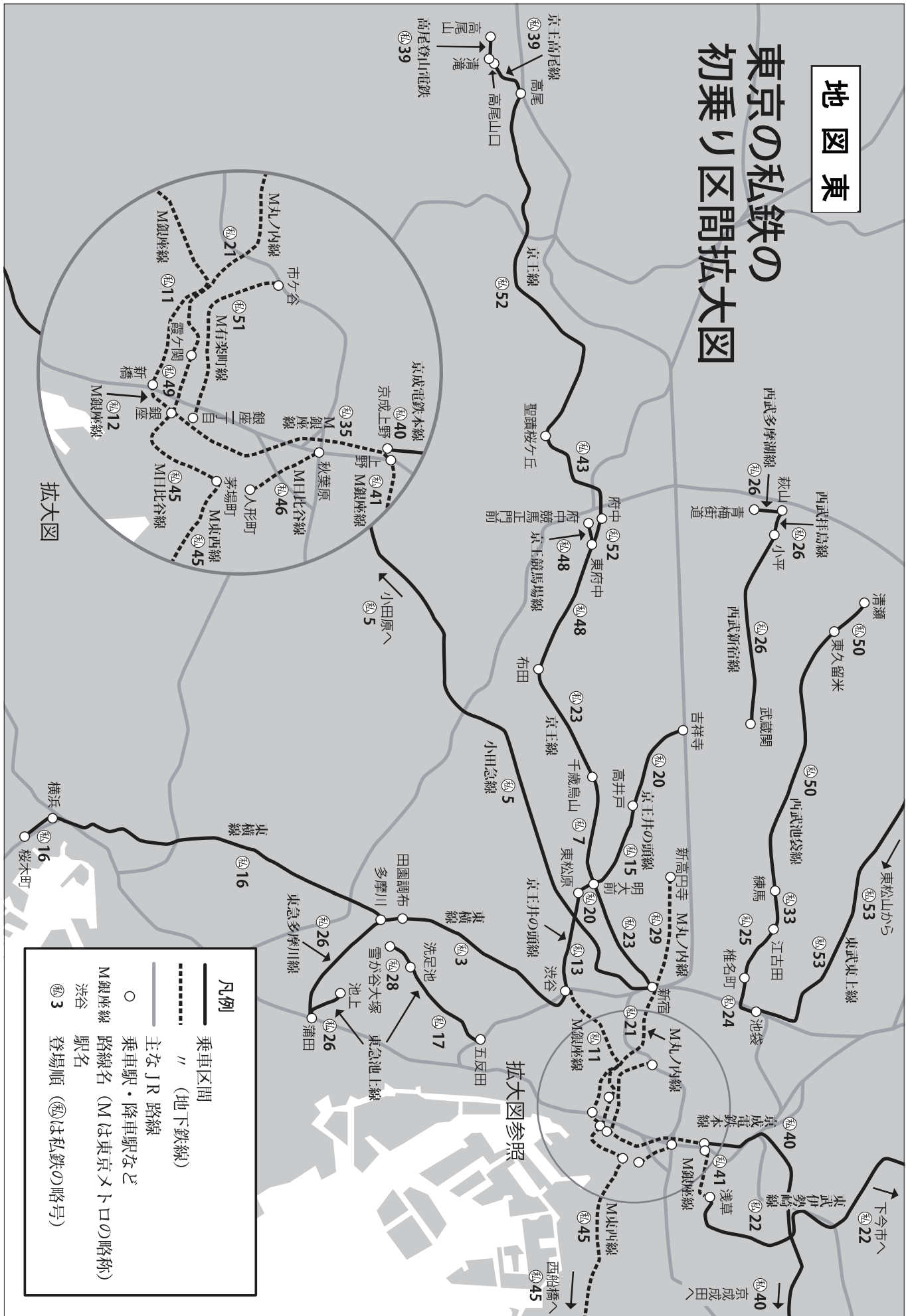
二〇一六年六月

《注》

- 1 漱石は1895(明治二八)年から96年にかけて松山中学で教鞭をとった。『坊ちゃん』は1906年に発表。
- 2 1964年9月13日紙面。中公文庫『実感的人生論』にも収録。
- 3 1971年まで駅名は「西鉄柳河」だった。
- 4 双葉文庫『対談集 発想の原点』にも収録。
- 5 小郡駅は現在、山陽新幹線も停まる新山口駅。中国山地に入ってゆく山口線と瀬戸内海沿いを走る宇部線との乗換駅でもある。
- 6 河出文庫『汽車旅12カ月』
- 7 オフィス版やフーの路線検索を見ると、6件中5件が山手線外回りを示している。時間的には遅いが、神田乗り換えもある。
- 8 オフィス版やフーの路線検索は、6件中3件ずつに分かれる。ただし、運賃は井の頭線経由が安い。
- 9 新潮文庫『眼の壁』
- 10 太宰の帥は、大宰の帥の誤記か。(新潮文庫『点と線』)
- 11 多田羅川は、多々良川を表記の方が定着している。
- 12 光文社文庫『松本清張短編集09 誤差』あとがき
- 13 女性自身の駆け出し編集者を経た後「清張番」を経験した
- 14 文春文庫版『ジョージ君のゴキゲン日記』
- 15 文春文庫の巻末。藤井は文藝春秋社で長年、清張担当の編集者をつとめた。現在は北九州市立松本清張記念館名誉館長。
- 16 大田川は、太田川の誤記か。(新潮文庫『駅路』)
- 17 郷原宏『松本清張事典決定版』の年譜61年の項
- 18 角川文庫『山峡の章』の解説
- 19 2007年10月から、テレビ東京系列で年に数回放送されている。4日程度の制限時間内に数百キロ離れた目的地にたどりつくことを目指すが、JRや高速バスを使わないという約束事がある。時に徒歩で峠越えや県境越えをする。
- 20 オフィス版やフーの路線検索では、五反田乗り換えは6件中2件。JRでの蒲田乗り換えが4件。その中にりんかい線で大井町乗り換えを示すものが1件あるが、清張の生きた時代では成立しない。
- 21 オフィス版やフーの路線検索では、多摩川線経由は6件中1件しかない。雪が谷大塚からのバス利用が有力だが、作品は電車利用である。また、当時は目蒲線時代であることも考慮した。当時の時刻表によれば、旗の台、大岡山経由より速かった。
- 22 井ノ頭線は、井の頭線の誤記か。(講談社文庫『草の陰刻』)
- 23 新潮文庫『天才画の女』の解説
- 24 文春文庫『聖獣配列』の解説で、元NHK記者手嶋龍一が書いた。

資料編

東京の私鉄の 初乗り区間拡大図



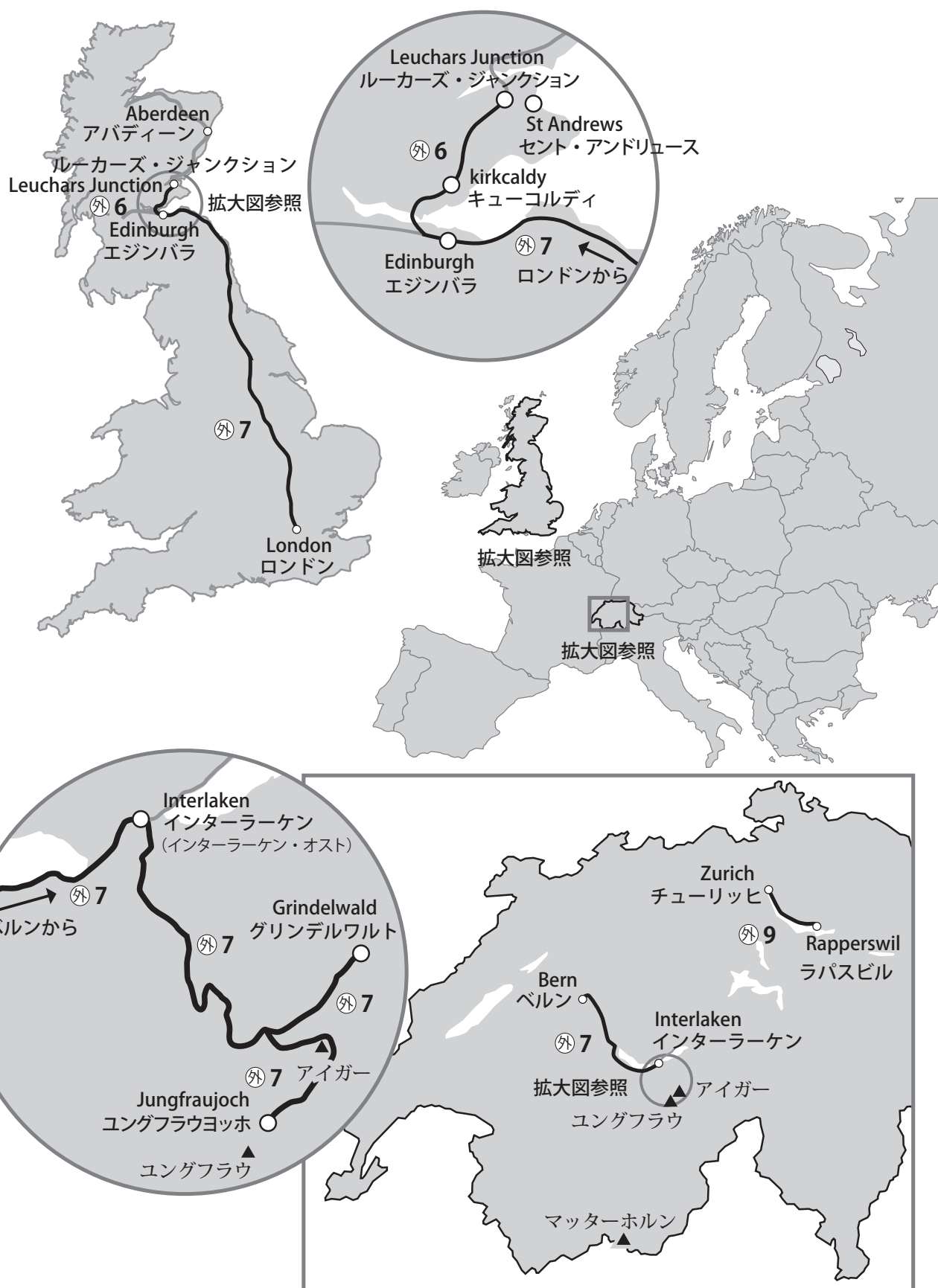
地図東の番号対照表

掲載年		作品名	線区名	乗車駅	降車駅	キロ数
55年	私3	父系の指	東横	渋谷	田園調布	8.2
56年	私5	箱根心中	小田急	新宿	小田原	82.5
57年	私7	地方紙を買う女	京王	千歳烏山	明大前	4.7
59年	私11	失踪	東京メトロ銀座	渋谷	新橋	6.3
	私12	紐	東京メトロ銀座	銀座	新橋	0.9
	私13	蒼い描点	京王井の頭	渋谷	東松原	4
60年	私15	黒い福音	京王井の頭	明大前	高井戸	3.8
	私16	黄色い風土	東横	田園調布	横浜	16
		黄色い風土	東横	横浜	桜木町	2.1
	私17	歪んだ複写	東急池上	五反田	洗足池	4.3
61年	私20	山峡の章	京王井の頭	東松原	明大前	0.9
		山峡の章	京王井の頭	高井戸	吉祥寺	4
	私21	球形の荒野	東京メトロ丸ノ内	新宿	霞ヶ関	5.8
	私22	風の視線	東武伊勢崎・日光	浅草	下今市	128
	私23	不安な演奏	京王線	新宿	明大前	5.2
		不安な演奏	京王線	千歳烏山	布田	5
62年	私24	蒼ざめた礼服	西武池袋	池袋	椎名町	1.9
	私25	連環	西武池袋	江古田	椎名町	2.4
	私26	美しき闘争	東急池上	池上	蒲田	1.8
		美しき闘争	東急多摩川	蒲田	多摩川	5.6
		美しき闘争	西武新宿	武蔵関	小平	8.5
		美しき闘争	西武拝島	小平	萩山	1.1
		美しき闘争	西武多摩湖	萩山	青梅街道	1.2
62年	私28	落差	東急池上	雪が谷大塚	洗足池	1.3
	私29	地の指	東京メトロ丸ノ内	新高円寺	新宿	4.9
65年	私33	溺れ谷	西武池袋	江古田	練馬	1.7
	私35	殺人行おくのほそ道	東京メトロ銀座	銀座	上野	4.9
67年	私39	年下の男	京王高尾	高尾	高尾山口	1.7
		年下の男	高尾登山電鉄	清滝	高尾山	1
68年	私40	Dの複合	京成	京成上野	京成成田	61.2
	私41	混声の森	東京メトロ銀座	浅草	上野	2.2
72年	私43	山の骨	京王	聖蹟桜ヶ丘	府中	4.4
77年	私45	渦	東京メトロ日比谷	銀座	茅場町	2.5
		渦	東京メトロ東西	茅場町	西船橋	18.8
	私46	馬を売る女	東京メトロ日比谷	人形町	秋葉原	1.5
82年	私48	死の発送	京王線	布田	東府中	5.5
		死の発送	京王競馬場	東府中	府中競馬正門前	0.9
83年	私49	彩り河	東京メトロ丸ノ内	霞ヶ関	銀座	1
84年	私50	信号	西武池袋	清瀬	東久留米	1.8
		信号	西武池袋	東久留米	練馬	11.8
85年	私51	聖獣配列	東京メトロ有楽町	銀座一丁目	市ヶ谷	4.2
88年	私52	黒い空	京王	東府中	府中	1.5
		黒い空	京王	聖蹟桜ヶ丘	北野	9.8
		黒い空	京王高尾	北野	高尾	6.9
92年	私53	神々の乱心	東武東上	東松山	池袋	49.9

地図外 1

欧州での清張鉄道世界の展開

注：(外) は外国の略号



地図外2 東アジアでの清張鉄道世界の展開

注：Ⓔ は外国の略号



作品中の海外での初乗り区間一覧(日本海航路を含む)

登場順	初出年月	作品名	乗車地・乗船地	降車地・下船地	初乗り者
外1	55年12月	任務	釜山	ソウル	徴兵された松本清張
外2	56年10月	市長死す	大田	裡邑※1	元陸軍中將で市長の田山与太郎
外3	63年12月	絢爛たる流離 絢爛たる流離	裡邑※1 金邑※2	金邑※2 木浦	篠原憲作主計大尉 篠原憲作主計大尉
外4	65年1月	半生の記 半生の記	博多 釜山	釜山 仙崎	出征する清張 引き揚げる清張
外5	66年3月	統監	下関	釜山	伊藤博文の妾、光香
外6	69年10月	セント・アン ドリュースの事件	エジンバラ	ルーカーズ・ ジャンクション	日本人4人のゴルフ旅行 客。殺人事件が起きる
外7	74年5月	黒の回廊 黒の回廊 黒の回廊 黒の回廊	ロンドン ベルン インターラーケン インターラーケン ユングフラウヨッホ ユングフラウヨッホ	エジンバラ インターラーケン ユングフラウヨッホ グリンデルワルト	女ばかりの欧州ツアー客。 ダブル殺人事件発生 添乗員らが謎解きに挑む
外8	84年1月	南半球の倒三角	トリヴァンドラム	マドラス	白川保雄は、大陸の南が 尖った理由を説く。
外9	85年9月	聖獣配列	チューリッヒ郊外	ラパスビル	中上可南子は、死を求めて森に入る
外10	92年5月	神々の乱心 神々の乱心 神々の乱心 神々の乱心	瀋陽 長春 咸興 錦州	長春 吉林 敦賀 瀋陽	横倉健児の宗教研究 横倉健児の宗教研究 姉を見舞う坂下キク 爆死した宇野陽太郎

※1 現在の釜山 ※2 現在の井邑か、高敞か

旧国鉄・J R の初乗り区間一覧 (p127～p132) に付く注

《注》線区名のうち、

* は 3 セクになった旧国鉄線。現在の鉄道会社と線名は以下の通り。

- 1 くま川鉄道、2 I G R いわて銀河鉄道、3 青い森鉄道、4 肥薩おれんじ鉄道、
- 5 えちごトキめき鉄道、6 あいの風とやま鉄道、7 I R いしかわ鉄道、8 しなの鉄道、
- 9 同鉄道（北しなの線）、10 えちごトキめき鉄道（妙高はねうまライン）、11 天竜浜名湖鉄道、
- 12 長良川鉄道、13 京都丹後鉄道、14 道南いさりび鉄道

※ は廃線になった J R、旧国鉄線。

- 1 幸袋（69 年廃止＝以下同）、2 青函航路（88 年）、3 信越（97 年）、4 宇高航路（88 年）、
- 5 広尾（87 年）、6 岩内（85 年）、7 高千穂（08 年）、8 筑肥（83 年）、9 倉吉（85 年）、
- 10 下河原（73 年）、11 津軽海峡（16 年）

駅名の後ろの○囲み数字は、掲載時または作品舞台としては、以下のような旧駅名であった。

ただし、旧字、異体字の変化については注を入れない。

- ① 坊中、② 門司、③ 大里、④ 西宇部、⑤ 宇部、⑥ 日奈久、⑦ 一日市、⑧ 田口、⑨ 寺井、⑩ 和倉、
- ⑪ 越後外丸、⑫ 氷川、⑬ 原町田、⑭ 丹後木津

作品中の旧国鉄・JRの初乗り区間一覧（その1）

登場順	初出年月	作品名	線区名	乗車駅	降車駅	キロ数	小計	初乗り者
【第1章】								
1	51年3月	西郷礼 西郷礼	東海道 根岸	新橋 横浜	横浜 桜木町	26.9 2	28.9	元佐土原藩士樋村雄吾 西郷礼買い付けに日向へ向かう
2	52年3月	火の記憶 火の記憶 火の記憶 火の記憶	東海道 東海道 山陽 鹿児島	東京 横浜 神戸 門司	新橋 神戸 門司 折尾	1.9 560.7 534.4 24.6	1135.6	母の不倫を疑う高村泰雄は、相手の男がいた炭鉱町を訪ねる
		火の記憶	筑豊	折尾	直方	14		
3	9月	或る「小倉日記」伝	鹿児島	折尾	久留米	83.8	83.8	田上ふじ、耕作母子の国外足跡の聞き取り取材
4	53年6月	青春の彷徨 青春の彷徨	鹿児島 豊肥	久留米 熊本	熊本 阿蘇①	82.7 49.9	132.6	木田と佐保子の心中旅行
5	54年2月	湖畔の人	中央	富士見	上諏訪	19	19	記者矢上の転勤引き継ぎ
6	4月	大臣の恋	鹿児島	門司港②	門司③	5.5	5.5	布施英造の門司税関時代の思い出
7	7月	ひとり旅 ひとり旅 ひとり旅	日豊 鹿児島 肥薩	小倉 熊本 八代	大分 八代 人吉	132.9 35.7 51.8	220.4	田部正一の竹製品売込み旅の帰途 愛人との心中旅行
8	9月	恐喝者	湯前線*1	人吉温泉	湯前	24.8	24.8	ダム建設現場に向かう尾村凌太
9	12月	断碑 断碑 断碑 断碑 断碑	桜井 関西 奈良 総武 外房 内房	三輪 奈良 木津 両国 千葉 蘇我	奈良 木津 京都 千葉 蘇我 五井	18 7 34.7 35.9 3.8 9.3	108.7	旧制中学卒業で、代用教員の木村卓治は仕事の合間に 京都大学に行って考古学を学ぶ 上総国分寺跡見学で久保シズエと知り合い結婚する
10	55年9月	父系の指 父系の指 父系の指	茨備 茨備 茨備	広島 備後落合 備中神代	備後落合 備中神代 生山	114.5 44.6 24.6		
		父系の指	山手	品川	渋谷	7.2	190.9	私は豊かな暮らしの従兄弟を訪ねる
【第2章】								
11	55年12月	張込み	長崎	鳥栖	佐賀	25	25	柚木刑事の犯人追跡行
12	56年8月	顔 顔	山陰 山手	幡生 渋谷	温泉津 代々木	235.9 2.7	238.6	俳優井野良吉の愛人殺害行 劇団からの帰り

作品中の旧国鉄・JRの初乗り区間一覧（その2）

登場順	初出年月	作品名	線区名	乗車駅	降車駅	キロ数	小計	初乗り者
13	9月	九十九里浜 九十九里浜 九十九里浜	総武 外房 東金	御茶ノ水 蘇我 大網	両国 大網 東金	2.8 19.1 5.8	27.7	文化人となった古月は異母姉に会いに行く
14	11月	声 声 声	中央 山手 中央	水道橋 代々木 新宿	代々木 新宿 国分寺	6.2 0.7 21.1	28	元新聞社交換手の高橋朝子は、声の主を知らうとして、誘い出される
15	57年4月	地方紙を買う女 地方紙を買う女	中央 伊東	国分寺 熱海	甲府 伊東	102.7 16.9	119.6	潮田芳子の殺人行 作家を殺害する旅は失敗する
16	5月	遠くからの声	幸袋※1	小竹	幸袋	4.9	4.9	津谷敏夫は、義妹啓子を炭鉱町に訪ねる
17	8月	白い闇 白い闇 白い闇 白い闇	東北 東北 東北*2 東北*3	上野 岩沼 盛岡 目時	日暮里 盛岡 目時 青森	2.2 201.1 82 121.9		小関信子は失踪した夫の行方を探しに行く
18	8月	捜査圏外の条件	宇部	宇部④	宇部新川⑤	6.1	6.1	夫を殺害した高瀬俊吉と十和田湖へ向かう 黒井忠男は復讐を準備するため東京を長年離れる
【第3章】								
19	57年12月	眼の壁 眼の壁 眼の壁 眼の壁 眼の壁 眼の壁 眼の壁 眼の壁 眼の壁 眼の壁 眼の壁	東北 中央 中央 中央 中央 中央 中央 中央 中央 中央 中央	東京 神田 名古屋 甲府 上諏訪 岡谷 塩尻 小淵沢 塩尻 松本	神田 水道橋 瑞浪 富士見 岡谷 塩尻 木曽福島 佐久海ノ口 松本 築場	1.3 2.1 50.1 48.8 8.5 27.7 41.7 39.4 13.3 46.3 83	362.2	萩崎竜雄は、東京駅で会計課長と別れ、帰宅。この間に課長はパクリ屋の詐欺に遭う 射殺犯でパクリ屋一味、黒池健吉の逃走 パクリ屋を追う弁護士の拉致殺人事件で、警視庁の井手警部補が中央線回りで木曽谷へ 萩崎は黒池の故郷を見に行く 黒池は殺され、萩崎はその遺体遺棄現場を見に行く
20	58年1月	点と線 点と線 点と線 点と線	青函航路※2 函館 根室 横須賀	青森 函館 滝川 大船	函館 滝川 釧路 鎌倉	113 369.8 308.4 4.5		萩崎は証人を連れて一味の根城へ乗り込む 某省の石田芳男部長は、安田辰郎のデリバイ工作のため北海道出張をする
21	2月	拐帯行	鹿児島*4	八代	日奈久温泉⑥	10.1	10.1	三原警部補が安田の妻亮子を訪ねる
22	4月	氷雨	山手	新宿	目白	3.6	3.6	森村隆志は会社の金を拐帯、西池久美子と死地を求める
23	6月	装飾評伝	青梅	立川	河辺	15.9	15.9	割烹料理屋女中、加代の帰宅
24	6月	真贋の森	筑豊	直方	新飯塚	12.8	12.8	画家芦野信弘は、青梅町のはずれに名和静治を訪ねる
25	59年8月	紐	津山	岡山	津山	58.7	58.7	宅田伊作は、贋作家酒匂鳳岳を発掘に九州へ 夫殺しの梅田静子は、遺体を多摩川に置いて帰郷する

[illegible]

作品中の旧国鉄・JRの初乗り区間一覧（その3）

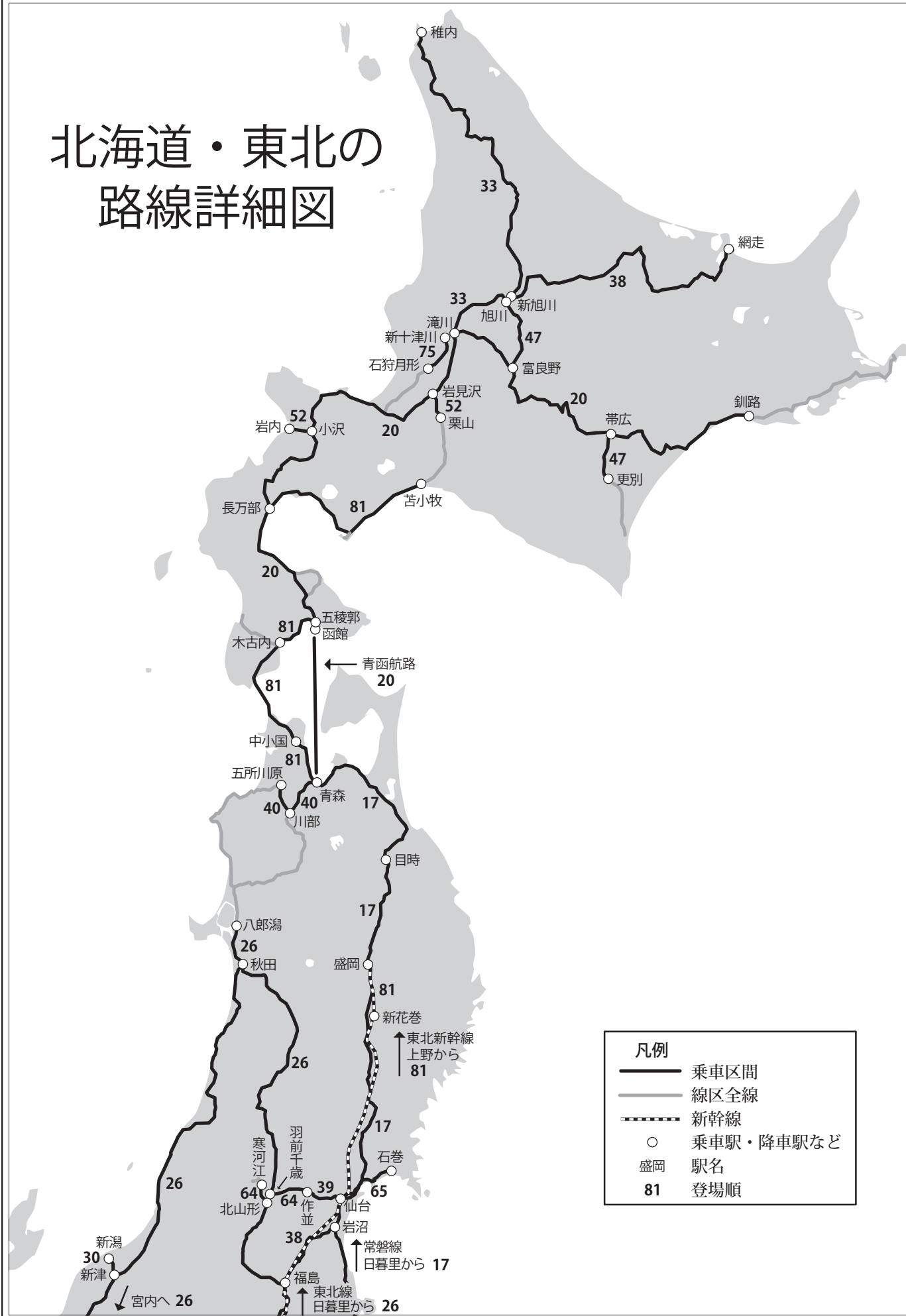
登場順	初出生月	作品名	線区名	乗車駅	降車駅	※ 数	小計	初乗り者
36	61年4月	砂の器 砂の器 砂の器 砂の器 砂の器 砂の器 砂の器 砂の器 砂の器	山手 福知山 山陰 山陰 木次 赤羽 姫新 宇野 宇高 予讃 土讃 北陸	目白 尼崎 福知山 松江 松江 宍道 赤羽 美作江見 岡山 宇野 高松 多度津 米原	池袋 福知山 松江 宍道 出雲三成 池袋 津山 宇野 高松 多度津 琴平 大聖寺	1.2 106.5 263.4 17 41.5 5.5 23.3 32.8 18 32.7 11.3 130.2		刑事今西栄太郎は迷宮入りの日、渋谷で飲んで帰宅被害者三木謙一の身元が分かり、かつての勤務地へ今西は山陰を延々と乗り、いったん松江で泊まる宍道湖畔から中国山地へ入る 三浦恵美子が事件に関係ありとみて行方を追う
37	6月	田舎医師 田舎医師	木次 木次	備後落合 八川	八川 出雲三成	25.6 14.8	683.4 40.4	今西は和賀英良の出生の秘密を探りに行く 杉山良吉は九州からの出張帰りに父の故郷へ行く
38	6月	わるいやつら わるいやつら	東北 石北	福島 新旭川	岩沼 網走	61.4 234	295.4	戸谷信一は逃げた女を追って北関東や東北を駆け回る多くの罪を背負わされて無期刑となり、網走へ向かった
39	12月	山峡の章	仙山	仙台	作並	28.7	28.7	朝川昌子は、偽装された夫と妹の心中遺体を確認に行く
【第6章】								
40	61年12月	風の視線 風の視線	奥羽 五能	青森 川部	川部 五所川原	31.1 21.5	52.6	写真家奈津井久夫は、野々村千佳子との新婚旅行に取材も入れる
41	12月	不安な演奏 不安な演奏 不安な演奏 不安な演奏 不安な演奏 不安な演奏	紀勢 関西 紀勢 身延 身延 二俣*11	新宮 名古屋 亀山 亀山 身延 富士 掛川	尾鷲 亀山 尾鷲 沼久保 富士 遠州森	56.9 59.9 123.3 26.6 10.7 12.8		選挙違反もみ消しグループの南田広一区議の視察旅行 南田の娘菊子は父親殺害の報を受けて紀伊半島へ 雑誌編集者宮脇平助は、選挙違反隠ぺい事件で奔走
42	62年3月	蒼ざめた礼服 蒼ざめた礼服 蒼ざめた礼服	東北 東北（田端経由） 山手 横須賀	神田 日暮里 田端 鎌倉	上野 田端 池袋 横須賀	2.3 1.3 5.2 11.4	290.2	片山幸一は殺人事件の聞き込み取材に行く
43	10月	連環	内房	五井	浜金谷	54.7	54.7	片山幸一の海苔工場周辺取材
44	11月	時間の習俗 時間の習俗	南武 成田	川崎 成田	立川 佐原	35.5 26.9	62.4	笹井誠一の殺人行 峰岡周一の殺人行 峰岡逮捕に向かう三原警部補と鳥飼刑事
45	11月	落差 落差	土讃 土讃	琴平 高知	高知 窪川	115.3 72.1	187.4	教科書売込みに向かう細貝景子
46	63年1月	影 影	伯備 姫新	倉敷 新見	新見 中国勝山	64.4 34.3	98.7	落魄の身の笠間久一郎が湯原温泉に向かう

登場順	初出年月	作品名	線区名	乗車駅	降車駅	キロ数	小計	初乗り者
47	4月	人間水域	富良野	旭川	富良野	54.8		記者島料理―は水墨画新人の森沢由利子に会いに行く
		人間水域	広尾※5	更別	帯広	35.4	90.2	由利子の少女時代の思い出
48	5月	塗られた本	青梅	河辺	奥多摩⑫	21.3	21.3	美貌の出版社社長紺野美也子は失踪した夫を探しに行く
49	12月	彩霧	日豊	霧島神宮	隼人	15.3		銀行員安川信吾は横領した金で女と南九州を遊びまわる
		彩霧	横浜	町田⑬	東神奈川	22.9	38.2	小野啓子は安川と落ち合い、逃避行の予定だったが...
50	12月	けものみち	北陸	能美根上	動橋	16.5		刑事久恒は公団幹部の愛人死亡事件を追って北陸へ
		けものみち	北陸	動橋	大聖寺	7.3	23.8	
51	64年1月	陸行水行	伯備	新見	備中神代	6.4		狂気じみた邪馬台国マニア浜中浩三の詐欺まがいの旅
		陸行水行	伯備	生山	伯耆大山	4.3	49.4	
52	65年2月	屈折回路	岩内※6	小沢	岩内	14.9		ポリオ流行の原因調査に取りつかれた私の北海道行
		屈折回路	室蘭	岩見沢	栗山	19.5	34.4	
【第7章】								
53	65年5月	草の印刻	予讃	伊予大洲	宇和島	48.1		地検支部長瀬川良一は放火の捜査で松山と行き来多数
		草の印刻	予讃	伊予大洲	松山	55.1	103.2	
54	8月	殺人行おくのほそ道	豊肥	大分	豊後竹田	60		倉田麻佐子は、大名家の叔父の地元で妻隆子の意外な行動を聞く
		殺人行おくのほそ道	豊肥	豊後竹田	宮地	34.6		叔母は昔レイプされた男に付きまとわれ、脅されていた
		殺人行おくのほそ道	東海道新幹線	東京	京都	513.6		隆子を助けたい叔父を訪ねる
		殺人行おくのほそ道	東北	田端	赤羽	6.1	614.3	
55	11月	すずらん	小海	佐久海ノ口	小諸	39.5	39.5	北海道に咲くスズランを不在証明に使う画家の犯罪
56	66年3月	統監	御殿場	駿河小山	沼津	35.6	35.6	伊藤博文の世話をする女中の意外な元勲批判
57	67年4月	草の浮船	高山	富山	高山	89.4		野暮つたい国史科助教授小関久雄だが、なぜか心を寄せる近村達子との列車旅行
		草の浮船	高山	高山	岐阜	136.4	225.8	偽装倒産した元経営者たちは、自らの行動を隠す一方で仲間を殺害する。
58	4月	三重葉脈	大阪環状	鶴橋	天王寺	3		
		三重葉脈	関西	亀山	木津	67		
		三重葉脈	関西	奈良	天王寺	37.5		
		三重葉脈	東海道新幹線	京都	新大阪	39	146.5	
59	5月	史疑	越美南*12	美濃白鳥	美濃太田	66.1	66.1	比良直樹は福井県山中で男を殺害後、岐阜県へ山越え
60	7月	古本	福塩	福山	府中	23.6	23.6	落ち目の作家長府敦治は府中で格好のネタ本に出会う
61	68年3月	Dの複合	山陰	京都	綾部	76.2		作家伊瀬忠隆は、浦島や羽衣伝説取材に向かう
		Dの複合	舞鶴	綾部	西舞鶴	19.5		
		Dの複合	宮津*13	西舞鶴	夕日ヶ浦木津温泉⑭	61.1		
		Dの複合	播但	和田山	姫路	65.7		丹後での取材後淡路、紀伊に足を伸ばす
		Dの複合	内房	浜金谷	九重	27.7	262.5	補陀落国渡海説話の取材に房総半島の先まで行く
		Dの複合	山陰	綾部	福知山	12.3		鳥取に行く際に通過した区間
62	9月	混声の森	鳥羽	鳥羽	多気	29.1	29.1	私立女子大理事長の太島圭蔵は、愛人の職員と旅行した
63	69年3月	通過する客	日光	今市	宇都宮	33.9	33.9	山根波津子は勝手放題の米国婦人の通訳で日光へ行く

作品中の旧国鉄・JRの初乗り区間一覧（その4）

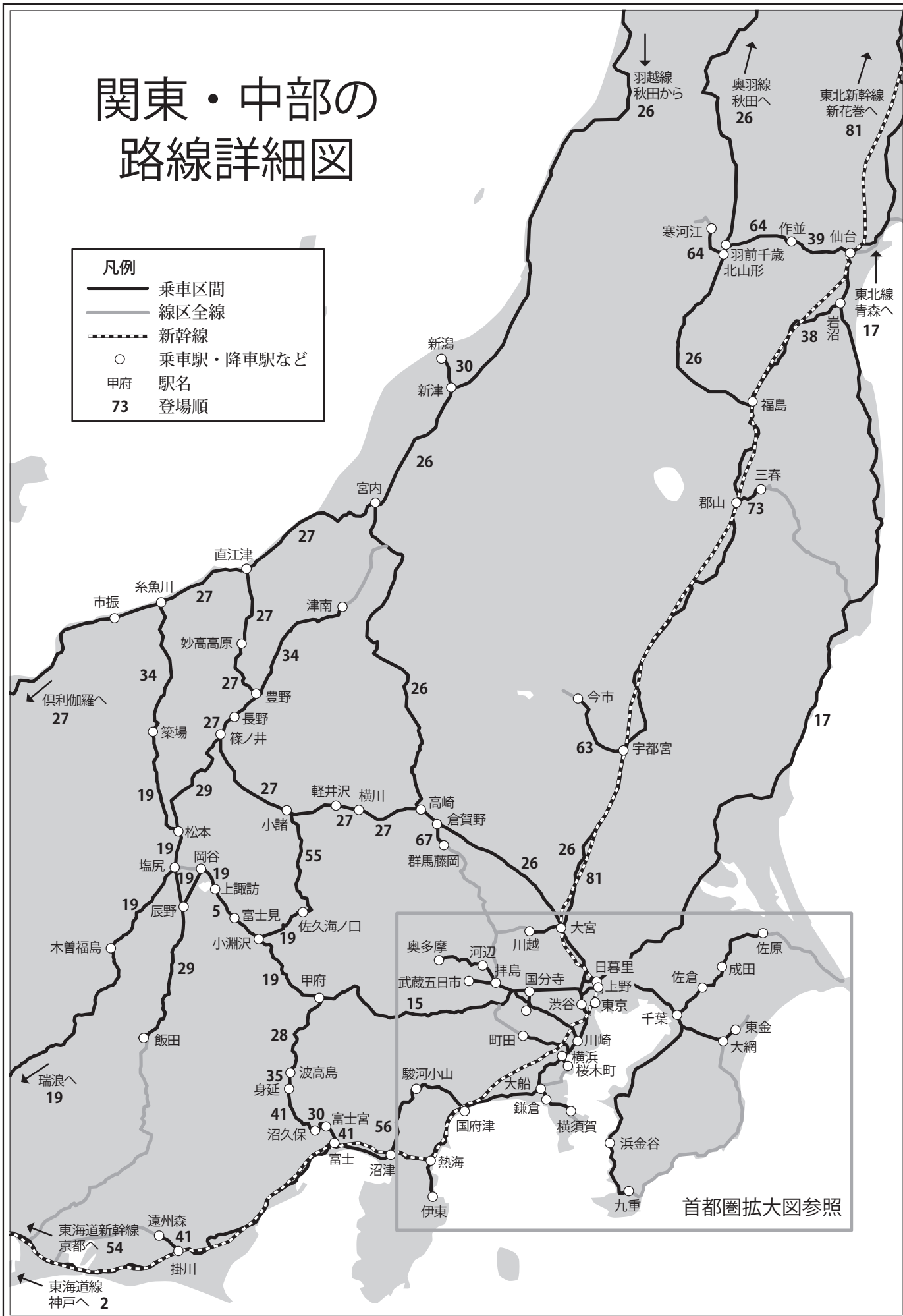
登場順	初出年月	作品名	線区名	乗車駅	降車駅	乗車回数	小計	初乗り者
64	71年5月	留守宅の事件 留守宅の事件	仙山 左沢	作並 北山形	羽前千蔵 寒河江	29.3 15.3	44.6	妻殺しの栗山敏夫は、出張と見せかけて東北各地を旅行しながら、不在証明を作る
65	72年7月	山の骨 山の骨	仙石 五日市	仙台 武蔵五日市	石巻 拝島	48.5 11.1	59.6	元高級官僚谷井秀雄一家の動きを不審に見た警視庁は、元女中へ聞き取りに行く。谷井は遺骨処理で多摩山中へ
66	72年11月	表象詩人 表象詩人	日豊 高千穂※7	大分 延岡	延岡 川水流	123.3 17.1	140.4	貧しい文学青年だった三輪は年老いて、仲間の秋島明治を日向に訪ねる。上司の美人妻殺しの真犯人が分かる。
67	73年11月	告訴せず	八高	群馬藤岡	倉賀野	7.3	7.3	小豆で儲けた木谷省吾は愛人と八塩温泉から帰る
68	74年10月	火の路	阪和線	天王寺	和泉府中	20.9	20.9	古代史助手の高須通子は学問で尊敬する海津伸六宅へ
【第8章】								
69	76年7月	渡された場面 渡された場面 渡された場面	筑肥※8 唐津	東唐津 姪浜 多久	姪浜 博多 唐津	39.3 11.7 25.1	76.1	下坂は博多・中州で働く愛人のもとへ通う A県警の刑事は、殺された真野信子の実家周辺を洗う
70	77年1月	渦	総武	千葉	佐倉	16.1	16.1	視聴率の記録用紙回収の主婦は佐倉から通っていた
71	78年3月	状況曲線 状況曲線	湖西 太多線	近江塩津 美濃太田	山科 多治見	74.1 17.8	91.9	ゼネコン専務味岡正弘は北陸視察の後京都へ向かった 殺された味岡の足跡を追うのは静岡県警の矢田部護親
72	7月	百円硬貨	倉吉※9	倉吉	山守	20	20	大金を拐帯した村川伴子は駅について小銭で失敗する
73	10月	天才画の女	磐越東	郡山	三春	11.9	11.9	小池直吉は天才画の女の秘密を探ろうと、彼女の故郷へ
74	80年2月	骨壺の風景 骨壺の風景	山陽新幹線 山陽新幹線	博多 小倉	小倉 新下関	67.2 19	86.2	清張は貧困時代を共にした祖母の遺骨の在りかを知る
75	81年2月	不運な名前	札沼線	石狩月形	新十津川	30.2	30.2	鷹札刃にされた男や典獄を偲ぶ人が石狩河畔で出会う
76	82年	死の発送	中央線支線 三下川原線※10	国分寺	東京競馬場前	5.6	5.6	底井武八は殺人事件に競馬関係者がいると見た
77	84年6月	信号	呉	海田市	呉	20	20	百貨店員白石信一は文学界の親分穂波伍作を訪ねる
78	87年3月	数の風景 数の風景 数の風景	山陰 久大 山陰 三江	宍道 由布院 温泉津 江津	大田市 豊後森 大田市 粕淵	48.3 25.9 20.7 48.1		設計士板垣貞夫は石見銀山の観光開発を頼まれ現地へ 事業に失敗した谷原泰夫は死地を求めて九州へ来た 谷原は送電線の補償交渉の依頼人となるため、山陰各地を列車で移動する
79	92年4月	一九五二年日航機「墜落」事件	成田	佐倉	成田	13.1	13.1	下坂孝一は、もく星号事故で死亡した女性の墓を探す
80	5月	神々の乱心 神々の乱心 神々の乱心	福塩 紀勢 川越	吉舎 南部 大宮	塩町 白浜 川越	10.7 19.1 16.1	45.9	萩園泰之は、旧満州の麻薬事件の詳細を知ろうと広島へ 浅草の木炭問屋支配人が持ってきた新聞で身元判明 特高係長吉屋謙介は、吉見百次近くの遺体発見現場へ
81	9月	犯罪の回送 犯罪の回送 犯罪の回送 犯罪の回送 犯罪の回送	室蘭 江差※14 海峡※11 津軽 東北新幹線 東北新幹線	苫小牧 五稜郭 木古内 中小国 上野 新花巻	長万部 木古内 中小国 青森 新花巻 盛岡	135.2 37.8 87.8 31.4 496.4 35.3		北浦市長春田英雄はズルトレで東京出張に行く 帰郷中の同行市議団は市長の訃報で東京へ引き返す 警視庁の2刑事は北浦市へ捜査に向かう

北海道・東北の 路線詳細図



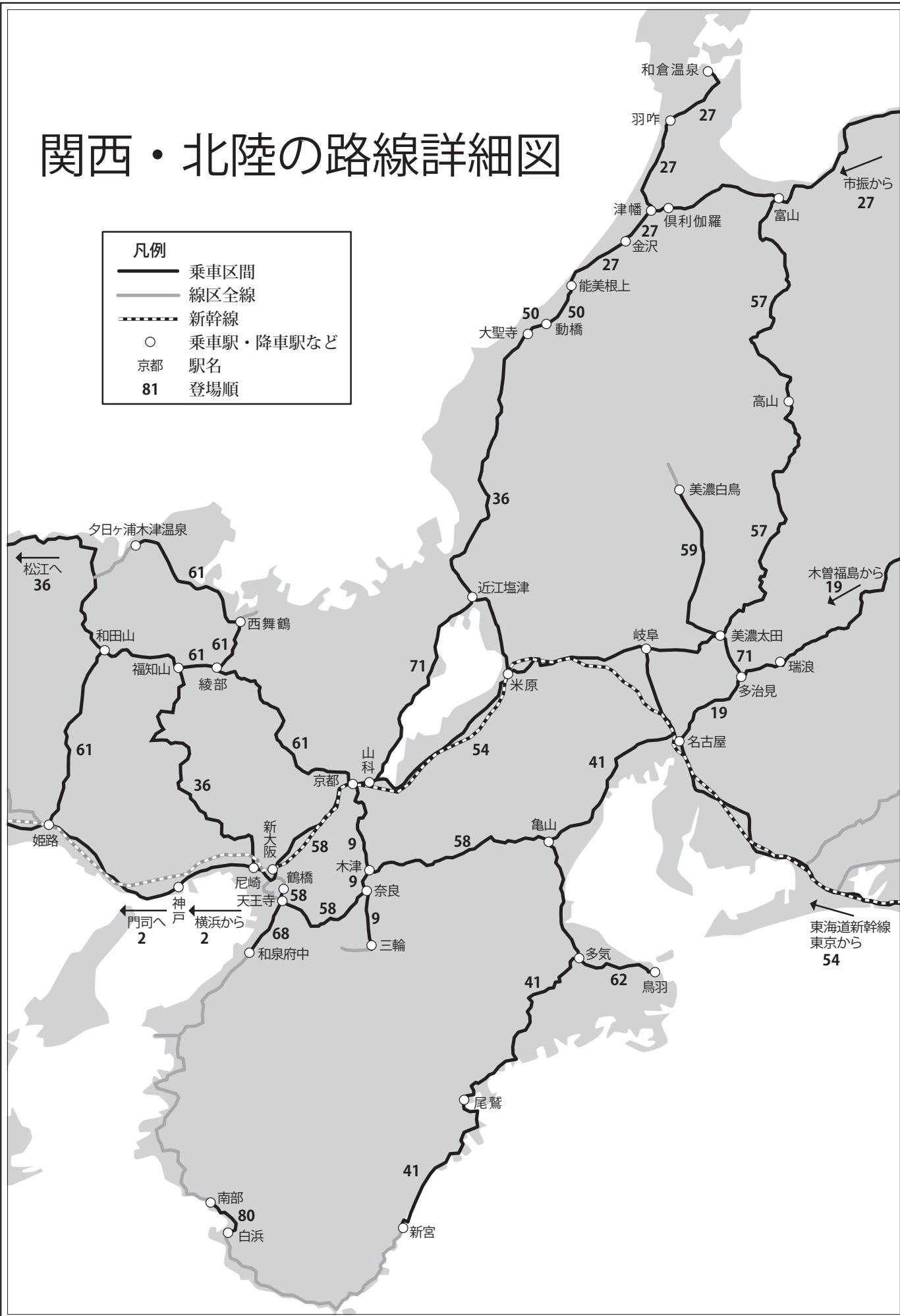
関東・中部の 路線詳細図

凡例	
	乗車区間
	線区全線
	新幹線
	乗車駅・降車駅など
甲府	駅名
73	登場順

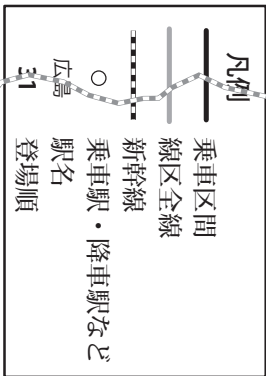


関西・北陸の路線詳細図

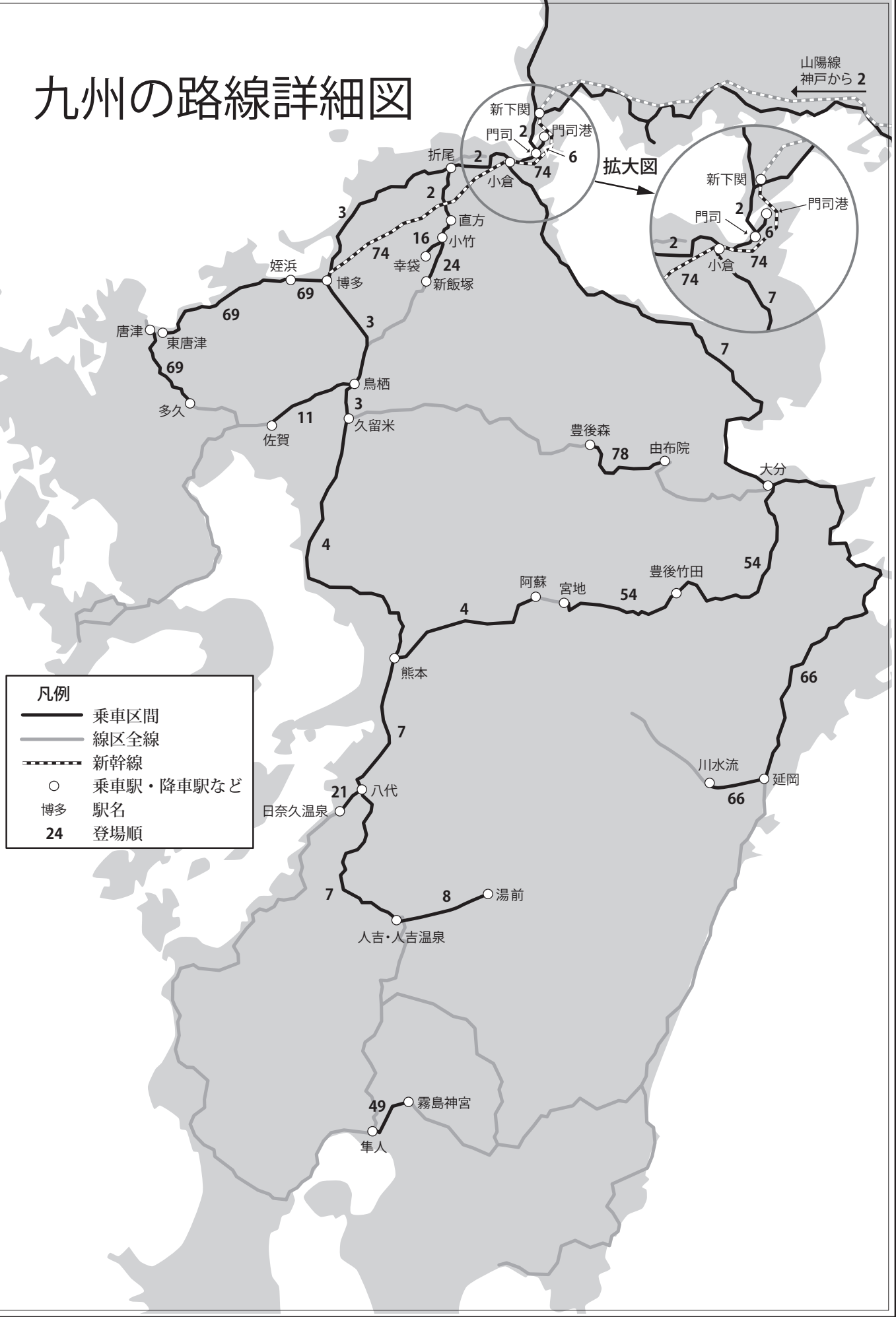
凡例	
	乗車区間
	線区全線
	新幹線
	乗車駅・降車駅など
京都	駅名
81	登場順



路線詳図



九州の路線詳細図



作品中の私鉄の初乗り区間一覧（その1）

登場順	初出年月	作品名	線区名	乗車駅	降車駅	キロ数	小計	初乗り者
【第1章】								
私1	52年9月	或る小倉日記伝	西鉄天神大牟田	西鉄久留米	西鉄柳川	19.8	19.8	田上ふじ、耕作母子の鵜外足跡の聞き取り取材
私2	54年7月	ひとり旅	京阪	天満	丹波橋	40		田部正一の竹製品売込み旅
		ひとり旅	京阪石山坂本	浜大津	坂本	7.4	47.4	田部は初めて琵琶湖を見た
私3	55年9月	父系の指	東横	渋谷	田園調布	8.2	8.2	貧しい私は裕福な従兄弟を訪ねる
私4	11月	青のある断層	伊豆箱根鉄道駿豆	三島	修善寺	19.8	19.8	画廊店主の奥野は画家姉川滝治に創作のヒントを与える
【第2章】								
私5	56年5月	箱根心中 箱根心中 箱根心中	小田急 箱根登山鉄道 箱根登山鉄道鋼索	新宿 小田原 上強羅	小田原 箱根湯本 早雲山	82.5 6.1 0.2		中畑健吉、喜玖子の従兄妹同士の日帰り旅は思わぬ落とし穴が待ち受けていた
私6	8月	顔 顔 顔	京阪京津 京阪京津※1 比叡山鉄道	京阪三条 御陵 ケーグル坂本	御陵 浜大津 ケーグル延暦寺	3.9 7.5 2		
私7	57年4月	地方紙を買う女	京王	千歳烏山	明大前	4.7	4.7	潮田芳子が渋谷のバーへ通う通勤路
【第3章】								
私8	57年12月	眼の壁 眼の壁	近鉄名古屋 近鉄山田	名古屋 伊勢中川	伊勢中川 宇治山田	78.8 28.3		萩崎に協力する新聞記者田村満吉は、右翼の人物が事件に関係ありと見て、会いに行く
私9	58年1月	点と線 点と線 点と線 点と線 点と線	西鉄宮地岳*1 西鉄宮地岳*1 西鉄宮地岳*1 西鉄宮地岳*2 江ノ島電鉄	貝塚① 西鉄香椎 西鉄香椎 和白 新宮 鎌倉	西鉄香椎 和白 新宮 西鉄福岡 極楽寺	3.6 3.6 3.8 7.2 2.4		
私10	4月	日光中宮祠事件 日光中宮祠事件	東武日光軌道※3 東武日光鋼索鉄道※4	日光駅前 馬返	馬返 明智平	9.6 1.2		日光で起きた一家強盗殺人事件を10年後、隣県の刑事たちが真相に迫り、真犯人探しに向かう
私11	59年6月	失踪	東京メトロ銀座	渋谷	新橋	6.3	10.8	
私12	8月	紐	東京メトロ銀座	銀座	新橋	0.9	0.9	強殺事件の被告は、この先どこに向かったかが争われた 夫殺害の梅田静子は、都心見物のアリバイ作りをした
【第4章】								
私13	59年8月	蒼い描点 蒼い描点	京王井の頭 秋田中央交通※5	渋谷 八郎潟	東松原 五城目	4 3.8	7.8	編集者椎原典子は、作家村谷阿沙子の家へ原稿督促に行く
私14	60年1月	ゼロの焦点 ゼロの焦点 ゼロの焦点 ゼロの焦点	北陸鉄道能登※6 北陸鉄道石川※7 北陸鉄道石川 北陸鉄道能美※8	羽咋 白菊町 野町 鶴来	能登高浜 野町 鶴来 新寺井	14.6 0.8 13.8 16.7		
私15	6月	黒い福音	京王井の頭	明大前	高井戸	3.8	3.8	室田佐知子は、被害後遠回りして、姿かたちを変える 生田世津子はカトリック教会のトルベックに呼び出される

作品中の私鉄の初乗り区間一覧（その2）

登場順	初出年月	作品名	線区名	乗車駅	降車駅	キロ数	小計	初乗り者
【第5章】								
私16	60年8月	黄色い風土 黄色い風土 黄色い風土	名鉄本 名鉄犬山 東横	名鉄名古屋 枇杷島分岐点 田園調布	枇杷島分岐点 犬山遊園 横浜 桜木町	3.3 26.1 16 2.1		記者若宮四郎は、木曽川の転落死事件を聞き込む 記者若宮は鷹札団の一味ながら美しさに魅かれる沈丁花の女から話を聞こうとする
私17	12月	壺んだ複写	東急池上	五反田	洗足池	4.3	4.3	税務署の不正を追う記者田原典太は課長の愛人を探す
私18	61年2月	万葉翡翠	富士急富士登山鉄道	富士山	大月	23.6	23.6	少年が殺人犯に渡した富士山麓の花の種子が事件発覚に
私19	4月	砂の器 砂の器 砂の器	近鉄奈良 近鉄橿原 近鉄吉野	近鉄奈良 大和西大寺 橿原神宮前	大和西大寺 橿原神宮前 吉野	4.4 23.8 25.2		被害者の元警察官三木謙一は吉野へ旅する
		砂の器	北陸鉄道山中※10	大聖寺	山中温泉	8.9	62.3	刑事今西栄太郎は和賀英良の育った村を訪ねる
私20	12月	山峡の章 山峡の章	京王井の頭 京王井の頭	東松原 高井戸	明大前 吉祥寺	0.9 4	4.9	朝川昌子は夫や妹を殺害した一味の病院に乗り込む
私21	12月	球形の荒野 球形の荒野 球形の荒野	近鉄京都 近鉄大阪 近鉄奈良	京都 鶴橋 布施	大和西大寺 布施 大和西大寺	34.6 3 22.3		医学者芦村亮一は、学会の後京都から奈良へ観光に行く 新聞記者添田彰一は、恋人野上久美子の父で元外交官が絡む事件で殺害された男の身元調べに奈良へ行く
		球形の荒野	東京メトロ丸ノ内	新宿	霞ヶ関	5.8	65.7	荻窪に住む久美子は新宿乗り換えで官庁街に通勤する
【第6章】								
私22	61年12月	風の視線 風の視線 風の視線	大分交通宇佐参宮※11 東武伊勢崎 東武日光	宇佐 浅草 東武動物園	豊後高田 東武動物園 下今市	4 41 87.4	132.4	写真家奈津井久夫は国東半島の富貴寺の取材に来る 元伯爵家の嫁竜崎亜矢子は新聞社の事業部デスク久世俊介との愛が貫けぬことを伝えるために旅へ誘った
私23	12月	不安な演奏 不安な演奏 不安な演奏	京王線 京王線 遠州鉄道	新宿 千歳烏山 新浜松	明大前 布田 西鹿島	5.2 5 17.8	28	選挙違反絡みの殺人事件に関係しそうな人物が布田駅周辺を立ち回るため、雑誌編集者宮脇平助は現地を踏む 逃亡する一味を追って宮脇は奥遠州まで足を伸ばす
私24	62年3月	蒼ざめた礼服	西武池袋	池袋	椎名町	1.9	1.9	怪しげな業界紙記者片山幸一は、変死事件で周辺取材
私25	10月	連環	西武池袋	江古田	椎名町	2.4	2.4	笹井誠一は九州から来た愛人を江古田に住まわせる
私26	10月	美しき闘争 美しき闘争 美しき闘争	東急池上 東急多摩川 西武新宿	池上 蒲田 武蔵関	蒲田 多摩川 小平	1.8 5.6 8.5		井沢恵子は知り合いの作家梶村久子のと闘病生活を支えようと、女流作家らにカンパ呼びかけをして回る 井沢は梶村の病院を訪ねる。見つからずに右往左往する
		美しき闘争	西武拝島 西武多摩湖	小平 萩山	萩山 青梅街道	1.1 1.2	18.2	
私27	11月	時間の習俗 時間の習俗	近鉄大阪 近鉄大阪	大阪上本町 布施	鶴橋 伊勢中川	1.1 104.8	105.9	犯人峰岡周一のゲイ趣味をつかむため、警視庁の2刑事は大阪から名古屋に移動、夜の世界で聞き込みを進める
私28	11月	落差	東急池上	雪が谷大塚	洗足池	1.3	1.3	歴史学者島地章吾は人妻佐野明子を訪ねた後五反田へ

登場順	初出年月	作品名	線区名	乗車駅	降車駅	※数	小計	初乗り者
私29	62年12月	地の指	東京メトロ丸ノ内	新高円寺	新宿	4.9	4.9	精神病院の不正と殺人事件を追う2刑事が聞き込みの後
私30	63年12月	絢爛たる流離	大分交通那馬溪※12	中津	柿坂	24.8	24.8	山口県 of 古物商足立二郎は借金相手を遠出に誘い殺害
私31	64年1月	陸行水行	大分交通豊州※13	豊前善光寺	豊前四日市	4.1	4.1	邪馬台国やニア族中浩三は四国から海を渡ってくる
私32	65年1月	半生の記	京福電鉄鋼索	ケーナル八瀬	ケーナル比叡	1.3	1.3	清張は霽荒込みの合間、独りで雪の比叡山に登った
私33	65年2月	溺れ谷	西武池袋	江古田	練馬	1.7	1.7	業界紙記者大屋圭造はライバルの女の素性を調べに行く
私34	2月	屈折回路	寿都鉄道	黒松内	寿都	16.5		ボリ才流行の背景を知りたい私は、それを探って自殺した
		屈折回路	北海道炭礦汽船	栗山	夕張本町	30	46.5	従兄弟香取木曾一の足跡を漁村や炭坑町にたどる
			夕張鉄道※14					

【第7章】

私35	65年8月	殺人行おくのほそ道	東京メトロ銀座	銀座	上野	4.9	4.9	倉田麻佐子は、叔母の過去を知る夫人の上京を出迎える
私36	67年4月	二重葉脈	近鉄南大阪	阿部野橋	古市	18.3	18.3	偽装倒産の仲間割れ殺人で、警視庁2刑事が遺体現場へ
私37	5月	史疑	京福電鉄越前本線*2	福井	勝山	27.8		歴史学者比良直樹は、福井県の山奥に住む古書やニアが
		史疑	京福電鉄越前本線※15	勝山	京福大野	8.5	36.3	新井白石の幻の古書を持っていると聞いて確かめに行く
私38	6月	年下の男	京王高尾	高尾	高尾山口	1.7		大石加津子はフイアンセが浮気したことを知り、自己過失
		年下の男	高尾登山電鉄	清滝	高尾山	1	2.7	の転落死に見せかけられるため高尾山へ行く
私39	7月	雑草群落	南海本	難波	堺	9.8	9.8	古美術商高尾庄平は成金に偽浮世絵を売りつけに来る
私40	68年3月	Dの複合	南海電鉄南海本	和歌山市	紀ノ川	2.6		作家伊瀬忠隆は、各地の伝承を取り入れた紀行文を書く
		Dの複合	南海電鉄加太	紀ノ川	加太	9.6		ため、東経135度線に沿って、兵庫県から和歌山まで南下
		Dの複合	南海電鉄南海本	紀ノ川	堺	51.8		する。取材が終わわり、大阪経由で引きあげる
		Dの複合	京成電鉄本	京成上野	京成成田	61.2	125.2	伊瀬のフアンと称する読者に会おうと出かけた
私41	9月	混声の森	東京メトロ銀座	浅草	上野	2.2	2.2	大学の専務理事石田謙一は不良息子を警察で引き取る
私42	72年4月	遠い接近	三重電鉄*3	近鉄四日市	湯の山温泉②	15.4	15.4	山尾信治は元兵事係を山中で殺害、徴集令の復讐をする
私43	7月	山の骨	京王	聖蹟桜ヶ丘	府中	4.4	4.4	元官僚谷井秀雄は不出来の息子を殺害、骨は遺棄する
私44	74年10月	火の路	近鉄長野	古市	河内長野	12.5		古代史助手の高須通子は海津伸六を待つ間に遺跡巡り
		火の路	近鉄南大阪	古市	橿原神宮前	21.4		写真家坂根要助は通子の依頼で巨石の計測に明日香へ
		火の路	大阪地下鉄御堂筋	新大阪	天王寺	11	44.9	通子は再び海津を訪ね、大阪市内を南へ抜ける

【第8章】

私45	77年1月	渦	東京メトロ日比谷	銀座	茅場町	2.5		高等遊民風の小山修一は聴率調査の正確さを調べ出す
		渦	東京メトロ東西	茅場町	西船橋	18.8		記録用紙回収員の夫人は、都心から佐倉まで帰る。
		渦	伊豆急行	伊東	伊豆急下田	45.7	67	別の回収員が殺害され、小山は西伊豆の遺体遺棄現場へ
私46	4月	馬を売る女	東京メトロ日比谷	人形町	秋葉原	1.5	1.5	競馬情報で金を稼ぐ星野花江の小岩へ帰る通勤路
私47	78年3月	状況曲線	叡山電鉄叡山本	出町柳	宝ヶ池	3.8		ゼネコン重役味岡正弘は北陸で会った芸者と再会を図る
		状況曲線	叡山電鉄鞍馬	宝ヶ池	貴船口	7.6		貴船口のホテルには業界黒幕の愛人の死体があった
		状況曲線	叡山電鉄鞍馬	鞍馬	貴船口	1.2	12.6	味岡は殺人の嫌疑がかかいるのを避け、鞍馬まで逃げる

作品中の私鉄の初乗り区間一覧（その3）

登場順	初出年月	作品名	線区名	乗車駅	降車駅	キロ数	小計	初乗り者
私48	82年	死の発送 死の発送	京王線 京王競馬場	布田 東府中	東府中 府中競馬正門前	5.5 0.9	6.4	殺人事件に競馬関係者がいると見た底井武八は東京競馬場へ行く
私49	83年3月	彩り河	東京メトロ丸ノ内	霞ヶ関	銀座	1	1	元商社員井川正二郎は銀行の不正を暴こうと銀座の偵察へ
私50	84年6月	信号 信号	西武池袋 西武池袋	清瀬 東久留米	東久留米 練馬	1.8 11.8	13.6	白石信一は、落魄の作家七里庄兵衛宅を訪ねようとする 七里は鬱屈が高まり、連夜池袋に飲みに出かけていた
私51	85年9月	聖獣配列	東京メトロ有楽町	銀座一丁目	市ヶ谷	4.2	4.2	米大統領から愛人代を取った中上可南子は地下鉄も利用
私52	88年3月	黒い空 黒い空	京王 京王高尾	東府中 聖蹟桜ヶ丘	府中 北野	1.5 9.8		上杉管領家の血を引く実業家山内定子は、夫の不倫を予感したのか、新宿から京王線で行き、逢瀬を押さえる。
私53	92年5月	神々の乱心 神々の乱心 神々の乱心	東武東上 上信電鉄 東武伊勢崎 東武佐野	東松山 高崎 館林 館林	池袋 下仁田 羽生 佐野	49.9 33.7 8.4 11.5	18.2 103.5	宮中務めの北村幸子は降霊術研究所帰りに職質を受ける 子爵家の萩園泰之は特高係長の嘘の経歴を確認に行く 特高係長吉屋謙介は麻薬密売と殺人事件の関係を追う 吉屋は宮中の元高級女官邸を訪ねる

私鉄の初乗り区間一覧（p139～p142）に付く注

《注》会社名、路線名は略称の方が広く知れ渡っている場合が多く、誤解を招かない範囲で略称を多用した。線区名のうち、

＊は作品登場時から変わったもの。現在名は以下の通り。

1 西鉄貝塚、2 えちぜん鉄道勝山永平寺、3 近鉄湯の山

※は廃線または廃線になった区間

1 京阪京津（97年廃止＝以下同）、2 西鉄宮地岳（07年）、3 東武日光軌道（68年）、4 東武日光鋼索鉄道（70年）、
5 秋田中央交通（69年）、6 北陸鉄道能登（72年）、7 北陸鉄道石川（72年）、8 北陸鉄道能美（80年）、9 東横（04年）、
10 北陸鉄道山中（71年）、11 大分交通宇佐参宮（65年）、12 大分交通耶馬溪（75年）、13 大分交通豊州（53年）、
14 北海道炭礦汽船夕張鉄道（75年）、15 京福電鉄越前本線（74年）

後ろに○囲み数字のある駅名は、掲載時には次のような旧駅名であった。

①競輪場前、②湯ノ山

第17回 松本清張研究奨励事業研究報告書

発行日 平成二十九(二〇一七)年三月三十一日発行

〔編集・発行〕

北九州市立松本清張記念館

北九州市小倉北区城内二―三

電話(〇九三)五八二―二七六一

〔印刷・製作〕

有限会社 シーズ

本報告書掲載の本文及び資料の無断転載・複写を禁じます。
松本清張記念館ホームページ <http://www.kidne.jp/seicho>
登録番号 北九州市印刷物登録番号 第1609153F